

ボバ・フェット(偽)は  
ウィッチと共に空を飛  
ぶ — Another Story

KEY (ドM)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

男は死んだ。

何も残せず。

何も得られず。

男は悔やんだ。

それまでの人生を。

それまでの自分を。

神様は男の所業をみていた。

輪廻転生の先に男が掴むものは。

というのは嘘だよ (MUR)

とある男がやらかして、

愛が重いウイツチたちに愛され (意味深) たり、

追いかけてまわされたりするお話。

—★★★毎月、第二、第四土曜日の22時に投稿★★★

ボバ (偽) の親友が主役の

『ダース・モール (偽) が逝くSAOく愛の重さに溺れてしまえ』

は毎週日曜日の22時に投稿予定!! (1月予定)

こっちもどうぞ。

KEY (ドM)

# 目次

気ままに書くお話

ちよつとしたおとぎ話（シンデレラ編）

くウイツチたちに囲まれて苦しむく

1

ちよつとしたおとぎ話（桃太郎編）く

スレーヴIから生まれたボバ太郎く

16

ちよつとしたおとぎ話（浦島太郎編）

く竜宮城（監禁場）は地獄なりく

32

ちよつとしたおとぎ話（幸福の王子編）

くこのシナリオ考えたやつ出てこい

（迫真）

☆（R18注意） if くセックスし

ても魔力を失わないことがバレた世界で

く終わりの始まりく

【幕間】（再会）

もし、ニコポ、ナデポ持ちのチート転生

者がやってきたら

【外伝】繰り返す人生く蜘蛛の巣に掛

かった時点で詰んでいるんだよなあ（憐

悧）

★★★NEW★★★2018/1/6

更新【随時更新】人物紹介（ボバ・フェッ

ト（偽）、時系列に関して）

47

61

73

86

100

6

111

He go to the witc

hes world (Wow!! Long

time no see!! Boba

!!) ————— 124

プロローグ

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ① ————— 140

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ② ————— 151

本編 ウィッチたちとの出会い／爆弾点

火／

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ③ ————— 169

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ④ ————— 185

幕間 〳その頃の彼女たちは①〳 (5

02、506 統合戦闘航空団) ————— 201

幕間 〳その頃の彼女たちは②〳 (5

04、507 統合戦闘航空団) ————— 214

幕間 〳その頃の彼女たちは③〳 (空

の魔王) ————— 228

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ④ (バルクホルンは立

ち上がる) ————— 244

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ ⑤ (”黙っててあげる

” ) 501 統合戦闘航空団 『ストライク』 259

ウイッチーズ』へ ⑤ (音速、そして：。) 272

501 統合戦闘航空団 『ストライク』 272

ウイッチーズ』へ ⑥ (”すきなひと”) 288

501 統合戦闘航空団 『ストライク』 288

ウイッチーズ』へ ⑦ (”二人目の”) 300

501 統合戦闘航空団 『ストライク』 300

ウイッチーズ』へ ⑧ (”気に入らない”) 313

501 統合戦闘航空団 『ストライク』 313

501 統合戦闘航空団 『ストライク』

ウイッチーズ』へ ⑨ (”気まぜい”) 327

327

501 統合戦闘航空団 『ストライク』

ウイッチーズ』へ ⑩ (”守るから”) 340

340

幕間 く 外出の前には準備をく

363

幕間② く その正体を知る者と、知らぬものく

ぬものく 381

502 統合戦闘航空団 『ブレイブ』

ウイッチーズ』へ ① (”ただいま”) 395

395

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウィッチーズ』へ ⑥（“ついてる”）

ウィッチーズ』へ ②（壁越しの再会）

410

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウィッチーズ』へ ⑦（“無理は通すもの”）

ウィッチーズ』へ ③（“愛している”）

422

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウィッチーズ』へ ⑧（“ようやく会えたな”）

438

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

幕間 くその頃の彼女たちは③く（アフリカと扶桑皇国）

ウィッチーズ』へ ④（“ばらすよ?”）

幕間 くその頃の彼女は恐ろしい

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

525

ウィッチーズ』へ ⑤（“ずっとそばに居ろ”）

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

512

ウィッチーズ』へ ⑤（“ずっとそばに居ろ”）

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

525

ウイッチーズ』へ ⑨(火葉積みのメリー

クリスマス) ————— 542

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑩(“またな”)

557 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑪(“いつから?”)

575 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑫(“嘘だろ?”)

590 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑬(“渡さない”)

604

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑭(“ばか”)

620

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑮(そして、彼はその  
手を振り払えない) ————— 638

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑯(逃げなかった男)

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウイッチーズ』へ ⑰(皆が待っていた修  
羅場へ) ————— 667



502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

4』

740

ウィッチーズ』へ ⑱ (〜蜜月編その1

501 統合戦闘航空団『ストライク・

〜)

ウィッチーズ』へ りとらい! 『その

681

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

1』(抜け出したその先には) | 756

ウィッチーズ』へ ⑲ (〜蜜月編その2

501 統合戦闘航空団『ストライク・

〜)

ウィッチーズ』へ りとらい! 『その

698

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

2』(久しぶりに) | 773

ウィッチーズ』へ ⑳ (〜蜜月編その3

501 統合戦闘航空団『ストライク・

〜)

ウィッチーズ』へ りとらい! 『その

711

幕間〜再び、世界最強の賞金稼ぎにな

3』(かつての自分を) | 790

るまで その1〜 | 725

501 統合戦闘航空団『ストライク・

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・

ウィッチーズ』へ りとらい! 『その

ウィッチーズ』へ 【21】(〜蜜月編その

4) (“軍人”、坂本美緒は諦めない)

725

- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 5】（少女は“女”になる） —— 824
- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 6】（モメにモメた日） —— 837
- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 7】（不穏さと、愛しさと） —— 850
- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 8】（外出。爆走。柄の間の平穩。）

- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 9】（目指すは成層圏 前編。） 879
- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 9】（目指すは成層圏 後編。） 891
- 501 統合戦闘航空団『ストライク・  
 ウイツチーズ』へ りとらい！ 【その  
 0】（風呂ができてしまった（震え声））

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

1】（ミーナのお尻できゅつと…あ、な

んでもないです。）

922

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

2】（不調の原因）

936

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

3】（大和を守れ（誰か俺を守ってくれ）

948

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

4】（命を賭けた鬼ごっこ）

962

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

5】（かけっこ戦いと）

979

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

6】（アフリカ組 しゅーらい！ その1

！）

994

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

7】（アフリカ組 しゅーらい！ その

2）

1010

501 統合戦闘航空団 『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

8】(アフリカ組 しゅーらい！ その

3) ————— 1023

501統合戦闘航空団『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その1

9】(アフリカ組 しゅーらい！ その

4) ————— 1036

501統合戦闘航空団『ストライク・

ウィッチーズ』へ りとらい！ 【その2

0】(最終けっせん！そして……)

1050

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』

【その1】(積みあがった火薬に関して

くそろそろ”けじめ”の時間です)

1064

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』

【その2】(逃げ続けた結果の先くちよつ

と”話し合い”ましようか) ————— 1079

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』

【その3】(逃げちやいかんのか? 逃げ

られるとでも?) ————— 1093

本編後の修羅場く現代編く

現代生活編くくボバ君で遊んでみよう

！(ワクワク〇さん風)くく彼だけが記

憶がない現代でその1く ————— 1103

現代生活編くくボバ君で遊んでみよう

！（ワクワク○さん風）> く彼だけが記

憶がない現代でその2く 1121

☆☆R18注意☆☆ 現代生活編く

彼だけが記憶がない現代でその3く

芳佳に搾り取られる。く 1137

現代生活編く彼だけが記憶がない現代

でその4く謎（笑）の美女と 1153

☆☆☆☆R18注意☆☆☆☆ 現代生活

編く彼だけが記憶がない現代でその5く

体育館でルッキニーに痴女られるく

1168 現代生活編く彼だけが記憶がない現

代でく波乱の文化祭（それを修羅場とい

う）その1！く 1183

現代生活編く彼だけが記憶がない現

代でく波乱の文化祭（それを修羅場とい

う）その2！く 1197

現代生活編く彼だけが記憶がない現

代でく波乱の文化祭（それを修羅場とい

う）その3！く 1211

く 501+1 発進します編 く

正体ばれて、普通に501にいることに

なりました（震え声） 1223

く 501+1 発進します編 く

ハニートラップ祭り、開催○ モテモテ

だよ!!やったねボバくん!!（震え声）く

番外編 もし、ネットがある時代

で、ウィッチたちが掲示板で会話してい  
たら（震え声）

気ままに書くお話

ちよつとしたおとぎ話（シンデレラ編）  
くウィッチたち  
に囲まれて苦しむく

むかし、むかし。

とあるところに、継母と、その娘達からいじめられていた

ボバという男性がいました。

「ほら。座つてていいんだよ？私が全部お世話

してあげるから・・・。」

「おかあさまは引つ込んでいてください。

・・・ねえ、ボバ。いい首輪が手に入ったの、

お散歩しにいかない？」

「ボバ。私の部屋で過ごそう。・・・ずっとずっと

ずーっとな。」

あの・・・。

継母のガランド。

姉娘のサーニャ。

妹娘のシャーリー。

その3人から召使のように

こき使われ、ボバは苦しい思いをしていました。

「ねえ、息子と母じゃなく、

もつといい関係にならないかい．．？」

「．．．．散歩。」

「．．．．アタシの傍に一生いるんだよな？」

○

．．．．してましたっ（強調）

ある日、そんな彼らの家に

舞踏会の招待状が届きました。

「全く興味ないのに．．．。」

直ぐ帰ってくるからね？

そしたらいっぱい気持ちいいことしようね？」



「・・・猫と犬、どっちがいいか

考えておいて。」

「・・・体が熱いんだ・・・。

シャワー浴びて、ベッドで待っているよ？」

ハイライトがない3人は馬車に乗って、

お城まで向かいました。

（・・・今のうちに逃げよう。）

ボバは舞踏会に行きたいと思いました。

しかし、彼は檻に入れられており、

外に出ることができません。

（どうやってプリズンプレイクしよう。）

どっちかというと24の方が好きな彼が

NETFLIXに申し込もうか悩んでいると、

目の前に青いフードをかぶった少女が

現れました。

「こんばんは。ボバさん。」

うわあああああつ!!?

その少女のあまりの美しさに

声をあげる彼。

違うからっ!! まったくもって違うからっ!!

そんな彼にミ||ヤフージはハイライトがない

眼で笑いかけます。

「・・・ふ、ふふふ・・・。」

懐から針金を取り出し、鍵をピツキングして

彼がいる檻の中にずんずん入っていききました。

・・・ミ、ミ||ヤフージさん・・・?

「私は魔法使いです。あなたの望みをなんでも

叶えてあげます。」

彼女は服を脱ぎながら、

彼に自分の正体を明かします。

・・・な、なぜ脱いでいるんだ・・・?

「・・・私、サキユバスなんです・・・♡」

アッ

「いちそうさまでした♡」

・あ・うあ・

満足した彼女は干からびて、

ばさばさになった彼に魔法をかけ、

元の元気な姿に戻します。

・いまだっ!!

「えっ・・・きゃっ!!」

チャンスとばかりに檻の外に出た彼は、

檻を閉め、外から錠をかけて

彼女を閉じ込めるのに成功しました。

どうだ!

「・・・ああん♡私のことをそんなに

飼いたかつたんですかあ・・・♡

言ってくれればいくらでも・・・♡」

彼は魔法使いの言葉に寒気を覚えながら

耳をふさいだまま部屋の外に出ました。

今が好機!!この機会を逃せば

俺に未来はないっ・・・!!

家の中にあるある程度の金目のものを

ポケットにつめていきます。

亡くなった父がつけていた指輪も

忘れずに持っていきます。

よし、これで・・・。

そう思つて外に続く扉を彼は

開けました。

「・・・・・・・・。」

そつと閉めました。

そこには、彼のいいはずけである

ルーデルちゃんがありました。

もちろん、ハイライトはどこかに

落としてきたのでありません。

コンタクトじゃねーんだぞ!!

絶叫しながら裏口に回り、

外に出て、彼は走り続けました。

「あ、ボバ。」

「ボバ。」

「ボバー!!私と付き合ってー!!」

「愛しているー♡」

「私の夫になれ。」

「・・・兄さん?」

うああああああつ!!

何ということでしょう。

これから先、ずっと孤独に

生きていくと思っていた矢先に

彼のことを思っていてくれる

少女たちがその後をついてくるでは

ありませんか。

思わず、彼も嬉しさのあまり

絶叫します。

ナレーションやめろおおおつ!!

そして、ハーメルンの笛吹のごとく、

その数はどんどん増えていきます。

『『『『『『『『『『『!!』』』』』』』

“ あ” あ” あ” あ” あ” あ” あ” つ!!!

そして、彼はお城に向かって逃げ続けます。

◆  
く王城く

ここでは舞踏会が開かれていました。

煌びやかな服を来た男女が

愛の言葉を交わしあうひと時です。

「お嬢さん、よろしければ僕と一緒に．．．。」

「ブ男は帰れ。」

「」

「そこのご婦人。私めと一曲踊ってはいただけませんか？」

「妄想は自分の頭の中だけにしてくれるかな？」

「」

「おじよ」

「・・・。」

「アッ」

「・・・ひと時ですっ!!（やけくそ）」

「そんなパーティーの中、」

「ため息をつく人物がいました。」

「・・・あー、だるい。マジだるい。」

「こら!!エーリカ!!ちゃんとしろちゃんと!!」

「・・・人選ミスだと思っわ・・・。」

「椅子に座ってうなだれるエーリカ王女。」

「その周りには彼女の幼馴染にして、」

「付き人であるミーナとバルクホルンが」

立っていました。

エーリカ王女はとつてもだるそうです。

「・・・帰っていい？」

「ダメに決まっているだろ！・・・ほら、もう少しで終わるから我慢しろ！」

「(お酒飲んでようつと)」

だらけながら椅子に座るエーリカを

たしなめるバルクホルン。

ミーナはちゃっかりとお酒を楽しんでいました。

すると、急に会場があわただしくなります。

「ん？なに？」

「おい、衛兵!!どうした?！」

「・・・あら？」

3人がそういぶかしんでいると、

入り口から一人の男が会場に

入ってきました。



顔は恐怖にゆがんでおり、  
目元には若干涙が浮かんでいます。  
だ、誰か・・・たすけつ。

『『『』・・・』』』』

あ。

そんな彼を愛しそうに見つめる  
周りの少女たちを視線にとらえた彼は、  
お城に来てしまったことによりやく  
気が付いたのでした。

そして、後ろから大勢の少女たちが  
駆け込んできて、彼の上に次々に  
押し掛かります。

ぐえつとカエルがつぶれたような  
声を出して彼は倒れました。

「捕まえたー!!私のねー!!」

「私のだから!!」

「・・・(こっそりと抱き着いておこう)」

「どけどけどけっ!!私の夫だぞっ!!」

「ほう?聞き捨てならんなあ。」

「・・・あの、こっそり二人で抜け出しませんか・・・?」

「ライーサ!!ずるいぞー!!」

かましい彼女たちを衛兵が取り囲みます。

『貴様ら・・・ここをどこだと・・・!!』

『あ?』

『邪魔だ、どけ。』

お城の兵たちは次から次へと彼女たちに

やられていきます。

周りで踊っていたはずの少女たちも

彼の姿を見るや否や、乱闘の中に

加わっていききました。

・・・い、今のうちに・・・。

しぶとい彼は身をかがめながら

誰にもばれないよう上手くその場を

出ました。

そして、玉座に座っていた  
エーリカたちの前に飛び出てしまいました。  
うおっ。

「え？」

疲れて足をつまずかせた  
彼が、エーリカの方に倒れ込み、  
唇と唇が重なり合いました。

.....。

「.....／＼／＼」

目を見開いて驚くボバ。

目をつむり、離すものかと

彼の首に両手をまわし、

むちゆるるるる、と深いキスをするエーリカ。

「.....はっ。」

呆然としていたバルクホルンとミーナは

正気を取り戻すと、二人を引きはがそうと

します。

「き、きさままら!!ずるい、じゃなく、

何をしているっ!!・・・こら、エーリカ!!

抵抗するんじゃないっ!!」

「んー!!」

「ちよつと!!エーリカ!!それは反則よつ!!」

なんだこれ。

バルクホルンとミーナによって引っぱがされた

彼は体を押されて、とある人物にぶつかりました。

おっと。

「「「「「」」」」」」

彼が後ろを向くとそこには継母たちがいきました。

・・・。

逃げようとする、首を掴まれ、

体の自由を奪われます。

「・・・うん、アキレス腱、切るね。」

「・・・エサ入れも必要みたいだね。」

「・・・今日は寝られると思うなよ？」

あああああああつ!!!

こうして、彼は追いかけてきた少女、  
王女たち、継母たち全員と籍を入れ、  
幸せに暮らしましたとき。

めでたしめでたし（少女たちにとっては）

!? 「赤ちゃんできたので認知してください♡」 ↑ ミーヤフージ

ちよつとしたおとぎ話(桃太郎編)　　スレーヴIから生  
まれたボバ太郎)

むかしむかしあるところに。

お姉さんとお姉さんが山に住んでいました。

一人は、坂本美緒といい、もう一人は

竹井醇子という結婚適齢期の女性です。

「ナレーシヨン、ちよつとあとで楽屋裏来い。」

「まだ若いもん……。」

美緒は山へクッキーモンスオーしばきに。

醇子は川へブラックバスを絶滅させに行きました。

「この台本作ったウィッチ。あとで司令室まで

出頭しなさい(激おこ)」

醇子が軽機関銃でブラックバスを射殺し、

川の生態系を守っていると、川の奥から

スレーヴIがどんぶらこ、どんぶらこ

流れてきました。

「ええ……。」

彼女が困惑していると、

スレーブIが座礁して陸に乗り上げ、

中から人が倒れてきました。

マスクとアーマーをつけ、

体のいたるところを包丁か何かで

刺された跡があります。

「……あ……。」

「……。」

男が上を見上げると、そこには

自分を見つめる、一人の美女の

姿がありました。

這いずりながら逃げようとする彼を

醇子が両足首を掴み、引きずっていきます。

「たす……け……て……。」

「えーっと、誓約書と、結婚書類と、戸籍謄本の更新と・・・。」

家に持ち帰った男性を醇子が介抱しているとクッキー○ンスターと激戦を繰り広げていた美緒が山から帰ってきました。

「・・・・・・・・。」

「あ、どうも・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・よし、脱げ。」

「え。」

持っていた刀をぼい、と投げ捨て、彼が寝ている布団に下着姿でもぐりこみます。

近くにいた醇子も便乗して、彼の体を温めるために下着姿で襲い掛かりました。

「ちよ・・・・・・・・ま・・・・・・・・っ!!」



「いいから早くしろっ!!本編での

濡れ場はまだ当分さきなんだっ!!」

「先生っ!!私、7年前から好きでしたっ!!」

あーっ!!

家の中でぎしっ、ぎしっ、という音が

一晩中なり続きました。

翌日、つやつやした顔の美緒と醇子は

げっそりしてETみたいな顔になっている

彼の話を聴きます。

「……それで、どうしてあんな状態に?」

「……」

美緒が尋ねると、彼は口を閉ざし

ぶるぶると震え続けます。

あつ、と何かを察した醇子は彼を

優しく抱きしめました。

「今日からあなたはうちの子です。」

「……名前は、ボバ太郎なんてどうかしら？」

「いいと思うぞ。」

そうして、ボバ太郎は美緒と醇子の

家族（意味深）になりました。

それから一週間ほどたったある日、

村長である、フェデリカ・N・ドツリオは

村の皆を集めて、とあることについて話し始めました。

「……最近、この村を荒らす鬼が出没するようになったわ。」

「……そこで、討伐隊を組織します。」

桃太郎の頭がハッピーセットな村の人たちと違い、

ガチで鬼の息の根を止めようと考えている彼らは

傭兵を鬼が島に派遣することにしました。

そして、そのうちの一人として、

ボバ太郎も候補の一人にあげられました。

「なぜ？」

「手柄を立てて、この村の人々に認められる

チャンスだからよ。．．．政治的配慮ね。」

おとぎ話の世界だろうと、現実の過労死社会だろうと

よそ者に厳しいのは変わりがないのでした。

出立の準備をボバ太郎がしていると

美緒と醇子が声を掛けます。

「ボバ太郎や。お前が鬼を討伐できるように．．．。」

「きびだんごか？」

「1か月分の糧食と、武器を用意しておいた。」

「あ、私たちもついて行きますからね♡」

「」

あわよくば、2人から逃げようという彼の魂胆を

彼女たちは見抜いていました。

家族愛はすばらしいですね。

美緒、醇子、ボバ太郎、

そして、雇われた傭兵である

マルセイユ、ライーサ、圭子の

合計6人で殲滅戦に向かいことになりました。

道中は和気あいあいとしています。

「おい、お前。いつになったら私の元に

帰ってくるんだ？」

「あの、通信機のコード教えてください。」

「兄さん……！会いたかった……！」

「なんだ？お前たちは？……さっさとボバから離れる。」

「……先生に勝手に触らないでくれるかしら？」

「」

色んな意味で肩身が狭い彼は、

皆に腕や体に抱き着かれながら

鬼ヶ島までの道を歩きます。

ボバたちが鬱蒼とした森を

抜けようとしていると、

がさがさ、としげみから

何かが出てきました。

「犬か？」

「………にやあ。」

「」

猫（アウロラ）でした。

「………犬は？」

「………わんと鳴かせてほしいのか？」

犬ということにしておこう。

そう思った彼はアウロラ（パーティーから外せない）を

仲間に加え、また道を進みます。

山を登っているときに、今度は

何かが上から降り立ってきました。

「キジか？」

「………私の命令を聴け。」

「」

カラスのゴロプが出てきました。

ただの鳥つながりやん。

そう思った彼はこれ以上の仲間はいらないと彼女を説得しようと足掻きます。

「……これ以上の戦力はいらないんだが……」

「……………」

「あ、なんでもないです……」

至近距離で彼女にメンチを切られ、

仲間にすることにしました。

「おい。貴様ら。カールスラントの人間ではないな？」

「……む。二人は我が祖国の者か。」

「なんだ、お前？喧嘩を売っているのか？」

「(505の冷血女かあ……。同じカールラント

出身だけど接しにくいなあ……)」

「……彼に近寄らないでください。」

「……兄さん。私を守ってあげるから……」

「なあ、これ以上増えたら死ぬと思うんだけど(名推理)」

やめろお!!と心の中で叫びながら、

とうとう、鬼ヶ島の近くまでやってきました。

後は海を渡るだけです。

「ボートは？」

「そんなものはない。．．だが、お前だけは

一緒に連れて行つてもいいぞ？」

「新入りのカラス風情が。」

「．．．なにかいったか酒飲み？」

「兄さん。スレーヴIは？」

「ガランド達に襲われたときに、ぶつ壊された。」

「どうやって向こうに行こう。」

「そう思っていた彼らの前に、救いの

手が差し伸べられます。」

「．．．．．♡」

「」

なんとそこには、手招きしながら

ボバにいい笑顔を向けて、

船に乗っているミィヤフージがいました。

彼女の姿を見た瞬間、

ボバは回れ右をして  
帰ろうとします。

「落ち着け!!シンデレラの時みたいには  
ならないから!!」

「いやだ!!6時間もするのはいやだあああつ!!」

結局、皆はミ||ヤフージが用意した

船に乗り、鬼ヶ島まで行くことにしました。

「あつ♡♡あつ♡♡あつ♡♡あつ♡♡あつ♡♡」

「指すごいつ・・・♡♡♡」

「んあつ♡♡ライーサばかり構うなよお♡♡

私にも・・・♡♡」

「酒と媚薬がいい感じに効いているな・・・♡♡」

「・・・ふん♡」

〈アツ・・・アツ・・・

仲を深めるために皆で

裸になって運動会(意味深)をします。

欲求不満気味の彼女たちを



止めるすべは彼にありませんでした。

あともう少しで赤玉が出て死にそうなとき、  
ようやく鬼ヶ島につきました。

「鬼どもを倒したらアフリ・・・村に帰って  
続きをするぞ、ボバ。」

「ハンナ。今日は譲るから、明日は頂戴ね？」

「兄さん。私は明後日でいいから。」

「酒と一緒に飲むぞ。」

「・・・ふん。さっさと終わらせる。」

「さー。速く終わらせて籍を入れるぞ。」

「美緒ったら。籍はもう入れたでしょ？」

「ああ。そうだったか。」

「えっ。」

そうして鬼ヶ島に入ると、

一人の女性が受付で

客を待っていました。

「あら、いらっしやいま・・・。」

鬼の一人である、ロスマンが彼の顔を見た瞬間、固まり、10秒ほどそうしていたあと、くるつと振り返り、どたどたと奥の方に走っていきます。

『彼が来たわ!!何としても

奪うわよ!!』

『先生。これとこれ、

どちらの方が似合うと思うかい?』

『・・・むう、どれを

着ていくとするか。』

『戦いの準備をする方が先です!!』

そして、鬼たちが10人くらいグレネードランチャー、

AK-47などで武装した姿で出てきました。

そんな彼女たちの前に美緒たちが

歩み寄ります。

鬼側からは、ヴァルトルート、  
グンドユラ・ラル、ロスマンの  
3人が出てきます。

「……………」

「……………」

そして、にらみ合っていると

突然がしつと握手をし始めました。

「…………お前たちもそうなんだな？」

「ああ…………提案なんだが、

我々は良い友人になれると思うぞ？」

美緒とラルが握手を組みかわしながら

不穏なことを言い始めたので

ボバが逃げようとすると、ロスマンと

ヴァルトルートに抱き着かれ、

床に倒されました。

「離してくれっ!!死にたくないっ!!」

「そんな、ひどいなあ。．．．一晩で、

10回。僕の中に出してね．．．♡」

「わ、私．．．。恥ずかしいけど、

頑張るからっ．．．!」

「よし、ここに住むことにするか。

アフリカよりも住み心地が良さそうだ。」

「そうだね。」

「兄さんがいるなら、どこでもいいわ。」

「酒とあいつがいればいい。」

「．．．ふん。カールスラントの

ウィッチたちか。同郷のよしみだ。」

「ボバさん♡私の魔法で”元気”にしてあげますから♡」

「結婚式をあげるにはいい場所ね、美緒。」

「そうだな。」

こうして、彼は未永く、鬼たちと一緒に

暮らしましたとき。

めでたし、めでたし。

「・・・あの、裏切り者たちめ。」

「フエデリカ。こちらの準備はできたぞ。」

「そう。・・・これより、オペレーション

『ボバ・フエツトは死す』を開始します。」

彼を奪還しに、鬼ヶ島にやってきた村人たちと戦うことになりましたが、それはまた別のお話。

ちよつとしたおとぎ話（浦島太郎編）  
は地獄なり（  
）竜宮城（監禁場）

むかし、むかしあるところに。

ボバ島ボバ太郎という青年が海を

歩いておりました。

「……桃太郎編と名前かぶってないか？」

彼が散歩していると、

数人の少女が亀をいじめているのが見えました。

彼はそれを止めようと歩み寄ります。

「いらいら。いじめはよくないぞ。」

彼がそう言うと、

何かをいじめていたジョゼ、那佳、エイラの3人は

彼の方に顔を向けます。

すると3人は目をハートマークにし、

舌なめずりをしました。

「……………」

「…………じゆるり。」

「…はあ♡はあ♡♡」

「えっ。」

「暴れないでください!!本編で506が出るのはもう少し

先なんです!!だから今のうちにっ!!

「ちよつとだけ!!ちよつとだけでいいから味見させてっ!!

「いいからさっさと脱ぐんだナ!!

「またかよっ!!あーっっっっ!!

砂浜に男と女の嬌声が響き渡りました。

「ふう…。満足したんだナ。」

「もうちよつとしてくれませんか?だめ?」

「また、お腹が空いてきたら飲ませてね♡」

「」

3人は干からびた彼の住所とケータイ電話番号を控えて、

帰っていききました。

ざざん、と海の潮にさらされ、

倒れている彼の元に先ほどの亀が

姿を現しました。

「あ、あの……。さつきはありがとう。

・・・おかげで助かったよ。私の名前は

ハンナ。・・・ハッセって呼んでくれると

嬉しいな……。」

もじもじ、と顔を赤らめ彼の

手を両手で握り締めます。

(・・・なんて、お淑やか子なんだっ……!)

それまでのおとぎ話編で逆レばかりされていた

彼は感動に打ち震え、思わず涙をこぼします。

「あの、よければこのお礼をさせてもらいたくって……。」

そういつて、背中を彼の方に向けます。

誰かをおんぶしようという態勢です。



「えっ。」

「.....」

ちら、ちら、とハツセは彼の方を

後ろ向きで何度も見ます。

顔が真っ赤ですが、それでも

辞めるつもりはなさそうです。

くちよつと待ってよ!!なんで

私じゃなく、ハツセなのさ!?

同じような見た目の私でいいじゃんか!!

くニパ、ステイなんだナ。

大の男が高校生くらいの少女に

おんぶされる。

犯罪臭がすさまじいですが、

彼女の背中に乗っからない限り、

話は進みません。

早く乗っかってください。

「え……。あの……。」

……。

「……はい……。」

「ど、どうぞ……。」

中肉中背の彼は、ハツセの

背中に乗っかり、両腕を

彼女の首元に回します。

ちやっかりとハツセは彼の

腕が自分の胸に来るように

位置を調整します。

「それじゃあ、飛ぶので

しっかりとつかまってくださいね。」

「え？」

すると、彼女は足につけていた

ストライカーユニットで空を

飛び始めます。

あつという間に高度1000Mを超え、

ぐんぐんと雲を突き抜けて進んでいきます。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫・・・っ。」

落ちないように、必死になって

ボバ太郎はハッセにつかまります。

成人男性が女性の胸を

こねくり回すという事案が

発生し、本来ならば通報物ですが、

ハッセはわざと不安定に飛びます。

「あ、ごめんなさい。ちょっとストライカーの

調子が悪いみたいで（棒）」

「あああ!! 落ちたくない!! 死にたくないっ!!」

（・・・かわいい♡）

結局、目的地につくまで、彼は彼女の

胸にしがみついていた。

乳離れできない赤ん坊のようです。

「ナレータアアアアアアアつ!!後で

憶えてろよおおおっ!!」

そんなこんなで目的の場所についた

彼らは、とある建物までやってきました。

「つきました。」

「・・・・こころは?」

「私の家です。」

「」

てつきり竜宮城にでも連れて行って

くれると思っていた彼は思わず絶句します。

「いやいやいやいや!!なんで!?

竜宮城は!?!」

「いやだなあ。現代社会にそんなもの、

あるわけないじゃないですか。」

夢見がちなバカ野郎を淡々とハツセは諭します。

彼女は自分の家のドアを開けて、彼を向かい入れます。

「どうぞ。」

「・・・おじゃまします。」

彼がドアをくぐり、中に入ると中は真つ暗でした。

「・・・おやすみなさい。」

「えっ？」

ハツセのつぶやきに対して振り返った

彼が見たものは自分の首に向かつて

バチバチと火花を散らす、スタンガン

突き出す彼女の姿でした。

「あつ♡．．．んんんっ♡きちやうっ♡ああんっ♡んんあっ♡♡」  
「あつ．．．ぐあ．．．」

彼が目を覚ますと、裸になって馬乗りで

自分の上にまたがる彼女の姿が見えました。

ベッドの中で、裸の二人が交わり続けます。

「．．．さびしかったあ．．．。なんでニパとエイラには  
会って、私のもとにはこないのさあ．．．」

「ぐっ．．．おお．．．」

「もう離さないからねっ♡」

このまま終わりか。

しかし、ハッピーエンドなんて

読者は求めていません。

彼には艱難辛苦を与えて

乗り越えてもらいましょう。

2人が愛し合っている（一方通行）と  
ドアがどごおん、と吹き飛ばされます。

そのドアの向こうには、右手を正拳突きで  
前に出している直枝の姿がありました。

おさなじみであるボバ太郎に付けておいた  
発信機をたどってここまでストーキングしてきたのです。

「・・・おいこらっ!!俺の傍にずっと

いるって言っただろうがっ!!浮気かっ!?

ああっ!!」

つかつかと歩み寄り、彼の腕を取って

立ち上がらせませす。

「な、直枝・・・。」

「・・・ふん。説教は後だ。

・・・帰るぞ。」

そういつて彼を引っ張って

帰ろうとする直枝でしたが、

ボバ太郎の反対側の腕をハツセがとり、

引っ張り帰します。

「……なんだよ。男女。」

「……がさつそうな君には言われくないな。」

「あ?」

「は?」

ぎゆううつとお互いに一步も譲らず引っ張りあいます。

「あああああつ!! やばいつ!! 腕がみしいって言った!!」

入院コースだつてこれっ!! 付けねがあああつ!!」

彼の悲鳴をBGMに、絶対に彼を離そうとはしない二人。

このままパピコみたいに半分こになりそうだったその時、  
窓から誰かが乱入してきました。

「……ボバ。」

「あつ!!」

「まてーっ!!」



その人物は、ボバの腕を引っ張っていた  
2人から彼を引き離すと家の外に出て、  
ボバを連れ去っていつてしまいました。

＜エイニ隊長!?!なんで隊長や

エイラやハツセは出れるのに

私はダメなのさー!!

＜ニパ（妹）よ、酒をやるから少し静かにしてろ。

＜アウロラねーちゃんも昨日のボバ太郎で

出てたし!!慰めはいらないよ!!

その正体は、彼との古い知り合いである

エイニという女性でした。

エイニが彼を連れて山を降り、

数十分走ったところで立ち止まります。

「……。」

「……あ、ああ……。」

まるで、一方的に離婚を告げた

元妻と出会ってしまった夫のような顔つきで  
彼は応えます。

「元妻じゃない。・・・妻だ。」

(恥ずかしかつたのか・・・。)

少しだけ頬を赤らめながらぶいっと

そっぽを向いて彼女はつぶやき、

気を取り直して再び彼の手を

取ります。

「・・・全く、皆が待っているというのに。

・・・早く帰るぞ。」

これまでの経験から嫌な予感がした彼が

腕を振り払って逃げようとすると、

突然、彼の体に何個もの手が伸び、

捕獲されます。

「爆撃されたいのか?・・・とつとと観念しろ。」

「ふふふ．．．。挙式はカールスラント式がいいかな．．．♡」

「章香。子供はやつぱり二人はいたほうが良くないか？」

「敏子。私は彼の子供なら何人でも生みたいぞ。」

「二回目だが、たつぷり楽しもうな♡」

上からルーデル、ガランド、江藤敏子、北郷章香、

あとちやつかり混じっているアウロラが彼にしがみついて  
ずるずるとどこかに引つ張つていきます。

「いやだあつ!!助けてくれえつ!!」

＜アツーーーー!!!

本編で待ちきれなかった、引退間近のウィッチに求愛され（）、  
彼は彼女たちと末永く暮らしましたとき。

めでたしめでたし。

「．．．（こ）が、あの女のハウスか。」

「・・・エイ二隊長。いくら隊長でも

彼を取つたら許しませんから・・・。」

「・・・ふふふ。葬式の費用を考えないと

いけませんねっ!!」

「・・・今日の運勢は最高なんだナ。」

「・・・おいしい料理、一緒に

食べようね・・・♡」

ストーカー5人VS引退組5人の仁義なき戦いが  
始まりそうなので続かない。

ちよつとしたおとぎ話（幸福の王子編）  
～このシナリオ

考えたやつ出てこい（迫真）

むかし、むかし。

あるところに。

幸福の王子（笑）と呼ばれる美しいけど

顔は不細工な像がありました。

「ナレーター。あとでブラスターか

ライトセイバーか。どっちか好きな

方を選べ（おこ）」

彼はかつて、この街に住んでいた

若くて幸福な生涯を送った人物を

模して造られた像です。

そんな彼の元に3羽のツバメが

やってきました。

彼女たちは生前、この像の元となった

青年がかわいがっていたツバメでした。

芳佳、リーネ、ペリーヌという名前の  
ツバメたちです。

「ちゅんちゅん。こんなところに

みずみずしい肉体の男がいるちゅん。」

「ご主人様そっくり・・・ちゅん。」

「・・・うう。はずかしい・・・ですわ。」

「その鳴き声は雀だからっ!!今の俺は像役だからっ!!

あっ!!寄るなっ!!」

くあっーーーーー!!

3羽とねつとりと再会を喜んだ

像は3羽にお願いをします。

「この街の人々に俺が持っている

この宝石とかを与えて助けてあげておくれ（やけくそ）」

「わかりました!!行ってきます!!」

「これでガリアも助かります・・・!!」

「・・・(また、そういうことを・・・ずるいですわ・・・)。」

この像は、生前モデルとなった人物の

意識が宿っており、街の人たちから

宝石などを付けられました。

しかし、それによってこの街のウィッチ達は

貧困状態となり、皆、困っていました。

「たぶん、俺の持っている宝石とかを

回収すればいいと思うんですけど。」

「ボバさん。女の子が一度あげたプレゼントを

返して、なんて言えるわけないでしょ？」

「あ、はい。」

笑っていない目で芳佳に諭された彼は

次のお願いをします。

「ツバメさんたちや。次にあのおばあさんや、劇作家、

マッチを売って生計を立てようとしている人たちに

宝石をわけてあげておくれ。」

「え．．．。そこは原作通りに

ボバさんの目をくり抜いちやだめですか．．？」

「グリム童話は、よしてくれ（ため口）」

「あ、芳佳ちゃん。ボバさんの目をくり抜けば

一生私たちなしじや何もできなくなるんじゃないかな。」

「それもいいですね。」

「えっ。」

——こうして、自分の身を犠牲にしていく

王子はついに目が見えなくなっていました。

それに街のウィッチ達が気づきます。

「誰がっ!!誰がとった!!彼の一部を

取るなんてずるいぞっ!!」

「お前かっ!?!」

「わたしじやないわよっ!!そんな羨ましい・・・!」

——街の人々は和気あいあいと話しますが、

また、いつもの日常に戻っていきます。

「ボバさん!今日は私が膝枕して、

お話を聴かせてあげますね♡」



「こら!!豆狸!!本編で正妻ポジとっているのに、

その上、番外編でも目立つつもりですか!？」

「ちよつと許せないかな・・・って（ハイライトオフ）」

「目が見えなくても争いの音は聞こえるんだよなあ・・・（震え声）」

彼はツバメたちと幸せなひと時を過ごします。

しかし、ツバメたちはここよりあたたかな場所を目指して

飛び立たなければなりません。

「ツバメさんたちや。もう俺に構わずに

海の方こうへ行きなさい。まもなく冬が来て

死んでしまうよ。」

「わかりました!!じゃあ、扶桑に招待しますね!!」

「ガリアもすつかり復興したので大丈夫です。」

「・・・感謝しますわ。さあ、3人で運びますわよ。」

「えっ。」

何それ、寝耳にウオーター、と王子が絶句していると

ストライカーユニットをつけた3人に掴まれ

持ち上げられます。

(あ、これ、拉致だ。)

そう思った彼が脱出しようにも

何も見えないのでここまでか・・・と

諦めていたその時、救いの手が

差し伸べられます。

「まていつ!!ガリアといええば

妾たちを忘れてはおらぬかつ!!」

そう、いまだに本編に出る

気配が全くない506の面々が

立ちふさがりました。

実は、ボバ君はスターウォーズの

ハン・ソロみたいに生きたまま冷凍

されていたのです。

街の人たちから愛されていた

彼は、彼女たちの共有財産だったのです。

「ハイデマリーとは通信しているというのに、

どうして妾ではダメなのじゃ?!

ぐいぐい、と506のハインリーケが

彼に詰め寄ってその体を引つ張ります。

「離してください!!彼は私と一緒に

扶桑で幸せに暮らすんです!!」

「ハインリーケさん!!ガリアの貴族とも

あろうものがはしたないですわ!!」

「・・・あ、あの・・・。それは

だめ・です!」

3人は同じく彼の体を掴んで引つ張ります。

眼が見えない状態の彼は、

自分の身に何が起こっているのかわからず

混乱します。

「あだだだだだっ!!見えないって

怖いつ!!」

しかし、さすがに3体1では形勢不利であり、

徐々に彼の体が3人の方によって行きます。

「ハインリーケさん!!手伝いますっ!!」

他の506の面々もハインリーケに加勢し、

今度は彼女たちが有利になります。

「……ううう。いやだもんっ!!絶対

渡さないもんっ!!」

「……嫌ですわっ!!」

「……。」

ただっこになる芳佳とペリーヌ。

こっそりと銃を構えようとする

リーネ。

そして、今度は3人の方に

応援が着きました。

ミーナが彼女たちに向かつて

声を掛けます。

「宮藤さん!!ペリーヌさん!!リーネさん!!」

そう、501の面々が

助けに来てくれたのです。

「それ劇場版んんんっ!!」

ボバが叫ぶと、彼女たちも

引つ張りあいに参加し、

完全に拮抗した形になります。

「マリアン!!先輩である私に

譲つてくれてもいいんだぞ!!」

「シャーリー大尉!!速くなる方法を

教えていただいたお礼はありますが、

これは譲れないんです!!」

シャーリーとマリアンが

久しぶりの再会に喜びながら

火花を散らします。

「あらあらあら?あなたとは

気が合いそうね?」

「ええ。全く。」

苦労人気質のミーナとロザリーは

ニコニコと笑いながらも

その手を離しません。

「ねえねえ!!その手を、放してくれない!？」

「だ、ダメですつ!!」

ちみっこ同士でシンパシーを感じたのか  
ルツキーニとジエニファーがそう

そう話します。

「・・・その手を離してもらおうか。」

「・・・力づくでやってみる。」

マルセイユと相性が悪かったバルクホルンは  
アドリアーナとも激突します。

「・・・あれ?あなたも同じ扶桑の子?」

だったら同じ同郷のよしみで・・・。」

「だめ、です。」

「・・・ふーん。」

何かを感じ取った芳佳と那佳はびりびりとした  
雰囲気に対峙します。

「・・・よかったらゆつくりお茶でも飲む?」

「……その手を離してくれたら考えます……。」

仲良くなりそうないザベルとサーニヤは

それでも譲り合いません。

「……なんだよ。」

「……そっちこそ。」

似た者気質であるエイラとカーラは

にらみ合います。

「……。」

「……。」

ジーナと美緒は沈黙しつつも

相手から目を離しません。

「ねえねえ。今のうちに二人で

逃げようよー。」

「目が見えないんですが、それは。」

「……一生、飼ってあげるよ?」

「」

ちやつかりとエーリカは彼と





そう命じます。

しめしめ、とハンナは笑います。

これでようやく自分の時代が来た、と。

そして、天使が帰ってきました。

「おお!!戻ってきたか!!」

「……彼の欠片です。」

「」

まさか、粉々になっているとは思わなかった

ハンナは絶句します。

「認められるか……!!」

「……（私も後を追おうかな……）」

砕け散った彼の後を追って

自殺したウィッチ達が大量に

あの世にやってきて、また

揉めるのは別の話。

「よし、脱げ。」

「あの。．．．．．ここ、地獄ですよね？」

「ああ。．．．．．入口の看板を見なかったのか？」

『搾精地獄』と書いてあっただろ？」

「」

地獄に落ちた彼はアウロラ、ガランド、章香、エイニ、

敏子、圭子に毎日搾り取られながらも幸福に暮らしましたとき。

めでたしめでたし。

☆(R18注意) if ~セックスしても魔力を失わな  
いことがバレた世界で~終わりの始まり~

「あっ!!出るっ!!」

「出してえっ♡♡中にいっぱいいいいいっ♡♡」

嬌声をあげ、股を開いて種付けされるヴァルトルト。

眼の焦点はあつておらず、口からはよだれを垂らし、  
うれし涙を目から流していた。

男にバックから押し倒され、その大きな胸を両手で  
鷲掴みにされ、グラマラスな体がたわむ。

「ああおおっ♡♡」

「ぐっっっっっ!!あああっ!!」

男の陰茎をきゆうきゆうと締め付け、

ヴァルトルトは離すものかと首を後ろに向け、

彼にキスをする。

「……んっっっ♡♡んあ……♡♡」

「・・・はあっ・・・はあっ・・・」

ぶるぶる、と体を震わせると2人はベッドに倒れ込む。

「・・・きもち・・・よかつ・・・たあ・・・♡♡しあわせえ・・・♡♡」

これ以上もなく、幸福そうな笑みを浮かべて

彼女がけいれんする。

男は、何度も彼女に搾り取られ、

昇天しかけていた。

周りには、ヴァルトルートと同僚である

502のウィッチ達<sup>が</sup>秘部から精子を垂らし、

恍惚とした表情で倒れている。

——なぜ、こうなったのか。

それは、数日前までさかのぼる。



「・・・はあっ・・・」

自分の耳がおかしくなったと思い、

聞き返すボバ。

しかし、彼の目の前にいる、

とある固有魔法を持つウィッチは、

淡々と告げる。

「あなたの体は普通の人間と違って、」

人体の構成物質が全く別物です。．．．だから、

例えウィッチと○○○○したとしても、

魔力を失わせるどころか、元気にしてしまうでしょう。」

えーつと、と頭を右手で軽く抑える彼。

気ままに空を飛んでいたら、ネウロイに襲われていた

ウィッチを助け、そのお礼として彼女の固有魔法で

自分の状態を見てもらうことになった。

告げられた事実はあまりにも衝撃的で、

彼は震えだす。

「．．．？あの、大丈夫ですか？」

「．．．．．ああ。」

ふらふら、と部屋から立ち去り、

彼は決意した。

これまで、一度も前世であつたウィッチ達にバレずに戦つてくれた。

何としても、逃げ切つてやる、と。

——このことが他のウィッチ達にバレたら——

時は194x年。

ネウロイに対して人類は大きく攻勢をかけており、

とある大戦が勃発する1週間前。

人類とネウロイは、互いに生き残りをかけた

最後の戦いに突入しようとしていた。

ふらふらと自身の隠れ家に帰つてきて、

小屋のベッドに倒れ込むボバ。

顔には疲労がにじんでおり、

明らかにオーバーワークであつた。

(・・・もう少しだ。もう少しウィッチ達が戦わなくて済むように・・・)

彼の脳裏に前の人生で出会った魅力的なウィッチ達の顔が浮かんで消えていく。

——その大半を口説いてしまい、結果としてめった刺しにされ、死を迎えた。

だからこそ、30年以上も前の人生であったウィッチ達に

極力接触しないように彼はうまく立ち回っていた。

——もし、一つだけ問題があつたとすれば、

その立ち回りがうますぎたことであつた

——『彼は見つかったの?』

——『ああ。501, 503, 504, 505, 506, 507, 508。そし

て

そのほかのあいつに縁のあるウィッチ達の協力でな。』

——『・・・もう。恥ずかしがり屋だなあ、彼は。僕はとつくに

限界だよお。』

——『それに、あいつに関する素晴らしい情報も手に入った。』

ウィッチには横のつながりがある。

ナイト・ウィッチ同士、統合戦闘航空団のウィッチ同士、同じ出身のウィッチ同士、そして、『彼を捕獲する会』という不穏なグループ。

かくして、運命はi fの道をたどる。

誰にも会わないようにしていた彼は、人生の墓場に叩き込まれることになるのだった。



「.....」

目を覚ますと、そこは知らない場所だった。

まるで、501や502の基地みただが、微妙に違う。

司令室に見えるが、それにしては巨大だ。

あたりを見回すと、もう一度寝たくなるような状況だった。



—— 以前の人生で俺が粉をかけた

ウィッチ達全員で俺のこを見つめていた。  
501〜508の統合戦闘航空団はもちろん、  
他のウィッチ達も勢揃いの(悪)夢のような  
オールスターである。

俺は、そんな彼女たちに取り囲まれながら  
椅子に縛り付けられていた。

『……………。』

沈黙。

何も言おうとしないウィッチ達。

今なら逃げられるか？

そう思つて椅子に縛られたまま立ち上がろうとすると、  
後から後頭部を叩かれ、膝を屈する。

「……………動くな。」

「……………君は、油断ならない。」

「……………逃げないようにさせてもらおうか。」

ルーデル、ガランド、章香の3人が  
俺の肩を抑えつけている。

そして、前の方を見ると、それぞれの  
統合戦闘校訓団の司令官が座って  
いるのが見える。

「……………さて。」

502のラルが口火を切る。

「我々は、ようやくこいつを捕まえたわけだが……………」  
所有権は502にある、と主張する。」

その言葉に他の司令官が顔をゆがませ、  
明らかに怒りの表情を浮かべる。

あのゴロプでさえ、感情を顔に出している。

「……………彼は、私たちと一番長くいたんだから、  
501に帰ってくるのが筋じゃないかしら？」

「はっ。」

「……ふーん。」

俺の所有権が501にあることを主張する  
ミーナ。

メンチを切るゴロプと、底冷えするような  
声で彼女を見つめるフェデリカ。

……彼女たちが議論に熱中している間に  
芋虫みたいに這って逃げようこつそり転がる。

(……あと少し!!あと少しだっ……?!)

本当にあと一步というところだったのに、  
背中を誰かに踏みつけられる。

それも、3人に。

「……ボバさん?」

「……へえええ。」

「……ふふふふふ。」

後を向けば、芳佳、ひかり、那佳の3人が  
ハイライトのない目で見つめている。

それでも前に進もうとすると、今度は

後頭部を踏んづけられる。

「・・・逃げるな。逃げるな逃げるな逃げるな

逃げるな逃げるな逃げるな逃げるな逃げるな

逃げるな逃げるな逃げるな逃げるな逃げるな。」

呪詛のようにぶつぶつと同じことを

繰り返すハンナ。

完全に壊れている。

「——では、くじ引きでまずは

どこの所でするのかを決めましょう。」

「「「「「異議なし」」」」」

する？

何をだ？

そう思っていたところに、

爆弾が落とされる。

「皆さん、知っていると思いますが、

彼とセックスしても私たちウィッチは魔力を

失いません。・・・これは、実に

素晴らしい朗報です。」

ミーナがそういつた瞬間、

ぐりん、と首を俺の方に向けて、

ハイライトのない目を向けてくる彼女たち。

がくがくと足を震わせつつ、

転がっていると、声が聴こえてきた。

「よし。では、最初は我々のところだな。」

「つち・・・。」

「・・・くたばれ。」

「・・・。」

ラルが嬉しそうに①と書かれた紙を掲げる。

そして、伯爵や、直枝、502の皆に取り囲まれ、

そのまま担がれて運ばれる。

「全くもう。今までどこに行っていたのき……」

おまけに、セックスしても大丈夫なのに、

僕を避けるなんて……。」

「……初めてだから、優しくしろよ……。」

「……初夜、ですか……。は、恥ずかしいです……。」

「……精子、飲んでみたい……かも……。」

「……傷を見せるのは、はずかしい……な。」

「……わ、私が手とり足取り教えて差し上げますから……。」

「体力には自信があります!!……い、いっぱい出しても、

全部受け止めます!!」

なぜ、こうなった？

俺は完璧に隠れていたはずだ。

何が、何がいけなかったのだろう。

それから、俺の種馬としての生活が始まった。

## 【幕間】（再会）

ぱちり、と目を覚ます。

幾重にもわたる転生を繰り返し、

そして再び死んだはずの俺は、

懐かしい場所に来ていた。

真っ白な部屋。

そして、そこには今までに転生した

転生者達の写真が壁に飾られている。

その一角にある、俺の写真と

特典名。

思わず笑った。

（・・・あいつも変わらざるの不細工顔だな。）

こんな顔でよくウィッチ達から惚れられたものだ。

そう思って自重しながら進んでいると、  
ドアが見えた。

右手でドアノブを掴み、ゆっくりと押し中に入る。

「オラツ!!死ねっ!!モールのセイバー・スローを喰らえヤアっ!!」

「四刀流じゃあああっ!!」

．．．なんか、ダース・モールとグリーンヴァスが

PS4で「スター・ウォーズバトルフロント2」をやっているのが見える。

ん、幻覚かなと思って右手でマスクの目のあたりをこすって  
もう一度目を開いて見ても消えない。

そして、まばたきした次の瞬間、2人の姿一瞬、

俺の唯一の親友たちの姿に変わる。

「．．．あ．．。」



そして、壁に写真が飾ってあることに気が付き  
写真を見ると、2人の顔と、特典名が写っていた。

「ジュヨー使いのモールに勝てるわけがないだろう!!」

「こっちは設定上モールより強いドゥークーから剣技を教わっているんだよおっ!!」

「……ん?」

俺の視線に気が付いたのか、グリーヴァスが俺の方を見てくる。

「ん? どうし……」

それに気が付いたダース・モールと一緒に振り返ってくる。

「……ああ、やっと来たのか。……遅いぞ。」

「……久しぶり。」

「……ああ。」

体感時間にして、数百年ぶりの再会は、

スター・ウォーズのテーマがBGMという

なんとも俺たちらしいものであった。



「……お前たちも転生したのか？」

ゲームをやめ、一緒にテーブルに置いてあるまんじゅうとお茶をいただきながら二人に話しかける。

モールが疲れたような表情でつぶやく。

「……憧れのキャラの力をもつてな。

……もちろん、俺はダース・モールで

こいつが……。」

「グリーヴァス將軍さ!!ほら!!しかも

肺がつぶれる前の全盛期バージョンだよ!!」

よっぽど見せびらかしたくて仕方なかったのか、四刀流を展開していろいろなフォームを

披露するグリーンヴァス。

その隣でダブル・ツイン・ライトセイバーを

展開しジュヨウの構えをとるモール。

ふふん、と自慢する二人の前に俺も

とあるものを見せつける。

スター・ウォーズに詳しい奴なら知っている

特殊なライトセイバーを。

2人が目を見開いて声をあげる。

「おまつ・・・!! それ、ダーク・ライト・セイバーじゃねえか!？」

「おおつ・・・!! 外伝アニメのクロロン・ウォーズと反乱者達に

出てきたマンダロア出身のジェダイ、ター・ヴィズラが1000年前に

作って、使っていたセイバーだね!!・・・俺のコレクションに

加えたいんだけど・・・。」

「ダメに決まってるんだろ。」

さすがに知っていたのか、ものほしそうな顔つきで  
ダーク・ライトセイバーを見てくる2人。

しかし、これはそもそも俺が作ったものだ。

そう伝えて断ると、2人はさっさと諦める。

「・・・ま、仕方ない。俺も弟子のために

もう何本かセイバーを作ったりしているから  
自分で作れないかやってみるわ。」

「・・・俺はそもそもライトセイバーを  
作れないんだけど・・・。」

「目の前にいる真赤な鬼を倒して赤い

ライトセイバーを奪えばいいんじゃないか？」

「おい、コラ。」

グリーンヴァス將軍はライトセイバーをコレクションしているという  
設定があるので、赤いライトセイバーを手に入れてみるのは

どうかと提案した。

モールが若干マジ切れ気味で怒っているのでジョークだ、と落ち着かせ、2人にその後の人生について聴いてみることに。

「モールはどんな世界に行つたんだ？」

「俺か？・・・VRが存在する世界って言ったら驚くか？」

「マジで!？」

モールの言葉にウツキウキで尋ねるグリーヴァス。

「え?!じゃあ、ライトセイバー分回し放題で、

仮想的にヨーダやシディアス卿とも戦えるの!？」

「・・・あの2人はやばかった・・・。マジで・・・。

メイスと全盛期アナキンは剣技だけならもつと上だったし・・・。」

なぜか遠い目をして、過去を思い返すモール。

ジュヨーを習得したということは、7つあるフォームを全て

極めたということであり、相当な実力を持っているということでもある。

俺の場合はフォースも使えないから、適当に剣を振り回しているだけである。

「ジェットパックとブラスターを併用して戦うので不足はないが。」

「ま、その面々より弱いとはいえ、マジでフォース使えないと勝てないようなチートがいたしな。」

「……それって人間なのか？」

「……少なくとも、俺は人間だと思っている。」

まるで、ダース・モールの魅力を語る時のようなイキイキとした顔つきでそういう彼は心から人生を楽しんだように感じられた。

続いて、グリーヴァスに尋ねる。

「グリーヴァスは？」

「……たいへんだったなー。」

四本腕を展開したまま

体育座りし、体をがくがくと震わせ始める。

「・・・古代に飛ばされ、メソポタミア、インダス、

インド、ブリテン・・・ありとあらゆる時代の相手と  
あつてきた。・・・ほとんどの偉人たちと

知り合いになつたんだよな。・・・な。」

「お、おう。」

「・・・色んな時代に飛ぶのつて、ほんと

格安の旅行ツアー並みにしんどかつたなあ・・・。

エコノミー症候群になりそう。」

こいつに一体何があつたのだろうか。

基本、明るいところは変わっていないが、

何というか新婚生活2年目くらいのサラリーマンの

ような哀愁を背中から感じた。

場の重々しい空気を変えようと、

口下手なほうのモールが必死に

話題をそらす。

「……ところで。ボバはどうだったんだ？」  
「俺か？俺は……。」

脳裏に浮かんでくるウィッチ達との記憶。

腹を刺され、肩を撃ち抜かれ、背中に刻印を刻まれ、  
筋肉弛緩剤で体の自由を奪われ、そして  
絞り殺されたこともあった。

内またでがくがくと膝を震わせながら  
精一杯の虚勢を張って言う。

「……しあわせだったぞ。」

（……嘘だな。）

（……嘘なんだろうなあ。）

妙なシンパシーを二人から感じた。

「……お前らもなのか？」

俺の問いに2人は静かに頷く。

「……お互い、愛が重い相手だと



大変だな。」

「……そうだな。」

「……うん。」

まんじゅうとお茶を着に、

それぞれの伴侶たち（強制）について

愚痴りあつた。



「ところで、ここは一体どこなんだ？」

「さあ？」

「気が付いたら俺たちもここにいてな。」

・ ・ ・ あ、ちなみに先にグリーヴァスのほうが

来ていたぞ。俺は二番目。」

「そうか。」

ぽりぽりとマスクの後頭部を右手で搔く。

最初に転生した時も、

転生を繰り返すたびに来ていた場所にも

似ていた。

ということとは……。

『あー。テステス。』

突然、声が部屋に響く

即座に抜刀し、ジュヨの構えをとるモールと、

四刀流を展開し、腕をぶんぶんと振り回すグリーヴァス。

俺も二人の背中を守るように左手にブラスタを

右手にダーク・ライト・セイバーを構えて

あたりを伺う。

『はっはっは。そんなにおびえなくっても大丈夫だよ。』

白い光がぼう、と俺たちの前に姿を表す。

ますます警戒する俺たちの姿を見て、

あれ？と惚けた声を出す白い光。

「……あ、ごめんごめん、これならどうかかな？」

すると、白い光がダース・ベイダーの姿に変わる。

「「!?」」

スター・ウォーズで一番有名な悪役。

おなじみのあの呼吸音もしつかりと

再現されていた。

ひらひらと漂う黒のマントがその

威圧感を増長させていた。

「お。ちよつと警戒が緩くなつたね。

．．．初めまして。僕の名前はダース・ベイダー。

——元、君たちと同じ転生者さ。」

かくして、物語は続く。

もし、ニコポ、ナデポ持ちのチート転生者がやってきたら

「あ、あの．．．。よかつたら今夜．．．。」

「あのあの!!えーっと．．．。」

「はっはっは。僕は嬉しいよ。」

ウィザードと呼ばれる魔力を持つ男性であり、

ウィッチ達を瞬く間に墮としていく人物がやってきた。

顔を赤らめて、その男性の元に群がるウィッチ達。

皆、嬉しそうにその人物に頭を撫でられたりしている。

かくいう、俺は前世のように、全く女つ気のない状態で

1人で飯を食っていた。

(．．．．．なんだかなあ。)

思うところがないわけではない。

いきなり魔力を持った男が現れ、しかも

次々にウィッチが惚れていくというのだから

基地に居る他の男子達も嫉妬の目線をその男に送っていた。

(いくらなんでも都合が良すぎやしないか・・・?)

女性しか魔力を持たない時代に突如現れた

男の救世主。

まるで、物語の主人公になるのが決まっていたかのような  
スーパースターっぷりである。

男の経歴も気になる。

世界中に張り巡らした俺の情報網に引つかからず、  
ウィッチ達の間で今まで全く話に出てこなかった  
というだけでも相当怪しい。

——転生者。

俺の頭の中に、その単語が浮かび上がる。

「はい。ボバさん。」

「ん? ああ・・・。・・・芳佳?」

「はい。」

お茶がなくなった俺の急須にそつと継ぎ足してくれる

少女。宮藤芳佳。

てつきり、彼女もあの男の元に行っているとはかり  
思っていたが、そうでもないらしい。

むしろ、その目線は何か汚らしいものを見るような  
目つきであつた。

「……あー。芳佳？」

「はい。なんですか？」

「……いや、なんでもない。」

お前はあの中に加わらないのか。

そういいたくなるのを済んでのところでこらえた。

言えば、何か恐ろしい目にあいそうだったからである。

他のウィッチ達はあんなにキヤーキヤー騒いで

群がっているのに、芳佳は俺の隣に腰掛けて動こうとしない。  
それが今の俺にとっては、ちよつぱり嬉しかった。



——やった。

やったやったやったやったやった!!

俺はやり遂げた。

やり遂げたんだけ!!

笑いが止まらず、思わずにやけそうになるのを唇を

噛んでこらえて、顔をゆがませる。

そんな変な表情を浮かべているというのに、

俺の周りにいるウィッチ達はあいつも変わらず

俺に黄色い声援を送っている。

(ひひひひ!!:ちよろいなあww)

ふひつ、と変な笑いが漏れそうになるのを抑え、

ここに来るまでのことを思い出す。

『——転生?』

『うん。・・・君、"ストライク・ウィッチーズ"って知っている?』

『!?!』

知らないはずもなかった。

2008年にアニメ化され、人気を博し、映画化もされた

シリーズである。

空を飛ぶ少女と、異形の魔物、ネウロイとの戦いを描く戦記物のコアな世界観の作品だ。

出てくる少女たちは皆、美女、美少女そろいのキレイどころ。

501のシャリー、ゲルトルト、ルッキニー、エイラ、

サーニヤ、エーリカ、もっさん、ミーナ、ペリーヌ、

そして、宮藤に会える・・・？

あの、とてつもなく可愛らしいウィッチ達を

俺のモノにして、ハーレムを築き上げられる・・・？

『……………』

『知っているみたいだね。……………それじゃあ、

君の世界で言うところの特典、をあげよう。…何がいい？』

自称、神に向かって俺が頼んだのは、この魔法である。

ウィッチ達が俺に惚れやすくなるという固有魔法である。

当然、魔力を持っているし、空を飛ぶことだってできる。

もちろん、やることだって…。

『わあお。これはまたわかりやすいのを選んだね。』



『うるせえっ!! さっさとよこせよっ!! できるのか!?

出来ないのかっ!』

『……はいはい。それじゃあ、楽しい来世を

楽しんでらっしやーい。』

『うっひょおおおお!! ウイツチは全部俺のもんだああああ!!

はははははは!!』

テンションが極限まで高まった俺は、叫びながら

次元の裂け目に向かってダイブした。

そこからはあつという間だった。

近くにいたウイツチ達を落とす、基地まで連れていってもらい、

魔力即定をしてもらった。

結果、俺に魔力があることが判明し、世界中が大騒ぎに。

メディアにも取り上げられ、俺は一躍時の人となった。

そして、今はあの501の面々に囲まれている。

「おい!! ルツキーニ!! あたしのだぞ!! 離せよ!!」

「シャーリーこそすつこんでよー。」

「おい、フラウ。私がこいつの面倒を見るから

お前は部屋で寝ていていいぞ。むしろ寝て居ろ。」

「……喧嘩売っているなら買うけど？」

ウィッチ達に取り合いされるのが気持ちいい。

モテるといのがこんなに素晴らしいものだとは。

(まあ、ある程度仲良くなったらやって、セフレにするか。)

今の俺は顔がイケメンになっているという

人生イージーモードでもある。

そこに、洗脳能力も組み合わせれば、無敵というわけだ。

唯一気に入らないとすれば……。

「はい、ボバさん。」

「……ああ。」

——なぜか、スター・ウォーズのボバフェットの

格好をした男が、俺の宮藤の隣にいることである。

(は？何だあいつ？俺の宮藤によくも……！)

黒髪、ロリ、ちっぱい、俺の好みを凝縮した

宮藤はなぜか俺になびく気配もない。

だとすれば、原因は——。

(……洗脳なんて真似しやがって……!!)

人の心をもてあそぶあの男に対して怒りが湧き上がる。

思わず拳を握り締めていたのに気が付き、

そつと力を緩め、落ち着く。

(……まあいい。どうせ俺と同じ転生者だろうが、

せいぜいウィッチ達にモテない人生を送ってなww

アディオスww)

どうせ俺には叶わないだろう。

そう考えて、俺は他のウィッチ達全員を引き連れて

もつと広い別の場所に行くことにした。



『やあ。』

『……』

シュー、コー、という音がしたので

目を開けて見ると、そこにはダース・ベイダーがいた。怒っているのか、右手には赤いライト・セイバーを掲げている。

『もう気が付いているだろうけど、最近、

君の近くに、やけにウィッチ達にモテるいけ好かないイケメンがいるでしょ？そいつ、転生者だから。』

『……………』

予想が当たって嬉しいような、厄介事が増えて悲しいような気分だった。

右手で頭を抑えながら目の前にいるベイダー卿に用件を伺う。

『……………で。何の用だ？神様』

『気軽に、ベイちゃんって呼んでいいよ？』

そんなフレンドリーにベイダー卿とやりとりする

ボバは見たくなかったので、スルーして話の続きを

無言で促す。

すると、ベイダー卿はさぞや困ったと言わんばかりに

肩をすくめる。

『いやー。トラックで死ぬというテンプレをして

僕を愉しませた褒美にあの魂をちよつとかいぞ……。

特典をあげたら、案の定、調子に乗り始めちゃってさー。』

『……。』

頭の中に思い浮かぶのは、ウィッチ達に囲まれ、

醜悪な笑みを浮かべるイケメン。

だが。

『……それが、あいつらの選択なら、俺は止めない。』

『……まあ、そういうと思った。』

俺の返答に対して、やれやれといった調子でそういう

ベイダー卿。

聞くまでもないことだろう。

——ウィッチ達がどうするかは、ウィッチ達が決めることだ。

『例え、洗脳だろうが何だろうが、ウィッチ達の選択だ。』

——当人の責任だろう。』

『正しいね。厳しいけど、正論だ。』

うんうん、と彼は頷いた。

だったら、なぜ俺を試すようなことを言ったのだろうか。

『話は終わりか？ だったら——。』

『ああ。うん。君の反応を見たかったから夢に

出てきたんだけどさ。スタンスの変わらない君を見て、

僕も決めたよ。』

『？何をだ？』

そして、バイダー卿はマスクを着けているというのに、

お面が笑ったかと錯覚するような嬉々とした声で

告げてきた。

『——あの男には地獄を見てもらおう。』

——それも、生まれてきたことを後悔するぐらいじゃ

足りない、地獄を……。目を覚ました時、

きつと愉快的な光景を見られると思うよ？

楽しみにしててね！』

一体何をするつもりだ。

そういおうとした俺の声は届かず、意識が遠のいていった。



「.....」

変な夢を見た。

がぼり、とベッドから体を起こし立ち上がる。

いつもなら他の誰かと一緒に寝ていたが、

あのウイザードが来てからは、俺は一人で

寝るようになったのだった。

ちよつとクるものはあったが、元々モテていない

方だったので、今の状態が逆に安心するのだった。

時計を見ると、まだ朝の6時だった。

7時まで二度寝しようとしてベッドにもぐりこむと、

それは聞こえた。

『.....きゃああああああつ!?!』

『ちよつと!?!なんでアタシのベッドに

見知らぬ男がいるのさ?! 変態っ!!』

『うわーん!! ボバ以外の男に裸を

見られたああああ!!』

『ちよっ?! えっ?! なっ、なんで!?!』

何で洗脳が解け．．．!?!

あああああああああああああつ!!!』

ドスン、バタンツ、という音が鳴り響き、

そしてしんと静まり返った。

そこで、俺はあの夢の中で神様の言ったことを

思い出した。

——あの男には地獄を見てもらおう。

——それも、生まれてきたことを後悔するぐらいじゃ

足りない、地獄を．．．。

そうか。と納得した。

憐れにも洗脳能力を失った男は501の皆に叩きのめされている

のだろう。

原型を留めていればいいが、その望みも薄い。



トウルルーデやもっさんあたりにボコボコにされ、  
地面に埋められているだろう。

後日、男は謎の失踪を遂げ、二度と表に出てくることは  
なかった。

そして、正気に戻り、洗脳されていたとはいえ他の男を

追っかけて、俺に暴言を吐いたことを気にして病んだ

501の面々と修羅場が起きたが、それはまた別の話である。

【外伝】繰り返す人生く蜘蛛の巣に掛かった時点で詰んで  
いるんだよなあ（憐憫）く

『おかえり』

何度目かわからぬあの存在との再会。

別れは哀しみを伴い、再会は喜びと共に

などどいう言葉はあてにならないらしい。

そう何度も何度も顔を合わせていては、

何も感じられなくなっていく。

思わず、何も無い白い床に寝そべり、

ゴロゴロと転がる。

ひんやりとした床が気持ちいい。

この疲れた体も癒えていくような錯覚を受ける。

『何度も何度もコンティニュー〜苦労様。』

いつもここに来るたびにきかされている言葉を

耳にし、思わず尋ねる。

「……これで、何回目だ？」

『さあ？とつくに3桁超えているけど。』

繰り返しを繰り返すすぎて、感覚が麻痺していたようである。

自分の記憶は引き継げる。そう説明を後から受け、

ネウロイ相手に戦いを続けることを選んだはずだった。

「……一つ聴かせろ。」

『うん？何？』

「……なぜ、彼女たちも前世の事を覚えている？」

俺が聴かされた内容は、俺自身の記憶は受け継がれるということ。

彼女たちまで前のことを覚えているなど想定外もいいところである。

死んで、生き返るのを何度も繰り返し、こいつに事情を聴く時間も

なかったが、ようやく尋問できる。

——何よりも、ようやく痴情のもつれから解放されると思っていた

俺を絶望の谷底に叩き落したこいつは絶許である。

いや、別に根に持つてはいないし、ブラスターでドタマをぶち抜こうと

銃を構えていたりなどしない。

決して。

『そつちの方が面白そうだから。』

「クロス」

『嘘嘘ジョークジョーク。』

思わず本音が漏れてしまった俺は悪くない。

こんなこと言われたら誰だって激おこになるであろう。

震える左手で銃を握っている右手を抑えながら

続きを促す。

『……なんていうかな。想定外だったというか。』

「………想定外?」

かりにも神であるこの存在がそんなことを困惑した様子で

いうのを初めて聴いた。

眉を顰め、考える。

そんなことがありえるのかと。

『本当はね?当初の予定通り君だけに記憶を引き継がせて

おこうと思ったんだよ?そしたらね。彼女たちの怨念というか、

情念というか、それがね……。』

「……。」

首筋を冷たい何かが流れるのに気が付き、それを右手で触れると、脂汗だった。

ここは寒いわけでも熱いわけでもないのにどうして汗が流れるというのだろうか。

『ほら。あの世界のウィッチ達って異性との愛情とか

知らずに生きている娘とかがほとんどでしょ？』

「・・・・・・・・・・。」

やめろ。聴きたくない。それ以上話し続けるな。

聴くのが怖い。

『・・・・・・・・例え、君がどんな生物にこの先生生まれ変わろうと

彼女たちとの縁は切れないんだ。』

「

嬉しいような、悲しいような、いや、やっぱり

恐ろしいという感覚がしつくりきた。

◆

「・・・・・・・・・・はっ。」

がばり、と体を起こすと熱い熱気が俺を襲うのに

気が付き、思わずヘルメットを脱ぐ。

周りには熱い砂ばかりがある不毛の大地であり、  
おおよそ生物と呼べるものは存在しないようである。

ここは見たところアフリカ辺りであろうか。

辺りにネウロイがいる気配もない。

だが、油断は全く持つてできない。

いつもの装備をもって、はやく移動しなければ。

長年の経験から培われた危機察知能力がそう告げている。

「.....」

——上を見ると、そこには目を見開いて俺の  
顔をじつと見つめているハンナと目があった。

「.....」

「.....」

かぼり、とヘルメットを被り、気が付かない  
ふりをしてそのまま立ち去ろうとすると

何かが肩をかすめた。

右肩を見ると、弾丸がかすめたのか

熱く削れた肩の装甲が見えてしまった。

「……………お前。どこかで会ったことはないか。」

「……………気のせいです。」

「……………。」

「……………。」

無言でジェットパックを噴出して空を飛ばうと

した俺を上から抑え込むハンナ。

背中から地面に衝突し、ジェットパックに亀裂が

入る音が鳴った。

首元に銃をつきつけられながら、瞳孔が半分

開いている目で尋ねられる。

「……………なぜだ。なぜか私はお前を知っている

ような気がする。」

「気のせいです。」

「なんだこの、気持ちは……………。はあつ、はあつ……………。」

「気のせいです。」

「ああ……………。熱い。体が……………。」

「きのせ・・・おいしいっ!？」

「脱げ。脱がぬけないのなら私が優しく剥いでやろう。」

「やめろっ!! やめろおおっ!!」



『おかえり。』

「コロス。」

生き返らせると同時に俺をハンナがいる地域に

送った神に報復しようとブラスターを構える。

結局のところテクノブレイクして逝ってしまった。

いや、上手いことをいったわけじゃなく。

「転生と同時にウィッチとエンカウントする

のだけはやめろ。」

『ええー。それってただ単に運が悪いだけじゃあ・・・。』

「せめて、もう少し手心を加えてくれ・・・。」

さすがに死因が腹上死なのはごめんである。

さつきまでハンナと一日中やっていたが、

脱水症状と体力切れで死んでしまった。



ハンナはそれに気が付かず、狂ったように腰を振っていたが、彼女は大丈夫だろうか。

『それじゃあ、イつてみようか。』

「おい。それは字がちが——」



「ほーらしい子いい子♡」

「えへへー♡かわいいいなー♡」

＜ア．．．アア．．．＞

時にシャーリーとルツキーニに捕まり、足と腕の健を切られた状態で死ぬまで愛でられ。

「．．．．．あ、あの。」

「．．．．．一緒に、いて、ほしいです．．．。」

「．．．．．。」

ペリーヌとリーネの二人からドストレートに求愛され、搾精されつつ、愛現動物に

近い扱いを受けたり。

「はあつ♡はあつ♡これで3度目え．．．♡」

「先生ばかりずるいぞ。私はまだ1回しか  
しれもらっていない。」

「．．．あ．．．ああ．．．♡中から

垂れてきて．．．♡またほしくなっちゃったあ．．．♡」

「

502のラル達に速攻で捕縛され、他のウィッチ達が  
知らないような無人島の檻に入れられ、

無理やり種付けさせられ。

「．．．．。」

「．．．．．。」

「

なぜかギスギスとした雰囲気のエーリカとエイラに

挟まれ、搾り取られながらスオムスのツンドラを

数える生活を送ったり。

「ん．．．あ．．．いっばい出たね♡

「こんなに出しちやったら妊娠確定だね．．．♡」

「次は私たちだな．．．♡ 敏子♡」

「ああ．．．♡ 楽しみだ．．．♡」

「」

圭子、敏子、章香たちの追跡によって

装備を奪われ、ただの人間となった俺を

貪る三人と爛れた人生を過ごしたり。

（．．．今度こそ、今度こそ大丈夫なはず．．．）

大丈夫大丈夫。

だって、今度は絶対に上手くやるから。

ウィッチ達と深い関係になりすぎず、それでもって

見つからないようにネウロイの数を減らしつつ、

ずっと戦い続けるだけだから。

何度目かわからない人生がまたもやスタートした。

辺りを見回すと、日本語のような文字で書かれた

店の看板や、和服を着ている人間の姿が見えた。

どうやら今回は扶桑皇国からのスタートであるらしい。

とりあえず、今日の宿をまず確保しなければ。

そう思つて通りを歩こうとすると、後ろから

何かが突つ込んできた。

何事かと思い、後ろを振り向く。

「あ．．．．．ごめんなさい．．．．．」

——そこには、俺がある意味一番恐れていた少女、いや、

今は数歳くらい幼稚な少女が泣きそうな顔つきで俺を見上げていた。

そして、表情がどんどん変わり、次第に俺を見つめる目に

熱が灯つていくのを感じ、俺はその場から脱兎のごとく

走つて逃げ出した。

「．．．．．逃がしませんよ。」

去り際に聴こえてしまった言葉を必死に

頭の中から追い出しながら。

# ★★★NEW★★★2018/1/6更新【随時更新】人物紹介（ボバ・フェツト（偽）、時系列に関して）

ボバ・フェツト（偽）

説明不要の我らのボバさん。

何度も死んでは転生を繰り返している。

ストパン世界にオリ主として舞い降りたのは

いいものの、本人は女性慣れしておらず、

神様からもらったボバの装備を使いこなすまでに

時間がかかった。

結果的に女尊男卑気味のこの世界においても

毅然とした態度でウィッチ相手に接せるように。

いわく、『現代にいたときは全くモテず、生理的に無理

と言われていたから、だったらウィッチあいてにどんな

態度でいっても何も失うものはない。』と半ば

ヤケクソ気味な態度に。

が、予想以上に世界はネウロイによって危機に瀕していた。

そのネウロイと戦い続けるのはすべて魔力がある

20代以下の若い少女たちである。

羽が傷ついた鳥が安息を求めて頼れる木に留まるように、

空を飛んでネウロイと戦い、自分を守ってくれる男である

ボバは彼女たちの依存先に。

その事実とうすうす感づき始めたのは転生してから

しばらくの事。

ウィッチ達と関わらず、ネウロイ相手に戦わないで

一生平凡な人生を送れば修羅場には巻き込まれないと思っていたが、

傷つくウィッチの姿を見て、何かを考えるより先に

ネウロイに喧嘩を売る。

毎度転生するたびに自業自得であるということ

自覚しているだけに、ウィッチ達には強く出れない模様。

彼自身が気づいているかどうかは別として、

今まで接してきたほとんどのウィッチ達のことを

憎からず思っている模様。

転生特典は『ボバ・フェツトの装備』。

しかし、彼の愛機であるスレーヴーは

なぜか今回の人生においては見つからず、  
残りの装備だけで戦うことに。

三点バースト式のブラスター・ライフル。

高周波ブレード。

火炎放射器。

ワイヤーアーム。

カミーユ・ダート・セイバー（毒矢）。

アーム・カッター。

リスト・ミサイル。

ジェットパック。

小型ミサイルなどの装備を身にまとい、  
様々な武器を駆使して戦うスタイル。

マロニー空軍大將がかつて使っていた  
研究所からネウロイのデータを押収し、

それをもとに『ダーク・ライト・セイバー』を開発。なぜ、普通のライトセイバーで無いのかというと、

「え？マンダロアに關係しているんだから

3600年前にマンダロア出身のジェダイが作った

ダーク・ライト・セイバーにするに決まっているだろ？」

という謎のこだわりのため。

現代では不細工、低身長、根暗であり、

親はパチンカス、かつ生活保護を不正受給していたという

不遇の人生を送っていた。

子供のころにスター・ウォーズを見てハマる。

中でも、ボバ・フェットに憧れ、親を失い、

1人でもタフ生き続け、女に言い寄られる

くらい魅力的な男になりたいと思うように。

が、速攻で退場したそのキャラが好きであるという

ことを馬鹿にされ、スター・ウォーズごっこでは

周りの子供たちにいつもいじめられ、生傷が



絶えなかった。

女に振られた回数は3桁を超え、  
コンプレックスに。

それが原因で、女子からも  
いじめられることに。

底辺であつたが何とか大学に進学。

しかし大学生活中に両親が彼を残して蒸発。

家に押しかけてきた借金取りに

大阪のタコ部屋に押し込まれ、

そこで毎日蹴る、殴るの暴行を

加えられながらもなんとか生きていた。

脱走をクリスマスの日に決意。

警備の数がわずかに緩むこの日を狙って

外に出た彼は、走る途中、闇夜を照らす

満月が出ている空を悠々と飛ぶカラスを見て、

ボバ・フェツトのことを思い出し、夢想する。

———  
背中に銃弾を受けて死にゆく彼の

最期の言葉は「……やっぱり俺は

誰にも愛されて——。」というつぶやきであった。

子供の頃から彼に唯一優しくしてくれた

ダース・モール好きの親友と、

グリーヴァス將軍好きの親友とは

血のつながっていない家族同然の関係だった。

お互いのピンチには、互いに駆けつける。

そう約束していた彼らが離れ離れになってしまったとき、

現代で会うことは二度となかったという。

ボバ（偽）は知る由もないが、彼らもまた、

憧れのキャラの能力を持って他の世界に

転生し、親友のことを忘れずに生きている。

転生したとはいえ、現代でろくな目に

合わなかった彼は体は元気でも

心は死んでいた。

1 回目の転生では、投げやりでいつ死んでもいいと

実は思っていた。

だからこそ、空を飛んで戦って死ねれば

それでやつと解放されるといつもへらへらしていた。

そのことに気が付いた芳佳たちウィッチに本気で怒られ、

それからは彼は自然と生き延びることを考えるようになる。

好みのタイプは『家庭的でお淑やかな子』（宮藤芳佳、下原定子など）

『グラマラスで性格がいい子』（シャーリー、ヴァルトルート、ラルなどは

好みドストライク）。

自身が得ることのなかった優しい家族を得て、

子供と妻と一緒に時間を共に過ごすのが夢。

#### ◆ 相関関係に関して

ボバ⇒ウィッチ達

（いろいろあつたし、刺されたことも多々あつたが、

……それでも、空を飛ぶのを辞めるつもりはない。

……彼女たちがいるんだから。）

501⇒ボバ

（もうあまのじゃくな態度（一部以外）はとらないから。

・・・愛しているから、ね・・・。

502⇒ボバ

(夫兼、ペット兼、性奴隷兼・・・絶対に  
離れてはならない半身。・・・末永く

『よろしく』ね?)

504⇒ボバ

(やだやだやだつ!!他のウィッチのところに行っちゃやだつ!!)

505⇒ボバ

(・・・責任を、とれ。)

506⇒ボバ

(・・・まずは邪魔なガリア政府を何とかしますから  
待っていてくださいいね?)

507⇒ボバ

(にがさない)

アフリカ⇒ボバ

(・・・一蓮托生。素敵な

響きね?死ぬときも・・・ね?)

スオムス⇒ボバ

（一緒に空を飛ぼう。・・・待っている。

・・・来てくれないと拗ねる・・・ぞ。）

扶桑勢⇒ボバ

（詳しい話を聴きたいなあ・・・。（ニッコリ）

各国の他のウィッチ達（事情をあまり知らない）⇒ボバ

（・・・また、会えるかな。・・・守ってほしいなあ・・・。）

ルーデル⇒ボバ

（・・・ほう？・・・ほう？他のカールスラントに

手を出していて、私に出さないのは・・・おかしいよなあ？）

アウロラ⇒ボバ

（そのうち夜這いに行くから待ってろよ。）

◆時系列

現代で生きていたボバ（偽）が銃撃されて死亡。（201x年）

←

ストパン世界へ（191x）

← 死んでは転生するのを繰り返す。

← x x 目のストパン世界へ（この小説の始まり）

← 第一次ネウロイ大戦勃発。これを退ける。（191x）

← 世界各地を放浪し、陰からウィッチ達を助け続ける（191x～1936）

← ヒスパニア怪異発生。ガランドと再会する（1936）

← 扶桑事変勃発。美緒、醇子、徹子、章香、圭子たちの

安否を案じた彼は、ガランドの付き人として扶桑皇国に  
 入国。扶桑海事変を陰から戦い抜く（1937）

← 再び、ガランドの協力をもとに世界中の

ウィッチ達を陰から助ける旅へ。（1937～1944）

- ← 501 結成の時来たり。陰から支え続け、ウオーロツクと、ガリア上空の
- ← ネウロイの巣を破壊する。（1944）
- ← 502へ潜入。しかしウィッチ達にはバレ始め、グリゴリーを破壊した後監禁され、媚薬、セックス漬けの日々を強制される。
- ← ボロボロの体で脱走し、504を助ける。かつて、トラヤヌス作戦の失敗は彼の心を大きく傷つけた。
- ← 501に見つかり、合流。
- ← 二期の戦いを送る。
- ← 劇場版にて芳佳と美緒が再び

空を飛ぶのを見送った後、他の  
ウィッチ達にバレて追われるハメに。

逃げ切ったものの、ウィッチをかばって  
左腕を失くしていた。

←

★★現在、ここの話を連載中★★

世界からネウロイが駆逐されつつあり、

世界平和が訪れようとしている中、

始まる逃亡生活。

数年に渡り逃げ続けた結果、

ほとんどのウィッチ達が退役しており、

更に自分の首を絞める結果に。

←

死亡後、かつての友と再会。

←

★★現在、ここの話を連載中★★

現代で記憶を喪失しつつも



転生を果たす。

ウィッチの事を覚えていないが、  
かつて、彼と共に一生を共にした  
ウィッチ達は彼を追い続ける。

※本編が更新されるたびにこちらも随時更新。

H e g o t o t h e w i t c h e s w o r l  
d (W o w !! L o n g t i m e n o s e e !! B o  
b a !! )

夢を見ていた。

それは、本当に俺が望んでいたものを

得られた夢。

夢を見ると、悲しくなる。

覚めたとき、得たはずのモノが綺麗さっぱり

なくなってしまうているから。

何も考えず、死ぬように寝られればいいのに。

昔からそう思っただけやまない。

目を開ける。

目の前にはゴミが所狭しと置かれており、

自分の見慣れた光景が目の前に広がっている。

むくり、と体を起こして寝ぼけた頭のまま、  
考える。

悪夢ではなく、まだマシない夢を見ていた気もするが  
内容を忘れた。

はて、どうしてこんなにも体が痛いのだろうか。

昨日は仕事もなかったので疲れるわけもないはず。

だが、腕をうごかせば今にも悲鳴をあげてしまいそうなほどに  
軋み、足は無理に動かせば痙攣してしまいそうだと  
感じるくらい弱っている。

壁にかかっている時計を見れば、既に朝の7時を回っている。

その隣には、俺が大好きなスター・ウォーズのキャラ、  
ボバ・フェットのポスターが貼られている。

15年以上まえに買ったものだからか、だいぶボロボロだ。

疲弊しきつた体を何とか動かし、

服をいつもの仕事着に着替えようと

タンス棚を空け、かかっている清掃着を

手に取ると、何かが地面に落ちる。

何だろうと思つて手に取ると、そこには、  
見たこともない美女、美少女たちに囲まれ、  
ひきつった笑みでピースしている自分の姿が  
写っている写真だった。

．．．．．？

．．．．．??

こんなコスプレをした女たちと写真をとつた  
憶えはないが、なぜか妙に懐かしい気持ちになつた。

頬に何かあたたかなものが流れる。

右の指でぬぐうと、それは涙だった。

．．．．．あ？え？．．．

俺は．．．泣いて、いるのか．．．？

．．．いや、単なる寝不足だ。

そう考えなおし、写真をくしゃくしゃに丸め、

ゴミ箱に捨てる。

だが、胸のつつかりはとれることはなかった。



万物は流転する。

ゆえに、汝も同じ定め。命は延々と巡る。

徳を積むことにより、より、高次元の存在へと

至らんとする者。

禁忌を犯し、呪われた魂に堕ちた汚らわしき者。

全ての命は生まれ、育ち、老い、死ぬ。

仕事場に愛車で向かう途中、俺はバックミラーで  
大型の貨物トラックが突っ込んできたところまで  
憶えている。

ぐしやり、と不快な音が聞こえたかと思うと、

そこで意識が途切れた。

気が付けば、何も無い空間で目の前の白い光が

何かをずっとしやべっている。

人間よ。肉体の生を取り、己の魂を殺している者よ。

汝の欲するところを与えよ。

さすれば、道は開かれん。

——その胸に憧れを抱きし者と同じ姿となるであろう。

はあ？

目の前の白い光が何を言っているのかわからず、

そう聞き返す。

だが、光は気にした様子もなく、その場に鎮座するのみ。

すると、自分の体がすけていつているのに気がつく。

——汝の道。多くの乙女に恋焦がれし道。

その選択により、彼女たちの命運も決まることとなり。

何を——。

その先の言葉をいうことは叶わず、

俺の意識は途切れる。

— 汝の人生に、幸多からんことを。

最後に、優し気にそう言う声が  
聞こえたような気がした。



「おい、起きろ。」

体を揺さぶられ、思わず目を覚ます。

目を開けば、無精ひげを生やした黒髪、

オールバックの男の顔が目の前に見えた。

ああ、時間か。

俺がそういうと、けつ、と吐き捨て

仕事着に着替え始める。

「あんた、やけに気持ちよさそうに寝ていたが

女とヤツてる夢でも見ていたのか？だとしたら

とんだ呑気だな。最近は、どこもかしこも

士気がガタ落ちだつていうのにな・・・。」

カチャ、カチャ、とベルトを締め、  
銃をしまうホルスターの具合を確かめながら  
そういう。

「よくわからないが、大勢のウィッチが

一気に退職しちまった。雑誌とかで取り上げられていた  
子もいたのによお……。うう……。」

懸想していたウィッチが彼女たちの中に居たのか、  
壁に右手をつき、ため息を吐いて落ち込む。

想像以上に心の傷は深そうだ。

その光景を見て、たたり、と冷や汗が  
顔から垂れる。

19xx年。世界は突如出現した異形の怪物

”ネウロイ”によってその命を脅かされていた。

通常の兵器ではダメージを負わせられない

外敵に、人類は死を覚悟した。

だが、人間は今も生き残っている。



魔力を持ち、ネウロイに唯一対抗できるとい  
うウィッチたちの存在によって――。

相部屋の同僚と共に食堂に向かい、鉄の

プレートとフォーク、スプーンを手に取り、

食事を受け取るために行列に並ぶ

待っている間、他の男たちから

様々なことに関して聞こえる。

「お前、先日の政府の放送、聴いたか？」

「ああ。・・・マジでシヨックだ。」

「俺さあ、シャーリーって子が好みだったんだよなあ。

・・・それがいつの間に男がいたのか。」

「雑誌でよくみるよな。・・・まあ、俺はサーニヤちゃん

好きだけど。」

「お前、小児性愛愛好者か？やっぱりスタイルが良い方が

興奮するだろ。」

「501の統合戦闘航空団どころか、他のところも

揉めているって聞いているがよ・・・。一体何があつたんだ？」

「男の取り合いでもしたんじゃね？」

「ばっか。んなわけねーだろ。ウィッチたちは退役後、権力者か、金を持った男のところへ嫁いでいるって聞くぞ？ 言い寄る男なんざ腐るほどいるだろうに。」

彼らが話しているのは、ウィッチたちのことらしい。

彼女たちは俺が思っていた以上の人気者であり、女神でもあったようだ。

プレートにパンとスープが乗つけられ、

それを持ったまま近くのテーブルに座る。

「どこも巣をつついたような騒ぎだな。」

無理もねえ。・・・あなたは悲しくないのか？」

硬いライ麦パンを右手に持って

一口サイズにちぎり、口の中に放り込みながら

尋ねてくる。

味があまりついていなかったのか、好みの味ではなかったのか、若干眉を顰め、スープをスプーンですくって飲んでる。

返答に窮していると、ノイズ交じりの声が聞こえる。

音の出どころに目を向ければ、そこには古びたラジオが他の男たちが座っているテーブルの上に置かれている。

ラジオをいじくっているテーブルの男の周りには、

珍しいモノを見るかのように他の野次馬たちが集まっている。皆が何かを聞き逃すまいと耳を立てて神経をとがらせている。

そして、単なる雑音しか吐いていなかったラジオから

突然、聞きなれた人物の声が聴こえてきた。

『——では、意中のお相手がいるという噂は本当だったのでしょうか。』

『それについてはノーコメントとさせていただきます。

フアンの方々を混乱させるわけにもいきません。』

聴こえてきた声に色めき立つ男たち。

「おー!!この声は・・・ミーナちゃんじゃねーか!!」

501のリーダー!!くあく!!相も変わらず美しい声だなあ!!おい!!」

「あああああ・・・。彼氏がいるという噂があつたけど

嘘だったんだなあ!!やつたぜ!!」

口々に彼女、ミーナへのラブコールを送っている。

だが、悲しいかな。

向こうからの声は聞こえてくるが、こちらからの声は届かない。

男たちがどれだけ愛の言葉を紡ごうとも、彼女たちには聞こえるはずもない。

この時代に気軽に使えるケータイ電話や、パソコンは存在しないのだ。

せいぜいが、手紙でファンレターを送ることくらいか。そうして、インタビュアーとミーナの会話は続く。

『先日、502戦闘統合航空団のグンドユラ・ラル少佐が同じ話題に関して「想像にお任せします」とのコメントを残した件に関してはどう思われますか?』

『彼女は私と同じ国の出身で、理性的な人物ですから。

下手に答えて、騒ぎを大きくしまいとしたのでしよう。』

『503のプロニスラヴァ・F・サフォーンフ中佐はグンドユラ・ラル少佐と不仲であるとも聴きます。

もしや、この件が原因ではないかという見方も

ありますが・・・。』

頭の中で、なぜかグンディーとブローラがニツコリと笑いながらにらみ合っている姿が浮かんだ。

グンディーも、ブローラも厳しくはあるが、基本は優しい女性だ。

だというのに、二人が仲良くできるビジョンが全く浮かばないのはどうということだろうか。

『全く、君は女心がわかっていないねえ。

・ ・ ・ところで、今日は帰りたくないんだけど・・・。』  
そういいながらワイングラスを片手に、ソファーに腰掛けて、足を組む彼女に言われたことを思い出す。

よくわからないが、帰りたくないということは何かまずい状況に陥っているのか。

そう考え、自分の部屋にあげて、一夜を過ごした

次の日の朝、明らかに不機嫌な様子の彼女に

脛をブーツで蹴られたのは記憶に新しい。

延々とそんなことを考えていると、

インタビューも終盤に差し掛かったようであった。

『——最後に、引退されてからはどうされる

予定でしょうか。』

『501の仲間と共に国の復興や、支援に励みたいと

思います。……彼もいれば嬉しいのですが。』

『?何かおっしゃりましたか。』

『いいえ。何でもありませんよ。』

『それではこの辺でインタビューを終わらせていただきます。

本日はお時間を頂きありがとうございました。——

501戦闘統合航空団のミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐でした。

来週のゲストは、506戦闘統合航空団のロザリー・ド・エムリコート・

ド・グリユンネ少佐です。どうぞお楽しみに。』

軽快なジャズのBGMと共に、締めくくられ番組が終わる。

来週はロザリーが出るみたいだ。

一体、どんなことを話すのか気になる。

「やっぱりよ。ウィッチは処女で純潔を保っているから

魔力を持てているんだ。だから男と付き合うとかありえんだろ。」

「いやいや。わからんぜ。そういう子たちに限って

男をキープしていたりするんだからよお。」

「・・・お前、まだ女房が他の男と一緒に蒸発したこと

気にしてんのか？」

「は？気にしてねーし。」

「・・・足、震えてんぞ。」

「武者震いだから。」

「何のだよ。」

にしても、食事はもうちよつとなんとかならないのか。

元、日本人としては米が食べたくなって仕方がない。

不味くはないのだが、洋食ばかりでは飽きるというもの。

扶桑皇国で嫁さんでも作れば毎日おいしい和食が

食べられるだろうか。

頭を振って、阿呆な考えを振り払う。

女の知り合いは多くつても、そういう関係の

相手は一人もない。

いつそのこと、彼女たちに相手を紹介でもしてもらおうか。

同じウィッチや、他の業種の子たちとも知り合いかもしれない。

が、その案も却下する。

紹介されたところで、上手くそういった関係になる気がしない。

ゆえに、その日暮らして気ままに生きる方がいい。

・・・彼女たちも結婚したりするのだろうか。

祝福するべきだろうが、その光景をイメージすると

なぜか胸が痛くなる。

食欲が失せ、まだ食べ物が乗っかったままの

プレートを食堂の返却口に置き、先に戻っている

と同僚に伝え、食堂を後にする。



自分の部屋のベッドに身を投げると、  
ぼすん、と体が少し跳ねる。

今日はどうせ午後まで仕事はない。

目をつむると、この世界にやってきたからの  
出来事が浮かび上がっては消えていく。

・・・意識が遠のくとともに

懐かしい情景が見えてくる。

どうやら夢を見ようとしているらしい。

心地よい眠気に誘われ、意識を手放し

夢の世界へと旅立つ。

——そう、すべての始まりは1914年、

ネウロイと呼ばれる異形が世界に

あらわれたのがきっかけだった——

## プロローグ

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ①

時は19xx年。

世界はネウロイによつて生活圏を

狭められ、その命を脅かされていた。

その異形の怪物は既存の兵器では太刀打ちできず、

人類は大きな苦戦を強いられることとなる。

だが、1936年。人類は対抗手段の開発に着手する。

魔力を持つ女性だけが使用することができる

ストライカー・ユニットの開発。

脚につければ空を飛ぶことが可能となる。

ただし、すべての魔力を持った女性、ウィッチが

扱えるわけでもなかった。

飛行適正、および戦闘適性を満たした者のみが

それをつけることを許され、戦地に送られることとなる。

また、とある人物によってネウロイの弱点が

解析、判明するまでに多くの犠牲を強いることとなる。

人類は、確実に反撃の一途をたどってはいたが

受けた傷の深さはそれに比例して大きいものであった。

ネウロイを倒せるのは、魔力を持ち、有効打を加えられるウィッチだけ。

人々はそう認識していた。

だが、ウィッチたちや、一部の軍人の中ではとある噂が流れていた。

『全身を鎧のようなプレートで身を包み、

背中から火を噴いて空を飛び、ネウロイと

戦い続ける者がいる』と。

都市伝説として馬鹿にされていたが、

何人かのウィッチたちははつきりと知っている。

——それが、まぎれもない真実であると。



1944年、俺はとある場所に向かう船に乗っていた。とある人物からの要請によって。

貨物船の荷積みの中に紛れ込み、木箱の中で寝っ転がっている。

暇だ。暇すぎるからこっさり積み荷から

何か漁って食べようと身を起こすと、持たされている通信機器のトランシーバーに連絡が入る。

腰のところ吊るしてあるそれを手に取り、応答ボタンを押す。

『——やあ。船上の旅はどうだい？』

「……暇すぎて死にそうだな。」

『そいつは良かった。つまり何事もなく

船が目的地まで向かっているっていう

ことだからね。』

くすくすと笑い声がトランシーバーから聞こえる。

音量が少し大きく、周りに人がいたらばれる可能性が

あったので音量を少し下げて、話を続ける。

俺が今、連絡している相手。

1936年のヒスパニア怪異以来の付き合いである

とある人物だ。

中々に良い性格をしており、男として

生まれていれば、元帥にまで昇り詰めることも

可能であったであろう女傑。

——アドルフイーネ・ガランド少将。

元ウィッチとしてネウロイと戦い続け、

単なる一兵卒から今の地位まで自力で

成り上がった女性だ。

腐れ縁。

それが俺と彼女の関係を示す適切な言葉である。

「……で、何の用だ？今、ステキな船旅を満喫しているところなんだが。」

『おいおい。拗ねるなよ。……私が手配した軍船に乗ればよかったのに。』

「……普通の船で旅がしてみたかった。」

『……仮にも、密航している人間のいうことじゃないよね？』  
あきれたように言われる。

戦場に向かう足があるのはいいが、そのたびに戸籍を偽造させられて、事情を知らない軍人の環視の中、じっとしているのも嫌だ。

だから、どつかの貨物船にでも便乗して

こっそり乗ろうと思った。

「俺は悪くない。」

『全く、本当にあちこちフラフラしたりするのが好きなんだね？』

……刺されないように気をつけなさいよ、馬鹿。』

「？ノイズが走って聞こえなかった。なんて言ったんだ。」

『……何でもないよ。今回の依頼の目的、覚えているよね？』

「ああ。」

ガランドが今回、俺に頼んできたこと。

それは、501 統合戦闘航空団への潜入。

一般人として基地で働きながら、

内情視察を兼ねた調査を行ってほしいとのこと。

それをやらせるなら、自分の息がかかっている

現役のウィッチでも派遣すればいい、と

言ったとき、きわめて真面目な顔で

答えられた。

『最近、軍内部でウィッチ反対派の動きが活発化している。

ウィッチはネウロイとの戦いにおいて必須の戦力だ。

それを排除すれば、人類はネウロイに蹂躪されて

終わるだろうね。』

ストライカー・ユニットの開発により、

ウィッチの地位は急激に向上することになった。

それを良いと思わない者も多くいる。

ガランドが言った者たちも同じく。

『私の上長にあたるトレヴァー・マロニー大将殿が

ネウロイに関して怪しげな研究をしているとの報告が出ている。』

「・・・確か、501統合戦闘航空団の司令官だったか。

以前、目を通した資料では確かな手腕も持つてはいるが、少々タカ派な印象も受ける。」

『そう。さすがに表立ってウィッチを排斥するような真似はしないだろうけどさ。妨害行動をこつそり行つて

501の存在意義を失くし、解体させようとするかもしれない。』

「・・・そいつは、馬鹿なのか？」

『優秀ではあるんだけどね・・・。私とは合わないかな。』

酒の趣味も違いそうだし。

感情がこもっていない声でそういい捨てる。

どうやら、彼女はマロニーとかいう男のことを気にいらならしい。実際にあつたことはないが、

たぶん、目の前にいたら俺も顔面を殴る

くらいはするだろう。

・・・に、しても。



「体が痛い……」

『……確か、先日まで別のところに居たんだっけ?』

「ああ……。ゆつくり体を休めようと思ったら

誰かさんが突然連絡をしてくて”ちよつとブリタニアまで  
行ってきてほしい”だなんて言い出さなければもつと休め  
たんだが……」

『……ヒスパニア怪異。扶桑海事変。』

ぼそり、つぶやかれた言葉に耳がびくり、と動く。

『そういえばずっと昔の第一次ネウロイ大戦から

戦っていたんだっけな。リークしちゃおうかな。』

「……」

長い付き合いによって握られている弱みで

俺は彼女の頼みをそうそう断れない。

中には、世間に知られたら危うい件もあったが

当時既に将校の仲間入りを果たしていた彼女に

全力で隠ぺいしてもらい、事なきを得たという経緯

があった。

それだけに、これらのことを持ち出されると

そうそう強気に出ることはできない状況である。

「・・・俺は、ワイト島にバカンスにいったわけじゃない。

501への合流が遅れるのも仕方がないだろう。」

『そうだねー。ポバは若い子が好きなんだよねー。』

「お前もまだ2x歳だろ・・・。俺よりずっと年下なんだから

気にするなよ。」

こいつ・・・。

ワイト島に俺が行っていたことをまだ怒っているのか？

いつもは飄々としている奴がすねると面倒なことこの上ない。

仕方なく、切り札を切ることにした。

「・・・501での仕事が終わったら、なんでもいうことを

一つ聴いてやる。」

『・・・ホント?』

「俺は、ウィッチとの約束を破ったことはない。」

『・・・ふーん。だったら機嫌を直してあげる!』

いつもののらりくらりと相手の言葉をかわす

雰囲気ではなく、昔の年相応の態度に戻るガランド。

周りの男性将校に舐められないためとはいえ、

いつもそうしていた方がいいとは思うが・・・。

まあ、こんなことを言ったら何をされるかわからないから

言わないが。

機嫌を直したのなら良かった。

『・・・でも、私のお気に入りのリーネ・ビショップに手を

出したらダメだからね?』

「出すわけないだろ。・・・バッテリーが少なくなってきた。

そろそろ切るぞ。」

『あ、うん・・・。』

そうして電源ボタンを押そうとすると、「あ、待って。」と

言葉をかけられる。

「まだ、何かあるのか?」

『・・・私が現役のウィッチを引退しているのは

知っているよね?』

「え？ああ・・・。」

『帰ってきたら、覚悟していてね？』

そういうとぶつり、と通信が途絶える。

頬をほりほり、と掻きながら一体何のことだろうと首をひねる。

だが、いくら考えても答えがわかるはずもなくもう一度木箱の中に寝転び、船が目的地につくのを待つのであった。

——ブリタニアへの到着まで、あと3日。

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

②

この世界にやってきたときに

目にした光景は地獄であった。

あたりに漂う火と血の匂い。

人の気配はせず、何かが爆散したような

焼け跡と、いまだにメラメラと音を立てて

燃え続ける火炎だけがある。

痛む体を無理やり起こして立ち上がる。

自分の姿を首から下を見ると、

ところどころ焦げた麻の服を着ているのが見える。

・・・？

なぜ、どうして俺は・・・。

死んだはずなのにまだ、生きている

現状に困惑しつつも、誰かいないか

辺りを歩き回る。

……これが、俺がこの世界に来てから初めてのことだった。



「敵襲うううううっ!!」

「ネウロイだあああああっ!!」

はっ、と誰かの叫び声とけたたましくなる

サイレンによって目が覚める。

木箱のふたをしたから蹴っ飛ばし、

外に出て、貨物室から船内に続く

扉を開けると、男たちがせわしく

走り回っている。

「クソツタレ!! ウィッチたちが来るまで

あとどれくらいかかる!?!」

「救援信号は既に送りました!!しかし、

何分ここまで距離があります!!」

「武装を搭載しているわけでもない船で

ネウロイ相手に持つかよ!!」

「誰か!!誰か来てくれー!!」

「ネウロイがいるルートをわざわざ迂回して

来ているんだぞ!?!なんで奴らがいるんだ!!」

「知らねーよ!!とにかく、なんでもいいから

空に向かってぶっ放せ!!」

船内は大騒ぎだ。

話を聴く限りネウロイの襲撃にあってしまった

ところか。

なんの戦闘力も持たない船でネウロイを

相手にするのは自殺行為だ。

逃げの一手が正解だが・・・。

丸っこいガラス窓から双眼鏡をかぎして

ネウロイがいるであろう方向を観察する。

・ ・ ・ 1, 2, 3, 4 . . . 5機か . . .

大型のネウロイは一体もないようだが、  
中型サイズの飛行している奴がいる。

その周りを飛んでいるのは僚機か。

男たちが船内に走って入ってくる流れに逆らい、  
甲板方向に走る。

すると、誰かに腕を掴まれる。

「おい!!そっちは外だぞ!!あぶねえっ!!

中に入って避難するんだ!!」

どうやら俺を助けようとしているらしい。

だが、男の制止を振り払い、そのまま  
船上に出る。

後から男が何かを叫んでいるのを気にせずに、  
船上に置かれている貨物に隠れて、上にある  
船長室から見られないように体を隠す。

もう一度双眼鏡を使ってネウロイの



様子を伺う。

小型のネウロイが猛スピードで突っこんでくるのが見える。このままでは接敵するのも時間の問題か。既にレーザーのような赤い光線で攻撃されており、何回か船体にかすつてもいる。

船がそのたびに揺れるがバランスを取り、なんとか両足で立ち続ける。

頭の中で、自分の憧れのキャラクターをイメージする。体のいたるところに外殻が覆われ、姿が変わっていくのを感じる。

右手の肘の部分から、手の甲にかけて銃の様な突起物がボゴン、と突き出る。

背中には二つのタンクが生え、

顔がフルフェイスのマスクで覆われ、

左肩にマントのような布が生える。

船上の甲板を力強く踏み、そのまま空に向かって跳躍する。背中のタンクから火が噴き始め、その推進力によつて空を飛び続ける。右手の銃を小型の、一機に向かって構え、そのままネウロイの方向に真つすぐ進む。ネウロイと正面からぶつかり合い、あわや接触するところで、紙一重で互いに身をひねつて躲す。

旋回して、後ろを向くとネウロイがレーザーを撃とうとしているのが見える。が、ピシピシ、という破砕音が鳴つたかと思うとコアが砕け散り、粉々に消え去る。

「まず一機。」

リロードし、次の獲物と向き合う



「あゝ。シエスタの途中だったのにく。」

「そういうなって。さっさと片付けたら

基地に帰って甘いモノでも食べよう。」

「そうだね。そうしたらぐっすり眠ろうか。」

「あなたたち!! 出撃の最中だというのに

不謹慎ですわよ!!」

ペリーヌがそういうと、ルッキーニとシャーリーが

わー、怒ったー、とからかう。

その姿を見て、さらに怒りのボルテージを高める

ペリーヌ。

・・・全くもって、仕方のない奴らだ。

だが、これから戦いに行くというのに気を緩めすぎという

点ではペリーヌに同意だった。

「お前たち。リラックスするのもいいが、あまり気を緩めすぎるな。遊びじゃないんだぞ。」

私がそういうと「はい。」と仲良く

返事をする二人。

そんな姿を見て、「さすが坂本少佐ですわ!!」といった視線で見ってくる。

ペリーヌももう少し私から離れてもいいと思うんだがな……。右目の眼帯をずらし、遠くを見やる。

そこには、ネウロイのコアが5つとらえられた。

「相手は5機……。お前たち、油断……。?」

油断するな。そういおうと思ったがその先を

口にする前に頭の中が一つの疑問で埋まる。

一つのネウロイの反応が、他のネウロイに

突っこんでいる・・・？

まさか、仲間割れか？

今までのケースではありえない。

だが、現実問題、そのありえないような  
事が起こっている。

これはチャンスか。

「リネット軍曹!!」

「はい!!」

私がそういうと、愛銃を掲げて

元氣よく返事をする。

「私が突っ込む!! 援護しろ!! 他の

者は中型ネウロイの周りを取り囲んでいる

僚機を落とせ!!」

「「了解!!」」

「攻撃が来るぞ!! 散開!!」

敵の攻撃がこちらに向けられ、

それを避けるために各機がばらばらになる。

右手に持っている愛刀で中型ネウロイに

斬りかかる。

「つやあああああつ!!」

ズガン、という音を立てて

その黒いからだ削れていく。

だが、コアにまで攻撃が届いていない。

すぐに振り切られ、レーザーで攻撃される。

「つ・・ぐ!!」

辛うじてシールドの展開が間に合い、

何とか攻撃を防ぐ。

もう一度攻撃が放たれようとしたとき、

後から銃弾が前方に駆け抜けていき、

中型ネウロイのコアに当たる。

「っ！まだですっ！坂本さん！」

リネット軍曹の放った弾丸が

当たったが、ヒビが入っただけで

まだ動ける。

すかさず斬撃をコアに加えようとするが、

ネウロイが急停止し、刀による一撃を

避けられてしまう。

隙だらけになった態勢の私に対して

再び攻撃をしようとするネウロイ。

その黒いからだから赤い光が漏れ出し、

発光し始める。

(!!っしまっ・・・!!)

その時、同じような赤い光が

別方向から中型ネウロイに着弾する。

それは、コアに向かって放たれ、

見事に命中した。

断末魔をあげる間もなく、

ネウロイの体は崩れ去っていった。

今のは……。

「リネット軍曹か？」

「い、いえ。私が撃つても

あんな方角からは……。」

首を横に振る彼女。

嘘をついているようにも見えない。

では……一体何が？

呆然としている私たちに近くに

近寄ってくる他の仲間たち。

「こっちは片付いたよ!!」



「二人とも大丈夫!？」

「坂本少佐!! ご無事ですか?!」

「あ? あ、ああ・・・。」

釈然としないが、ネウロイは討伐できた。

だというのにどこかもやもやする。

抜いていた刀を鞘に納め、ある程度

離れた距離に見える貨物船の方に

指をさし、指示を出す。

「民間人が目的地に着くまで護衛する。

・・・補給が必要なものは?」

「大丈夫だよ。でも、船内にいる人は

けがをしているかもしれないね。

ちよつと私とシャーリーで様子を

見てくるよ。」

「ああ。てなわけで行ってくる。」

「あつ、こらつ!! あなたたち!! 待ちなさい!!」

坂本少佐!! あの2人だけで行かせるのは心配だから

私も同行しますわ!!」

貨物船の近くまで向かうシャーリーとルツキーニ。  
それを慌てて追うペリーヌ。

「……あの2人だけで行かせるのは不安だが、  
ペリーヌがいれば問題ないだろう。

残りのネウロイがいらないか警戒しつつ、  
残っているリーネにつぶやく。

「……先ほどの銃撃。何やら見覚えの  
あるものだった。」

「えっ?」

「いや……。何でもない……。」

まさか、な。

そう独り言を吐き、貨物船の方を見下ろす。  
銃撃はあつちの方向から来た。

それはつまり……。

(そこにいるのか? ……そんなわけないか。)

その疑問に伝えてくれる者がいるわけもなく、  
胸の高まりを抑えながらどこまでも続く  
青い空を見渡す。



さて、どうしようか。

撃墜するネウロイにコバンザメのように  
くつつくことでウィッチたちから  
身を隠し、貨物船まで戻ってくることは  
できた。

だが、遠目でピンチだと思ったので  
思わず援護してしまった。

コンテナの陰からそつと顔だけ出して  
今も空に浮いている二人のウィッチ。

そのうち一人は、今回の人生でも既にあっている  
右目に眼帯をつけている女性。

やばい。

この姿を見られるわけにはいかない。

船内に入って事なきを得ようとすると、

上空から3つの影が降り立ってくるのが見える。

思わず隠れる。

「さーて。じゃあ、船長さんのところに行つて

事情を説明しようか。」

「そうだな。．．．ふああ。眠い。」

「ほらっ！しつかりなさいな！」

息が止まった。

．．．．．

彼女たちは俺を知らないだろうが、

・ ・ ・ ・ ・  
俺は知っている

まずい・・・。

まずいまずいまずいまずい!!

船内に入つてく三人の姿を

そつと物陰に入りながら見つめる。

この船を目的地まで護送する気か。

だったら、密航している俺はヤバイ。

下手しなくても警察送りだ。

どうする? どうする!?

頭がせわしく働き、この現状を打破できる

考えを探そうと必死に悲鳴をあげる。

テンパっているときに、どこまでも青い海が

広がっているのが見える。

・ ・ ・ ・ ・

(・・・次来的时候は、豪華客船のファーストクラスを  
経費で使つて来てやるっ!!)

鼻をつまみながら、果てしない海へと身を投げる。

こうして、俺はブリタニアへと到着した。

・・・貨物船を護衛しているウィッチたちに見つからないよう、  
数十キロを迂回して泳ぐという荒業によつて。

そのことを後にガランドに伝えたら、  
爆笑された。

死ぬかと思つたわ。

本編 ウィッチたちとの出会い〜爆弾点火〜

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

③

「せいっ!!はあっ!!」

愛刀を握り締め、上段下ろしの  
太刀筋を描く。

毎日欠かせずに行っている鍛錬。

しかし、なぜか今日はあまり

体の動きがよくない。

邪念を抱いてしまっているからか、

頭の中をぐるぐると何かが

巡りまわっている。

昨夜、夢に出てきた人物。

あったことがないはずなのに、

その男の顔を見たとき、なぜか泣きそうになった。

しかし、その理由はわからない。

この胸の中に巣くっている、

ドロドロとした怨念も。

(・・・)

刀を降ろし、海を眺める。

ネウロイに襲われていた貨物船を

助けてから、心がうずいている。

自分のすぐ近くに、私にとって

大切な誰かがいると勘が告げている。

(・・・バカな。)

頭の中で否定しても、

いつの間にか生えていた耳はびこびこ



せわしく動き、しつぽはちぎれんばかりに横に動いている。

手で抑えて、耳と尻尾を引っ込める。

刀を鞘にしまい、基地までの帰路につく。

(私は・・・何を確信しているのだ?)

不安はなく、むしろ心臓の鼓動が速まる

温かさを感じながら、来た道を帰るのであった。



げっほ!!げっほ!!・・・うええあつ・・・。

数十キロ泳ぎ、ブリタニアの陸地についた俺。

砂浜に倒れ込み、肩で息をする。

泳いでいる途中、水を飲んでしまい気持ち悪くなる。

はあつ、はあつ、と乱れる息をゆっくりと整えつつ、

ごろんと砂浜に寝転がって休む。

腰につけていたトランシーバーを手に取ろうとすると、何も感触をつかめないことに気がつく。

血の気が顔からサーツと引いていき、

体がぶるぶると震えだす。

・・・な、ないっ!?

トランシーバーが・・・!!

あわててあたりを探すも、見つからず

思わず両手で頭を抱える。

(・・・やばい。ガランドの助けを借りられなきや、

このままずっと野宿確定だ。というか、偽造した

身分証明書をまだ受け取っていない・・・)

現地で受け取る予定だったので、

リベリオンについてからこのことについて

考える予定だった。

だが、今の俺は宿無しどころか

自分が何者であるかを証明することさえ

できない。

(・・・詰んだ。)

体育座りでいじけながら、

浅瀬で泳いでいる魚って

食えるかな、とサバイバル思考に

陥るのだった。



「走れ走れ走れっ!! 体力をつけろっ!! もっと長く戦えるように

なるために!! ネウロイの脅威から人々を守るために!!」

「はいっ!!」

「はあっ!! はあっ!!」

坂本さんの掛け声を受けて、必死に走り続ける

リーネちゃんと私。

既に体のあちこちが悲鳴をあげており、今にも倒れそうなほど疲れ切っている。けれども、根をあげるつもりは私もリーネちゃんもなく、なんとか訓練をこなしていく。

最初来たときはすぐにバテていたのに、今は数キロ走っても大丈夫なほど体力もついた。

武器を持ってても体をふらつくことはなくなったし、前よりは安定して空を飛ぶことができるようになりつつある。

「よし!!そこまで!!……二人とも、よく頑張ったな。」

「ひい、ひい……ふええ……。」

「はあ、はあっ……。う……。」

ぱたり、と同時に倒れ込む。

限界を迎えつつあったので、

そのまま横になって地面に寝転ぶ。

「二人とも、前よりも長く走れるようになったな。」

上出来だ。確実に成長しているぞ。」

「あ、ありが……とう……ございますっ……。」

「はあつ、はあつ……。えへへ……。」

坂本さんに褒められて、喜ぶ。

子供扱いされていたのが嘘のようだ。

……何だか最近、坂本さんの機嫌が

よさそうに見える。

何というか……時々憂れた目で

空の彼方を見つめているその姿は

まるで……。

「さて。そろそろ基地に戻るぞ。」

……お前たちはゆっくり休んでからでいいぞ。」

踵を返し、スタスタと歩いて立ち去っていく。

その凜とした姿はかつこよく、

毅然としたものだった。

(・・・何があつたんだらう?)

隣で一緒に倒れている彼女に聴いてみる。

「ねえ、リーネちゃん。」

「はあつ、はあつ・・・。なに?」

「坂本さん、ちよつと前から様子が変だけど・・・

何かあつたの?」

私がそういうと、驚いた顔つきになる。

「・・・やっぱり、芳佳ちゃんもそう思うの?」

「うん・・・。」

リーネちゃんもうすうすう感づいていたようだ。

「・・・ある時、ネウロイに襲われていた

貨物船の救助に向かつたの。その時、

不思議なことが起きて・・・。」

「不思議なこと?」

「うん。ネウロイにやられそうになつた坂本さんを

守るかのようにな、どこかから銃撃がネウロイのコアに

打ち込まれて……。」

それって……。

「他の人が助けてくれたんじゃない？」

首を振って否定する。

「その時、一緒に出撃していた人たちは

他のネウロイと戦って距離が離れていたの。

だから、ありえないはずだけど。」

今でもその時のことを思い出しては

信じられないのか、驚愕の表情を浮かべる。

「……私、長距離の銃を扱っているから

弾道からなんとなくどっちの方角から銃弾が

放たれたのかわかるの……。」

貨物船の方から来たの……。その銃撃は。」

「……。」

きつと、私がおその場に居合わせていても

信じられないだろう。

誰か他のウィッチが撃った弾が

偶然ネウロイのコアにあたり、

倒した。

そう頭の中で結論づけても、

気が晴れることなかった。



「あ、もしもし。私、ジヨドー・カストというものですが……。

ええ、アドルフイーネ・ガランド殿はいらっしゃいますか？

……え？なぜか昨夜から見当たらない？

さいですか……。もし、もどいたらジヨドー・カストという

男から、○○番地の××ホテルから連絡があったと伝えていただけますか？

……はい、ありがとうございます。」

そういつてがちやり、と電話を切る。

ホテルとは名ばかりのぼろ宿。

しかし、俺のような身分証明ができない



人間でも泊まれる場所となったらここ  
くらいしかなかった。

小銭をフロントの受付に渡し、

自分の部屋まで戻る。

扉をしめ、そのまま扉にもたれかかって座る。

思わず、ため息が漏れる。

野宿を回避し、なんとか今日の

寝床を確保した。

幸い、リベリオンで使われている

通貨はある程度持っていたので

一週間は過ごせる。

が、自分の立場が危ういことに

変わりはない。

今すぐにもガランドに連絡を

入れたいところだが、別件で

席を外しているのかつながらる

気配もない。

刻一刻と時間だけが過ぎていく。

が、今抱えている最大級の爆弾から目をそらし続けるのも限界の様だ。

ちらり、とベッドで眠っている

人物の姿を見やる。

銀色の肩まで伸びている髪。

儚さと、幼さが入り混じった

端正な容姿。

その姿を見れば、誰もが

美少女だと声を漏らすであろう。

——サーニャ・V・リトヴァク。

そう、何をトチ狂ったのか

自室に、よりにもよって501の  
彼女を連れ込んでしまった。

食べ物を買に行くために、  
裏路地を抜けようとしていたら、  
出会ってしまった。

——複数の男に襲われかかっていた  
彼女に。

速攻で男たちを打ちのめし、  
彼女を助けたまではよかった。

耳と尻尾を出し、  
瞳孔が半分開いている目で  
マスク越しの俺の顔をじつと穴が  
空くほど見つめてくる彼女。

『……………』

『……………』

気まずい沈黙。

それを破ったのは、さらに

気まずい俺の一言だった。

『……お、おそようございます。』

そういつた瞬間、

彼女が何か確信をもった顔つきで

全速力で俺めがけて走って来た。

意味不明な光景に内心驚きつつも

冷静さを装い、背を向けて

ダッシュで走る。

普段ならこれくらいのこと、

わけもなく引きはがせるが、

顔を隠すために姿を変えているので

アーマーの重さが俺の脚を引つ張っていた。

それでも何とか逃げ切れると

タカをくくっていた。

だが、さすがナイトウィッチというか

夜に彼女、サーニャから逃げ切れることは不可能であった。

このままでは追いつかれる。

そう判断し、くるりと

体の向きを180度構えて

ファイティングポーズをとる。

『……にや。』

しゅばっ、と俺の体めがけて飛び込んでくる。

そんな彼女に対し俺は、

右手をぐつと手刀で構え、

……彼女の後頭部を優しく叩いた。

気絶した彼女が床に落ちそうになったので

あわてて抱きかかえた。

で、気絶した彼女を抱きかかえて  
ベッドに寝かせ、今に至る。

(・・・どうしよう。)

昼間とは別の意味で頭を抱えた。

# 501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

④

温かな心地の中。

私は目を開ける。

辺りを見回すとぐにやぐにやと

風景がゆがみつづけ、ここが

現実の世界でないことを知らせている。

夢をみているみたいだ。

そして、場面が切り替わる。

あれは・・・、私だ。

見覚えがある。

501の基地にこんな部屋があつたはずだ。

だが、あそこは今誰も使つておらず、

物置になつているはずだった。

そこに置かれているベッドで、

シーツを顔までかぶり、熟睡している誰かがいた。耳と尻尾を出しながら、顔をほころばせ、

その誰かが寝ているベッドのシーツに手をかける私。

そして、そのシーツの中にいた人は……。



レーザーがアーマーをかすめる。

当たった部分が焼け焦げ、

金属が溶ける匂いがする。

「……っ!!」

痛みが体にずきりと走り、

思わず動きを止めそうになるが、

右手のブラスターでネウロイに

向かって弾幕を貼る。



小型の数匹を仕留めた。

だが、まだまだ数はうじゃうじゃいる。

(・・・くそっ!!)

思わず心の中で悪態をつき、

空を飛んでネウロイを街中から、

海の方面へと誘導する。

まさかの襲撃。

サーニャがいればこうは

ならなかっただろう。

だが、夜間哨戒の任務に行く前に

俺が宿に連れて行ってしまい、

街がネウロイの襲撃にさらされてしまった。

他のウィッチたちが付くまで

何とかもたせなければならぬ。

だが・・・。

(うつ、ぐ……。目が……。)

エネルギーが切れてきたのか、  
目がぼうつとかすんできた。

つい前にも一回戦って、

それからまともなエネルギーの  
補給ができていない。

戦える状態でないのは  
明白だった。

しかし、ネウロイがやってきて  
戦わないわけにもいかなかった。

左手に装備しているリストから  
ミサイルを発射し、ネウロイの  
体に直撃させる。

シールドで一発目を防がれたが、

二発目でシールドを破壊し、

三発目が着弾する。

また一体落としたが、

それと入れ替わるように他の

ネウロイたちが突っ込んでくる。

体をひねって避けた先に

別のネウロイが突っ込んできて

体にぶつかり、吹っ飛ばされる。

(・・・っ!!)

頭の中をかき乱され、

遠くの彼方まで飛ばされかけるのを

背中からジェットを噴射して

体勢を立て直す。

「らああああっ!!」

背中の小型ミサイルを発射し、

ネウロイのシールドごと破壊する。

距離を取りつつ、ブラスターを

撃つて近づかせないようにしようとすると、  
後から別のネウロイにぶつかられる。

「ぐっ……がっ……!!」

その瞬間、チャンスとばかりに  
一斉にレーザーを放たれる。

俺の近くにいたネウロイごと、

とどめを刺さんと。

「……っおおおっ!!!」

とっさに近くにいたネウロイの体を盾にし、

攻撃をしのぐ。

全て着弾し、俺が盾にしたネウロイはあっという間に

消えていった。

あと……12……か。

万全の状態なら、これくらいの奴ら  
なんともない。

速攻で片をつけられただろう。

だが、数十キロ泳いで疲弊した体力と  
昼間の戦闘で消耗した精神力が完全に  
回復しきっておらず、思うように体が  
動かない。

まさか、こんなところで死ぬとは……。

気が付いたら、笑みをこぼしていた。

……

(……1回目に比べて、2回目は速い終わりだったな……)  
ふっと自嘲し、震える手でブラスターをネウロイに向ける。  
(最後まで、かっこつけて死ぬか……。……やっぱり)

死ぬのは、怖い、な……)

これからする抵抗も、奴らにとっては  
何の痛みもないだろう。

それでも、最後まで抗ずにはいられず、

戦うことを自然と選んでいた。

折れた左腕に仕込んであるリストミサイルを起爆させて、一体でも道連れにする。

ネウロイが一齐に攻撃を放ってくる。

それにはたいして、ブラスターで応戦する。

数で上回る向こうにかなうわけもなく、

徐々に押され、レーザーが自分めがけて

飛んでくるのが見えた。

(・・・避け切)

その瞬間、暗闇の中から俺と

ネウロイの攻撃の間に何かが

飛び込んできた。

魔法陣を展開し、ネウロイの

攻撃から俺を守った乱入者。

「……サーニャ!？」

ネウロイの気配で目を覚まして

飛んできたのか!？」

他のウィッチたちが来る前にストライカー

ユニットをつけて駆けつけてきたということは

近くにストライカー・ユニットを置いていたのか。

いや、それよりも……。

「サー」

「……久しぶり。」

振り返った彼女の瞳を見て

思わず言葉を失う。

どこまでも暗い漆黒の目。

ハイライトが薄れて、焦点が

果たしてあっているのか疑わしい状態。

そして、その表情はどこか狂気を

含んでいる笑みであった。

「話はあると。……今はこのお邪魔虫たちを  
始末しよう。」

「あ、ああ……。」

ミサイルランチャーを構え、

一斉掃射し、跡形もなくネウロイを  
粉々にしていく。

彼女の撃ち終わりの隙を狙って

攻撃を仕掛けようとしている

ネウロイに飛び蹴りを加え、

ブラスターで蹴散らす。

「あと6!!」

「いや、あと3だよ。」

サーニヤの方を見れば、

一気に3体のネウロイを屠ったところが  
見えた。



「じゃあ、これで2!!」

小型のネウロイに飛び付き、

至近距離からブラスターを連射し、

コアを撃ち抜いて撃墜する。

ついでに近くにいたもう一体に

左腕につけていたリストミサイルを

右手で外して、投げ、ブラスターを

当てて誘爆させる。

形勢不利と見るや否や、

逃げようとする最後の一匹。

「逃がすかあああつ!!」

右手のリストからワイヤーを射出し、

小型ネウロイの上に乗っかり、

コアめがけてブラスターを押し付ける。

「ラストおっ!!」

シールドがなかなか壊れなかったが、

銃身が焼けつくのも気にせず、

接射し続け、ついに最後の一体の

コアを撃ち抜く。

全滅させたことにホツとし、

地面に降りる。

思わずしりもちをつき、

床に倒れ込む。

「はあつ、はあつ、はあつ……。」

死、死ぬかと思った……。

いや、サーニヤが来なければ確実に死んでいた。

お礼を言おうと体を起こすと、

至近距離で彼女の顔が見える。

「うおっ!？」

あぐらをかいている中に飛び込まれ、

体をすりすりとこすり付けられる。

腰に両手をまわされ、

がっちり抱きしめられる。

「……全部、覚えているよ。」

耳元でささやかれ、思わず寒気がした。体中に鳥肌が立ち、悪寒が止まらない。

あれ、何だか既視感があるぞ、これ。

初めてガランドと会ったときと同じ光景。

・  
・  
・

前のことを思い出してしまった彼女がいきなり襲い掛かってきたような状況。

混乱していると、マスクを両手ですぼつと

外される。

あ、と間拔けな声を漏らすと、素顔で彼女と対面した。

「ボバだよね。」

「……僕の名前は、ジョドー・カストです。」

「ボバだよね。」

「僕の名は」

「ボバだよね。」

「はい。」

顎に軽機関銃を押し付けられ、

思わず答えてしまう。

両手をあげて降参していると、

首に何かをかちやり、とはめられる。

自分の首元を見ると、

リードのようなものがつけられ、

その取っ手を彼女が握っているのが見える。

彼女の耳がびこびこ嬉しそうに動いており、

尻尾はぴん、と立っている。

「・・・サ、サーニャ・・・さん？」

「これで、もう、誰にも渡さない。

どこにもいかない。ずっと私の

傍にいろ。・・・子供は二人ほしいな。

私の隣からいなくなったりしたらいや。

・・・ん。」

体をすりすりともまたこすり付けてくる。

大切なものを絶対に手放さないとするように。

速攻で首輪のリードをブラスターで焼き切り、

空を飛んで彼女から全速力で逃げる。

後を見ると、瞳孔が完全に開いている

彼女が、ハイライトのない瞳のまま

追いかけてきているのが見えた。

「なんで逃げるの？ 私のこと、

かわいって言って言ってくれたのに。

ずっと守ってくれるって言っていたのに。

逃げないで。離れないで。待って。ねえねえねえねえねえ．．．。」



幕間　　（その頃の彼女たちは①）（502、506統合戦  
闘航空団）

ここではない、たぶんどこかの世界において。  
とある一人の男がいた。

その男は、憧れのキャラクターの能力を  
神から賜り、自由に生きていた。

そして、あまりの嬉しさとその世界にいる

魅力的な女子達を前にして、イロイロと  
やっってしまった。

そう、色々と。

そのアホは何をトチ狂ったのか、その子たちを  
片っ端から口説いていた。

正確にはただだからかかっていて、と本人は思っていただろうが、  
彼女たちはそうは思っていないかった。

ネウロイという化け物が世界に跋扈する世界。

その怪物に対抗できるのは魔力を持った女子のみ。  
男がネウロイを相手に戦えるわけもなく、  
最前線でネウロイを仕留めるのはいつも魔力を持つ、  
ウィッチの仕事であった。

しかし、幾たびも行われる終わりなき戦いに

PTSDを発症する者があらわれ始めた。

ストライカーユニットをつけて空を飛び、ネウロイ相手に  
まともに戦える術を人類は身に着けた。

その代償としてウィッチたちは精神をすり減らすこととなる。  
そんな中、ストライカーユニットが1936年に開発される  
ずっと前からネウロイを相手に戦い続け、生き延びてきた男。

——彼があらわれたことよって、世界の命運は  
大きく変わることになったのだった。



〈506統合戦闘航空団〉A隊基地



「.....」

窓の外から見える景色。

外は雨であり、たたきつけるような雨粒が

窓にびちゃびちゃと音を立て、ぶつかってきている。

司令室の椅子に腰掛けて、紅茶を飲む。

ことり、とカップをソーサーに置き、ふう、と息をつく。

いつもなら演習をB隊と行っているところだろうが、

あいにく、この天気では不可能であった。

机に頬をついて考える。

（せっかく、A隊とB隊で距離を近づけるチャンスだったのに.....）

政治的な理由によって、A隊とB隊に別れている

506統合戦闘航空団。

互いがいがみあって、争っている場合ではないのに

いまだに仲良くする気配もない。

しかし、先日新しくやってきた扶桑皇国のウィッチ、

黒田邦佳中尉。

彼女はB隊のウィッチたちとも隔たりなく

接していた。

あのプライドの戦いプリンツですら彼女には

一目置いてるように見える。

光明。

A隊とB隊のコネクターとしての役割を果たしてもらうのが

一番ではないかと一縷の希望を彼女に抱く。

そんなことを悶々と考えていると、司令室の

ドアが開けられ、見知った人物が入ってきた。

「む？ロザリー。休まんでよいのか？」

ハインリーケ・プリンツエシン・ツー・ザイン・ウイトゲンシユタイン。

A隊の戦闘隊長にしてエース。

その実力は506の中でも一線を画している。

つかつかと近くのソファアーに歩み寄り、

美しい所作で座る。

その動作から彼女の教養が垣間見える。

「全く。今日はB隊の者どもに我らの実力を  
見せる良い機会であったというのにお。

残念じゃ。」

虚勢を張っているわけでも、悪態をついているわけでもなく、  
心からそういつているかのように、至極残念そうな表情で  
そういう。

そんな彼女の様子を見て、思わずため息をつく。

「・・・もう少し仲良くしてくれと嬉しいんだけど・・・」

「向こうが突つかかってくるのが悪い。わらわは悪くない。」  
そういつてふいつとそっぽを向く。

新しく来た彼女とのふれあいでも多少は

丸くなったと思っただが、やはり相も変わらず

強情である。

全く、どうしてこうも厄介なのか。

.....

——こんな時、彼がいてくれればきつと  
・・・・・

何とかしてくれるだろうに。

そんな考えが頭の中に浮かんできたとき、  
即座に疑問が湧いてきた。

——彼とは、誰だろう？

なぜ、見知らぬ男の人が助けてくれるだろうと  
考えたのか。

自分で自分の思考回路が理解できなくなる。

そんな風に困惑していると、続けて話題の  
彼女が入ってきた。

「あ、いた！」

耳をびこびここと動かし、嬉しそうに

プリンツの元まで近寄る彼女。

黒田那可さん。

どうやらプリンツのことを探していたようだ。

右手に何かおいしそうなお菓子を持っている。

「これ!!偶然手に入った扶桑皇国のお菓子ですよ!!」

3人で一緒に食べましょう!!」

「・・・本当に甘いモノが好きじゃな、お主は・・・。」

あきれたようにさういう。

だが、どこか嬉しそうに口元がほころんでいるのが見えた。

そんな様子を見て、思わずくすりと笑みがこぼれる。

「じゃあ、いただきましょうか。・・・せっかくだから

他の子たちも呼びましょう。」

「あ、いいですね!!私呼んできます!!」

「わらわは紅茶を用意するとするかのう。」

今日も穏やかに日々を過ごす。

私も、彼女たちも。

——胸の奥に灯り始めた火に気づくことなく。

◆ 502 統合戦闘航空団基地

「……………」

ぶすつとした表情で、椅子に座り、  
両腕を組んでいる女の子。

菅野直枝。

通称かんちゃんが大機嫌だと言わんばかりの  
ポーズをとって座っている。

「……………どうしたの?」

僕がそう聞くと、耳をぴくりと動かし、  
ゆつくりと口を開いて話し始める。

「……………すっげえ変な夢、見ちゃった。

……………くそつ。」

イライラを抑えるかのように組んでいる手の  
指でとんとん、と自分の腕を叩いている。

「一体、どんな夢だったのさ。」

「どんなって……。」

そう聴くと、一瞬真顔になり、

あつという間に顔を真赤に染め上げる。

「……言、言えるかあつ!!」

がおおおつ、と吠えると彼女の声

食堂中に響く。

どうやら相当恥ずかしい夢を見たらしい。

……やれやれ。

……

・ 今回は独り占めして、自分の傍にずっと置いておけると思ったんだけどなあ……。

左手の薬指を右手で触る。

そこにあるべきものがないことに

内心いらだちを感じ、思わず爪で

手の甲を引つ掻く。

気を落ち着かせるために厨房の方を

見るとそこでは異様な光景が広がっていた。

「……え、えーと、包丁の持ち方ってこう、かしら……？」

「そうそう。……上手になりましたねー。」

「そうかしら？ そうだったら嬉しいわ。」

水色のエプロンを身に着け、包丁を右手に持ち、

料理をしているジヨゼと、その隣で料理を

教えている定子ちゃん。

食べるのが好きな彼女が料理をしているのは

502にしてみれば珍しい場面であった。

「そういえば、どうして急に料理を？」

「え？ えーと、それは……。」

聴かれていいよどむジヨゼ。

「……あ、もしかして。」

「つ……。」

どきり、と驚愕の表情になる。



「自分で食べるためですね!!いやー、

料理の楽しさを知ってくださいるのは嬉しいです!!」

「え、ええ。そうよ……。」

何を想像したのか、表情がにへらへと

緩み切っている。

ちらり、と隣のテーブルで突っ伏している

二人を見る。

「……これは夢よ。左手にないなんて……。」

夢……そう。夢でなければならいんだから……。」

「……ついてない。恋愛にまで運がないなんていやだ……。  
いやだ……。はやく会いたい……。会いたいよお……。」

怪しい宗教団体が邪神を呼び出すような

重々しい雰囲気。

目が虚ろになって死んでいる二人は、ずっと同じ

ことを繰り返しつつ歩いていた。

ワイングラスにお気に入りのワインをトクトクと注ぎ、  
くいつと飲み干す。

・・・最近、いくら飲んでも酔えなくなってきた。  
前の世界で経験できなかったこと。

それを夢の中でしてしまつてから、どうにも

以前ほどお酒を飲むこともなくなつた。

ほう、とため息をつき、伸ばしている髪を

右手の指でくるくると弄ぶ。

(・・・ふふふ。ふ・・・ふ。)

自分が自分でなくなつていく感じ。

女の子が好きはずだったのに、今は

彼のことがばかりを考えている。

そのことに気が付いたとき、

顔から火が出るほど体が熱く火照り、

女に目覚めてしまったようだった。

（・・・初めまして、かな？）

あつたとき、最初に何て言おう。

この風景に足されるべき彼が帰ってくる  
ところを思い浮かべ、静かに微笑した。

幕間　　くその頃の彼女たちは②く(504、507統合戦  
闘航空団)

扶桑皇国。

そこは、ボバが元いた世界でいうと  
日本であった。

どうからどう見ても日本なのである。

扶桑皇国のウィツチは強い。

リバウの三羽鳥をはじめ、歴戦の猛者が

数多く生まれた国としても知られている。

中でも、501統合戦闘航空団の坂本美緒。

504統合戦闘航空団の竹井醇子。

そして、扶桑皇国最強のウィツチ、若本徹子。

この3名を知らない扶桑国民はおそらくいないだろう。

が、彼女たちがそこまで強くなった原因である

とある人物については、ごく一部の関係者しか知らない。  
3人は、口をそろえてこういう。  
.....

——自分には二人の師がいる、と。

一人は誰もが容易に想像できた。

北郷章香。

彼女たちの先輩であり、先生であつた

ウィッチである。

しかし、もう一人に関しては誰も知らず、

謎に包まれているのだった。



504 統合戦闘航空団基地

「はっ、はっ、はっ……。」

体の痛みも気にせず足を動かし

走り続ける。

加齢とともに落ちていく魔力はどうしようもない。

だが、その分体力でカバーできるはずだ。  
まだまだウイッチとして空を飛びたい。

大切な仲間を、人たちを守りたい。

そのことを考えるだけで自然と体は  
動くのだった。

並木道を走り続け、目標の距離を走り切ったので  
早歩きでクールダウンする。

息が苦しく、心臓が破裂するのではないかというくらい  
鼓動している。

すると、目の前に見知った人物がいるのが見えた。

「……隊長。」

「……あら？」

ドミニカ・S・ジエンマイル。

通称、大将が私の目の前で待っていた。

立ち止まり向き合う。

「……どうしたの？」

私がそう聞くと、何か足をとんとんと

せわしく叩き落ち着かない様子で聴いてきた。

「・・・なあ。長らくここでやってきた。」

どこか懐かし気な表情でそういう彼女。

ここに来た時のことを思い出しているのか。

それとも・・・。

「・・・501のヴィルケ中佐と会ってから、

ただネウロイをぶつ潰すだけじゃなく、

それ以外の戦いがあるってことに気が付いた。」

噂に名高いカールストラントのミーナ中佐。

501の司令官として知られているウイツチだ。

美緒がいるところでもある。

「ジェーンがいれば満足だった。でも・・・。」

表情を歪め、右手で胸を押さえつけながら言う。

「・・・最近胸に穴が開いたような気分なんだ。

・・・誰か、ジェーン以外に誰か大切な奴が

いたような気がするんだ・・・。」

今にも泣きそうになるのをこらえているような顔つき。

気の強い彼女がそうしているところを見て

今は501にいる親友の姿を思い出す。

「・・・悪い。ただ、吐き出したかっただけだ・・・。

明日からはいつも通りに戻るさ。」

そういつて背を向けて立ち去る。

その背中は悲哀に満ちており、明らかに

悲しんでいるのが見て取れる。

彼女が言っていること。

それはきつと——。

(・・・いけないな。)

思わず顔がにやけてしまう。

自分だけが、完全に思い出している。

優位に立っている。

今なら他のウィッチを出し抜ける——。



その事実がどうしようもなく私の  
胸を高鳴らせ、興奮させる。

しかし、彼が今どこに居るのか

そもそも生きているのかさえ分からない。

自分が嫌っていたような人間になっているというのに  
止められない。

欲しい。

なりふり構わず。

手に入れたい。

（そのためにもまずは・・・）

—— 体力をつけて、彼を捕まえられるようにしないと

つぶやいた独り言は誰にも聞こえることはなく

空の彼方に吸い込まれていった。

◆ 507 統合戦闘航空団基地。

背中を感じるベッドの硬さを

気にせず、枕に頭を乗せて寝ころがる。

大好きな煙草を最近吸わなくなった。

その姿を見た彼女から

「て、天変地異の前触れ?!」と

言われた。

・・・さすがにひどすぎるのではないだろうか。

同性からアプローチされて揺らいでいる

ウイツチに言われたくない。

目を閉じて静かに考える。

今まで居場所がなかった自分にできた

大切な場所。

今では、自分よりも大切だと言える

仲間たちもいる。

間違いなく、幸せだと言えるだろう。

・・・しかし、大切な最後の一かけらが  
揃っていない。

彼なくして、この「スオムスイらん子中隊」、  
いや、507、サイレントウィッチーズはありえないのだから。

眠りかけていたその時、扉をノックする音で  
目が覚める。

「・・・どうぞで。」

「入るわよ!!」

そういつて上がり込んでくる人物。

巫女服のような独特の衣装を身にまとい、

自信に満ち溢れている顔の女性。

穴渕智子。

この507の戦闘隊長だ。

しかし……。

「私が返事をする前からドアを開けるのはやめてほしい。」

「いいじゃない。どっちにしろ。」

良くはない。

だが、そういったところで彼女が直すはずもないので

諦めている。

体を起こし用件を尋ねることにした。

「……何かあった？」

「あ、そうそう。あいつの事なんだけど……。」

あいつ、それはつまり——。

……。

「……この世界に、いるみたいよ。」

目を見開き口元をゆがませる。

そうか。

……そうか。

体がそわそわしだし、耳が生えてくる。

最大の懸念は払拭された。

「今までの色んなウィッチとかから地道に

聴いてみたの。」

そういつて私の傍に投げたのは何かの資料。

「それが、ウィッチたちにあいつについて

聴きこみした結果よ。」

右手でもって、中を開いて見ていく。

『背中から火を噴いて飛ぶ謎の物体』

『右手に持っているいびつな銃から

赤い光線のようなものを発射した』

『私のことをまるでかばうかのように、

ネウロイに立ち向かっていった。』

そんな証言が大半を占めていた。

ばさ、とベッドの上に資料を置いて立ち上がる。

近くにクローゼットにかけてあるコートを手に取り着こむ。

「……ふふ。」

「あら、笑うなんて珍しいわね。……かくいう私もそうなんだけど。」

むふー、と息を吐きながら興奮した

様子で耳と尻尾を動かす智子。

笑うなという方が難しい。

……ようやく見つけた最後の欠片。

「皆を集めてほしい。……彼のことについて

と言えば、すぐに集まるはずだ。」

「オツケー。……圭子には負けないんだから……っ！」

逃がさないように。

逃げられないように。

◆ 執拗、狡猾に追い詰めてがんじがらめにしなくては――。

ぞくり、という寒気が背中に走り、  
思わず後ろを見る。

だが、そこには誰もおらず  
無限の暗闇が広がっているだけである。

（・・・風邪でも引いたかな。）

ぶえつきし、とくしやみをして  
うええーい、と息を吐く。

体調管理に気をつけねば。

双眼鏡で501統合戦闘航空団基地を覗き見る。  
明かりがまだついていることから

仕事中心なのが伺える。

（司令室がまだ明るいつてことはミーナと美緒か。

・・・あいつも変わらぬの生真面目さだ。）

右手に持っているサンドイッチをほおぼり、むしやむしやと食べながら他のところを見る。既に消灯しているところもあるが、いまだに光が消えていないところもある。

さすがに、ルツキーニがいるところらへんは明かりが消えているが。

・・この距離だとわかることはこれくらいか。

双眼鏡を降ろそうとしたとき、何かが視界の端に写る。気になったのもう一度双眼鏡で見るとサーニヤが

基地に降り立ったのが見える。

ナイト・ウィッチとして哨戒していたのか。

あまり無理をしてほしくないが・・・。

と、そこでびくん、と体が反応する。



いつもの姿に変わり、右手のブラスターを  
廃墟の窓から構えて、海の彼方に向け連射する。

双眼鏡で見ると、小さな爆発が遠くで起きたのが見えた。

（・・・さてと、仕事だ。体はまだ痛いがやるか。）

逃げる、戦わないという選択肢はなく、

自然と体は戦場に向かう。

願わくば、彼女たちが少しでも安眠できることを願いつつ。

（・・・？気のせい、かな。）

「サーニャ？どうした？」

「・・・今日はいい夢が見れそう。」

「??？」

## 幕間　　くその頃の彼女たちは③　　く（空の魔王）

——501 統合戦闘航空団に向かうずっと前の事。

話がある、と通信機でガルファイ、じやなかつた

ガランド准将に言われた。

話？

『うん。』

そういつて、嬉しそうな声を弾ませる彼女。

木に寄りかかり、組んでいる足を変えようとすると

痛みが体中に走り、思わず叫びそうになる。

つい先日、のちに505となる彼女たちの

撤退戦をサポートしてきたところだった。

しかし、もう少しで頭の切れるゴロブにばれるところだった。

避難民に扮して紛れ込めたのは良かった。

だが、その後姿を変えて、こっそりネウロイを狙撃していたら

彼女が考案した鉾山にある爆発物を起爆させて、

ネウロイを巻き込む作戦に巻き込まれかけた。

一応撤退のルートはある程度開けたので、

これから先、彼女たちミラージユ・ウィッチーズだけでも

大丈夫だろう。

包帯を負傷した右腕に巻きながら話を続ける。

俺はすぐに次の戦場に向かう予定だ。

用件はなるべく手短にくれるといいんだが・・。

『まあまあ。話っているのはね。』

『——そこから先は私が話しますよ、准将殿。』

思わず、左手に持っていた包帯を落とす。

忘れるわけもない。

若本徹子。グレート・M・ゴロブ。

穴渕智子。ハンナ・ユステイナー・マルセイユ。

多くのわがままというか、我が道を突き進む

ウイツチたちとは数多く会ってきた。

その断片的な記憶は今も自分の心に  
焼き付いて薄れることはない。

だが、彼女はその中でも間違いなく一番強烈な  
ウイツチである。

殿堂入りである。

『久しぶりだな。先日、あの怪異どもを一掃したと  
人づてに聞いたぞ。・・・それでこそ、私の傍に  
並ぶにふさわしい。世界平和にまた一步近づいたな。』

頭の中をぐるぐると回る、彼女との

思い出（死地巡り）。

ある時は、シールドをもう張れないというのに  
ネウロイ共の真つただ中に突っこんでいった。

それを彼女の副官であるアーデルハイドと共に  
フオローした。

もちろん、3人ともボロボロになって帰投することに

なったのは言うまでもない。

そして、ある時は夜中眠っていた俺を叩き起こし、左腕が折れている状態だというのに銃を担ぎ、

『出撃するぞ。ついてこい。』と無理やり

戦地に引つ張られたこともあった。

思わず通信機のスイッチを切ろうとボタンに手が伸びる。

『——もし、通信を切ったら絶対に許さん。』

伸びかけていた手が止まる。

拗ねさせたらハンナ並みにめんどくさいだけに、あまり強く拒絶することも出来なかった。

仕方なく通信を切らずに彼女の話に耳を傾ける。

『うむ。それでいい。．．．今から

ネウロイを倒しに行く。』

はて、いきなり何を言っているのだろうか。

牛乳の飲み過ぎで頭がイカレているのか。

俺のそんな思いなど知らないといった風に

命令してくる。

『ガランド少将殿に頼み、お前とコンタクトをとったのもそれが理由だ。．．．どうか来てくれ。』

．．．．．。

何というかここまでぶれないウィッチは  
そうそういないだろう。

傷はまだうずくが、そういわれては  
立ち上がるしかない。

痛む腹を右手で抑え、ブラスターを  
構えて応える。

オーケイ。合流ポイントは？

地図を広げて地形を確認しながら  
通信を続ける。

『私は今、オストマルクにある

カールストラント前線基地から

アーデルハイドと共に出撃するところだ。』

だと思った。

俺は今、503の撤退戦をこっそり手伝い、そこから少し離れた山岳地帯で補給を取り、カールストラントを制圧したネウロイの数を減らそうとしていたところである。

．．．少々遠いが、問題ない。

『ふん．．．早く来い。』

先に行って待っているぞ。』

そういうと通信はぶつり、と切れた。

いつもの装備に加え、こっそりと

鉦山地帯からかすめ取ってきた資源を

撮取してある。

いつもの姿に変わり、空の彼方に飛び立つ。

◆  
———  
彼女が待っている空へ。

陸を覆いつくさんばかりの黒い影。  
地上が見えないほどに密集している  
怪異ども。

すう、と息を吸い大声をあげて  
部隊への指示を出す。

「——第二急降下爆撃航空団！

降下開始!!」

次々に高度を下げ、ネウロイに向けて  
爆撃を行っていく部下たち。

地上からは轟音が所々に鳴り響き、  
怪異が爆発四散してくのが見える。

以前戦った超長距離射程の戦車型  
ネウロイに比べれば容易い相手であった。

しかし——。

(思った以上に数が多い……。)



あの大型ネウロイと戦ったときも

無尽蔵に小型ネウロイが生み出されていた。

既にその大型ネウロイは蹴散らしたが、

そいつが生んでいた残りのネウロイが

押し寄せてきたのだろう。

事前に聴かされていた情報が事実で

あることを戦況から確信する。

「——敵を一掃する!!私についてこい!!」

両足のストライカーについている

37mm砲を掃射し、小型ネウロイを

蹴散らしながら更に奥に進んでいく。

精鋭たちも危なげなくネウロイを撃破していつている。

倒した数が10を超えたとき、

後ろについてきていた記者のニールマンが

叫ぶ。

「ま、まってくださーい!!ひええ!!」

ネウロイからの攻撃をかわし、  
シールドで防ぎつつ必死に

追いかけてくる。

いくらシールドが張れるとは言え、武器も  
持たずに戦場で生き延びているとは。

中々タフな奴だ。

ただの記者にしておくのはもったいない。

戦況は良好。

だが――。

「ほう……。」

新しくやってきた増援を見て思わず

感嘆の息を漏らす。

前倒した戦車タイプの大形ネウロイ。

それによく似た中型が何体もいるのが見えた。

超長距離射撃を行ってきたやつに比べれば

一発当たりの威力と射程は小さいが、

弾幕を張るように撃ってきているのがうっとおしい。

数で押しした方が有利とでも学習したか。

化け物にしては上出来だ。

37mm砲で蹴散らす。

確かに数が多いのは厄介だが、コアを撃ち抜けるのであれば問題ない。

一気に3機を撃破する。

「アーデルハイド!!ニールマンをフォローしてやれ!!」

私は突っ込んでくる!!」

「・・・了解しました。」

「え?えー!?!」と驚くニールマンの声を

背中に受けて、急降下を行い、中型を屠っていく。

急上昇しようとしたとき、行く手に砲撃され、

思わず急停止する。

「・・・ん?」

私が動く先を予測して偏差射撃をしてくる

怪異ども。

どこで知恵をつけたのか、なかなかどうして

やるものだ。

当たりはしないが、こうも動きを制限されると攻撃できない。

かくなる上は射撃点ギリギリを避けつつ

攻撃をするか。

そう思い、突っ込もうとしたとき

何かが私の背中を追い越していき、

前の方にいた中型に当たる。

爆発が起き、ネウロイがバラバラになった。

—— やつと来たか。

「遅いぞ。あまりに遅いんで

私が全滅させてしまうとところだった。」

に、してはやりにくそうだったけど。

私の軽口に返してくる声。

通信機越しのノイズがかかったものではなく、

耳から直接聞こえてくる音の振動。

思わず濡れた。

「黙れ。今日は一番搾りの牛乳を飲んでいないだけだ。

飲んでいたらあと10機は落としているぞ?」

はいはい。——おらよ。

そういつて、背中と腕にあるミサイルを射出し、

前方にいる中型、ではなくそれらがいる

間に着弾させる。

濡れて不安定になつている地面がドロドロに溶け、

茶色いしぶきをあげて歪む。

なるほど。直接狙うのではなく、

地面を撃つて、走行不能な状態にしたのか。

転倒している中型を狙い撃ちして

倒していく。

断末魔をあげて、怪異が消えていく。

「ふん。腕は鈍っていないようだな。」

ああ。・・・つ。

どこかけがをしているのか、ほんの一瞬痛そうな声をあげ、すぐにまたいつもの調子に戻る。

「さて、あとは小型だけ。・・・賭けといこう。」  
もちろん、私がほしいのは一つだけ。

「——私が勝ったら、ずっと私の傍に居る。」  
じゃあ、俺が勝ったら今日の出来事を  
記事にしないでもらおう。

そういつてちらりとニールマンの方を向く。  
「え？え？」と何が何だか分からないといった  
顔をしている。

・・・ふ、ふふふふふふふふふふ。。  
これだ。

このやり取り。

私と同じかそれ以上の實力を持った相手。

それも異性とのやり取り。

これが私相手にできるのは、実力から  
言ってこいつしかいない。

だからこそ――。

「私に手柄をよこして自分はこのうのと

他のウィッチ（女）のところに行こうなど

――許さん。」

思わず握った右こぶしに力がこもり過ぎ、  
血が滴り落ちて垂れる。

どこか委縮した様子で「お、おう……」  
と震え声をあげて応えるボバ。

よし、今だ。

奴の傍を通り過ぎ、小型ネウロイが多く  
集まっているところまで射撃しながら突っ込んでいく。  
後から「あっ!?!ずるいぞ!!」という声が  
聴こえたが知るものか。

……前の時にもらったものをまだもらっていない。

それをつけて空を飛びネウロイを倒すのだ。  
緩んだ口元を見られないように奴の目線から  
顔を隠しながら飛び続ける。

「え?え?だ、誰!?何あの格好!?

お、男の人!?なんで空を飛べるの!?

こ、これはスクープ・・・!!」

「死にたくなければ記事にしないことです。」

「ハイ」

アーデルハイドにニールマンを抑えるよう

言っているから実質、ボバが賭けをするのは意味がない。

だが、やつはそれを知らない。

この賭けに勝ち、手に入れる。



『世界平和』のためにはボバ、お前が必要だ——。

易々と私を追い越していった背中に手を伸ばしながら  
それを手に入れたときの光景を想像し、思わず

ぶるりと震える。

ぐんぐんと離れていく距離。

今はまだ、届かないかもしれない。

だが、いつの日かきつと——。

（お前のすべてを頂く——）。

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ④（バルクホルンは立ち上がる）

なんだか懐かしい夢を見ていた気がする。

具体的には505の撤退戦の事とか、

某魔王のこととか。

そういえばマルセイユとルーデルって

どっちもハンナって名前なんだよなあ。

・・・二人がもし出会ったらいろいろな意味で

ヤバそうだ。

接触させないように気をつけねば。

硬いコンクリートの床の上に布切れを敷いて

寝ていたので少し背中が痛い。

宿のふかふかベッドで寝られればいいのだが、

あそこは基地に近すぎる。

感知能力を持っているサーニャにばれかねないので

うかつな真似はできなかった。

街で調達しておいた水とパンを食べながら

彼女たちがお茶会を楽しんでいるのを双眼鏡で見る。

ミーナと美緒は美し気な所作で紅茶をゆつくりと

飲み、堪能している。

ペリーヌは貴族として宮藤の飲み方が我慢ならなかったのかちよつとした口喧嘩をしている。

—— 変わらないものを見て、ほつと胸をなでおろした。

そこであわあわと喧嘩を止めようとしているリーネもいて自分が前にいたときのことを思い出す。

『—— 全く！ あなたも紳士たるものであるならば

マナーに注意なさい！』

『いや、俺は。』

『ほら！ 宮藤さんと一緒に教えて差し上げます！』

本当に懐かしい。

しかし、俺が今あそこに戻る気はなかった。

エイラは相変わらずサーニヤにべったりで、ルツキーニはシャーリーでじやれている。

エーリカもマイペースだ。

だが、そこで顔に陰を落として沈みがちな表情になっているのが一人いた。

「……バルクホルン。」

元気がないというか、何かに悩んでいるといったところか。

ミーナと美緒は気づいているが、原因がわかっていないといったところか。

エーリカも本能的に悟っているが、どうしたらいいのかわかっていなさそうだ。

……だが、彼女は立ち上がる。

それだけの強さを持っているウィツチだ。

伊達に501に所属されているわけではない。

けど。

「……ちよつとぐらい、背中を後押ししたっていいよな？」  
思わずつぶやいた一言は誰にも聴かれることなく、  
右手をぎゅつと握り締めた。



大切な者を守れなかったという罪の意識は  
どれだけその人間を傷つけるのだろう。

毒のように心を蝕み体を衰弱させ、

……最悪の場合は死に至る。

そうした中で、彼女、バルクホルンの精神状態は  
最悪と言っても良かった。

宮藤に妹の面影を重ね、心のバランスを崩したまま  
ネウロイとの戦いに出陣した彼女。

しかし、そんな状態で冷静に戦えるわけもなく、  
フオローについていたペリーヌとうまく連携を

取れず、結果として墜落してしまう。

済んでのところでペリーヌと宮藤によって

助けられたが、胸から出血し、

傷を負ってしまう。

宮藤は己の治癒魔法を使い、

彼女の治療にあたる。

——諦めないでください！

今、助けます！

その言葉にバルクホルンは私なんか

構わず、その力を敵に使えという。

だが、宮藤はその言葉に対して一步も退かない。

——あなたが生きていれば、もっともっと

大勢の人が守れます！

——だから——！！

バルクホルンの頭の中に懐かしい思い出が

蘇る。

大切な自国の人々。

たった一人の妹。

そして――。

―― ひどく安心する誰かの背中。

左肩にはマントのようなものをつけており、  
全身を鎧のようなもので覆っている。

―― 誰だ。・・・でも、嫌な感じはしない・・・。

そして、彼女は再び立ち上がった。

結果としてこの戦いで過去のトラウマと

向き合ったバルクホルンはその後、カールストラントの  
エースとして恥じない戦いぶりを見せつけることとなる。

両腕に持っている機関銃を掃射し、ネウロイのコアを

撃ち抜いたとき、ガラスが割れたときのような音を立て、  
碎け散った。

——かくして、バルクホルンは蘇った。  
自分が守りたいもの自覚し、

.....  
.....自分のことを守ってくれる誰かのことを  
少しだけ思い出して。



と、通常ならここでハッピーエンドとなるだろう。  
バルクホルンは再び調子を取り戻し、宮藤との  
確執もなくなる。  
本来ならここで終わりだ。

——火事場泥棒がいなければ。

時は彼女たちがネウロイとの戦いに



出撃していた時のこと。

501 統合戦闘航空団の司令室。

そこで俺は、軍服を着た異様な雰囲気的人物と対面していた。

服装こそ軍人のものだが、明らかに裏の匂いがする。

右手にはどこから漁ったのか紙のようなものを

大事そうに持っている。

室内でブラスターは使えない。

下手な痕跡を残せば、後々ガランドに迷惑が

かかってしまう。

構えを取り、じりじりと距離を詰めながら

話しかける。

「……誰に頼まれた？」

「……。」

俺の言葉にたいして何も答えず、

無言でナイフを右手に構える男。  
その能面のような顔からは一体  
何を考えいているのかわからない。

そして、もう少しで蹴りが届くといった  
ところでそいつは右手にもったナイフで  
鎧の隙間を狙ってきた。

体をひねって一発目の斬撃を躲す。

その際に左肩につけているマントが  
少し切り取られ、床に落ちる。

二発目にたいし、右手で手首をつかみ、関節を極めようとすると  
転身受け身を取られ、一瞬で抜け出される。

防がなければこのアーマーの隙間を刺されて  
右腕か左腕が使えなくなっていただろう。

アーマーをつけたままでは不利。

そう判断し、元の姿に戻り

すぐさま一步踏み込んで蹴りを

右手に叩き込もうとする。

しかし、読まれていたのか靴の裏に  
ナイフを刺される。

「・・・っ！」

痛みを悟られないよう歯を食いしばって耐え、  
ナイフが刺さったまま足を後ろに引っ込め、  
右の膝を顔にぶち込む。

ぶぶっ、という音と共に鼻から血を吹き出し、  
机に体をぶつける侵入者。

追い打ちをかけようと右足の靴の裏に  
刺さっているナイフを手で抜き取り、  
相手の胴体に向かって投げる。

それを横に転がることでかわし、  
窓をけ破って逃げ出す。

窓の近くに近寄るが、既に男の  
姿は見えなかった。

(・・・逃げたか。・・・ん?)

彼女たちが戻ってこないうちにここから立ち去ろうとすると、何かが落ちていることに気が付く。

何かのバッジの様だ。

そういえばどこかで見たような気がする。

ここに来る前にガランドに見せられた

トレヴァー・マロニーの資料を思い出す。

ブリタニア軍の大将としてその座に

ついている男。

その胸には同じようなマークのバッジがつけてあった。

これを見る限りブリタニアの国旗を模したものか。

右ポケットにしまい、あたりに散らばった資料を

取ろうとかがむと廊下から声が聴こえてくる。

『トウルーデも元気になってよかったわね。』

『ああ、全くだ。』

ミーナと美緒の声。

もう帰ってきたようだ。

このままここに残っているのは俺が

犯人になつてしまう。

できればあの男が何の資料を探していたのか、

司令室に置いてあつた紙を持ってきて

調べたかつたが仕方ない。

さっきの男と同じように窓からジャンプし、

他の人間に見つからないよう基地を抜け出す。

さすがに空を飛んだら一発でばれるので

天井に向けて右腕からワイヤーを射出し、

屋根に登る。

そのまま屋根を走り抜け、隣の建物まで

ジャンプし、出口まで疾走する。

・ ・ ・ あの野郎、次にあつたら許さん！

奴への怒りを燃やしながら

自分の隠れ家まで撤退した。

くおまけ・今日のウィッチく

グレート・M・ゴロプは激怒していた。

1942年、撤退戦の最初の方で懐かしい  
気持ちに襲われたときの事。

自信の固有魔法、『空間把握能力』を

使ってネウロイとの戦いに明け暮れていた。

そして、そんな彼女だからこそ、

気が付いてしまった。

・・・夢で見たあの男がいたことに。

最初に抱いた気持ちは思わず怒鳴り付けたく  
なるような激情であった。

しかし、日ごろ規律が大切だと言っている

自身を取り乱すような真似をさらすわけにも

いかない。

何よりも部隊の見回りと作戦の立案、  
指揮で時間のほとんどを使っていた

彼女にそんな余裕はなかった。

それでも、『元』自分の部下ならば、

自分に命令を仰ぎに来るはず。

そう信じてやまなかったが、鉦山を

爆破したのを最後に、彼の姿を

確認できなくなった時、彼女の中で

何かが弾けた。

自分の指揮下に入っておきながら

易々と傍を離れるような奴は許さんないという

気持が湧いてきた。

実力はあるようだからカールストラント製でない

装備を使っけていても許してやったのにと

思った。

・ ・ ・初めて、私に女らしいことをさせたくせに、と眉間にしわを寄せて唾棄した。

あれから約2年と少し。

その間、彼女の前に姿を全く見せない彼にいらだちとどす黒い感情を貯めつていく。

505の司令室で自分の愛銃をいじりながら

次あったとき、どうしてくれようか、

と逃がさないために策を講じながら

ゴロプは不気味に笑うのであった。



# 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ⑤ (“黙っててあげる”)

「坂本さん!!これ、こつちですか?」

「ああ、そこに置いといてくれ。」

司令室の床に散乱していた資料を拾い上げた

宮藤に机の上に置いておくように言う。

あたりを見回す。

とどこどこに何か争った形跡が垣間見え、

単なる物取りではないことを伺わせる。

隣で腕を組んで考えていたミーナが

ぼつり、と漏らした。

「・・・複数の人間がこの基地に侵入した。

それは状況からいって間違いないわ。」

「ああ。」

彼女が言っていることはおそらく事実だろう。

司令室に置いてあつた重要書類と、倉庫に鍵をかけて隠しておいた機密物がいくつかなくなつていた。

しかし、どうしても分からないことがある。

「侵入者の一人は、倉庫に行つて、

それからまっすぐ司令室までやつてきた。

まるで、そう。」

「……この基地の中に来たことがある

人間のように、まっすぐと。」

ミーナの言葉の続きを代わりに言う。

普通、これだけ大きい基地ならば例え侵入したところで

迷うように作られているし、警備の人間だつて多くいる。

ウィッチに手を出そうとする不埒な輩は多いのだ。

だからこそ、男の軍人も基地には滞在しており、

いざとなつたら彼らの力にも頼っている。

だが、侵入者は易々と入ってきた。

彼らの監視をかいくぐつて。

深刻な表情で目をつむり、顎に手を当て  
考え続けるミーナ。

今は、そつとしておいた方がいいだろう。

この基地の最高責任者として今回の件は  
シヨックだったはずだ。

幸い、他のウィッチたちには単に空き巣が入ってきた  
と言つてあるが、皆、どこか不安そうな表情だ。

サーニヤとリネットは気分がすぐれないと言つて  
部屋に戻つた。

あのエーリカでさえ、嫌悪感を隠そうともせず  
眉にしわを寄せている。

何か手掛かりはないか。

外に向かつて開けられている窓の傍に近寄つて見ると  
何か染みのようなものが点々と続いているのが見えた。  
かがんで右指で触つてみると指に赤いモノが付いた。  
鉄のような匂いがほんのりとする。

これは・・・。

(血?)

しかもそれは窓の近くだけでなかった。窓から外を見ると、点々と赤い模様が絵の具のように垂れている。

(……)に二人以上の人間がいた。

それは現場の状況から言って間違いない。争った形跡と、机に刺さっていたナイフがその証拠だ。

(……血を流した方が不利と悟り、窓からの脱出を試みた。)

赤い模様は地面のある部分で止まっていた。

「……ミーナ。」

自身が気が付いたことを伝えて、必ず犯人を捕まえる。

大切な部下をおびえさせた罪は……重いぞ。

◆  
ふえつくしゅん!!・・・ええつくしい!!

くしやみをするところだまが返ってきて

耳がキンキンと鳴り響く。

うるさいことこの上ない。

に、してもドジった。

俺としたことが、怪我を負うだけでなく

侵入者を逃してしまおうとは。

やはり肉体的にはもう衰え始めているのか。

しかし、今はそれよりも足のけがを何とか

する方が先だった。

茶色い麻製のズボンをめくり、

けがをしたところを見る。

流血はある程度収まっているが

痛くて顔が思わず歪む。

街でもらってきたアルコール液を

薄めたものをぶっかける。

「!!!」

あまりの痛さに叫びそうになったが

布を口で噛み、声を抑える。

後は包帯で怪我を包むだけ。

そう思い、自分の近くにあつた包帯を

取ろうとあたりを見回すとなくなっていた。

あれ?どこに行った?と疑問を浮かべていると

横から誰かに包帯を差し出されると

あ。ありが。。

待て。

ここには俺しかないはず。

一体だれが俺に手を貸してくれるというんだ?

ゆつくり、そう、本当にナメクジが動くくらいの

スピードで体を後ろに向ける。

「.....はい。」

そこには、瞳孔が完全に開いた目で、なぜか俺の脚に包帯を巻き始めるサーニヤがいた。



血が滴る後を私とバルクホルン、そしてエーリカの二人と一緒にたどってきた。

それは、屋根に、街に、果ては森にある廃墟まで点々と続いていた。

念のために銃と刀を持ち、ストライカーユニットを装備した状態で空を飛んでやってきた。

そこは、まさに廃墟とした言いようがない、天井が吹き抜け、誰かがそこを布切れで補強していたような場所だった。

先日までここにいたのか、食べ物のゴミや雑用品などが置かれており、生活の跡が残っていた。

「・・・逃げられたな。」

「ちえっ。あーあ。せつかく睡眠を削ってまできたのに。」

「仕方ない。何か手掛かりがないかだけ探そう。」

そういつてあたりを散策し始める私たち。

しかし、めぼしいモノが残っているはずもなく、

調査に飽きてサボっているエーリカをバルクホルンが叱っていた。

撤回するか。

そう考え二人に声を掛けようとすると、

何かを踏む。

なんだ？と思つて足をあげてみると、

そこには見たことのあるマークのバッジが落ちていた。

しゃがんで手で拾う。

◆ ブリタニア国旗を模したバッジだった。



あのあと、サーニヤに忠告された。

「美緒たちがこつちに向かつてきてきている」と。

だからそれを俺に伝えるために、部屋に戻って  
休むと嘘をつき、エイラの目を盗んでここまで

来た。

仕方なく、俺とサーニヤは廃墟を脱出することに。

美緒の魔眼で見つからないように、超低空飛行で  
海の上を飛んでいた。

しばらくそうしていたが、そろそろ大丈夫という  
彼女の言葉に従い、一気に急上昇する。

きゅつと左手を掴まれる。

横を見ると、嬉しそうな顔で俺の手をしっかりと  
握り締める彼女の顔が見える。

そのまま雲を突き抜け、地上から見えないほど  
遠くが上がってきた。

横にいる彼女に言う。

．．．．．なあ、そろそろ手を離しても．．．

「．．．．．だめ。」

あの．．．。

「．．．．．にゃ。」

無理に手を離そうとすると、かえって強く握り締められほどけなくなる。

完全に俺を逃がさないように警戒している。

前も、前も、そのまた前も逃げていたから

無理もない。

諦めてそのまま話を続ける。

．．．．．どうして、俺を助けてくれたんだ？

「．．．．．大切だから。」

俺が尋ねると、ぼそり、と小さな声で話す。

「．．．．．501に来ないのは、何か

理由があるんでしょ？」

その言葉を受けて、思い出す数々の事。

ウィッチ反対派の軍人ども。

彼女たちに手を出そうとする犯罪者。

日常に潜む彼女たちの危険が脳裏に思い出される。

左手を両手でそっと包まれて、

彼女の胸のあたりまでもつていかれそうに・・・って！

ちよちよちよちよ!?

思わず手を引つ込めた。

「・・・ちつ。」と軽く舌打ちをするサーニヤ。

おかしい。大天使宮藤と並ぶ、女神サニヤエルは

どこに行ってしまったのか。

女神が、女神が腹黒くなってしまわれた・・・。

頭を抱えていると、胸を頭に押し付けられる。

「・・・だから、ボバが私たちの近くで

隠れているのは黙っていてあげる。」

・・・ありがとう。

でも、顔を胸でうずめられるのは恥ずかしい。

しかもそこそこ柔らかいくらいで、ルーデルや  
ガランドに比べると・・・。

ペしつ、ペしつ、とマスク越しに頭を  
はたかれた。

「・・・小さくないもん。つん。」

今度は拗ねた。

そして、ぷいっと体ごとそっぽを向いてしまう。

そんな彼女にナニか声を掛けようと口を開けると  
指をそつと唇に置かれる。

「・・・でも。条件がある。・・・ん。」

そういつてごそごそと何かを取り出し、  
右手で差し出してくる。

・・・これは？

通信機、と・・・、コード？

押し付けられて思わず受け取る。

「ん。・・・私が哨戒任務の時は

必ず出て。・・・じゃないと。」

じゃ、じゃないと・・・？

おそろくどうするか想像はついたが

それでも聴かずにはいられず尋ねてみる。

すると思わず見惚れるほどの笑みを浮かべて

嬉しそうに言う。

「・・・501の皆にばらさす。」

毎日夜の相手を務めさせていただきます。(早口)

こうして、俺は心強い味方を現地で得ることに成功したのだった。

・・・成功、っていうのか、これ？

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ⑤（音速、そして・・・）

サーニャ・V・リトヴァク。

俺が前の人生で深くかかわったウィッチの一人である。

ある女の子に惚れたこと相談し、そして

色々と複雑な仲にもなった。

俺が憶えている限りでは、宮藤の次に世話になった

ウィッチだと思う。

本当に彼女には頭があがらない。

・・・今回の人生で、別の意味で

頭が上がらなくなるとは思いもしなかったが。

『・・・聴いてる？』

ずっと考えごとに没頭していた俺の

目を覚ますかのように彼女の声が聴こえた。

はっと意識を取り戻し慌てて無線に応答する。

「ああ、聴いてる聴いてる。」

『・・・じゃあ、さっきの質問に対して

イエスカノーで答えて。』

「え？えーと・・・。」

実は聴いていなかった、ごめん。

などと言える雰囲気でもない。

彼女の顔は見えないが、なぜか

瞳孔が開いている表情を想像し、

背筋が凍る。

こういう時はとりあえずイエスだ、イエス。

「イエスだ。」

『・・・ホント？』

「ほんと、ほんと。」

実は何の質問かはわからないけど。

今更そんなこと言ったら彼女に鉢の巢に

されるだろうからお口をチャックしておく。

すると、彼女が沈黙しだした。

訝しみ、声を掛ける。

「サーニヤ? どうした?」

『・・・うん。やっぱり私たちは

結ばれているんだね。・・・うれしい。』

「? あ、ああ。」

一体何の事は知らないが、とても

嬉しそうな声色だ。

怒らせないだけかもしれませんが、とても

『・・・そろそろ哨戒任務が終わるから、

切るね。・・・本当はもっとお話したい・・・。』

「・・・いつか。」

『?』

彼女の弱弱しい声に対して自然と

声を掛ける

「いつか絶対に、サーニヤたちの前に姿を出す。

・・・必ず。」



『・・・そこは、サーニヤたち、じゃなく

私だけって言ってほしかった。』

「無茶いうな。・・・じゃあな。」

『うん。・・・お休み。』

ぶつり、ということが鳴り、無線が切れる。

右手に持っていた通信機をベッドの上に置き、

そのまま枕に顔をうずめる。

・・・今日はいろいろありすぎた。

眠い・・・。



「ひゃっほーうう!!」

改造したストライカーはみるみるうちに

速度を上げていく。

今まではある程度まで出たらそれ以上

はやくならなかったが、今はどうだ。

間違いなく、これまでより速いスピードが

出せている。





寝たいんだろ？寝てなよ。皆のところまで連れて行くから。私をお姫様抱っこしたまま連れて行こうと、歩き出す。

恥ずかしくなって、飛び降りる。

「わかったよ・さすがに恥ずかしいから

やめてくれ！・・・うう、アタシをからかうなんて・・・

からかう側なのに・・・」

もう皆待つているぞ。早く食堂に来いよ。

ドアを開けてスタスタと立ち去っていく男。

男が完全に部屋から出て行ったことを確認し、

内側から鍵を閉めてへたり込む。

(・・・な、なんで？・・・なんでこんな胸がどきどきしているんだ？

あんなさえない男とアタシじゃ釣り合わないだろ?!)

自分の容姿とスタイルには抜群の自信があつた。

ウィッチになつてからうける取材でも

胸やお尻に向けられる異性からの視線には慣れていた。

だけでも、あいつはアタシの体を見ても

全く動揺していなかった。

・・・むかつく。

ベッドに置かれていた枕にパンチして

八つ当たりする。

すると、左手の薬指に何かがはめられているのに  
気が付く。

（?指輪?）

そして、また景色が変わる。

今度は、マスクに全身をアーマーで身を包んだ男が、  
奇妙な乗り物に乗り込もうとしている場面だった。

おい、シャーリー、どうした?

早く乗りなよ?

後を振り返ってアタシにそう声を

かけてくる。

この声・・・。さっきアタシのお姫様抱っこしたやつと

一緒だ!!

にやろう・・・。

お返しをしてやる。

背中を再び向けて無防備になったので、

乗っかっておんぶさせる。

後から胸を押し付ける。

自慢のバストだ。

動揺しろ！

・・・。

「・・・・・・・・」

あ、あれ？

なんで？

なんで何の反応も示さないんだ？!

・・・もういいか？

「・・・え？あ、ごめん・・・。」

そういつて背中から降りて、一緒に

乗り物の中に入る。

すると、入り口のドアが閉められ、

船が浮き出した。

椅子にちゃんと座っていないな。

危ないから。

そして、目の前のガラスで張られている

コックピットからは夜の景色が見える。

あつという間に高いところまで上昇し、

雲を突き抜けた。

ぐんぐんと上に上がっていき、アタシたち

ウィッチでもこれないほど高いところまでやってきた。

青くて丸いモノが近くに浮かんでいるのが見える。

シャーリー。早いモノが好きだと言っていたよな？

「え、う、うん・・・。」

アタシがそう答えると、右手で機械のようなものをいじくり、

子供がこれからイタズラするような声で言った。

・・・だったたら、音速を超えた、光速を見せてやるよ。

そういつた瞬間、見たことのない景色が次々と現れては消えていく。

丸っこい何かが暗闇に浮いており、そのどれもが神秘的な何かを思わせる物体だった。

すごい……。

音速、いや……これはもうそれ以上だ……。

興奮して耳と尻尾が出る。

そうだ、アタシはこいつを、いや、彼を知っている。

どうしようもないスケベで、かっこつけて、

……大好きなボバを。



「……リーさん!!」

「……う。」



誰かがアタシを呼ぶ声で意識が覚醒する。

目を開けると心配そうな顔の宮藤と

ルツキーニがアタシの顔を覗き込んでいるのが

見えた。

「よ、よかったあ・・・。」

「うわあああん!!ごめんねシャーリー!!」

ほつと、胸をなでおろす宮藤と

泣き顔でアタシに抱き着いてくるシャーリー。

というかなんでアタシは裸なんだろうか。

「よかった。出撃してから数時間目を覚まさなかったからな。」

「色々あったからね。・・・今日はもうゆつくりと休みなさい。」

念のため、明日も体を休めておくように。」

上司二人はアタシの心配をしてくれてくれたみたいだ。

なんだかんだ言つてこの二人には頭があらがないんだよなあ。

左手でぽり、ぽり、と後頭部を搔く。

——そして、ぴたり、と思わず手を止めて

左手を凝視する。

それは、なんの変哲もないアタシの指だ。

何もついてない、何も無い——。

「……悪いけど、一回寝てすつきりしたいから

一人にしてくれない？」

アタシがそういうと、何も言わずに部屋を出て行ってくれる皆。

ぼたり、とドアが閉じられたのを確認し、

もう一度左指を見る。

ない。

どこだ。

あれは私が彼からもらった愛の証だ。

なぜないんだ。

おかしいじゃないか。

だって、彼は唯一アタシに対して

いやらしい目線を送ってこない特別な

相手なのに。

なのに。

オカシイ。

左手をぎゅううううつと握り締め、

壁に思いつきりぶつける。

ドゴム、ということを立ててこぶしの跡が

壁にめり込み、天井からばらばらと

木の屑が降ってくる。

・・・そういえば、あいつは他の

ウィッチ（雌猫）にも指輪を送っていたよな。

また、左手で壁を思いつきり叩く。

一番速いのはアタシだ。

また、叩く。

彼の一番も……。

「……アタシだけだ。」

生まれ変わったような最高の気分だった。

「今日のウィッチ」

ヴァルトルト・クルピンスキーは

女の勘で自分と同じ状態のウィッチが複数いることを感じ取った。

それに対する彼女の反応は

「……ふっ。」

——嘲笑であった。

ソファーに腰掛け、ワイングラスを片手に

揺らしながらぼそりとつぶやく。

「ねえ、ボバ。知っているかい。」

彼女は最近伸びてきた自分の髪を右手で

くるくるといじりながらうっとりとした

表情で言う。

「——女同士の戦いに、“停戦”はないって。」

「僕がこんな“女”になってしまったのも君のせいなんだから」

——責任、とってよね。

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ⑥ “すきなひと”

「……おかしい。」

ベッドで寝転がりながら思わずそうつぶやいた。

501に置いてあったネウロイと戦闘した時の

詳細レポート。

一部だけだがかすめ取れたので見ていたら

注目するべき部分が多くあった。

宮藤が配属されたあたりのネウロイ襲撃。

民間船救助時の戦闘。

バルクホルンが立ち上がるきつかけとなったあの一戦。

そのどれもにとある共通点が見え隠れしていた。

気のせいだとそれを片付けることも出来る。

しかし、一笑に付すには無視できないものだった。が、今の時点では確信が持ちきれないので資料をベッドの上に置き立ち上がる。いつもの装備を整え、窓を開ける。

外を見れば、満月が夜を満ち照らしているのが見える。サーニヤが哨戒任務を行っている時間だ。

と、なれば……。

ベッドの横にあるテーブルに置いていた通信機に連絡が入る。

噂をすれば影とはよく言ったものだ。

右手で通信機を手に取り、応答ボタンを押す。

「今日は遅かったな、サーニヤ。」

『……あ、あの。』

息が止まる。

彼女の声を耳にした瞬間、完全に体の動きが止まった。数あるナイト・ウィッチの中でも間違いない

”最強”と呼ばれるカールスラント〔4強〕の一人。

『彼女に聴いて、きつとあなたとお話をするといいつて言われて、

このコードにかけてみたんですけど……。』

困惑した様子で返事がない俺のことを

気にしている彼女。

——ハイデマリィ・W・シユナウファー。

通称、『サン・トロンの幻影』と呼ばれる

彼女が俺と接触してきていた。

右手の指をわななかせ、落ち着いた後

少しむせている喉の調子を保つために

咳払いをする。

よし、大丈夫だ、大丈夫。

話した感じだと俺のことに気が付いていない。

若干緊張して声を震わせながら

彼女に応答する。



「・・・あー。はじめまして。俺はジヨドー・カストって言います。

おおかた、サーニヤからこの通信機のコードを教わったんでしょうが  
気にしないでください。彼女は気まぐれなんです。」

『・・・私の名前はハイデマリーと言います。あ、あの・・・。』

お互いに緊張した声で自己紹介しあった後、

彼女が何かを切り出す。

『・・・私たち、どこかで会ったこと、ありませんか?』

「ないです (即答)」

口が勝手に動いてそう答えていた。

何という勘の良さ。

声色をちゃんと変えているというのに

それでも気が付く当たりさすが最強のナイト・ウィッチと  
言ったところか。

だが、今ばれるわけにもいかない。

ガランド、北郷文香、サーニヤ、少なくとも

既に3人以上のウィッチには正体がばれている。

これ以上俺のことを思い出されるとなぜかまずい気がする。  
必死に彼女からばれないように話をそらしつつ、  
ハイデマリリーの気が済むまでお話するのだった。

・・・次あつたらサーニヤの額にデコピンしておこう。



夜の哨戒任務が終わり、宮藤さんと一緒に部屋で寝泊まりすることになった。  
今まではエイラと一緒にいることが多かったが  
夜間哨戒任務を3人でやるので今のうちに寝るのだ。

『・・・なあ。』

「っへ。」

ベッドの下に隠してある通信機を取り出し、  
指を立てて静かにするように言う。

「もうちよつと小さなこえで話して。」

『あ、ああ。．．．いや、うん．．．』

どこか調子が狂うといった感じだ。

一体どうしたのだろうか。

「．．．．．どうしたの？」

『．．．．．なんでこんな盗聴まがいのことをしているんだ、と

思ってるな．．．．．』

どうやら彼はひっそりと盗み聞きしているようで

気が進まないらしい。

「．．．それを言うなら、私たちの前に姿を

出さずに周りをうろつくのも、怪しいと思う。」

『うっ。』

自覚はあったのか、私の指摘に声を詰まらせる。

．．．．．戦場ではあんなに頼れる人が、

私の前で可愛いところを見せてくれるのが嬉しく、

思わず笑みが浮かぶ。

「．．．食堂とかの会話も、なるべくボバが

聴けるようにするから。．．．ちゃんと聞いてね？」

『・・・あい。』

居場所を知られているから強く出れず、  
イエスとしか言えない彼に要求を吞ませる。  
ベッドの下に通信機を戻し、

ドアを開けて二人を部屋の中に入れる。

「サーニャ。何をしていたんだ？」

「ないしょ。・・・みやふじさん、どうぞ。」

「あ、お、おじやまします。」

そういつて入ってくる二人。

宮藤さんの声が聴こえた瞬間、

彼の息を呑む声が聴こえたような気がした。

・・・思わず頬を膨らませる。

私と初めて会ったときとだいぶ反応が違う気がする。

「サ、サーニャ？どうしたんだ？」

私の雰囲気気が付いたのかエイラが

おびえながら尋ねてくる。

いけない。

これくらいで取り乱しちや。

「……だいじょうぶ、……にや。」

「にや、にや?」

気にしないで、と言ってベッドに横になる。

二人も同じくベッドで横になる。

……早速宮藤さんに聴いてみよう。

「……宮藤さんってすきなひと、いる?」

「え、えええつ!」

いきなりこんなことを聴かれると思っていなかったのか

驚きの声を挙げる彼女。

顔を赤らめながら、人差し指と人差し指をつんつんと

合わせて答える。

「い、いいいですけど……。でも、どうしてそんなことを?」

「ん。なんでもないの……。エイラ、そんな口を大きく開けて

驚くことじゃない。」

「い、いや……。」

そうか。

私が記憶を取り戻したのは最近だから、  
エイラにとつては信じられないことなんだろう。

「……まだ、記憶を取り戻していない、そして

取り戻すかわからない二人に向けて自分の気持ちを  
明かしておく。

「……ベッドの下から聴いている彼にも。

「……わたし、好きな人がいるの。」

「え、えええええっ!?!」

二人して起き上がって驚く。

「……いくらなんでもひどいと思う。

「だ、誰ダ!?!サーニヤをたぶらかした

悪い奴は!?!ずつと一緒にしたけど

そんな心配はなかったゾ!?!」

「サーニヤさん、好きな人がいるんですか?!」

「……ふえええ。」

激昂するエイラと、感嘆の声をもらす宮藤さん。

そして、絶句しているであろう彼。

・・・ふふふ。

(大好きだよ。)

取り乱す二人をよそに、一人つぶやいた。

くおまけ サニーニヤの誕生日く

『あー。サニーニヤ。』

「?なに?」

いつものように夜間哨戒任務についている私と

通信機で話す彼。

彼に淡々と私の気持ちを伝えていると

彼が突然かしこまったように仕切りなおす。

『「・・・誕生日、おめでとう。」』

通信機と背中から彼の声が出たので振り向くと、

いつの間にか私の後ろを彼が飛んでいるのが見えた。

右手には、ネックレスを持っている。

「・・・確か、こういうのが好きだったから選んだ。

・・・数日遅れだけど。」

「・・・・・・・・。」

差し出してくる彼。

それを受け取らず、後ろを振り向く。

「……………つけて。」

「……………ああ。」

そつと私の首にネックレスをかけてくれる。

プレートを見ると、『B・Fより』と書かれているのが見える。

「金を降ろせばもつといいものがあげられたんだが……………」

ちよつと俺がいつも使っているアーマーの一部を加工して

作った。」

「……………」

右手でぎゅつと握り締め、胸のあたりに持つていく。

ぼろ、ぼろ、と涙があふれる。

「……………あり、が、とう……………」

「……………ああ。」

今日は最高の日だ。

本当に……………。



おまけく食堂での彼女たちの会話を聴いてく

『肝油は目にいいんです!』

・・・まじか。

『これ、おいしいわね。』

・・・まじか。

『あ、そういえばサーニヤさんに好きな人がいるつて。』

おい、やめろ。

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ⑦（“二人目の”）

「——以上が、今回の捜査の結果よ。」

そういつて司令室の机の上に

捜査資料を置くミーナ。

それを手に取って見てみると、

司令室に侵入したであろう二人組の

パーソナルデータが記されていた。

「靴の大きさは片方が27.5cm・・・おそらく男だろうな。」

・・・もう一人の方はおかしいな。」

「ええ。そうなの・・・司令室の中に残っていた

不審な足跡と、外に残っていた足跡が別なのよ。」

顎に手を当てて考える。

司令室に入った狙いは？

この二人は本当に偶然出会ったのか？

いや、それよりも・・・。

ちらり、と司令室の机の上に置いてある

ブリタニアの国旗を模したバッジを見る。

私たちが血の跡を追って手に入れた証拠品である。

犯人につながる唯一の手掛かりになると思ったが、

これだけではさすがにわかりはしなかった。

「警戒態勢は以前よりも嚴重にしてあるわ。

もし、私たちウィッチが狙いならが大変だし。」

「うむ。」

暗い顔をして鋭い目で窓の外を見るミーナ。

窓の先から逃げた何者かの正体を見極めようとしているのか。

「・・・そう言えば気になった点がある。」

右手に持っている資料のあるページを開き

そこを読み上げる。

「血を垂れ流しながら逃走した男は誰にも

遭遇することなく、基地外に脱出した」。

「・・・こんなことがあり得るのか？」

普通ならありえない。

だが、現に犯人は逃げ切っている。

そこが鍵のはずだ。

ミーナが椅子から立ち上がり、外の景色を

眺めている。

そして、ぽつり、とつぶやいた。

「……ねえ。」

そして、振り返るとどこか寂しそうな表情で

言い出す。

「……私たち501って11人だけだったかしら？」

「……初期に抜けた3人のことを言っているのか？」

今は11人だけだろうか？」

「……いえ。そうよね。うん。そのはずよね……。」

私の答えに満足したのかふつと笑う。

「……そうよね。——男性なのに、空を飛んで

ウィッチを守る人なんて、いるはずないわよね。」

脳裏に浮かぶのは、私がピンチだったときに背後からネウロイのコアに放たれた弾丸。魔眼でいくら探してもそれらしき人物は見かけなかった。

だから、いるわけがない。

・ ・ ・ いるわけがない。



サーニヤからもらった通信機で試しに『彼女たち』のところに連絡をかけてみたらまさかつなるとは。

—— 『 ・ ・ ・ どちらさまですか？ 』

—— 『 ・ ・ ・ ・ ・ 』

やばいやばいやばい。

なぜ、このコードがまだ生きている？と

疑問に思いながらもスイッチに手を伸ばして

切ろうとしたら、どこか確信を持った彼女の声で言われた。

『ボ、バさん・・・？』

そして、すぐに通信を切ったはいいが、やってしまったことの重大さに思わず頭を抱えてベッドでうなだれる。

と、なると『以前』連絡を密かにとつていた子たちにかけるとつながら可能性が高い。

ある意味これは切り札だ。

しかし、使い方を誤れば俺の位置がばれるかもしれないし、その結果どんな大変なことになるか予測できない。

・・・ハイデマリーやサーニャは比較的大人しめだったんだなあ、と

『わがまま姫』や『アフリカの星』を思い出して

ため息がこぼれる。

すると、ドアがノックされる。

・・・ああ、飯か。

ベッドから立ち上がり、ドアの前まで行って開ける。

まずは飯でも食べて落ち着こう。

そう、悪いことばかり重なるわけじゃない。

ドアを開ける瞬間まではそう思っていた。

「・・・よう。」

思わず持っていた資料を落とした。

——うさ耳を立て、口を三日月にゆがませて笑っている

シャーリーがそこに立っていた。



「サーニャ？」

エイラの呼びかけによって意識が戻る。

どうやらずっと彼のことを考えながら

眠っていたらしい。

ベッドから降りて窓の外を見る。

・・・今日は、雨だ。

「……雨だね。」

「ああ、全く嫌になるゾ。」

エイラが憂鬱そうな顔でそういう。

まあ、晴れだったら海でひなたぼっこ  
できたのはまちがいない。

服をいつものに着替えて、

彼女に聴く。

「……他のみんなは？」

「え？ああ。なんかおかしいんだよナー……。」

えいつ。」

タロットカードを一枚引く。

そこには、逆さにつるされている男が

描かれていた。

「吊るされた男、だナ……。正位置は

”長年の片思いが報われる”、逆位置は……。」

「言わなくても大丈夫。」

「エ？」



「……私、辛抱強いほうだから。」

目を丸くしたエイラの顔が面白かった。



「なあ。なんでなんだ？なんで？」

なんでお前はアタシと一緒にいてくれないんだ？」

彼女ににじり寄られ、思わずベッドに足をひっかけ、  
仰向けに転がる。

その上に乗っかられ、腕を抑えられて

マウントを取られる。

なぜ？

どうして？

その考えが頭の中をぐるぐると駆け巡るばかりで  
体を動かせない。

「……左指。」

俺の左手をそつと撫でて、薬指をじつと見つめる。

その眼は、狂気をはらんでおり、いつもの彼女でないことが伺える。

「……んのだ。」

ぼつり、と彼女がつぶやく。

そして、次の瞬間、左手に激痛が走る。

~~~~~!!!

左手を見ると、ナイフが手の甲に突き刺さり、ベッドまで姦通しているのが見える。

「なんでお前の左手にも指輪がない!？」

アタシとは遊びだったのか!？」

~~~~~!!

脚で彼女の尻を浮かせて、

バランスを崩したところに蹴りを軽く入れた。

ドアの手前まで吹っ飛ぶ彼女。

距離を取ることができた。

しかし……。

「……なあ。アタシはさ。」

右手に新たにナイフを持ちながら立ち上がってくる。

左手に刺さっていたナイフを引き抜き、地面に

放り投げる。

構えを取って、攻撃に備える。

「いつも男にモテていたし、それが当たり前なんだと

思っていたんだ。」

一歩一歩、獲物を追い詰めるようにゆっくりとにじり寄ってくる。

「・・・でも。」

びたり、と立ち止まり顔を俯かせる。

「——本当に振り向いてほしい奴には振り向いて

もらえていないんだっ!!」

次の瞬間、体ごと彼女が突進してきた。

両手でナイフを持った右手を必死に抑えるが、

興奮しているからかとしてつもない力で

体ごとベッドに押し倒される。

「あはは。アタシとボバが一緒のベッドで横になっている・・・♡

夢みたいだ・・・♡」

恍惚とした表情で語るその顔は、  
本当の魔女の様だった。

彼女みたいな魅力的なこと一緒にベッドの上で死ねるのは本望かもしれない。

だが。

ぐぐぐ・・・と徐々に力を込めるところこちらが  
有利になり、位置をずらす。

今度は、逆に彼女がベッドに押し倒され、  
俺が上から覆いかぶさる形になった。

「・・・ははは。やっぱり組み敷くより、組み敷かれる方が  
好きだなあ・・・♡♡」

・・・せいっ!

軽く当身を胸に当て、失神させる。

うっ、と声を小さく漏らした彼女がぴくんと  
体を動かし、気絶した。

はあ、はあと息が乱れたまま

ごろんと彼女の横で一緒に寝転がる。

・・・つう。

左手の刺された箇所から血が止まらない。

しかし、よかつた・・・。

危うくシャーリーを手に掛けるところだった。

ほつと胸をなでおろしていると、どきつと

いう音がドアの方から聞こえてきた。

「・・・何を、しているの？」

冷や汗を垂らしながら声のした方に顔を向ける。

ハイライトが消えた目で、食べ物や物資が入った

袋を床に落とし、瞳孔が開いた目でシャーリーと

俺を見つめるサーニヤの姿があつた。

く今日のウィッチ

(・・・連絡こない・・・。ぐすん。)

一晩中、連絡がこないか待ち続けていた  
最強のナイト・ウィッチがいたとかなんとか。

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

⑧ (“気に入らない”)

「……………んへへへえ……………♡」

気絶させた彼女に抱き着かれ、

胸元でほおずりされて、

抱え込まれる。

「……………。」

ハイライトのない目でじつと俺の

ことを見つめてくるサーニャ。

ドアをぱたむ、と閉じ、つかつかと

歩み寄ってくる。

そして、落ちていたナイフを右手に持ち、

シャーリーめがけて振り下ろしてくる。

う、うおおおおっ!?

左手で、サーニヤの手首をつかんで

ぐいつと抱き寄せる。

い、いきなりシャーリーを刺そうとした!?

あつぶねえ・・・。

キているとは知っていたがまさか

自分の仲間に何のためらいもなく

ナイフを刺そうとするとは。

しかし、後ろからはシャーリーに抱き着かれ、

前はサーニヤを抱きかかえているので身動きが取れない。

すると、先ほどまで目の瞳孔が開き切っていた

サーニヤがとたんに頬を緩ませ、目をつむりながら

胸元に頭をこすりつけてくる。

「・・・♡」

すりすり、と猫がマーキングするように。

そのたびに甘い香りが漂い、頭がくらくらしてくる。



—— あ、やばい。温かくなって、柔らかくなって、  
ねむ——く——。

◆ そのまま意識を手放した。

「ん……うう……。」

安心する匂いに包まれているを感じる。

温かな何かが自分の体にびったりくっついていて  
胸がぼかぼかする中、ゆっくりと目を開ける。

そこには、目をつむって無防備な姿をさらす

あいつがいた。

……。

あ、夢かあ。

そう結論づけ、自慢の胸で頭を挟んでやる。

他の男どもが視姦してきた自慢のボディで

包み込むと、安心したような寝息になる。

……♡

かわいい……。

更に抱きしめようとすると、

そいつが何かを抱いているのに気が付く。

ボバの腕を付け根からたどってみてみると、

——サーニヤが、あいつに抱きしめられているのが見えた。

「……………」

熱く火照っていたからだだが急速に冷めていき、  
思わず目を細める。

ぐいっとサーニヤとボバを引きはがそうと

ボバの腕をとると、手首を掴まれた。

「……だめ。」

ハイライトが消え、瞳孔が開いている目で、

サーニヤがじっとアタシの目を見つめていた。

「……………へえ。」

思わず声が漏れる。

あの気の弱いサーニヤが、ね……。

「……………」

「……………」

そして、直感的に気が付いた。

気づいてしまった。

(……………気に入らない。)

それが、率直な意見だった。

◆

サーニヤ・V・リトヴァクとシャーロット・イエーガーは同僚である。

お互いに、大切な501の仲間であることは二人にとっては言うまでもなかった。

しかし、この二人はあまりにも正反対過ぎた。

——物静かで、消極的なサーニヤ。

——明るくて、積極的なシャーリー。それはまるで、月と太陽のようであった。

「……なんのつもりですか？」

先に口を開いたのはサーニャであった。

しかし、その言葉とは裏腹に、下で彼の左手の傷をなめて、血を自分の体の中に入れていた。

もし、彼が目覚めていたら、

「半径50M以内に近づかないリスト」の一人に入れられていたことだろう。

猟奇的であることを自覚していても、

彼女は全くやめる気はなかった。

自分の中に、愛しい人の一部が入るの感じ、静かに達した。

「……そつちこそ。」

それに対抗するかのように、

シャーリーは直接ボバの右手を軽く噛み、

そこからにじみ出てきた血をちゅうちゅと

吸い出していた。

舌で彼の手を舐めると、ぶるり、と体を震わせ

体を揺らした。

・・・実のところお互い、目の前に邪魔ものさえ

いなければ、『既成事実』を作っていたであろう

ことは間違いなかった。

「……………負けないから。」

「……………何かいった？」

「……………でぶ。」

「……………つるぺた。」

「……………発情期。」

「……………根暗。」

「……………。」

「……………。」

◆ 彼が起きるまで、そんな風なやりとりが延々と続いた。

・・・・ん。

目を覚ますと、あたりには何も無い白い空間だった。

立ち上がり、自分の姿を見てみると、

スターウォーズ好きの友達と語り合っていたころの姿だった。

・・・懐かしい。

グリーヴァス將軍とダースモールがそれぞれ好きな奴らで、

ボバ好きな俺と気が合う変人二人。

そいつらを良く話していたことを思い出す。

二人とも、どうしているのやら。

手でぼりぼり、と頭を搔いていると

目の前に見覚えのある光景が広がっていた。

第一次ネウロイ大戦、ヒスパニア怪異、扶桑海事変、

501での戦い、502での思い出、504のトラヤヌス作戦、

506でのガリア政争。

そのどれもが強烈な出来事ばかりだった。

一体いつまで見せつけられるのか、と思っている  
急に映像が消える。

ん？と首を傾げていると、次は今までにあった  
ウィッチたちとのやり取りが浮かんでいく。

『すき、です……。』

『ふん。妾の夫にしてやるぞ？』

『私の傍にずっと一緒に居る。私にはお前が必要なんだ。』

『ねえ、いいワインが手に入ったんだ。』

僕の部屋で一緒に飲まない？』

『じゅ、醇子ちゃんって呼ばないください!!……もうっ。』

『わ、私、魔力は少ないですけど、体力には自信が  
ありますから!!』

『私を選べ。選ばないと泣くからな。雑誌でお前に  
泣かされたって言うてやる。』

『……ボバ、さん。』

—— 本當に、いろんな子に出会ったんだな、俺——。

転生を繰り返す前には考えられないような縁。

でも、本當は女の扱ひなんてあまりよくわかつていなかった。

追いかけられるとどうも逃げたくなるらしい。

—— 『ふ、ふん!! 特別に! . . . ガリアに招待して差し上げますわ。』

—— 『私、いつもは食べる側だけどあなたのために練習してきたの . . . 』

—— 『ねえねえ。寂しいからぎゅつとしていい?』

—— 『イツルと二パのために義兄を作つてやるのもいいな。 . . . よし。』

私の夫になれ。』

—— 『兄さん。いつもありがとう。大好きだよ。』

一体、どれほど多くのウィツチたちと出会つてきたのだろう。

ずっと一人でネウロイと戦つてきて、偶然出会つた彼女たちの

存在は、考えるだけでいつも勇気をくれる存在だった。

. . . . . そろそろ目が覚めそうだ。

意識が覚醒していくのを感じる。

—— 今度こそ、逃げ切つてやる。



決意を胸に、現実の世界に戻った。

「  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．」

「

目覚めてすぐに無表情で見つめあう

サーニャとシャーリーの姿を見て

早速心がくじけそうになった。

．．．．宿泊場所を変えよう。

くおまけ 今日ウィッチ クリス・キーラく

頭の中に知らないはずの男が

出てくる。

そのたびに自分が自分でなくなっていく感じがして怖くなる。

けど、なぜかこう思ってしまった。

——愛おしい、と。

かつて、あの男と一戦を交えたこともあった。

最初の一戦目は私の完勝だった。

なんて弱い男なのだろうと思った。

しかし、二回目に私の前に

立ちはだかったあの男は別人だった。

——『俺は、お前を絶対に許さない。』

——『ロザリー、プリン、ヴィス、

イザベル、ジーナ、マリアン、

ジェニフファー、カーラ。』

——『そして、那佳を傷つけたお前を——』。

その時の事を思い出し、思わず舌で渴いていた

唇を舐める。

おっと、いけない。

顔に出てしまっていたか。

くくく。

どうしてこんなに心地がいいのだから。

私の上司も奴に失脚させられた。

その時のことを思い出すだけで思わず

笑ってしまう。

かつて、私に接触をしてきた人物のことを思い出す。

……あの、ガランドとかいう女にコンタクトを試してみるか。

——どこまでも残酷で、どこまでも甘い男。

……そんな男がもし、あの506にいれば

どんな面白いことになるのやら。

「……なあ、お前もそう思うだろうか？」

今はこの世界のどこかにいるであろう

奴のことを考えながら、空を飛ぶ。

突き抜ける風の冷たさなど気にならないほどに、  
体が火照っていた。

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

⑨（“気まずい”）

テーブル前の椅子に座りながら

コーヒーを飲む。

喉を伝って胃の中に入っていくカフェイン。

バターを塗ったパンとの相性はなかなかいいらしい。

そして、ことり、とカップをテーブルにおき

ふー、と息を吐く。

頭を両手で抱えうなだれる。

・・・どうしてこうなった？

俺は、今度こそ最低限の接触だけにして

彼女たちを陰から守ろうと思っただけなのに。

あれか？一回目に口説いたのがいけなかったのか？

・・・502ではうまくやろう、うん。

先日の顛末を思い出しながらパンをかじる。

◆

「はい、あーん。」

「・・・あーん。」

包帯を足と左手に巻かれ、ベッドで

安静にしている俺にスープをスプーンで

すくって差し出してくる二人。

右からはシャーリー、

左からはサーニャ。

美少女二人に囲まれて羨ましい、と

思うだろうがそうもならない。

「・・・サーニャ、アタシが食べさせるから

それは下げていいぞ。どうか邪魔だ。」

「・・・シャーリーさん、彼を傷つけたあなたが

看病するのは、おかしいと思う。・・・

私が傍に寄り添うから、大丈夫。」

ほら、なんて素敵なやりとりなんだ。

二人とも目からハイライトがサヨナラしている。

全く、今日はいいい日だ。

星座占いをしたら12位であることは間違いないだろう。

・・・自分で食べるから。二人ともちよつと落ち着け。

そういうとあつさりと引き下がる二人。

存外、聞き分けがいいので助かる。

・・・それで、シャーリー、だよな？

俺が彼女の名前を呼ぶと、うさ耳を頭から生やし、

嬉しそうにびこびここと動かす。

「ああ、そうだよ。お前のシャーリーだよ。

ほら、胸触るか？溜まっているだろ？

上に乗っかってやろうか？気持ちよくしてやるぞ？」

ぐつと身を乗り出して、鼻と鼻がくつつくぐらいの距離で

笑みを浮かべながら耳元で囁いてくる。

記憶、戻っちまったのかあ……。

サーニヤだけでも大分やばいのに、よりによってシャーリーまで。ルツキーニ、エイラあたりならまだ救いはあったが、年中発情期の彼女が覚醒したとなるが貞操の危機を感じる。

彼女の積極的なアプローチに何も返答できずにいると、後ろからサーニヤがシャーリーの首根っこをつかみ、ぽいっと投げる。

ぐえつ、という声を出して飛ぶシャーリー。

サーニヤの細腕のどこにそんな力があつたというのだろうか。

「……私、体つきは子供だけど、あなたのきもちいいところぜんぶ、知っているから……だから、ね？」

そういつて俺の右手を取り、自分の胸に押し当てる。

指の先に柔らかな感触が伝わり、理性がぐらぐらと揺れる。

「……私を、めちやくちやにしてもいいよ？」

……あああああつ!!



右手で自分の顔を殴り、正気を取り戻す。

サーニヤとシャリーが目を丸くして

驚いているのが見えた。

・・・ふう。

落ち着こう。

何も誘惑されるのはこれが初めてじゃない。

頭をぼりぼりと掻き、二人に言う。

今は誰も受け入れる気はない。悪い。

頭を下げてそういう。

以前の自分なら、ふざけて茶化していただろうが

そうした軽薄な行為が死因となった。

だからこそ、今回の人生ではなるべく穏やかなライフスタイルを  
実現するのだ。

そして、嫁さんでも貰ってひっそりと山奥で隠居して  
生活する。

それがささやかな望みだ。

「……頭をあげて。」

サーニヤにそういわれて頭をあげると、満面の笑みを浮かべているのが見える。

……な、なんで笑っているんだ？

困惑して固まっていると、シャーリーに

首元に抱き着かれる。

「アタシが嫌いだから断る、ということじゃないんだろ？」

……だったらいいさ。あ、でも一緒に死ねたら嬉しいぞ？」

「……他にどれだけ妾がいても気にしないよ？」

私が特別なら、ね。」

「……あんまり調子に乗るなよ？ 雌猫。」

「……万年発情しているウサギには言われたくない。」

「……あはははは。」

「……ふふふふふ。」

目の前で今にも殺し合いを始めそうな二人を見て思った。

◆ 宿を変えよう、と

で、二人をその日は帰して、すぐに宿を引き払い別の場所に移った。

当然、二人は俺がどこにいるかも知る由もない。

無線機でのやり取りだけはしているが、

場所を聴かれても絶対に教えない。

教えたらすぐに二人とも押しかけてくるからだ。

……その代償として、宿の主人にシャーリーと

名乗る人物が来たら通信機のコードが書かれた紙を

渡すよう言っておいたので、これで当分は大丈夫だろう。

……爆発、しないよな？

——『・・・へえ。』

脳裏に浮かぶのは、ワイン好きの彼女。

恋愛ごとには興味がないと思っていたが、

実は一番うぶで、一番恋に憧れていた

体の大きな少女。

そういったケースもあるので断言しきれず

悩んでいた。

とりあえず、飯だ、上手いものを食って

忘れるんだ。

やけ食いしようとする、店員さんに

声を掛けられる。

「お客さま、すみません。他の席が空いておりませんので

相席をさせていただいてもよろしいでしょうか。」

ああ、いいですよ。

そういうと店員さんは入り口の方に引つ込んでいった。

一体どんな人が来るんだろうな。

そう思つてコーヒーを飲んでいると、  
声を掛けられる。

「すみません。ご一緒させていただきますわ。」

思わず飲んでいたらコーヒーを噴きだしそうになった。

「席があいていなかったものですから……。あら？  
どうされました？」

い、いえ。飲んでいたらコーヒーが口にあわなかったもので。

そういつてごまかす。

……。なんでペリーヌが?!

一人で買い物にでも来たのか、

俺の前に座る彼女。

気の強いところもあり、しかし祖国であるガリアの  
ために聖女さながらの献身をしていた人物。

その所作は彼女の生まれの良さを指し示しており、

どこか高貴な感じがする。

506のプリンに似ている。

大丈夫だ。

顔はフードで隠してある。

目を合わせなければいけないはずだ。

店員さんに注文している彼女をちらりと覗き見る。

こんな小さな子が、のちに506の隊長としてスカウトされるとは

やはり考えられない。

結局のところ、一人のガリア国民として復興に力を注ぎたいから

ということで辞退はしたものの、受けていたら一体どうなっていたらどうか。

・・・たぶん、那佳あたりとは喧嘩してただろうなあ、

とその光景を目に浮かべる。

ついでに俺も店員さんにおかわりを頼みつつ、

彼女と目を合わせないように顔を微妙に伏せる。

「……あの。どうして店内でフードを？」

いえ、ちよつとけがをしております。・・。

「失礼しましたわ。」

俺がそういうとすぐに話を切り上げ、

それ以上は追求しないでくれる。

・・。やつぱり、サーニヤも、シャーリーも、

目の前にいるペリーヌもそれまであつてきた

彼女たちと変わらない。

コーヒーカップを口元に運び、ぐいっと飲み干す。

「……」

・・・・・。

お互いに何かをしやべるわけでもなく、

鏡写しのように違う手でカップを持ち、

同じようなタイミングで飲み物を飲む。

彼女からこうしたマナーを教わったからか

所作もそつくりになつていた。

ちら、ちら、とペリーヌから見られているような  
気もしつつ、店員が持ってきた料理を口に運ぶ。

全て食べ終わり、席を立てて会計しに行く。

「あ……。」

声がしたので後ろを向くと、彼女が

俺の方に向かって手を伸ばしているのが見えた。

近くにいた店員さんにどうしたのかと

尋ねられている。

「……いえ。なんでもありません。」

そういうと会釈してきた。

それに対して同じように会釈を返し、

料金を払って店を出る。

宮藤と同じようなところがあって、

どうも彼女には弱い。



506に入っていたのもペリーヌのためだったし。  
・・・・・帰るか。  
これから“仕事”だ。

## 501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ

## ⑩ “守るから”

美緒が墜ちた。

そのことを知ったのはサーニヤからの通信によってだった。

人型のネウロイとコミュニケーションを取ろうとした

宮藤を守ろうとしたところを……。

死んではない。

だが、シールドを撃ち抜かれてしまったらしい。

それが意味することはつまり……。

『ねえ。……大丈夫なの？』

……。

うすうす感づいているサーニヤ。

魔力を持たなくても前線で戦っている

ウィッチはいる。しかし、それは彼女が

最強クラスのウィッチだからできる芸当だ。

数十年ネウロイと戦って、経験値が溜まれば

話は別だが、それでもきついだろう。

それよりも、司令室で盗み聞きした

もう一つの話の方が気になっていた。

美緒が墜とされる少し前にさかのぼる。



「……これ以上、深入りするな、か。」

「これは一体どういうことだ!？」

激昂するバルクホルンの声が聴こえる。

「……やはりこうなったか。」

バルクホルンの妹が目を覚ましたのは良かったが、

これはよろしくない。

司令室の机に仕込んである盗聴器から

彼女たちの声を拾い上げていた。

「私たちを疎ましく思う軍人は多いわ……。」

「だが、大体的見当はつく。」

「……トレヴァー・マロニー空軍大将。」

ガランドの資料で見たあいつか。

本当にどこでも懲りないやつだ。

……一人くらいきれいなマロニーはいないものか、

とため息をつく。

どうする。

殺すのは簡単だ。

だが、あいつは貴重なネウロイに関するデータも持っている。

それが以後の戦いに役立つことは言うまでもなかったので

躊躇する。

かといって何もしなければ調子に乗ることは目に見えている。

腕を組んで悩んでいると、話の続きが聴こえてくる。

「……これですな。以前、この司令室を荒らした

人間がいた理由。」

「……そしてトレヴァー・マロニーと同じ国籍のバッジ。」

ナイフで刺された左足がうずく。

あいつの部下には足をやられている。

次にあつたら絶対に頭を落ち武者にそり込んでやる。

盗聴器の通信を切り、屋根から飛び降りて海にダイブする。

海面にぶつかると直前に背中のジェットパックを点火し、

水平線に向かって飛び続ける。

奴が死のうとどうなろうと興味はないが、

あのネウロイのデータはどうしても必要だ。

夜の冷たい風を体に浴びながら遠回りで隠れ家に戻った。



『ねえ。．．．大丈夫？』

いかん。

考え込んでいたようだった。

彼女に大丈夫、大丈夫と返し、

通信機を切る前にもう一つ質問する。

・・・サーニャ。確か人型のネウロイが出たって

言っていたよな？

『え？う、うん。』

そうか……。

ふーと息を吐きながらベッドに寝つ転がる。

と、なると最悪の事態を想定する必要がある。

宮藤は脱走した。

美緒はいまだ戦える状態じゃない。

……そして、極めつけだったのがあの男がやってきたことだ。



スコープ越しに俺が追っていた男が見えた。

周りの兵士たちが彼女に向けて銃を構えたとき、

皆殺しにしたい気持ち湧き上がったがそれを

自分の左手で右手を抑えることによって辛うじて耐える。

……っ。

遠めでも唇を読んであいつが何を言っているのかはわかる。

ウオーロック。

解散。

引継ぎ。

原隊への復帰。

宮藤が滑走路の地面に倒れたとき、

本当に飛び出そうと思わず立ち上がったが、

他のウィッチたちに抱えられて基地の中に

連れていかれるのが見えた。

・・・宮藤。

他の子たちがついているなら大丈夫だろう。

だが、それよりもあいつの後ろにあるあれの方が

今は優先だ。

・・・あれが、ウォーロック？

今まで倒してきたやつよりもごつく、

武装の数も増えている。

嫌な予感がする。

スコープをトレヴァー・マロニーの

頭に定めつつ、その背中を歯ぎしりをしながら

見送った。



『私たち、みんなバラバラになっちゃうのかな．．．。』

泣きそうな声でそういう彼女。

いつも病んだ目で俺を振り回している

とは思えない。

．．．安心しろ。

『え？！』

そんな彼女に向かって自然と声を掛けていた。

絶対を守るから。

それだけ言って通信機の電源をオフにする。

別の時間帯にシャーリーからもらった情報とも

合致している。

．．．やることは決まった。



◆  
とって意気揚々と今はマロニーの支配下にある  
501基地に乗り込んできたのだが・・・。

「これであなたももう終わりね」

そういつて、何かの資料をマロニーに  
突き付けるミーナ。

エーリカとバルクホルンもぎまあみろ、  
という顔をしている。

なんでこいつが最後は失脚したのか

分からなかったが、今わかった。

彼女たちにやられていたからか。

ウオーロツクと交戦している

宮藤を助けるため、部屋から出てくる三人。

あわてて天井まで飛び、

右腕に仕込んであるカッターで突き刺して

ぶら下がる。

「……ストライカーは使えるかな!？」

「さあな!!やるしかない!!」

「武装してすぐに行きましょう!!」

そういつて駆け抜けていった彼女たちの

背中を見送り、入れ違いに部屋の中に入る。

バルクホルンに縛られて、身動きが取れない

マロニーと、窓の近くに集まって体を縮こませている

研究者と軍人たちがいた。

「……誰だ貴様は!？」

俺の姿に気が付いたやつがにらみつけてくる。

が、それよりも先に身を寄せて集まっていた

軍人と化学者たちを一人ずつ殴って気を失わせていく。

命乞いをしてくるやつもいたが全員殴り倒していく。

側近は……。

わお。

既にバルクホルンの怪力でボコボコにされたのか  
服がボロボロで気を失っている。

やるな。

近くにあったネウロイのデータをすべて漁り、  
袋に入れて集める。

さてと……。

とりあえず右手で顔を思いつき殴る。

「っ……!!」

口が切れたのか、血を垂らし始める。

……初めまして。

「……だ、れだ……?! 貴様?!」

そうか。

俺はこいつを知っているがこいつは  
俺を知らないんだった。

まあ、そんなことはどうでもいい。

彼女たちの応援に駆け付けたいが、

こいつが留置所に拘束される前の  
今が接触するチャンスだ。

501の皆と何よりも宮藤を泣かせたことは  
絶対に許さないが、もう一度殴りながら  
穏便に質問することにした。

めきよつという音が部屋に響く。

「……このネウロイのデータは、  
いつから取っていた？」

「……は、な、ぜ、貴様なんぞに  
話さなければなら、ん……。」

そうか。

じゃあ、話したくなるようにしてやろう。

こんどは右足で腹を蹴る。

これで3人分。

「……では質問を変えよう。」

あれは一体なんだ？

窓の外のウォーロックを指し示して言う。

「……ふん。ウィッチ、ど、もに頼らずとも

我々、が、ネウロイと戦えることを、示す兵器、だ……。」  
戦っているのはお前じゃなく、あれ自身だけだな。

イラつとしたのもう一度殴る。

先日の泣き声で通信してきたサーニヤのことを

思い出してもう一度殴る。

顔に青たんができていい男前になってきた。

資料に目を通す。

そして、最後までめくり、

——そこに書かれているものを見て、

息が止まった。

……っ!!

奴の首を両手で掴み、握り締める。

壁に体をぶつけ、うめき声をあげる。

そして、ずるずると体から力が抜け、

地面に倒れ伏した。

どうやら気を失ったらしい。

・・・生きていたら後、7発は殴っていたが、  
それどころじゃない。

窓をけ破つて外に出て、ジェットパックから火を噴かせて  
外に出る。

他のウィッチたちも集まってきたのか、

ウオーロック相手に戦っているのが見えた。

そして、基地の中から発進する2つの新たな黒い影。

・・・やっばりか。

片方にブラスターを当て、もう片方には

左手のリストミサイルを命中させる。

ウィッチたちの元に行こうとしていたもう2体の

ウオーロックが俺の方に向かってきて、

レーザ砲を放ってくる。

・・・意志を持たないタイプの量産型。

ネウロイに乗っ取られたのが親機。

だとすれば、まだ封印されていたはずのこいつらは

その親機によつて無理やり目覚めさせられたといったところか。  
シールドを俺はもっていない。

ネウロイの攻撃が直撃することは死を意味する。

だが、そこら辺にいるネウロイとはさすがに

速さが違い、あつという間に背中を取られる。

・・・っち!

急停止して、宙返りすると

通り過ぎていく。

そこを後ろから狙い撃ちすると、翼に当たった。

だが、まだ致命傷にはいたっておらず、反撃してくる。

背中のロケットミサイルを発射して、

すれ違いざまに叩き込む。

コアがむき出しになった片方に照準を合わせようと

銃を両手で構えると、左手がずきり、と痛んだ。

・・・っ!

照準がぶれ、コアではなくその周辺にプラスターが当たる。

レーザーが当たらないと判断したのか、

体当たりを仕掛けてきたのを避けると、

すぐ後ろに隠れてもう一機が突っ込んできており、

それにぶつかる。

がはっ、と胴体に機体の先っぽがめり込み、

そのまま遠くまで運ばれる。

・・・があああっ!!

自分の左腕をむき出しのコアに突っ込み、

そのままミサイルを撃つ。

爆発四散するウオーロックと

爆風で吹っ飛ぶ俺。

マスクの左側が吹っ飛んだのか

むき出しになった。

背中からジェットパックを噴射させ、

体勢を整えようとしていると、

もう一機がウイツチたちのところに行こうと



していたのが見える。

すぐに右手でブラスターを構えて

引き金を引くと、カチツ、という音が鳴った。

・・・エネルギー切れ!?

そうこうしているうちに、奴はぐんぐんと

彼女たちに近づいていく。

親機を倒して喜んでいるのが見える。

だが、子機はそれでも止まらずに最後に

一矢を報いるために飛び続ける。

——宮藤の元に。



「よかったあ・・・。」

皆、皆無事だった。

守りたい人たちを守れた。

でも……。

(これで、お別れかあ……。)

色々なことがあった。

坂本さんにスカウトされたこと。

501の皆に会えたこと。

不思議なネウロイに会ったこと。

きつと一生忘れられない記憶になるだろう。

一抹の寂しさを胸に基地に向かって飛び続けていると、

サーニヤちゃん慌てた様子で何かを叫ぶ。

「……だめっ!!」

「えっ?」

後を振り向くと、すぐ近くまで

ウォーロックがまつすぐに飛んできているのが見える。

あつ……。

突然のことに頭が真っ白になり、

ぶつかりそうになったその時。

・ ・ ・ ああああああああつ!!!!

どこからか雄たけび声が聴こえてくる。

そして、その声の主は私にぶつかろうと

してきていたウオーロックにタツクルした。

そして、壊れたマスクの奥から見える目と

視線が合った。

ぶつかってウオーロックの進路を変えたその人が、

しがみつきながらあつという間に遠くに行ってしまった。

なぜだかわからないが涙があふれてきた。

「大丈夫か?! 宮藤!」

近寄ってくる501の皆。

・ ・ ・ ああ、そうか。

そうだったのか。

基地にいるときに感じたあの気配は ・ ・ ・

口を手で抑えながら嗚咽を漏らす。

どうして、どうして最初から

姿を見せてくれなかったのだろうか。

なぜ忘れていたのだろうか。

いつもみたいにかっこつけるためなのだろうか。

……本当に酷い人だ。

「…………お帰りなさい。」

遠くで爆発音が鳴り響いた。



はあー。はあー。

ああ…………。

本当に今回ばかりはダメかと思った…………。

いや、マジで死ぬ。

マジで…………。

げほっ、とせき込み、

陸地まで上がる。

砂浜に寝っ転がり、仰向けに

なりながら呼吸を整える。

まさか最初に来た方法と

同じやり方で帰ってくるとは。

一体神様は俺にどんな恨みが

あるというのだろうか。

残り一機のウオーロックにしがみついたは

良かった。

しかし、ブラスタはエネルギー切れ。

ミサイルは弾数がなく、攻撃手段がなかった。

本当に、本当に嫌で、最後の手段だったが、

俺はそれを使うことになった。

右手でジェットパックを外し、

ウオーロックの機体に押し付けて

誘爆させた。

体中が痛い。

とうかやけどしていて熱い。

海水の塩っ気が傷口に染みて

死ぬほど痛く、思わず涙が出てくるほどだった。

と、とりあえずどっかに隠れて体を休めるか・・・。

そう思っって立ち上がろうとすると、

後からとん、とんと肩を叩かれる。

「・・・・・・・・やあ。」

後を振り向くと、そこにはハイライトの消えた笑みで  
俺の肩を両手でがつつちりと掴んでいるガランドがいた。

・・・・・・・・。

無言でその手を振りほどき、走って逃げようとする、  
体に力が入らず、彼女にもたれかかってしまう。

「……へえ、情熱的だね……♡♡」

何を勘違いしたのか、ハイライトが戻り、  
機嫌をすつかり良くした彼女が耳と尻尾を  
出して嬉しそうに胸を俺の頭にうずめる。

「……お疲れ様。今までなんで通信してこなかったのか  
たつぷりと尋問したいところだけど……」

俺の頭を抱える両手に徐々に力がこもっていく。

「……ガ、ガラン、ド……?」

「まずはゆっくりと怪我を直そうか。」

そのためにも監き、入院してもらおうよ。」

今一瞬間こえてはならない声が聴こえた気がした。

逃げようにも本当に力が入らず、彼女に

抱きしめられ続ける。

「その後はハネムーンと行こうじゃないか。」

「……私の両親にあいさつしに来てもらおうかな♡」

た、助けて・・・。

「うん。助けてあげるよ。・・・私が、ね♡」

501のみんなが無事だったからよかつたもの  
こんなオチは認められない。

・・・認められて溜まるかっ!!

痛みにうめきつつ、彼女に車まで引きずられて  
運ばれ、病院に連れていかれるのだった。



## 幕間　　＼外出の前には準備を＼

「しかし・・・君も無茶したね。」

包帯でぐるぐる巻きにされ、

ミイラ男みたいになっている俺の横で

リングの皮をナイフで向きながらそういうガランド。

ウィッチが包丁やナイフを持っているのを見るだけで

最近、体が震えるようになってきた。

自業自得であるとはいえ、やはりウィッチの

重い愛というのは思わず逃げたくなるものだった。

あーん、とフォークで差し出されたので

半ばやけくそ気味にそれに食い付く。

血だ、血が足りない。

本来だったらもつと栄養がつくものを食べたいのだが、

こここの医者が言うにはまずは軽いモノを取って

胃を慣らしておいたほうがいいとかなんとか。

ふふ、と彼女が笑う。

「……こうしていると、夫婦みたいだね？」

あー、あー、聞こえない。

聴こえないぞー。

耳を塞ごうにも両手にギブスがはめられ、

聞かざるできないので頭だけ伏せて

彼女からの熱い視線をいなす。

「……つれないなあ。でも。」

ぎつとベッドに乗っかってきて、

俺に馬乗りになる彼女。

「……私のお願いをなんでも一つ、

聴いてくれるって約束だったよね？」

しゆるしゆる、という音が聞こえたかと思うと、

彼女が服を脱いで、下着姿になっているのが見えた。

意外とかわいらしいピンクの下着だったので

そのギャップに思わず下半身が反応する。

それに気が付いた彼女が右手で俺のモノを

ズボン越しにさすり、嬉しそうに声を挙げる。

「♡♡♡……私で興奮してくれているの？うれしい……♡♡♡」

歯止めが利かなくなつたのか、そのままズボンのベルトを外して  
下着まで降ろそうとしてくる。

ちよ、へるーぷ!!と叫びつつ、逃げようとするも

上からうまく体を抑え込まれて、なすが儘にされる。

「一杯きもちよくなろうね……♡♡キミのアレ、好きなんだ……♡♡」

これはもうダメかもわからんね。

禁欲性活でムラムラしているところにされる

誘惑に負けそうになつたその時、ガランドが

突然身をかがめて抱き着いてくる。

すると、先ほどまでガランドの頭があつたところに

向かつてナイフが通過し、壁に突き刺さる。

「……。」

「……。」

入口の方を見れば、そこにはハイライトが消えて  
ガンギマリ状態のサーニャとシャーリーが  
立っていた。

「……っち。」

形勢不利だと悟ったのか、  
俺の上から降りて、服を着なおす。

「……まあ、いいよ。だったら別の手段を使うから。」

そういうと俺の傍から離れて入り口の方に、は  
行かずに俺の方を向いてウインクしてくる。

「愛しているよ♡……また今度、二人つきりで

今日の続きをしようね♡」

そういうとスタスタと病室から立ち去っていく。

彼女の背中を警戒して、見えなくなるまで

見つめている二人。

そうして足音が聞こえなくなると、

二人がすぐにそばに駆け寄ってくる。

「大丈夫？何か変なことされなかった？」

「行き遅れはこれだから駄目なんだよなあ。

やっぱりアタシみたいに若い女の方が

嬉しいだろ？」

お前、それ、絶対にガランドに向かって言うなよ？

ただでさえ空が飛べなくなつて、俺に甘える頻度が

多くなつているのに死体蹴りはやめてやれ。

というか実質二人にとっては上司なのに

ちよつと態度がよろしくないんじゃないだろうか。

そういうつても聞く耳を持たないことは

想像できるので、言わないが。

「……で。いつまでここに居るつもりだ？」

さつきガランドが向いていたリングの残りを

口に入れながらそう語りかけてくるシャーリー。

俺の傷がもう既に癒えていることに気が付いているあたり  
やはり勘が鋭い。

サーニャも同じような表情だ。

そうだな。

・・・正直言うと、迷っている。

「迷って？」

ああ。

以前の人生において、501が解散して再結成するまでの  
間というのは特に重要なターニングポイントだった。

というのも、その間に様々な統合戦闘航空団に  
いたからだ。

今回の人生においてはスレーヴーがないので

そうやすやすと他の国には侵入できない。

となると、502に行けば501が再結成される間は  
そこにずっといることになる。

504に行けばもちろんトラヤヌス作戦が発動し、

501がその後の戦いを引き継ぐまでは移動できなくなる。

506に行けば、ガリアの政争に巻き込まれ

色々と面倒なことになるのは目に見えている。

選択肢は多くあっても、そのすべてを選ぶのは

現実的に考えて不可能だった。

サーニャに水が入ったカップを差し出され

それをんぐ、んぐ、と飲む。

・・・うし。

どこに行くかは決まった。

包帯を取り外し、ギプスを割って

患者服からいつもの服装に着替える。

・・・最初はピカピカだったマンガロリアンの

アーマーもボバ・フェットが使っていたころみたいな

色になってきた。

次の戦地に行くまでに新しい武器が必要だ。

ブラスター・ライフルだけでは心もとない。

「……もう行くの？もつと一緒に行きたい……」  
「アタシもそうしたいんだけど。」

二人とも連れをあまり待たせないほうがいいだろ？

俺の言葉でそれぞれの相棒を思い出したのか

押し黙る二人。

二人にはエイラとルツキーニがついている。

なら、大丈夫だろう。

マスクを新調したので、アーマーも新しく

新調するか。

マスクをかぶりながら、次なる戦場のことを考えるのだった。

◆  
「……」

その男は、軍法会議にかけられるのを待つ身だった。

トレヴァー・マロニー。

501を強制的に解散させ、ウォーロックを開発した人物。

やっていることは違法行為であったが、その中には

いくつかの功績も確かに存在してた。



(・・・ネウロイのデータは結果的に上層部に伝わった。

これを元にして、第二、第三の完全なるウオーロックが  
開発されればウィッチなどの力を借りずとも・・・！)

男の目的はウィッチの排除と、ウィッチ以外のネウロイへの  
有効策の開発だった。

結果的にウオーロックはネウロイに乗っ取られ、

501のウィッチたちに破壊された。

しかし、それはあれがまだ完全な出力調整が済んでいない

試験機だったからだ。

完成さえしていれば、ネウロイに乗っ取られることもなかったのだ。

手錠をかけられた両手を握り締める。

おそらく、悪くて銃殺刑。

しかし、身内のスキヤンダルが漏れないように軍部はするだろう。

妥協案として自分が閑職に追いやられるくらいか。

忌々しいウィッチも、無様をさらしたウオーロックも

男にとっては納得できないものだった。

(・・・つまらん結果に終わったな。)

ため息をトレヴァー・マロニーが吐くと、

留置場のドアの向こうから声が聴こえてくる。

『……おい、貴様。止まれ。ここは民間人の

立ち入りは禁止だ。』

『……。』

『なっ……。がっ!!』

男のうめき声と争うような物音。

どき、どき、と何かが倒れる音が

ひびいたかと思うと、ドアがキイイ、と音を立てて開いた。

「———どうやら、ギリギリ間に合ったようだな？」

そういつて入ってくる男。

トレヴァー・マロニーにはその人物に見覚えがあつた。

「……貴様はっ……!」

その男はマロニーを何度も殴り、

失神させた張本人。

当然、彼にとって心象がいいわけもなく、  
鋭い目つきでにらみつけた。

「……私を、殺しに来たのか？」

「……お前を？うぬぼれるな。」

そういうと、ナイフをテーブルに突き立て  
サグンツ、と刺した。

お前が軍法会議にかけられ、護送される  
前に聴いておくことがあったからな。

「……なんだと？」

マロニーとは反対側の椅子に座り

テーブルの上に足を乗つける男。

「……ネウロイの開発を行っていた

研究所はどこにある？」

その言葉にマロニーは目を見開いた。

「……そうか、それが目的だったか。」

納得したのか、落ち着いた様子でそういう。

「……ふん。どうせ今頃はブリタニア軍が証拠隠滅のために動いている。」

……お前には妻子がいたな？

男の言葉にマロニーは思わず立ち上がった。

「……………」

もつと冷静になれよ。

それだとイエス、と言っているようなもんだぞ？

「……っ。ふん……………」

どかっとう腰を降ろして座りなおした。

それでいい……………研究所の場所を言え。

そうしたらお前の妻子を守ってやる。

男がマロニーに突き出した条件は

彼にとつて耐えがたいモノであった。

「……………誰が貴様なんぞにっ!!」

手錠でつながれている両手をテーブルに

叩きつけながら激昂する。

しかし、マスクの男は淡々と言葉を紡ぎ続ける。  
「．．．あんたは失脚したとはいえ、

絶大な権力をブリタニア軍内で持っていた。

その影響力を横取りしようという輩があんたの  
弱点に手を出さないとでも思っているのか？

「．．．．．っ。」

留置場に入れられた自分ではその弱点を

守り切れない。

それくらいのこととは考えずともわかるだけに

マロニーは歯ぎしりしながら言う。

「．．．何が望みだ？」

言つたろ．．．研究所の場所を全て教えろ。

そうしたらお前の弱点を守ってやる。

「．．．．．。」

そうしてマロニーが男に返した返事は．．．。



「もう行くの？」

寂しそうにそういうガランド。

「……彼女には命を助けられた。

ヒスパニア怪異との時は逆の状況に

思わず笑ってしまった。

それを勘違いした彼女が頬を膨らませて

俺の首元に噛みついてきた。

「いだっ！」

「……ばか。」

そういうと口を離し、俺から距離を置くガランド。

「まだ、私の両親に挨拶していかないのに。」

勘弁してくれ。……じゃあな。

それだけ言つて、船に乗り込んだ。

目指すは新天地。

「……道中、何もなければいいんだが。」

吹き荒れる嵐の中、

それは無理だろうなあ、と思いつつも

願わずにはいられなかった。

おまけく今日のウィッチたちく

502 統合戦闘航空団基地にて

「はっ！」

食堂でジヨゼと一緒にご飯を食べていたエディータ・ロスマンは

突然立ち上がった。

戦友がいきなり奇行に走ったので目を丸くして驚くジヨゼ。

「……どうしたの？」

「……ナニか、良いことが近々起きるわ……!!」

「……ふーん。」

「こうしてはいられないわ！」

そういつてロスマンは食堂から走って外に出て行った。

嬉しそうな笑みを浮かべつつ。

普段は落ち着きがあり、皆のフォローに回っていた

彼女がハイテンションになっているのを見たことがない

他のウィッチたちも驚愕に顔をゆがませる。

「……先生、どうしたのかな？」

「……たぶん、疲れているんじゃないか？」

「……会いたいよお。まだかなあ。切ないよお。」

「二パはずつと壊れているし……。」

「それを言うなら菅野さんも最近おかしいですよね。」

「は、はあっ!? んなことねーよ!!」

それを遠目に眺める二人の長身の女性。

「……伯爵。最近酒を飲まないし、髪も伸ばしているようだが、

男でも出来たか？」

「んー? さあ、どうだろうねえ。……ふふふ。」

伯爵の返事に何か確信めいたものを感じた

グンドユラ・ラルはすつと目を細める。

「……渡さんからな。」

「……最初からずつと僕のものだけど?」



「・・・・・・・・・・ははははは。」

「・・・・・・・・・・ふふふふふ。」

美女が二人笑いながら談笑しているその様子は  
まるで映画のワンシーンの様であった。

しかし、それはどちらかというと、

ラブロマンスなどではなく、ホラー映画

さながらの様相であった。

ぶえつきしよい!!

・・・・・・・・ええつきしよい!!

男は向かう。

かつての知り合いたちが集う

場所（修羅場）へ。

・ ・ ・ ・ あ、ルーデルと最近通信していなかった。  
まあ、いいか。

女がどんな生物であるか知りながら  
放置する彼にとってはこの言葉が最も  
相応しいだろう。

——すなわち、自業自得と。

幕間②　　くその正体を知る者と、知らぬものく

「・・・。」

501はガリア解放を成し遂げたことによつて  
解散することとなった。

ウォーロックを倒したのは一つの戦果であつたが、  
その後は、フェデリカ・N・ドツリ才率いる  
504がこの地域の戦闘に参加することとなる。

しかし、そんなことをいまだ知る由もなく、  
これから扶桑皇国の自身の家まで帰ることとなる  
宮藤芳佳は件の男のことを考えていた。

——あの目に、見覚えがあつた。

脳裏に浮かぶ、蜜月の記憶。



相も変わらず酷い。

こんな状態の私を置いていくなんて。

でも、また必ず会えるはずだ。

(……ふふふ。)

頭が急速に冷えていき、体が

燃えるように熱い。

今なら、どんな敵だつて倒せる。

(……待っててね、あなた♡)



宮藤芳佳が自室で自分を慰めているのと

同時刻の事。

食堂には数名のウィッチが来たる別れに向けて

会話をしていた。

「……んーと……できた！」

そういつて自分が今まで作っていたものを

掲げ、他のウィッチたちに見せつけるルツキーニ。

あははっ、と笑うとチャームポイントの八重歯が見えた。

「確かこんな格好だったよね。あの謎の生物。」

ルツキーニが言っていたのは、ウォーロックと

戦ってきたときに、乱入してきたとある人物の事であった。

「……もうちよつとフォルムはかっこいいと思うぞ。」

親友のぐちやぐちな絵に対して不満げな表情で

自信の意見を述べるシャーリー。

真実を話す気はさらさら彼女にはなかったが、

かといってごまかしきるのは無理であると悟っていた。

「えー。そうかな? …でも、あの鎧みたいなアーマー、

かっこよかったなあ。ねえねえ! 私たちもあんな戦闘服にしない?」

「……着替えとか、めんどくさくなるけどいいのか?」

「げっ。やっぱやーめた。」

そういつて書いた絵を紙飛行機にして

飛ばすルツキーニ。

どうやらまだ記憶を取り戻していないことに

シャーリーは思わず笑った。

利は自分にある、と。

少し離れたところでは、サーニヤがエイラ相手に話を聴いていた。

真剣そうな顔でタロット占いをしている。

「ムムム……。んー。サーニヤの運がものすごく

良くなっているんだな。……なんでかわからないけど……。」

無表情だが耳と尻尾を生やし、ぴこぴこ嬉しそうに動かすサーニヤ。

彼と会ってから彼女は悦びで胸がいつぱいだった。

「……未来予知でもあんな奴がいることは見えなかつた。

私たちを助けたみただけど、余計なお世話だ。」

そういつてタロットを並べなおし、もう一度引く。

引いたカードにはLOVERS、と書かれていた。

「……。」

なぜかわからないがエイラは無性に恥ずかしくなり、何事もなかったかのようにカードを山札に戻す。

「いやいやいやいや。恋とかありえないカラ。

私にはサーニヤがいるシ。……うん。」

まさか恋人のカードを引くとは思っていなかった

彼女は顔を赤らめる。

「……。」

それに対して警戒の視線をエイラに浴びせるサーニヤ。

これはちよつとまずいのでは？と考える。

前世では比較的そんな重くなかったエイラは、

下手をすればヒロインレースを独占する可能性があつた。

何というか、サーニヤにとつてはかけがえのない親友であるのだが

それと同時に恋敵でもある。

ハイライトが消えかかるのを必死に抑え、

微笑しながらエイラに尋ねる。

「……ねえ。最近は夢とか見ないの？」

「……んー。前ほどは見ないゾ。」

「……なんでそんなこと聞くんだ？」

「何でもない。」



聴きたいことは聞いた、と言わんばかりに  
会話を打ち切るサーニヤ。

その様子を少し訝しみながらも

まあいいか、と占いに戻るエイラ。

シャーリーは、目の前にいる

親友が恋に目覚めたら手強いことを

女の直感で知っていた。

だからこそ、下手に記憶を取り戻さないよう

手を打ち続けている。

サーニヤは、エイラのことを刺したくなかったので

何とか彼から遠ざけようと思っていた。

・・・正反対のサーニヤとシャーリーの

思考の行き着く先が皮肉にも同じだったのは、

彼女たちが似ている証拠なのかもしれない。



「……………」

ぎいつ、と背もたれに寄りかかり、

傍に立っている美緒に視線を向けるミーナ。

その顔はまるで亡霊を見たかのように

驚愕に染まっております、口を

片手で抑えて考え込んでいる。

「……生きて、たんだな。」

「……信じられないけど、ね。」

フラツシユバックして彼を思い出した二人。

かつて、501にいた最後の仲間のことを

どうして今まで思い出せなかったのだろうか。

司令室で二人の人物が争った事件があった。

あれも、彼が裏で守ってくれていたからなのだろうか、

と二人は思案した。

時間にしてみればほんの数秒の再会だったが、

それでも彼のことを思い出すには彼女たち

二人にとって十分すぎた。

「……ところで、ペリーヌはどうしたんだ?」

「……さあ?」

ペリーヌ・クロステルマンはあのあと、顔を真赤にし、自室にこもっていた。

「……恥ずかしいですわ。」とシートで

全身をすっぽりと覆い、うわごとのように

つぶやくばかりであった。

ミーナと美緒は知る由もないが、

ペリーヌは彼が以前の人生で506に入っていたのは

自身のためだったことを知った。

そこまで思われていたことに気が付いた彼女は

ぶつぶつと壊れたラジオのように、

はずかしい、はずかしい、と繰り返していた。

「……来月には501は事実上の解散になる。

あいつがいけないのは残念にならない。」

「……彼も、私たちの前に姿を出してくれていたなら

良かったんだけどね。」

窓の外にある月を眺めながら二人はつぶやく。

きつと、もうここではない他のところに行つて、別のウィツチを助けているのだろう。

「……なんか、腹が立つてきた。

私のことを口説いていたくせに……」

「……私もよ。」

思い出したということは、

それまでに交わした会話、とその他の

チヨメチヨメに関してでもあり。

「……次に会ったら、鞆帯を切つて

逃げられなくしておくか？」

「……そうね。少なくとも首輪をつけて

おきましょう。そうすればずっと私たちの

傍から離れられなくなるでしょうし。」

物騒な会話をにやり、と不気味に笑いながら

続ける二人。

それがさも、当然かのように

どうやって501の共有財産にするかを

一晩中話し合うのだった。



「エーリカ？最近部屋を綺麗にしているが、

一体どうしたんだ？」

「え？な、なんでもないよ!？」

ほら、そろそろ帰国するじゃん？だからだよ！」

バルクホルンがそう尋ねると、

エーリカ・ハルトマンは手をわたわたと

動かし弁明する。

相棒の挙動不審に疑問を持つ彼女であったが、

それ以上の追及はしなかった。

「・・・来月にはここを出るのは確かだが、

それにしても早いような・・・。」

「いいからいいから・・・ほら、

散歩でもしてきなよ。」

そういつてバルクホルンの背中を押し、

部屋の外まで押し出すエーリカ。

部屋から追い出され、ドアが閉じた後、バルクホルンは一言だけつぶやいた。

「……お前も、なんだな。」

それだけ言つて廊下を歩く。

エーリカ・ハルトマンは自身の記憶に混乱していた。

自分は男と縁がない女だと思つていた。

部屋は散らかしているし、ずぼらだし、

何より、体つきが貧相であることに

ちよつとうしろめたさを感じていた。

しかし、思い出してしまった。

そんな自分の一面を見ても、

最後まで女扱いして、寄り添ってくれた

彼の事。

世界で一番ネウロイを撃墜した一人である

自分以上の戦果を稼いだ男のことを。

「……………」

自分の頭を右手で触れる。

そこには、以前、彼にもらったかんぎしはなかった。

「……は、ははは。」

心臓の鼓動が速くなるのを抑えられない。

ぼすつ、ぼすつ、と昂る気持ちを抑えるために  
枕を両手でぼかぼかと叩く。

「……今頃、502かな？……でも。」

枕を彼に見立てて抱き着く。

「……私、本気を出したら、凄いんだからね？」

恋は人を変えるとはよく言ったものである。

伯爵によって生真面目な性格を180度反対な

お茶らけた性格に変えられた彼女は元の自分を

少しだけ取り戻すことにした。

．．．すべては、恋のために。

．．．バカな!?

何事もなく502についただと?  
ありない．．．。

良いことがあると、その後には  
不幸が訪れることを知っている  
彼は、自身のツキに震えていた。



502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ ①

「ただいま」

「うっ!!」

雁淵孝美は焦っていた。

502 戦闘航空団の基地まで船で向かっていた矢先に

大量のネウロイによって襲撃を受けていた。

そして、自身も傷を負い、落ちていく。

(・・・う・・・)

朦朧とする中、下を向くと妹である

雁淵ひかりが受け止めようとしているの彼女には見えた。

何とか持ち越えたようとするも、体から

力が抜けていき、重力に従って落下していつてしまう。

あと少しで、船に落ちる。

自分がやられればネウロイに妹ともども船が。

——  
ああ……。

声が彼女には聞こえた。

—— あ“あ”あ“あ”……。

それは、だんだんと彼女の方に近づいてくる。

—— ……にあえええええっ!!

そして、下で受け止めようとしている妹にぶつかりそうになつたその時、割り込む影が一つ。

背中のジェットパックから火を噴き、

雁淵孝美を抱きかかえて上昇する。

朦朧とする意識の中、彼女はその人物の

かぶつているマスクに右手で触れる。

「……あ、あなたは……?」

……しゃべらなくていい。

そういうと、その人物は

甲板にいる雁淵ひかりに彼女を渡す。

ひかり。彼女を頼む。

「あ、あなたは・・・？」

その言葉に答えることもなく、

マスクの男はネウロイに向けて飛んでいった。

「・・・!!私も・・・!!」



俺としたことがなんて様だ。

以前、508に所属してた頃の孝美から

思い出を語られたときのシーンが脳裏に浮かぶ。

—— 『最初は私、502に配属される予定だったんだけど、

着任する前の戦闘で怪我をしてしまっ・・・。』

だから、戦闘が行われたというところで長期間待っていた。

——彼女を助けるために。

(・・・くそっ!!)

左手のリストミサイルからミサイルを放ち、

右手のプラスターでコアを破壊する。

落ち着け、最低限度の止血はしてある。

回復魔法が使えるジョゼが付きさえすれば

彼女は助かるはずだ。

だが、それでも目の前でウィッチが落とされるのを見るのはつらい。

今回の人生では二度と周りに利用されないよう

陰から彼女たちを守ると決めていた。

・・・本当にぎりぎりまで戦闘に参加できなかった。

ブレイブ・ウィッチーズが持ちこたえるまで

戦えれば俺の勝ちだ。

ブラスターを二度、三度と照射する。

パキーン、とガラスが砕けたような音を立て、崩壊していく怪異。

だが、相手の数がいかに多い。

(・・・っ！切り札を使うか?)

マロニーのネウロイ研究所から奪い取った

データで作ったとあるもの。

テストは行っているものの、

実戦で使うのは初めてなだけに

躊躇していた。

腰にあるホルスターにしまっていた

それをいよいよ抜こうかと

ためらっている、ネウロイが

誰かからの射撃によってチリとなっていく。

「・・・やああっ!!」

声のする方を見れば、雁淵ひかりが

両手に抱えている狙撃銃で敵を  
狙い撃ちしている。

・・・なるほどっ！

初めてこの場面に居合わせたので

今までなぜ彼女がブレイブ・ウィッチーズに  
入れたのか実際にはよくわからなかったが、  
こういうことだったのか。

・・・そのウィッチ!!

「・・・は、はいっ!!」

俺が大声をあげると、近くに

寄つてきながら敵を狙撃し続ける彼女。

もう少しで近くの基地から援軍が来る!!

それまで動き回って時間を稼げ!!

「え、は、はいっ!!」

俺の言葉に従って、回避行動を優先して

飛び回るひかり。

これでよし。

・・・問題は、少しでも多くの数をここで落としておくことか。

そうしてミサイルをぶっぱなし、ブラスターを撃ち続けていると

両手がだんだん重くなり、指の感覚がなくなってきた。

・・・っ!!

体をネウロイのレーザーがかすめ、

手が少し火傷した。

・・・ああああっ!!

背中にあるミサイルをぶっぱなし、

中型の装甲をコアごと撃ち抜いて

撃破する。

ぜえっ、ぜえっ、と息を切りながら

飛び回り続ける。

・・・まだか?!

彼女が徐々に被弾してきた、

このままでは・・・。

「あ・・・。」

一際大きなネウロイが彼女の前に姿を現すと、恐怖で動けなくなる彼女。

そこに向かおうとすると行く手に立ちふさがる他のネウロイたち。

・・・っどけっ!!どけえええっ!!

ブラスターをぶっばなし、

ネウロイを蹴散らすも、体当たりされ、

銃を落としてしまう。

そして、その怪異どもの後ろにとあるものが見えたとき、俺は思わず笑みを浮かべる。

・・・俺の勝ちだ。

次の瞬間、ネウロイが次から次にコアを撃ち抜かれて



塵になっていく。

ブレイブ・ウィッチーズ。

第502統合戦闘航空団のお出ました。

今の俺には彼女たちが天使に見えた。

しかし、今ばれるわけにもいかない。

・・・一体、どれくらい俺のことを

思い出されているかもわからない。

そんな中、彼女達に俺のことがばれるのは

マズイ。

背を向け、一人戦場を後にする。

———ただいま、ブレイブ・ウィッチーズ。

小さな声で誰にも聞こえないようにつぶやくのだった。



「……」

グンドユラ・ラルは司令室で考え事をしていた。  
先の戦闘の事。

雁淵孝美の事実上の脱退。

そして、その後を継ぐことになる雁淵ひかり。

だが、それよりもはるかに彼女の心を  
とらえて離さないものがあつた。

——『ラル。』

あの姿は……。

その時、ドアノックされる。

かぶりを振るつて、いつもの調子に戻り  
彼女は入れ、と告げる。

がちやり、とドアが開けられると

そこには自身が見知つた人物が2人いた。

エディータ・ロスマン曹長。

ヴァルトルート・クルピンスキー中尉。

グンドユラ・ラル少佐と同じカールスラント出身のウィッチであり、戦友である。

「・・・なんだ？」

グンドユラが二人に司令室に来た用件を尋ねる。すると、ヴァルトルートは笑いながらからかった。

「・・・今は、色々一度に起きたけど、

彼のことに関して話に来たんだ。」

「そうね。・・・やっぱりいいことがあったわ。」

熱っぽい声で笑顔を見せるヴァルトルートと

ロスマン。

そんな彼女たちに向かって真顔のままグンドユラは言う。

「・・・忘れるものか。彼は私の傷を笑わないでくれたんだぞ。

・・・あの格好をした人物は一人しかいない。」

そういうと司令室が沈黙に包まれる。

しかし、とある疑問が彼女たちの前に沸いた。

「……どうして、彼は私たちの顔を見るや否や逃げたのかしら？」

「たぶん、僕と結納するのを恥ずかしがっているからじゃないかな？」

「は？」

「ん？」

眉間にしわを寄せてすぐむロスマンに対して

肩をすくめて「ジョーク、ジョーク。」と

からかうヴァルトルト。

「僕たちの前に姿を見せる気はなさそうだったね。

……ちよつと許せないかなあ。」

ヴァルトルトは右手をぎゅつと握り締め

怒りを少し露にした。

ロスマンも口では何も言っていないものの

どこか同じく不満そうな表情を浮かべている。

「奴にもイロイロとあるんだろう。」

その色々、を想像すると三者とも

違う反応を見せた。

ロスマンは計算した。

少なくともこの二人を味方につければ

彼をとらえられる可能性が高まると。

ヴァルトルートは勘で気づいた。

三人共倒れが一番まずい。

ならばこの二人を利用したほうがいいと。

そして、グンドユラ・ラルは想像した。

彼が502にいる他のウィッチたちに

ばれたらどうなるかと。

—— 『好きっていったのにつ!!』

—— 『左手がいいですか？右手がいいですか？

・・・失うなら利き手じゃないほうが

生活に支障が出にくいですよね。』

—— 『・・・・・』

少なくとも一人占めするどころではない。

彼が自分以外の人間に殺されてしまうのも嫌だ。  
なにより、一緒にシャワーを浴びる以上のことを  
まだしていない。

(・・・いやだ。)

普段、鉄面皮で感情を表に出さない  
彼女は思わず心の中でつぶやいた。

「・・・共有しないか？この3人で。」

「・・・実は、僕も同じことを考えて

ここに来たんだよ。」

「・・・ある意味、これまで以上に

親密な付き合いになりそうね？」

三人は部屋の中で静かに笑った。

ぶえつきしよい!!

・・・寒気が止まらない。

・・・まさか。

い、いや。

なるべく彼女たちに見えないよう隠れながら  
飛び回っていたし。

大丈夫。大丈夫。

・・・うん。

毛布にくるみながらベッドで  
寝ているのだった。

# 502統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ (壁越しの再会)

②

雁淵ひかりが502に着任してからというもの、  
あわただしく基地は動いていた。

そして、とある一室にてネウロイの巢を

破壊する計画について彼女たち502、

ブレイブ・ウィッチーズの面々は集まっていた。

エディータ・ロスマンが指揮棒を手に持ちながら

他のウィッチたちを見回して言う。

『……以上が、作戦の全容よ。』

『501にやれたのなら我々にもやれないはずがない。』

グンドユラ・ラルは真剣な表情で

他のウィッチたちを見回す。

全員が緊張している面持ちであり、

これから先の激戦を予感していた。



そんな彼女たちが集まっている部屋の壁に蜘蛛男のようにワイヤーでぶら下がってその会話を聴いている男がいた。

はたかれ見れば不審者でしかない男はいたって真剣な顔つきで彼女たちの話に耳を傾けていた。

相変わらず、直枝はひかりに厳しいなあ……。

二人とも記憶が戻っていないって証拠だが。

ぶつぶつと独りごとをつぶやきながら

メモを見返す。

彼は、先ほど彼女たちが

話していた内容に関して考えていた。

(……この基地が落ちたら実質、

このあたりの戦線は終わり。ネウロイを勢いづかせることになる。)

501統合戦闘航空団の周りには街がある。

かつては200万人もの人々が暮らしていた一大都市である。

今は、ネウロイの侵略によって住人は皆非難し、

基地の兵士しか残っていない状況である。

最後にして、最大の砦。

それが502戦闘航空団基地である。

『……ところだ。』

ん？と作戦の説明は終わったのに

話を続けるグンドユラ・ラルに首を傾げる。

彼女は仕事中に世間話をするタイプだったかな、と。

かくして男の違和感はいやな形で中することになる。

『……前の戦場で、こうした姿をした生物が空を飛んでいた

という情報があった。』

彼が窓からそつと顔をのぞかせると、

そこには、彼の後姿が写った写真があった。

思わず地面に落ちそうになる。

『?今なんか物音がしませんでしたか?』

『・・・気のせいじゃない?』

もう一度彼が窓から中を覗くと、

その写真がボードに貼られており、

その周りをウィッチが囲んで姦しく話しているのが  
見えた。

『・・・なんですか、これ?』

マスクに・・・、アーマー?

・・・抱きしめたら硬そうだなあ。』

『・・・いた。』

『?ジョゼさん?何か言いましたか?』

『んん。何でもない。』

ジョゼの表情が一瞬顔見知りを見たようなものになつた。

しかし、誰もそれに気が付くことはなかった。

・・・彼女たち以外は。



心臓がばくばくと跳ねている。

ちよちよちよちよちよ。

え？な、なぜ？

絵とかならともかく、なぜあんな精巧な写真が

いつの間に撮られているんだ?!

わけもわからず心の中で叫ぶ。

・・・撮られていた？

いや・・・。

あんな状況で写真を撮れるとしたら

もうこれしかない。

・・・俺が来るのを知っていた？

つまり、それが意味するところは。

ずっとメモ帳に書き記していく。

・・・ロスとラリーはダウト。

俺の写真を持ってきた張本人なので  
疑いの余地はない。

他の面々は珍獣を見るような目つきだ。

ならば、他に記憶を取り戻している

ウィッチはいないか？

いないでくれ、と懇願していると、

あーっ!!という叫び声が聴こえてくる。

『こーこの人っ!!』

『・・・知っているのか、雁淵?』

何かを見極めるような感じで

ひかりに聴くラリー。

『この人が私と、お姉ちゃんを助けてくれたんですっ!』

そういうと、部屋がしんと静まり返る。

『・・・ほう。』

冷たい声色でつぶやくラリー。

なぜだかわからないが、いや、

わかりたくもないが冷や汗が止まらない。  
すると、最悪のタイミングで

もう一つ不幸が起きた。

ザザツ、というノイズが走り、

通信機に連絡が入る。

『・・・む？おい。なぜでない？

いるのだろうか？』

某魔王からの通信だった。

爆弾を落とすのが好きなのは、

日常でもそうらしい。

小声で誰にも聞こえないくらいの

声量で応答する。

・・・ハンナ。ちよつと静かに・・・。

『なぜ、そんなこそこそとした

真似をしなくてはならん？

・・・さてよ、貴様、もしかして

他のウィッチと。』

あつ、手が滑ったー。

ポチっ、と電源をオフにする。

．．．．．。

やっちまった。

ま、まあ、当分は彼女からの連絡を

受けないようにすれば大丈夫だ。

きつと．．．。

通信機を再びしまい、

息を大きく吸って深呼吸する。

よしっ。

．．．．撤退だ。

ワイヤーを伝って地面に降り、

そのまま基地の外へと脱出する。

背後から感じる視線を気にしないよう

必死に、懸命に。



「あ、あの・・・？」

雁淵ひかりは困惑していた。

自身の発言によつて、周りの

ウイッチたちの様子がおかしくなつたからである。

エディータ・ロスマン、グンドユラ・ラル、

ヴァルトルート・ケルピンスキーからは

嫉妬の感情がこもつた目線を向けられている。

ジョゼ、二パの二人は頬を膨らませて

ずるい、と彼女に詰め寄っていた。

当然、何も知らない彼女は

何のことかわからず混乱するばかりである。

「ちよ、ちよつと待つて——」。

バギイツ、という音が部屋に鳴り響いた。

「……………」。

そこには、鋭い目つきで写真に写っている



人物を睨みつけている菅野直枝がいた。

彼女が腰を掛けていたテーブルは

真つ二つに割れており、その右手には

魔力が込められていた。

取まらないとばかりに自分が

座っていた椅子も殴り飛ばす。

「ちよつと外に行つてくる!!」

飯前には戻ってくるからなっ!!」

そういつて部屋の外に走り去つていく。

その後ろ姿を呆然と眺めていたジヨゼとニパも

顔を見合わせ、そして何かに気が付いたような

表情で菅野の後を追う。

「ちよつとー! 抜け駆けは良くないわよ!!」

私が最初だからねっ!!」

「今日についている日だっ!! あははははっ!!」

どたどたと足音を鳴らし、あっという間に

二人も外に出て行った。

「……どうやら。敵はあぶりだせたようだな。」

「ええ、全く。……後で作戦会議しましょう。」

「いやあ。嬉しいなあ。彼が本当に戻ってきたんだあ。」

「……髪、伸ばしているのに気づいてくれるかなあ……。」

グンドユラ・ラル、ロスマン、ヴァルトルトの3人も

不穏なことを言いながら部屋を出て行く。

「……一体、どうしたんでしょう？」

「……さあ？写真を見てからおかしくなっていたけど……。」

下原定子とサーシャが彼女たちの奇行に

驚きつつも、落ち着いた様子で話す。

「……なんか、今動かないとまずい気がするわ。」

「……実は私もそんな予感が……。」

「……ついていてみる？」

「……そうしましょうか。」

そういつて、最後の二人も後を追って

部屋を立ち去っていく。

かくして、もう一つの戦いの火ぶたは切って落とされたのだった。

「え？え？な、何？何なのこれー！ーっ!?」

感情の高ぶりが最高潮に達した

雁淵ひかりは、一人、作戦室で叫んだ。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

③

（“愛している”）

んーと、ここがこうで……。

地図に黒のマーカーで線を引き、

丸で囲んでいく。

その下には時刻を記しておいてある。

今、俺は502 統合戦闘航空団基地

周辺の地図にとあるものを書いていた。

501の時とは違い、買い物をすることは

できないがガランドの手引きで必要な

物資は送られてきていた。

……頭が切れるラルが502に納入される

以外の物資に気が付かないように少しずつ、

少しずつ輸送してもらっている。

そして、地図に書き込んでいたのは

彼女たちの行動時間帯だ。

さすがに細かなことはわからなかったが  
大体、何時くらいにどこにいるのかは  
分かった。

ふー、と息を吐いて  
額の汗をぬぐう。

ここにはふかふかのベッドも、

おいしい食事もない。

・・・502の皆は今頃、定子が作っている  
おいしい料理に舌鼓を打っているのだろうか。

たまに扶桑の料理も作ってくれる彼女には  
頭が上がらなかった。

こっそり忍び込んで食べようか。

そんな想いが頭をよぎったが

すぐにやめた。

捕まったらどうなるのかわからないし、502の中は501よりも嚴重なので潜入ができて脱出が難しい。

なにより、エイラの姉がいるのがヤバい。

ふと、オーロラが空に浮かぶ夜、

スコップをもってネウロイを圧殺している

彼女の姿が脳裏に浮かんだ。

右手に手りゆう弾を持ち、左手には

ウオツカを。

そんなアンタツチャブルと出くわすのは

ごめんだったのでガランドから送ってもらった

食糧で我慢することにした。

・・・味が薄い。

そんな風に泣きそうになりながら

ご飯を食べていると、通信機に  
連絡が入る。

応答ボタンを押す。

……もしもし？

『あ、つながったか。』

そうして聴こえてきたのは

ガラランドの次に付き合いが長い

彼女の声だった。

章香？

『ああ。久しぶりだな。』

坂本美緒、竹井醇子、若本徹子の恩師であり、

雁淵ひかりが通っていた学校の校長である。

かつては、軍神としてその名を

扶桑皇国にとどろかせた伝説のウィッチである。

本当に久しぶりだ。……どうかしたか？

『ん、いや、ええと……。なんとなく』

かけてみたんだ。・・・迷惑だったか？  
いや。

『そうか。』

・・・。

『・・・。』

そうして沈黙が俺たちの間に訪れる。

彼女とはこうした雰囲気が多い。

互いに必要以上のことを話さないこの空気。

俺は案外気に入っていた。

『・・・美緒と醇子は元気か？』

かつての教え子たちの名前を出す章香。

そこに徹子の名前が出てこないあたり

わかっているな、と思わず笑ってしまう。

ああ。・・・特に美緒は、な。

『そうか・・・。そういえば

502の方に私の教え子たちが行っていてな。』



彼女が行っているのは雁淵孝美とひかりの二人だろう。

そういえば孝美が扶桑皇国に送り返されたことは知っているのだろうか。

言おうかどうか迷ったが、寸前で踏みとどまり辞めた。

いずれわかることだ。

屋根の上からとある塔のてっぺんを

壁に魔力を込めた手をついて登ろうと

しているひかりを眺めながらつぶやく。

・・・ひかりは元気だと思うぞ。

これ以上なく。さすが、ってところだ。

『?』

塔のてっぺんから何度落ちても

這い上ろうとするひかりを見ると、

かつての自分の姿が頭に蘇る。

——『何がボバ・フェットだ!! てんで弱いじゃねーか!!』

—— 『皆で囲んで袋にしちまえっ!!』  
装備した武器をまともに使えず、

その辺のごろつきにさえやられて

死ぬほど悔しい思いをしていた時。

その頃の自分と彼女の姿が重なり合い、

思わず握り拳を作る。

『ところだ。最近敏子がコーヒーを

飲みに来てくれないってぼやいていたぞ。』

いつか戻るって言っておいてくれ。

・・・それじゃ。

それだけ言って通信機をオフにする。

『諦めて・・・たまるもんかつ!!』

・・・。

何度落つこちてもあきらめずに

挑戦し続ける彼女の姿を日が暮れるまで

見守り続けた。



「・・・雁淵は魔力が相変わらず少ないな。」

「ええ。・・・でも、彼女が私たちの知っている

通りなら、私が出した課題もやり切って見せるでしょうね。」

「うむ・・・。戦力が増えるのはいい。」

司令室で窓から雁淵ひかりが塔に登ろうとしては

落ちるところを見守るラルとロスマン。

その眼は、我が子を見守る親のように優しいモノだった。

右手に持っているカップに入ったコーヒーをずず、と

ロスマンがすする。

「ところで、やつのは見つかったか？」

ラルの言葉に黙って首を横に振るロスマン。

「そうか・・・。やはり一筋縄ではいかんな。」

「・・・あいつがいるような感じはずっとするんだが・・・。」

「大方、陰から私たちを守ろうとしているのかしらね？」

・・・そんなことよりも、一緒にいてくれるほうがいいのに。」  
耳を出し、ぴこぴこ動かして

彼が502にいることを浮かべる二人。

戦力としては紛れもない一流なので

どうしても組み入れたいと彼女たちは考えていた。

そして、窓の外ではストライカー・ユニットを

つけた他のウィッチたちが街を徘徊しているのが

時々写った。

全員、ワイヤーのようなものを片手に持っており、

何かを話しながらあちこち飛び回っている。

「火はついた。・・・グリゴリー作戦が終わり、

501が再結成されるとなれば。」

「彼はそちらに行つてしまふ、か。」

スツとハイライトが消えた瞳で

この街のどこかにいるであろう探し人の

ことを考えるラルとロスマン。

ロスマンは指揮棒を何かを叩く練習のように

空に向かってひゅん、ひゅん、と音を立てて振るう。

ラルは携帯しているナイフを研ぎ石で

静かに研ぎ続ける。

「今、伯爵が501のエーリカに手紙を出しているわ。

巣を破壊する方法と、彼の情報についてのね。」

「・・・全く。さっさと姿を出して私の夫に

なればいいものを。」

「あら？ 私たち3人のものじゃなかったかしら？」

「・・・ああ、そうだったな。すまんすまん。」

うっかり本音を言ってしまったラルは

ロスマンの指摘に悪びれずに謝る。

(・・・どうにかして、二人つきりに・・・)

(・・・スタイルには自信がある。悩殺してやろう・・・)

それが単に形だけのものであることを

直感的に悟ったロスマンは心の中で

伯爵とラルを排除する算段を立て始める。

逆にラルはロスマンと伯爵をいかに

出し抜こうかと考えていた。

同盟が一時のものでしかないのは  
恋も、政治も、同じなのであった。



はっ、はっ、はっ。

毎日訓練に明け暮れている彼女たちを  
見て、俺も自然と体を動かしていた。

少しでも力を維持するために。

全盛期はとつくに終わりを迎えている。

それでも、彼女たちが引退するまでは

一緒に空を飛び続けたい。

その思いだけが、俺の体を突き動かしていた。

誰もいない、真夜中。

装備を着ながら街中を走っていると、

ひかりが登ろうとしていた塔の前までやってきた。

確か、ロスマンはひかりにストライカーなしでここを登り切れ、と言っていたような気がする。一番上を見ると、てっぺんにロスマンの帽子がかけられているのが見える。

準備運動して体を慣らし、壁の前まで歩く。

右手と左手にくっついていているブレードをしゃきん、出しそれを壁に突き刺して登っていく。

案外難しく、少しでもバランスを崩せばあつという間に落ちてしまいそうだった。

危なげなく、3分もかかったが一番上まで来ることができた。

ロスマンの帽子を右手でタッチすると、そのまま飛び降りる。

やはり、彼女の指導は素晴らしい。

ロスマンの教導力にほれぼれしていると、誰かが塔に近づくと足音が聞こえてきた。

すぐに近くの物陰に飛び込み、

頭だけ出してその様子を伺う。

そこにいたのは……。

……ヴァルト？

その人物は、502のヴァルトルート・クルピンスキーだった。

しかし、その姿は俺の知る彼女とは

かけ離れた姿だった。

髪はショートからロングに伸ばしており、

もともと発育の良かった胸を少し前開きにして

色っぽさが増している。

あのシャーリーと同じほどの美貌っぷりに

思わず開いた口がふさがらなくなる。

何かを探しているように首をきよろきよろと

動かしている。

そして俺の方を向いてくる。

咄嗟に身を隠す。

「……おかしいなあ。ここにいた気がしたんだけど……。

ま、焦らずともいいか。」



何かをつぶやいて基地の方に立ち去っていく。

その後ろ姿は寂しげであり、誰かを探し続けている様だった。

見ているだけで胸が締め付けられる思いがした。

・・・ヴァルト。

以前の人生で俺のために協力してくれた子。

自分が女らしくないことを悩んでいた

とても可愛い少女。

自然と彼女が去っていった方角に向かってつぶやいていた。

ヴァルト。愛している。だからもうちょっと待っていてくれ。

「・・・うん♡僕も・・・♡」

え？

後を向くと、そこには顔を赤らめ、耳と尻尾をちぎれんばかりに動かし、はあ、はあと息が荒い彼女が立っていた。

・・・・・・・・。

え？

何でっ!?

先ほど立ち去ったはずの彼女がいつの間にか後ろに回り込んでいたことに驚きを隠せず、思わず叫ぶ。

硬まって、動けないでいると両手でマスクをスポツと外される。

そして、押し掛かれ、地面へと押し倒された。

腰をかくかくと押し付けられ、首を甘噛みされる。

あ、ちよ・・・・・・・・つ。

「大丈夫♡魔力を失う様な真似はしないよ♡

・・・・・・・・でも、そうでなければ何をしたらいいでしょ？♡

「僕も愛しているからぁ・・・♡」  
彼女の手がスツと俺の下半身に伸び、あそこをズボン越しにつかんできた。  
「・・・いただきます♡」

一晩中、彼女と【自主規制】した。  
・・・野外でするのはとっても刺激的だったとだけ言っておく。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

④

”ばらすよ?”)

やってしまった。

俺の腕枕で眠っている

伯爵をちらりと横目で見ると

幸せそうな笑みを浮かべながら

よだれを垂らしてえへへ、と寝言をつぶやいていた。

……後悔はない。

脳裏に浮かぶ、先ほどまでの情事。

—— 『ぐちゃぐちゃにい……してえっ……♡♡  
もっとおっ……♡♡』

指だけだというのに乱れ切った彼女は

下手をすれば押し倒してしまいそうなほどに

綺麗だった。

思い出しただけで下半身に血液が集まってきたので、それを何とか抑えて彼女を起こすことにした。頭を揺らすと、ぱちり、と目を覚ます。

「……おはよ。」

……ああ。

そして沈黙する。

気まずいというか、何というか

変な空気が漂っている。

他のウィッチたちが気づく前に基地に戻れ。

ばれたら不味いだろう？

「えー。もうちょっとお……。」

そういつて後から抱き着いてくる。

長い髪をポニーテールに結っており、

それまでの男性つぼさが完全に消えて

美女と化した彼女に思わず手を出しそうになる。

右手を左手で抑えて、彼女の手をつかんで

ドアの方に歩み寄る。

途中までは送っていくから。

「……時々会いにきてもいい？」

寂しそうにそういつてくる伯爵。

しかし、何度も会うという事は

他の502のウィッチたちにばれる可能性が

高くなるということである。

ここは断るべきなのは明白だった。

いや、もうこれ以上会わないほうが

「君の事、ばらすよ？それとも僕と

一緒に心中する？」

来てもいいぞつ（早口）

腹にナイフを突きつけられ、

ハイライトが消えた瞳でじつと見つめられる。

どこまでも暗い深淵を思わせるその眼に

抗えず受け入れてしまう。

ヴァルトだけは、ヴァルトだけは大丈夫だと  
思ったのにつ。

性欲に負けて流された結果であり、  
明らかな自業自得だった。



ということが先日あった。

ヴァルトの手引きで作戦室の近くまで

簡単に来れるようになったので、

壁越しに彼女たちの会話を聞く。

窓からそつと顔を出して中を覗くと、

ヴァルトと目があい、ウィンクしてきた。

それを不審に思ったサーシャがこちらを

向いてきたので咄嗟に隠れる。

『?..どうしたの?..』

『なんでもないよー。』

女というのはどうしてこういうやりとりが

好きなのだろうか。

ヴァルトとの関係をどうしようか悩んでいると、ロスマンが作戦の指示を出していくのが聴こえる。

『……じゃあ、今回はラドガク北東

テトロザボーツク周辺を探索してください。』

『はいっ！』『は、はい……』

元気に返事をする定子とひかり。

対照的に元気がないジョゼ。

大方、孝美を助けられなかったと

思ってふさぎ込んでいるだろうか。

彼女にあつて言いたい。

君は人を救える力がある。

俺とは全然違うと。

飛び出したかったが、済んでのところで自重し、

メモに書いておいた内容をもう一度見直す。

あそこらへんは昔行ったこともある。

この時期だとジェットパックが凍りそうな



くらい冷え込むはずだ。

ジョゼ、定子、ひかりの三人を追って、陰からそつと守るべきか。

空から相手を追うというのは難しく、

空中では身を隠す場所がないので

後を振り向かれたら終わりである。

かといって、彼女たちを放っておくのもイヤだ。

何かあつてからは遅い。

『・・・それじゃあ作戦については以上よ。

各自、解散。』

考え込んでいるとロスマンが皆に向かって素晴らしい、

部屋から出て行く彼女たち。

意気込むひかり、気負い過ぎている定子。

そしてずっとひかりと目を合わせないように

俯いているジョゼ。

すこぶる心配だった。

．．．．．ヴァルト、部屋を出るときに  
こつちを見るのはやめろ。ばれたらヤバイ。

◆  
(ん?)

菅野直枝は違和感を覚えた。

彼女が良く知っている伯爵こと、

ヴァルトルートがどこか上機嫌だと。

伯爵はいつも余裕を崩さず、笑みを浮かべている  
落ち着いた人物であるが、今日はいつもとほ

様子が違うように見えた。

そして、それは彼女と同郷の出である、

ロスマンとラルも同様であった。

伯爵の顔を彼女たちは見る。

．．．．．一目でわかるくらい、

ものすごくつやつやつやしていた。

石鹸のCMとかに出てきそうなくらいに。

鼻歌を歌っているし、今まで結んでいなかった

髪を、銀色の髪留めでポニーテールに  
まとめているのも異様であった。

つまるところ、どこか昨日とは明らかに違っているのだった。

(・・・なんだ。なんか腹が立つ。)

ぶううん、と右手に魔力を込めつつ

握り拳を作る菅野。

そして、ロスマンとラルは伯爵の様子を作戦室の

帰り際、ずっと観察していたが、何かに気が付いたように

目を見開く。

そんな中、伯爵は彼女たちの傍に近寄り

何かをつぶやいた。

それも、ロスマンとラルにしか聞こえないくらいの

声量で。

ほんの一瞬で起きたことだったので、

ロスマンとラル以外のウィッチは気が付かなかった。

・・・そう、彼女は彼に脅迫した時、

嘘は言っていないかったのだ。

・・・・「君のことをばらすよ」という件に関して。



悩んだ末、3人についていくことにした。

大切なウィッチのためならえんや、こーらと

ばれないように距離を置いて後ろから付いていく。

3人は偵察に向かうらしい。

このあたりの海が凍ってくると、

ネウロイが渡って侵略してくるので

今のうちに情報を集め、防衛線戦を

張ろうという試みなのだろう。

雪が積もっているのを見て歯が震えるが、

パンツ姿で寒空の中、飛び続けている

彼女たちの姿を見ると、歯の震えが

更に強くなった。

・・・・彼女たちは寒くないのだろうか。

あんな格好して飛んでいたら下手すれば

死ぬだろうに。

サーニヤやエイラみたいに寒さに慣れているのなら  
ともかく、凄い。

感嘆の声を漏らしていると、突然、視界が  
吹雪で覆われる。

・・・っ！

ただでさえ、距離を取って飛んでいるというのに  
彼女たちを完全に見失ってしまった。

そして、吹雪の中、どこからか銃声音が聞こえてくる。

・・・ジョゼたちかっ!?

音のする方に向かって飛ぶと、

彼女たち3人が飛び回って戦っている

野が見える。

ネウロイは冷気を生み出しているらしく、  
体を凍らされた3人が落ちていった。

ぷっん、と何かが切れ、  
雄たけびをあげながらブラスターを連射して  
突っこむ。

“あ”あ”あ”あ”あ”あっ!!

外殻がボロボロになっていくネウロイ。

しかし、冷気を俺に向かって吹き付けてきて、  
右手が凍って動かなくなってしまう。

左手からリストミサイルを発射し、

コアごと撃ち抜く。

ぱきいいいん、という音と立てて

ネウロイは砕け散った。

あ、危なかった・・・。

背中のジェットパックまで凍らせていたら  
死んでいた。

敵は倒したので帰ろうとすると、

おかしいことに気が付く。

・ ・ ・ 吹雪が、やまない？

この悪天候の原因は排除した。

ならば、いまだに天気が変わらないのはおかしい。

その時、ぞくり、という嫌な予感が体を駆け巡り、

咄嗟に上に上昇する。

両足に冷気がたたきつけられ、

凍ってしまう。

前を見ると、先ほどの冷気を生み出していた

ネウロイよりも一回り大きな奴がいた。

先ほど倒したのは子供。

こいつが本当の元凶。

辛うじて動く右手でブラスターを構えるも、

相手の方が動きが速く、今度は体全体を

冷気で凍結されてしまう。

体全体が冷え込み、まともに動かせなくなり、

バランスを崩して地面へと不時着した。

雪がクッションになったので多少は大丈夫だったが、  
体が冷えて動かない。

「．．．あ、やば．．．い．．．」

だんだんと眠くなってきた、

遠のく意識を舌を思いつきり噛むことで

覚醒させ、持ちこたえる。

「．．．さて、どうしようか。」

久しぶりのピンチだった。

「その頃の502」

「一体どういふつもりだ？」

「．．．．．」

鍵をかけた司令室で3人の人物が

密談していた。

ロスマン、ラル、そしてヴァルトルトの

3人である。

ヴァルトルトの変化に気が付き、



耳打ちされた2人は彼女に詰め寄っていた。

「まあまあ、落ち着いてよ。」

そんな彼女たちを軽い調子で

たしなめる伯爵。

しかし、火に油を注ぐようなものであり、

その態度がかえって2人を苛立たせた。

「落ち着け? 落ち着けといつたか?

貴様は自分の夫にすり寄る雌猫を

放っておけるか?」

「……キャビアの件といい、

本格的にあなたを“排除”したほうが

いいみたいね……。」

「……ごちゃごちゃとうるさいなあ。

同盟なんて、どうせ一時的なものだろうに。」

ナイフを右手に構えるラルと、

指揮棒を伯爵に向かって突き付けるロスマン。

ボクシングのフォームを取り、

2人を迎え撃とうとするヴァルトルト。  
あと少いで激突か。

そう思った矢先にさらなる

乱入者が現れた。

ドゴムツ、という音を立てて

司令室のドアが吹っ飛んだ。

その轟音の方に目を向ける3人。

そして、廊下からとある人物が

入ってきた。

——「……………」

菅野直枝。

直情的ではあつたが

このようなことをするはずもない

彼女の姿に確信めいた推測を持つ3人。

「……………今の話、全部聴かせろ。」

かくして、混乱は大きくなっていく。

水面下で、彼の気が付かない形で――。

あ、やばいやばいやばい。

マジで死ぬ。

その本人はここから遠く離れた場所で凍死しかかっていたが、それはまた、別の事である。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑤

“ずっとそばに居る”

しくった。

本当にしくった。

体が隅々まで凍って

手を動かすのもやっとの状況。

吹雪は止んだが、体についてる

霜がすぐに溶けるわけもなく、

回復した3人が空に上がっていくのを

眺めるしかできない。

どうにかこうにかして、

すぐに応援に行きたい。

先ほど、彼女たちが入って

弾を取っていた営倉に行こうとするも

体の動きがナメクジのようにゆっくりとした物であった。

こうしている間にも、彼女たちがネウロイと戦っている。

倒れている場合ではない。

右手で体を何度もたたき、

動かない体を無理やり動かそうとする。

しかし、そんな方法で体調が回復するわけもなく、体は凍ったままであった。

死ぬ。

◆ こんなことならヴァルトルートと心中しておけばよかつたと思つた次の瞬間、頭の中にとあるアイディアが浮かぶ。

ジョゼ、下原、ひかりの3人は、502 統合戦闘航空団基地に向かって

移動を続けるネウロイを追い、戦闘を始めていた。持っている銃や、ストライカーを凍らしてくる

ネウロイはウィッチにとって天敵と言える相手だったが危なげなく、彼女たちはネウロイ相手に善戦する。

攻撃よりも回避を優先することで、体を凍らされないようにしている。

そして、準備した火矢をネウロイに向かって放ち、

それが最終的にコアに当たり、ネウロイは撃破された。大喜びで3人は基地まで戻ることとなる。

・・・だが、本来の物語と違い、

一回り大きかったからか、そのネウロイはいまだに生きていた。

飛び去っていく彼女たちを背後から襲おうと

最後の力を振り絞って冷気を放つ。

3人が襲われそうになったその瞬間、

ネウロイが火に包まれ、燃え盛る。

ネウロイが背後を見ると、

そこには、全身が焼け焦げたアーマーとマスクを着ている何者かが、自分に向かって火を放っているところであった。

次の行動を起こす前に、ネウロイに間髪いれずに攻撃が叩き込まれ、

今度こそ本当にネウロイは沈黙した。

そのネウロイを撃破した人物は

息を荒く吐きながら、地面へと降り立ち倒れ込む。

・・・自分で、自分の体をあぶるとか、2度とやりたくない・・・。

自信が装備している火炎放射器で

凍っていた自分の体を溶かすという

荒業を起こした男は、2度とそんな真似をしなくていいことを祈った。



凍っていた体を何とか動かすために  
火炎放射器で体を温め、

ネウロイを撃破した俺は、

502周辺の無人の街にやってきた。

今は、とある無人の民家にお邪魔して

居候している。

場所を変えたかったが、ヴァルトルートから

「勝手にいなくなったらばらすからね?」と

脅迫され、ここに落ち着くこととなる。

最近、彼女がマルセイユや、ルーデルに

見えてきたのはきつと気のせいじゃない。

ゴロプほど暴君ではないが、せめて

エーリカくらいの優しさを持ってほしいと

思いつつ、ドアを開けて中に入る。

焦げたマスクとアーマーを脱ぎ、

敷いていた布団の上に寝っ転がる。

軽く火傷した箇所を水をかけて癒し、



消毒して包帯を巻いていく。

ずきり、と痛むが生活に

問題はなさそうだった。

食糧が入った袋をごそごそとあらし、

堅パンを取り出して食べようとすると

ドアノックされる。

伯爵か？

そう思いつつも、右手にプラスターを持ち、

いつもの戦闘服に着替えてドア越しに

声を掛ける。

・・・ヴァルトルートか？

『……………』

返ってきたのは沈黙だった。

もう一度声をかけて確認しようとする

とドアが吹っ飛び、そのドアごと

部屋の奥にたたきつけられる。

がっ!?

ドアをどかし、襲撃者の姿を見る。

「……本当に、いやがった……。」

そこには、両手に魔力を込め、

鋭い目つきで俺を睨んで立っている

直枝の姿だった。

◆

夢の中で、俺を口説いてきた男。

最初は、気に入らなかった、

模擬戦を申し込んだ。

ウィッチでもないやつが空を飛ぶことも、

ネウロイと戦うのもあり得ないと考えていた。

だが、そんな考えは一瞬で消え去った。

何度戦っても勝てない相手。

それも、ウィッチですらない男。

あまりの悔しさに特訓の量を2倍にし、

何度も何度も挑んだ。

それでも、勝つことはついにできなかつた。  
なぜ、どうして勝てないのか。

それからひたすら空を飛び続け、  
あいつの後を追った。

その戦い方を真似し、食事も、睡眠も  
同じようにしていた。

ある日、ついに俺は奴に一矢報いることができた。  
初めて、攻撃が当たった。

その嬉しさにざまあみろ、と中指を  
奴に突き立ててやった。

でも、やつはどこか嬉しそうに、

——そして、悲しそうな雰囲気  
で俺を見つめていた。

そして、あいつは502を去っていった。  
なぜ、俺たちの元を去った？

なんで、俺の傍にいてくれない？  
ずっと一緒にいてくれるって言ったのに。

嘘つき。

嘘つき。

驚いた様子で俺を呆然と眺めるあいつに  
言っちゃった。

「——ざまあみろ。」

そして、アーマーをぶち抜いて

ボデイに一発入れる。

がはっ、と苦しそうにもがき、倒れる

奴の上に乗っかり、

——頬にキスした。



下原、ひかり、ジョゼの3人がネウロイと

戦っていたころの事。

一触即発の空気でにらみ合う4人。

ヴァルトルト、ラル、ロスマン、直枝は

それぞれの真意を探りあっていた。

永遠に続くかと思われた静寂はヴァルトルトの

一言によって終わりを告げる。

「——オーケイ。彼の間所を教えてあげるよ。」

「……なんのつもりだ？」

静かにラルは彼女に尋ねた。

普通ならありえない、恋敵に塩を送る行為。

「ちよつと考えてみてよ。僕たちが殺しあつて

彼を取り合うのもいいけど、まずは彼に会つて

みたほうがいいんじゃない？」

「それは……。」

まだ、彼に会えていないロスマンとラルは

熟考する。

既に彼と接触している伯爵が有利なのは

言うまでもない。

たいして、他のウィッチは彼に会っておらず

まともに会話もしていないのだ。

「……条件は？ただで教えるつもりはないのでしょうか？」

臨戦態勢を解き、交渉に入るロスマン。

頭の中ではすでに、争うよりも

交渉した方がメリットが大きいと

計算していた。

「簡単だよ。——」。

語られるヴァルトルートの提案に

3人は声を失う。



なぜ？

なぜなぜなぜ？

直枝がどうして俺の場所を見つげられたのかとか、

なんで出会い頭に襲われているのかとか

そういった一切が吹き飛ぶことが起きている。

直杖にキスされている。

それも、顔を真赤にし、体を

ふるふるすると震わせながらほっぺに。

唇が離れると、彼女の顔が

ほんの一瞬だけものすごいト口顔に

なったのが見えた。

しかし、すぐに元の強気そうな顔つきに戻る。

「・・・へ、へっ!!ど、どうだっ!!俺だつて

やる時はやるんだぞっ!!・・・な、

何とか言えよっ!!」

がああつ、と大声で叫ぶ彼女。

虚勢を張っているのか足が震えていた。

今回の人生で、自分からウィッチたちと

知り合いになるつもりは毛頭なかった。

だが、向こうから会いに来たとなつては放つておけないのも事実だった。

彼女の腕を引つ張りそつと抱きしめる。

・・・・直枝。

「・・・なんだよ。」

胸元に顔をうずめて返事をする彼女。

表情は見えないが、きつと喜んでくれている。

会いに来てくれたのか？

「・・・お前が、焦らしすぎなんだよ・・・。」

ぎゆうううつとこちらを抱きしめる両手に

だんだん力がこもっていき・・・、ん？

「ずつとずつとずつとずつとずーっつと会いたかった・・・。」

これからはいつも一緒だぞ。お前言ったよな。ずつとそばに

いるつて。俺が引退するまで本番はなしだけど、く、口や

手でならしてやるし・・・。あ、引退したらすぐに籍を入れに

扶桑に行くぞ。他の雌猫がすり寄る前にな。家は庭付きの

一戸建てで、子供は2人以上。退職金で養つてやるからな。



あとそれから・・・。」

おかしい。

先ほどまでは再会を喜ぶ単なるハグだったのに、

いつの間にかサバ折りに移行している。

彼女自身は小柄でそんなに筋力はなかったが、

魔力を込めた手で掴まれると、みしみしと

体が悲鳴をあげていく。

「・・・えへへへ。」

俺の胸元から顔をあげた彼女の瞳には

ハイライトがなかった。

・・・ガリア政府に亡命しようかな。

彼女にだいたいしゅきホールドされながら

504か506に逃げようかと考えるのだった。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑥

（“ ついでに ”）

直枝も時々俺のところに来てくれることになつた。

伯爵といい、直枝といい、肉食系が

多すぎると思った俺は他のウィッチに

俺たちの関係がばれるのはまずい、と

彼女を諭す。

しかし、直枝から返ってきたのは強気な笑みと、意味深な発言だった。

「ああ、心配しなくてもいいぞ。絶対に他の

やつらとはかちあわないから。・・・こら、

手を緩めるな。ちゃんと俺を抱きしめろ。」

彼女が凄みかかった声に少し体が

強張りつつも、あぐらをかいている中に  
すっぽりと収まっている彼女を後ろから  
あすなろ抱きする。

ぶるぶる、と震えたかと思うと、

「・・・ああつ♡♡」と嬌声を漏らした。

「こ、れ・・・やべえ・・・」

・・・次からは毎回俺を後ろから

抱きしめろ。」

暴君な彼女に命令をされつつ、

502からどうやって逃げ出そうか

考え始めるのだった。



ニツカ・エドワード・カタヤイネン  
通称ニパ。

どこにでもいる少女の彼女にはある特徴がある。

それは、ものすごく不運である。

どれくらい不運かというと、

財布は落とすし、ストライカーは故障するし、雷に打たれるし、食べ物には当たる。

幸せとは程遠いと思われる彼女はそれでもめげずに毎日生きている。

周りは彼女のことをついてないと  
言っているが、彼女自身はそうは  
思っていないかった。

そして、彼女にとって最大級の  
転機が訪れることとなる。

彼女はかつて、501のエイラ、サーニヤと  
親交がある人物だった。

出身が同じであることも仲がいい理由である。

ここではない世界でのこと。

エイラとサーニヤは良く、ニパと手紙でやりとりをしていた。

いつもは他愛もない話ばかりだったが、エイラが手紙で漏らしたとある話がかきつけだった。

いわく『501』にとある男がやってきたことを。



今までに会った、というか一方的に知ったり、話したことのあるウィッチの名前が載っているリストをめくっていく。

「話したことあるウィッチ」一覧に

ヴァルトルートと直枝の名前が

書かれていることに軽いため息を吐き、少し憂鬱になる。

今回の人生ではちゃんと反省して

自重しているというのに。

やはり、ヒスパニア怪異でガランドと

知り合つたのが運のツキだったか。

いや、扶桑海事変で圭子、文香、徹子と再会したことがきつかけだったのか。

それとも、507の智子に見つかったことが原因なのか。

いくら考えてもわかりっこないのでリストをしまい、作戦室の向こう側で

真剣に意見を組みかわしている彼女たちに目を向ける。

あのヤンヤンしていた顔から想像も

できないほど、ヴァルトと直枝は真面目に戦術を考えており、他のウィッチたちも

次々に案を出しあっていた。

ロスマンとラルは何かを考えているように静かに沈黙している。

彼女たちも気になったが、中でも

特に目を引く彼女にちらり、と視線を向ける。

「……………」

どこか壊れたような雰囲気

虚空をじつと見つめるニパ。

斜め45度でチョップすれば直りそう

くらいに故障していた。

そんな彼女に気が付き、その身を案じるひかり。

『あの、大丈夫ですか……………?』

『……………』

だが、そんな声にも反応することなく、

ジョゼや定子が顔の前で手を振ってみても

ぼーっとしている。

『おーい?……………だめだこりゃ。』

『虚ろになっていますね……………』

割とマジで心配になってきたが、

ニパが何かを突然つぶやく。

『……………ぱりいたんだ。いたんだね……………』

そして、そのまま作戦室を出て行ってしまおう。  
ちよ。

『あ、あれ？どこ行くんですかー!?!』

『・・・まあ、大丈夫でしょう。皆でちゃんと

見張れば。作戦は以上です。各自解散。

体を休めて準備するように。』

スタスタと、作戦室から出て行くロス。

ラルもその後に静かに続いて退出していく。

『・・・とりあえず、ご飯食べようか。』

『そうしましょう。』

腕を組んで考える。

ニパは一体どうしたのだろうか。

だが、結局わからず、ワイヤーを伝って

屋根の天井に降りたち、基地の外に出る。

とりあえず、俺も飯にしよう。

隠れ家に帰るのだった。





手紙で彼のことをニパが知ってから幾日か。かつて、501にいたという男に対して

抱いた印象は『胡散臭そう』であつた。

これを本人が聴いたら傷つくことは間違いないが常識的に考えれば男がネウロイと戦うのはほぼほぼありえないことである。

それが、共に空を飛んで、となればなおさら。

エイラとサーニャは彼に関する話をし始めた。

最初は愚痴や、怖い、といったものだった文が次第に丸みを帯びたものに変わっていくにつれて、ニパは戦慄した。

・・・あれ、籠絡されていないか、と。

話を聴く限りでは女だったらしで油断ならない相手だと考えた彼女は502の皆を

守るためにいつも彼を近くで見張ることにした。

最初は離れた位置で食事していたのに、いつの間にか隣で。

模擬戦ではいつも違うチームだったのにいつの間にか同じチームで。

そして、決定的だったのは

彼女をかばって彼が墜ちたときであった。

これらのでき事がニパの頭の中で

延々と繰り返し映画のように映し出され、

以前の記憶を取り戻した彼女は

凄まじく重い愛を抱えることとなる。

本人に聴けば『これくらい重くないよ。

・・・好きな人と添い遂げたいって

きもち、普通でしょ?』と返すことだろう。



まただよ、とウィッチとの

遭遇率の高さに絶望しながらも、

自分の目の前で目を見開き、

興奮した様子で俺を見つめる彼女。

ニツカ・エドワード・カイヤイネン。

通称、ニパが俺の前に立ちふさがった。

本当に偶然だった。

朝のランニングを、無人の街で

していたら、ぼったり角であってしまった。

『あ。』

『あ。』

で、逃げようとした矢先にワイヤーで

ぐるぐる巻きにされ、近くの部屋に

連れ込まれた。

ジェットパックを噴射すれば逃げられるかも

しれなかったが、彼女に熱があたって

火傷させてしまうかもしれない。

そう思うだけで飛べなくなり、

そのすきを突かれてつかまってしまった。

マスクを剥がされ、今は、

あぐらをかいて座っているところを

後から彼女に抱き着かれている。

大きな胸が頭にあたり、

柔らかな感触が後頭部に。

意外とスタイルがいい彼女の

色気に負けそうになるも、

耐える。

「・・・えへへへ・・・♡♡

ついでに・・・♡♡ついでによお♡♡」

絶対に後ろを見てはいけない気がした。

見たらきつと抑えが利かずに彼女を

襲ってしまうかもしれない。

耳元で吐息が聴こえるのが

それに拍車をかけている。

「・・・私さ。いつともついでないことが起きていたけど・・・。」

弱きな声で独白する彼女。

いつもストライカーを壊しては

サーシャに起こられていた彼女の

姿を思い出す。

ニパは運が悪い。

それは誰もがそう思うほどに。

しかし、彼女はいつも前向きでタフだ。

そんなところに惹かれたのかもしれない。

「・・・ねえ。」

ぎゅつと後ろから抱きしめられ、

甘えるような声で囁かれる。

「言ってくれたよね。ニパが好きだって。」

抱きしめてくれたよね。寒空の下でぎゅつと。

・・・私、全部思いましたよ。ごめんね  
忘れちゃってて。」

本当は、502の誰にも知られる気はなかった。  
本音を言ったらきつと伯爵や直枝だけでなく

ニパにも殺されるだろうな、と震えつつ、

彼女の言葉に耳を傾ける。

「前の人生だと子供は2人だったね。

・・・今回はサッカーできるくらい

一緒に作ろうね♡」

・・・ん？

彼女の発言に首を傾げる。

子供が2人・・・？

一体何をいつているのか。

その部分に疑問を感じての

リアクションだったが、彼女には

違って伝わってしまう。

「・・・ねえ。なんで首を傾げるの？」

なんで何も言ってくれないの？

逃げるの？また。・・・だめだよ。

他のウィッチのところいつちやヤダ。

・・・ずっと私たちと・・・私の

ところにおいて。」

ぎゅううううつと首を絞められる。

そして、嫌な考えが頭をよぎる。

まさか・・・。

俺が持つ記憶と彼女たちが

持つ記憶は・・・。

結局、通信機のコードを教えることで

一時的に脱出することに成功した。

いざとなつたら通信を無視しよう。

そういえば、ルーデルからの応答数が

100を超えたな・・・、と遠くを見ながら

現実逃避した。



502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ ⑦  
 (“無理は通すもの”)

『擬態とマーキングを行うネウロイか．．．』

司令室で腕を組みをし、真剣な表情でそういうラル。

豊かな胸が強調され、見そうになるのを顔を背けて

耐え、話の続きを盗み聞きする。

『営倉もやられたわ．．．貯蓄がなくなるのは厳しいわね。』

『私がネウロイを仕留めていれば．．．』

気負った表情でしゅんと顔を下に向けて

落ち込むサーシャ。

どうも彼女は真面目過ぎて背負いすぎ

きらいがある。

彼女の前に出て、笑わせたかったが

踏みとどまって行く末を見守る。

．．．マーキングするネウロイか。

地点を割り出せば大体のことはわかる。

おそらく、次にマーキングするのは基地の近くだろう。連絡網と補給線を断ち、とどめを刺す。

実に合理的だ。

マーキングしに来るネウロイを仕留めればいい。

それだけのはずだったが、気にかかることがあった。

(・・・なんだ、この予感めいたものは。)

数十年にわたるネウロイとの戦いの記憶が

俺に警報を鳴らしている。

何だ。

一体何を見落としている？

そして、気が付く。

・・・。

前回までの襲撃地点とずれがあることに。

本拠地を狙うのも確かに考えられる。

だが、これだけ戦略的に攻撃できる

生命体が対策されている、と考えていないはずがない。

切り札として持っているあるものに

視線を落とす。

使うかどうか迷っている

頭の中にサーシャとの思い出が

ふいに蘇ってきた。

食堂で、彼女は俺に話してくれたときの事。

——『私、昔はこの辺に住んでいたの。』

そういう彼女の顔はどこか悲しそうで、

——どこか嬉しそうだった。

サーシャの思い出の街、か……。

◆  
ぎゅつと切り札を握り締める。

ジョゼ、定子、直枝、ヴァルトルト、ロス達は長距離砲撃をおこなっているネウロイを仕留めに行った。

そして、その砲撃しているネウロイに

場所を教えているネウロイを探して

倒す役割が、ひかり、ニパ、サーシャだった。

このに向かつて砲撃するつもりなら

この街のどこかにいるはず。

彼女たちに見つからないよう

街中を飛んでいると、彼女たちの

叫び声が聴こえてくる。

『い、いたー!!』

『逃がさないっ!!』

擬態していたネウロイを追うひかりとニパ。

位置情報を二人から教わったのかサーシャも

合流してきた。

少し離れた場所から双眼鏡で覗くと、

善戦しているのが見える。

(向こうは問題なし。・・・願わくば、

ヴァルトルートたちの方も上手くいっている

いいんだが・・・)

今頃、砲撃をしようとしているネウロイを

倒そうと戦っているはずだ。

心の中で無事を祈りつつ、双眼鏡で

サーシャたちを見ていると、ネウロイが

何か赤い光を発し、コアを撃ち抜かれて

消えていく。

・・・マーキングされた!?

ということは。

ヴァルトルートたちが向かった方向に

双眼鏡を向けると、何かがこちらに

向かってくるのが見える。

間に合わず、砲撃されてしまったようだ。撤退しようとするサーシャ。

それに続くひかりとニパ。

賢明な判断だ。

わざわざ食らう必要もない。

だが、そこで何を思ったのか

ニパが引き返してネウロイの

砲弾に一人で立ち向かっていく。

自分の見ているものが信じられず

呆然とする。

そして、シールドで防ぎ切った

ニパは地面へと墜ちていき、

サーシャに介抱される。

・・・そうか。

ニパ、サーシャのために。

無事だからこそよかったものの、

良くも……。

泣いているサーシャと

そんな彼女に微笑むニパ。

こちらの戦いは終わった。

あとは俺の仕事だ。

先ほどのマーキングしているネウロイが

いたところから2キロほど離れた場所に行く。

そして、そこにそいつはいた。

同じ種類のネウロイが。

擬態はしていても俺にはわかる。

—— 『あのね。あそこの建物におばあちゃんと一緒に行ったの。……』

ふふふ、こんなこと話すのってなんだか不思議。』

—— 彼女との思い出を、忘れるわけではない。

てっぺんにくつついているネウロイをプラスチックで掃射する。擬態を解き、逃げ始めるネウロイ。

それを追撃し、ワイヤーを射出して

動きを止める。

人相手ならともかく、ある程度の大きさのある

ネウロイなので、その拘束は一瞬だった。

だが、その一瞬が在れば片はつく。

もがいているうちに外殻を剥がしていき、

拘束が溶けたのと同時にコアを撃ち抜いた。

霧散していくネウロイ。

が、一手遅かった。

飛んでくる砲弾が見える。

あと10秒で彼女との思い出の場所に

着弾する。

シールドを貼れない俺は、ニパみたいに

無茶ができるわけもない。

だということになぜだろうか。



俺は自然と砲弾に突っこんでいく。

そして、隠し持っていたそれを起動させ抜刀する。

——ネウロイのコアは不思議なものだ。

スター・ウォーズのプラスターを

出すことができる。

ならば、剣はどうかと考えた。

マロニーが残したネウロイのデータを

元に何か作れないかと。

かくして、それは出来上がった。

一回振るえば消えてしまいそうなほど

不安定ではあったが、触れたものを

切り裂ける最強の剣。

——ライト・セイバー。

短く、黒く、小太刀のような

セイバーではあるが、確かに

それは起動していた。

おおおおおおっ!!

雄たけびをあげながら、両手で

ライト・セイバーの一種である

ダークセイバーを砲弾に向かって

振るう。

ズパンツ、という音が響き、

砲弾が真つ二つに割れ、爆発する。

その爆発に巻き込まれて吹き飛び、

地面へと叩きつけられる。

◆  
そのネウロイは歓喜していた。

ジョゼたちが倒しに行ったネウロイとは

反対の場所に隠れていた。

今まで一回も地上に出なかったの  
で司令官のラルでさえ気が付かなかった。  
ネウロイはマーキングされた場所に

砲弾を放った。  
あとは着弾点が火の海に沈むのを

待つだけ。

それだけのはずだった。

役目を終えたネウロイが隠れて  
逃げようとすると、どこからか

銃撃される。

振り返ろうとすると、

同じ個所を何度も爆撃され、

コアが剥き出しになる。

そして、襲い掛かってきた

相手を倒さんと迎え撃つ

準備をしていたが、遅すぎた。

その男は、右手に黒色の

光る剣を掲げ、近づいて

コアを両断した。



気を失いそうな状態で、右手に

持っているダーク・セイバーを

見ると、柄にひびが入り、パキインと

音を立てて割れてしまう。

……まだまだ改良の余地はある、か……。

どうやらまだ、ライト・セイバーを

振るうには早いらしい。

それよりも今は、眠……い……。

地面へと墜ちていくのも気にせず、

目を閉じて重力に身を任せる。

眼前で爆風を受け、死にそうになりながらも  
ここまで長距離飛行をしてきた。

体力がないのは明白だったが、  
こいつを放っておくわけにもいかず  
気が付いたら強行軍してしまっていた。

地面にぶつかりかけたその時、  
誰かに腕を掴まれ持ち上げられる。

「…………おつかれ。」

・・・ヴァルトルート？

柔らかな笑みを浮かべた彼女が  
俺の腕をつかんで支えていた。

な、んで…………。

「僕だけじゃないよ。直ちゃんも

先生も一緒さ。・・・さて、

治療のために行こうか。」

助けてくれたのはありがたかったが、

治療という言葉に思わず腕を

振りほどきそうになる。

だが、とてつもない握力で

腕に手が食い込むほど掴まれ、

しびれてきた。

「・・・ふ、ふふふ・・・。」

弱っている君をここで押し倒して

頂きたいなあ・・・♡・・・まあ、死なれたら

嫌だからちゃんと連れていくけど。」

「ようやく年貢の納め時か。・・・ったく、

手間どらせやがって。」

「・・・、あ、あの・・・。私のこと、

憶えている、かしら・・・?」

不穏なことを言うヴァルトルート。

愚痴を言いながらも嬉しそうな直枝。

もじもじと体をくねらせ、頬をほんのりと

赤く染めながら尋ねてくるロス。

・・・あれ、これ、逃げられない？

慢心創痕で彼女たちに連行されるのだった。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑧

“ようやく会えたな”

砲撃をしていたネウロイを仕留めて、

墜落しかけたところを彼女たちに

介抱され、治療のために連れていかれた。

治療、の言葉を聴いてガランドのことを

思い出し、体をびくつかせてしまうのは

もはや止められない。

とうとう502に連行か……。

自決用の薬はあったかな……と

連れられながらポケットをまさぐっていると、

前を歩いていたロスマンが立ち止まる。

「着いたわ。」

彼女の目線の先には、基地から

少し離れたくらい場所にある



何の変哲もない民家だった。

・・・え？

基地に輸送されると思っただけに  
考えが外れて間抜けな声ができる。

そして、木製のドアががちやり、  
中から開き、彼女が出迎える。

「・・・・・・・・久しぶりだな。」

あ。

そういつて俺たちを出迎えてくれたのは、  
502 統合戦闘航空団基地の司令官であるラルだった。

いつもの軍服・・・のだが、胸がなぜかはだけていて  
眼のやり場に困る格好である。

今までであったウィッチの中でおそらく、

一番スタイルの良い彼女のラインに見とれていると、

左右で俺と腕を組んで逃がさないようにしていた直枝とヴァルトからほっぺを脇腹に肘鉄を喰らう。

おおっ・・と少し悶絶しながらも倒れないように脚に力を入れて踏ん張る。

2人とも、自分には構え、抱け、とかわがままを

言いたい放題なのに、俺の好きにはさせてくれないらしい。

そのまま中へと連れていかれ、がちやり、と扉の鍵がロスマンに閉められる。

「．．．．」

なぜか顔を赤らめ、耳と尻尾をぴこぴこ

動かし、両手で顔を抑えている。

一体何が始まるのだろうか。

一番大きな居間に連れていかれ、

対面に置かれているソファーに

座らせられる。

隣にはヴァルトと直枝が座って

逃がさないように腕をぎゅっと組んでくる。

アーマーとマスクを外され、包帯で体をぐるぐる巻きにされる。ロスマンはちよつと離れた場所に立って、時折こちらをちらりと覗きながらも、目が合うとあわてて顔をそらす。

なんだ、これは。

わけがわからぬままに、対面のソファアに座ったラルが、足を組む。

スカートから生足が見え、思わず下半身に血液が集まる。

「……さて。積もる話も

あるが、まずはお互いの状況を  
確認するでしょう。」

きわめて冷静にそう切り出した。

・・・足を組み替え、両腕で

胸を強調する姿勢を取りながら。

横に座っているヴァルトと直枝の

ハイライトがスツと消える。

ラルがふふん、と鼻で笑ったような

気がした。

「私の名前はグンドユラ・ラル。・・・そして

その3人のことも覚えているか？」

・・・エディータ・ロスマン。ヴァルトルート・クルピンスキー。

菅野直枝。

俺の返答に満足したのか「うむ」と頷く彼女。

ある意味長い付き合いだ。彼女達とは。

「ここではないどこかの世界で、我々は共に

戦っていた。・・・そうだな？」

ああ。

彼女が言っているのはおそらく、

俺が持っている前の人生の記憶について。

501の解散後、その実績を買われて502への参加を要請された。

金額も魅力的だったし、何より

ウィッチを助けることは俺の目的に

叶っていたからこそである。

結局、その後は色々あつて再結成した

501に再び行くことになったのだが……。

502のとある作戦が終わったところで

契約は打ち切られ、またフリーになった。

そこでガランドを通して501と契約した。

……と思うのだが、ところどころ

思い出せないことが多く、部分的にしか

記憶がない。

「さて、単刀直入に言おう。」

俺の目を見据えて彼女が言った。

「私たちの元に帰ってこい。．．．とは言わん。」

その言葉に目を見開いて驚く。

てつきりそういうかと思っていたのに

なぜなのか。

そして、続けて違う提案をしてきた。

「．．．この家を貴様が使えるように手配した。

だから、その．．．」

言葉を濁す彼女。

どこか気恥ずかしそうに俯き、膝に置いた両手を

ぎゅつと握り締めている。

「．．．基地に居なくてもいい。ここにいろ．．．

．．．だめ、か？」

上目遣いの潤目でそう懇願される。

普段強気で、絶対に弱そうなどころを見せないラルの

そんな姿にギャップを感じ、心臓の鼓動が速まる。

「シッ!!シッ!!」

「あー。急に何かを刺したくなつたなー。」

「……。」

俺の隣からいつの間にか抜け出し、  
部屋の隅っこで魔力を込めた腕で

シャドーボクシングする直枝。

ヴァルトルトはどこから取り出したのか  
ナイフを右手に持ち、俺のことをじつと  
見つめている。

ロスマンはハイライトが消えた瞳で

微笑しながら指揮棒を虚空に

向かって振るい続けている。

体の震えが止まらない。

冬だからだろうか。

それはそれとして、ラルの提案に答える。

・・・条件付きで。

「……言ってみろ。」

一日に会うウィッチは一人だけで。

そういった次の瞬間、ラルに右手で首を掴まれる。

ハイライトが消えており、

俺の首をつかむ右手に力がどんどんこもっていく。

「・・・なぜだ？」

息が苦しくなりながらも、

どうにか声を出して答える。

・・・っ、二人っきりの・・・時間が

ほしつい・・・！！

毎日ここに502の皆が押しかけてきたら

それこそやばいことになる。

脱出の準備をしているのに

気づかれるかもしれない。

それに、何よりも精神的にきつい。

ラルの目をじっと見つめ続ける。

しばらくお見合いのように目を合わせ続けていたが、



恥ずかしくなったのか、ハイライトが瞳に戻り、顔をふいっとそらし、頬を朱に染めている。

「……あつ、恥ずかしかったのか。」

おほんつ、とわざとらしく咳をする彼女。

さきほどのことを見られなかったことにしたいらしい。

「……とにかく。そういうことならいい。」

「……だが、もしも。」

そういつて、俺の首元にナイフを突きつける。

「……私たち、私から離れたら許さん。」

「……いいな。」

ああ。

二つ返事で了承する。

俺の言葉に満足したのかナイフをしまい、

上機嫌で口元にうつつすらと笑みを浮かべる。

他の3人も耳と尻尾をぱたぱたと動かして

嬉しそうな顔をしている。

これでよし。

「ふむ。では、体を重ね合わせるとしようか。」

ラルの爆弾発言に部屋の空気が凍った。

いや、具体的には俺の時間だけが。

直枝とヴァルトルトは「やつとか。」、

「よいしょつと。」と言いながらいそいそと

服を脱ぎ始めている。

・・・ふあつ。

立ち上がって逃げようとすると、

後からロスに首を極められ

動けなくなる。

「動かないで。・・・ずつと一緒に

いるために必要なの・・・。

役得・・・。」

最後にぼそつと何かをつぶやきながら

恥ずかしそうに俺にしがみつくロス。

ジェットパックで逃げようにも

背中に引っ付かれてはそれもできない。

そうこうしているうちに、下着姿になり

露になった姿でぎしつと俺の膝に

乗りがかかってくるラル。

「．．．っ．．．♡」

正面から抱き着きながら、

体を震わせてこすり付けてくる。

豊満な体が俺の体に密着するたびに

柔らかな感触がむにゆりとあたり

我慢できなくっていく。

「ほらっ．．．我慢．．．するなよっ．．．♡♡」

「ね．．．♡♡僕、胸に自信があるんだ．．．♡

挟めるくらい大きいんだよ．．．♡♡」

あ・・・ぐ・・・。

そこにロスも加わっていき、

部屋全体が熱気で熱くなっていく。

「・・・わたし、ちっちゃいけど、

あなたのために尽くすから・・・」♡

う・・・あ・・・。

「忘れろ、他の女（ウィッチ）のことなど・・・。

私だけを見ろ・・・。」

「これから毎日搾り取ってあげるからね・・・」♡

「こら、ちゃんと俺のこと、見ろよ・・・」♡

本番こそしなかったものの、

彼女たちの責めは数時間に及んだ。

毎日日替わりで彼女たちが

俺に会いに来るといふ。

・・・救いとしては、

他の502の子にはばれていないということぐらいか。  
4人にむさぼられ朦朧とする意識の中  
性欲には勝てないと悟るのだった。

## 幕間　　くその頃の彼女たちは③く（アフリカと扶桑皇国）

194x年。

アフリカの第31統合飛行隊基地にて。

酒盛りをし、死屍累々のキャンプ地の中で

一人、自分がとった写真を大切そうに

眺める女性がいた。

ランプの明かりで映し出される情景。

憂いを帯びた目で、それまでに

彼女がとった写真を見ていく。

ウィッチ養成所での卒業式にて、

親友たちと一緒に撮ったもの。

扶桑海事変にて撮った激戦の記憶。

そして——。

ピンボケしていて、写真の端っこだが

確かに写っているそれをじっと見つめ続ける。

その眼には女としての情念がこもっており、

ただならぬ感情をその人物に抱いているのが

傍から丸わかりであった。

加東圭子はため息を思わず漏らした。

（……兄さん。）

心の中でどこかにいるであろう

大切な相手のことを考えていると

後から誰かの手が彼女の首に回される。

「よう。ケイ。まだ起きていたのか？」

そう尋ねるのは、『アフリカの星』と呼ばれる

エースの一人、ハンナ・ユステイナー・マルセイユであった。

びくつ、と加東圭子は体を強張らせ、慌てて

写真をしまい込む。

「あら。まだ起きていたの？」

「ちようど大きな作戦が終わったばかりだろ？」

「・・・明日は何もないし、今日はもうちよつと  
飲み明かそうかと思つてな。」

右手にビールが入った大ジョッキを持ち、

ぐいつと飲み干す。

既に酔いが回っているのか顔は赤く、

若干ろれつが怪しい。

「・・・飲みすぎじゃないかしら？」

「これくらいどうつてことないさ。・・・なあ。」

ひつく、としゃつくりをしながらハンナが

圭子に尋ねる。

「あいつ・・・。まだ見つからないな。」

「・・・」

ハンナの言葉に押し黙る圭子。

彼女が言うあいつとは一体だれなのか、

圭子にはわかつていた。



先ほど隠した写真のことをハンナに言おうか迷っていたが、圭子はやめることにした。

・・・前の人生では痴情のもつれが部隊内で起きかけた。

それもこれも、彼女の家族である男が原因であった。

その男女関係のいざこざに加わってしまった負い目があるだけに、この件に関しては

自分の胸の中にしてしまっておこうと判断する。それこそが、最も危ない判断だというのに。

「・・・そうね。でもきつとどこかで今も空を飛んで戦っていると思うわ。」

「・・・他のウィッチを助けにか？」  
むすーと拗ねるハンナ。

脳裏で件の男が自分以外のウィッチと一緒に戦っているところを想像してやきもちを妬く。

憎からず、というか実質婚約していた

相手がフラフラとどこかをほつつき歩いていると  
思うだけでいい気はしないのも当然だった。

この世界では、彼女はまだ彼に会っていないのだが、  
その思いはどんどん募っていく。

場の空気を変えるために、圭子は

別の話題を振ることにした。

「ところで、ライーサは？」

「寝ているよ。．．．寝言で、あいつの

事をつぶやきながらな。」

「うわあ。」

思わず声を出して辟易とする圭子。

それまで記憶を取り戻していなかった

ライーサはある時期から突然

人が変わったような行動をとるようになった。

誰も使っていないかった無線機で

どこかに通信を試みるようになったり。

新聞で、ウィッチを助ける謎の

怪異が出現したという記事を切り抜いては  
幸せそうにフアイリングしている。

一時期、新聞の記事を取り合っていたが、

二部とすることで二人は喧嘩を辞めることにしたのだった。

ぐいつとワイングラスに入ったワインを飲み、

ほう、と息を吐いて上を見上げる。

圭子が見上げた先には、闇夜を照らす

月が輝いていた。

「……兄さんに近いうち会える気がする。」

「……そうか。ケイがそういうならそうかもな。」

それだけ言ってハンナはジョッキにさらにビールを

注いでぐいつとあおる。

（……私のこと、守っていてくれてたのね……）

彼女は親友である穴拭智子から

兄のことを聴いていた。

月を同じように見上げるハンナ。

「……絶対に逃がさん。」

地の果てまでも追っていく。」

その顔はどこか寂しそうで、

だが、それと同時に何かを

予感して楽しみに待っている表情だった。



扶桑皇国の佐世保航空予備学校にて。

校長室から一人の女性が

校庭で訓練を行っているウィッチ候補生たちを

見つめていた。

北郷文香。

坂本美緒、竹井醇子、若本徹子の師匠であり、

雁淵ひかりが通っていた学校の教導者である。

届けられた報告書に目を通そうと

資料を見ると、ドアがノックされる。

「入れ。」

彼女がそういうと、がちやり、とドアが開けられ、一人に女性が入ってくる。

そして、彼女は驚いた顔つきで

その人物に声を掛ける。

「……敏子？」

江藤敏子。

かつて、扶桑海事変を共に戦った

彼女の戦友である。

今は軍人を退職して、

明野陸軍飛行学校周辺に喫茶店を開き、

店主をやっている人物である。

嬉しそうな笑みを浮かべると

敏子はつかつかと北郷が座っている

机の近くまで近寄る。

「久しぶりだな。」

「ああ。……何か月ぶりだろうな。」

立ち上がり、旧友の手を握り締め  
再会を祝う文香。

自信が信頼する相手の来訪を  
心から喜んでいた。

「立ちっぱなしもなんだ。座って  
話そう。」

「ん。」

文香がそういって来客用の椅子に  
座るよう言うと、二人とも対面で  
腰を落ち着ける。

「しかし、どうしてまた急に？」

親友の来訪を祝いつつも、

その行動に疑問を投げかける。

普段は飛行学校の近くで

リベリオンのF2Aバツファローで

気ままに空を飛んでいた敏子は

懐からスツと資料を文香に差し出す。

「これは？」

「読めばわかる。」

敏子に言われるまま、資料に

目を通す文香。

そして思わず席を立ちあがる。

「……あいつめ。」

持っている資料をぎゅつと握り締め、  
手に力を込めながらつぶやいた。

「全く。私たちを口説いておきながら

これだからな。」

やれやれ、といった感じのため息を

つく敏子。

しかし、その表情はどこか嬉しそうであった。

その資料の中には、501統合戦闘航空団が

ガリアに発生していたネウロイの巣を破壊した

事に関することが記述されていた。

そして、その中にほんの少しだけ  
奇妙なことが書かれていた。

『——以上が501統合戦闘航空団がガリア解放に

至った経緯である。——その後、彼女たちの証言で

全身を装甲服で身をまとい、空を飛んでウィッチを

支援していた人物がいるという情報が判明。

国籍、所属不明のウィッチと見て、501統合戦闘航空団との

関連を調査中——』

彼女の教え子であった坂本美緒が501統合戦闘航空団に

配属され、ガリア解放に寄与したことを彼女は

知っていた。

しかし、この情報までは知らなかっただけに、

驚愕の表情を顔に浮かべる。

「……一つ、聞かせてくれ。どうしてこのことを

私に？」

仲間であると同時に、恋敵でもある

江藤敏子に北郷文香は尋ねた。



直球でその真意を探る。

「そんなの決まっているじゃないか。．．．

引退しているから、ね？」

「．．．なるほど。．．．なるほど。」

にやり、と笑ってそういう親友の

言葉に二回頷き納得する彼女。

「智子からはそういった情報が時々

送られてくる。．．．傲慢のつもりだろうが、

敵に塩を送る行為だとわかっていないらしい。」

ふふふ、と意味ありげに笑い、

遠くにいる智子の顔を思い浮かべる敏子。

「．．．美緒、醇子、徹子もそろそろ『あがり』の

時期だな？」

彼女が言うあがり、それは魔力減退期に入り、

シールドを貼れなくなったウィッチの事である。

かつての教え子たちの名前を出され、

敏子が言わんとしていることが分かった文香は

一瞬躊躇し、しかし、それでも結局  
その考えに乗ることにした。

「……さて、私はコーヒーを振る舞いながら  
情報を集めるよ。……引退したウィッチが  
良く来るから、な。」

「……教え子の想い人を取るのには抵抗があつたが、  
一緒に囲い込むのなら問題はないか。」

「私たちのアドバンテージだな。現役のウィッチでは

こうはいかない。……他にも、協力してくれそうな  
引退したウィッチたちに声を掛けよう。彼の  
事を知っている人物はそれなりいるだろう。」

かくして、また一つ共同戦線が生まれようとしていた。  
後に、『ワールド・ウィッチーズ』が結成され、

ネウロイと人類の最後の戦いの最中にて、『世界で一番  
多くのウィッチと関係を持った男』として世間に  
知られる彼が、最大級の修羅場に巻き込まれるのは  
もう少し後の事である。

幕間　　くその頃の彼女たちはく番外編く　　（エイラの姉は恐ろしい）

1939年ごろの事。

かつて、とある男がスオムス独立義勇軍。

通称、『いらん子中隊』に機密扱いで

在籍していた。

その正体を知る者はウイツチと、一部の

上層部のもののみであり、男とウイツチたちの

距離は最初、近くはなかった。

だが、激戦を経て絆が結ばれていき、

確かに彼女たちと男の間に

信頼関係が芽生え始めた。

ここではない、前の人生において

彼は『いらん子中隊』に所属していたが、

今回は関わることはなかった。

陰からのサポートに徹して、彼女たちに見つからないようフォローし続けていた。

——後に、507統合戦闘航空団、『サイレント・ウィッチーズ』へと  
改変される『いらん子中隊』の戦闘隊長である穴拭智子は  
とあるウィッチに語る。

『あいつ、本当に腹が立つ。．．私より戦場で目立っていたくせに  
いつもはこそそそとしていいるし．．．どこに隠れているんだか。

．．もうっ!』

これは、そんな頃に彼ととあるウィッチがスオムスで  
出会った（再会）した話。



迷った。

さる部隊をフォローしようと

こっそり後をついて行ったところ、  
スオムスの鬱蒼とした森林地帯で

土地勘が働かず、気が付けば孤立無援に。

・・・こんなことなら、彼女たちに見つかっても  
いいから一緒に飛んでいけばよかったか。

距離を置いて追跡したばかりにこれだ。

極寒のなか、ジェットパックと火炎放射器の  
熱をちまちまと使い、体をあつためながら  
カマクラを地道に作り、退避する。

グローブをしていなかったら指がかじかんで  
壊死していたと思うほど、指がしびれて  
痛んでいる。

ジェットパックの燃料をかまくらの中で  
少し入れ、湿って燃えにくい集めた

木の枝を燃やして暖を取る。

こうしていると、あのウィッチとの事を思い出す。

いらん子中隊にこつそりともぐりこみ、スオムス戦線を押上げて、ウィッチを助けるために戦っていた時、

今みたいにはぐれて出会った彼女。

——スコップと手りゆう弾、倒木、ありとあらゆるもの、地形を活かし、ネウロイを圧殺していく彼女を最初見たときは悪魔かと見間違えた。

今回の人生では彼女はいろのだろうか。

エイラがいれば、彼女もいろはずだが果たして——。

炎に向かって両手を差し出し、

体を温めていると、近くで轟音が

鳴り響いた。

ずずん、と何かが崩壊するような音と共に、振動が響く。

何だ？と思いい外に出た俺が音のした方に向かうと、

——そこには、かつて出会った”悪魔”がいた。

寒空の下だというのに、愉快そうに地面に胡坐をかいて、酒を飲んでいる彼女。

アウロラ・E・ユートイライネン。

エイラの姉である。



この二人の関係を一言で表すなら

『対等な友人』であった。

しかし、これは彼、ボバ・フェットから

見た関係であり、当の悪魔は、

カールスラントの爆撃王のように

熱のこもった視線で彼を見ていた。

彼女はとにかく強い。

陸戦ウイツチとしては間違いなく

世界でも最強クラスの人物である。

その強さと酒豪っぷり、豪放さからか、

その美貌と性格にも拘わらず

言い寄る男はいなかった。

女としてあまりにも強すぎた彼女は

男がいたことはなかった。

当の本人は、妹であるエイラと、

そのエイラの親友であり、アウロラにとっても



第二の妹であるニパを愛でているだけで幸せだった。

——いつものように、陸戦装備を構え、

ネウロイを抹殺し、時には凍った湖を

わること怪異を一掃していた彼女は、

仕事の後の一杯を楽しんでいた。

そんな折、近くで轟音が聴こえて、

友軍が近くにいるのかと彼女は向かった。

◆ 向かった先にいたのは——。

出会ってしまった。

ルーデル、文香、ガランドと並ぶ女傑の一人に。

これ以上はもう俺のキャパを超える。

そう思つて、回れ右をしてそつと離脱しようとする、慣れない雪に足を取られ、転んでしまう。

音を大きく立てて。

すぐに立ち上がろうとする俺の後頭部にジャキリ、と音を立てて銃が突き付けられた。

「……なんだ、お前は？」

後をゆつくりと振り返ると、

こちらを警戒心しながら酒を左手で

飲みつつ、右手にもった銃を

構える彼女の姿が見えた。

「……俺のことを覚えていない？」

チャンスだ。

ネウロイと間違われないように、

言葉をかける。

「……ただの遭難者だ。そういうあんたは？」

彼女のことを知らないふりをいて、

聞き返す。

すると、目を鋭く細め、にいい、と八重歯を

覗かせて笑う。

「嘘だな。……お前、軍人かなにかだろ？」

俺が装備しているブラスターを見てそういう。

さすがに遭難した、は無理があつたか。

なら次の手だ。

銃を両手で掴んで奪い取り、遠くに放り投げる。

一瞬、驚いた表情を浮かべたかと思うと

何のためらいもなく腰にしまっていたナイフを

抜いてきた。

手の動きが見えないほどの速さで

振るわれる刃。

ところどころかすり、グローブが

傷つくが、ナイフを持っている  
右手首を掴み、膠着状態になる。

とてつもない力で、今にも押し返されそうになる。

「……はははは!!なんだ、やるな!!」

同じ軍所属のものには見えないな!!

誰だ!?!お前は!?!」

大声をあげて笑いながら手に力を込め、

俺の体を徐々に押し戻しておしていく。

酔っていて、体のリミッターが

外れかかっているのか。

押し倒される瞬間、わざと自分の

方に彼女を引っ張り、後ろに投げ飛ばす。

「おおっ!?!」

すぽん、と飛んでいき、近くの地面へと転がっていく。

掴まれた左手がしびれてまともに動かない。

ずきり、と痛む腕をかばいながらブラスターを抜き、

彼女に向けて構える。

そして、彼女はさっき俺が投げ捨てた銃をいつの間にか  
回収して、右手のもち、俺に差し向けている。

「……………」

……………」

お互いに相手から目を離さず、  
じつと見つめあう。

このままずっと沈黙するののか。

そう思っていたところに

闖入者が現れる。

背中を何者かに撃たれた。

……………っ！

被弾して、誘爆しかけた

ジェットパックをすぐに投げ捨て、

爆発に巻き込まれないように

回避する。

後を見ると、地上型の小さなネウロイがわらわらと集まっているのが見えた。

すぐさまブラスターを連射し、

数を減らすも、さきほどアウロラにしびれた左手が上手く使えず、

攻撃が命中しにくい。

逃げろっ!!

後ろにいる彼女に向かって声を掛け、

さきほど彼女が落としたものを

右手で持つ。

近くに置いてあつた彼女の酒を

自分と彼女の間に注ぎ、火炎放射器で

炎上網を作り、分断する。

これでよし。

死ぬ準備はできた。

後をちらりと見ると、

彼女が俺の顔をじっと見ていた。

・・・早くっ!!

「……………」

無言で背中を向けて走っていくアウロラ。

これでよし。

彼女はこれで生き延びる。

だが、まだ仕事が残っている。

武装はワイヤー、リストミサイル、

ブラスタター、火炎放射器。

ワイヤーで近くのネウロイを巻き取り、

引き寄せて盾にする。

しかし、そう長くはもたず

あつという間に他のネウロイたちの

集中砲火によって、盾は消え去った。

木々の間に隠れながら

ブラスタートを掃射していくも、  
遮蔽物をレーザーで壊されていき、  
隠れる場所が消えていく。

最後の砦である、一際大きな  
岩に隠れ、肩で息をしながら  
目をつむる。

・・・終わるか。

一体でも多くのネウロイを道連れに。  
そう考えて突貫しようとしていると、  
突然、ネウロイが爆発する。

・・・なんだ？

次々にやられていくネウロイ。

そして、俺の視線の先には、  
陸戦型ウィッチの装備を身にまとった  
彼女がにかつと笑いながらネウロイを  
砲撃しているのが見えた。

・・・アウロラ?!



思わず彼女の名前を叫ぶ。

「……はははは!!お前、男だったら

大した奴だな!!……ここを生き延びたら、

マスクを取って正体を見せろよ!!」

・……それは勘弁してくれっ!!

挟み撃ちの形でネウロイを撃破していく。

—— 結局のところ、3日3晩、彼女と共に

スオムスの森で共闘し、生き延びた。

正体がばれて、基地に連行され、彼女が目を離れた一瞬の

隙をつき、スオムス基地にいた他の兵士の服装を拝借し、

トラックを一台奪って逃走した。

陸戦型の装備を身につけながら、最後まで俺の

ことをあきらめずに追ってきた彼女に軽い

トラウマを覚えつつ、いらん子中隊がいる

近くまでなんとか帰ってきたのだった。



『イツルへ。元気にしているか?こっちでは相変わらず

ニパがストライカーをぶっ壊しているよ。

他にも二人、ストライカーを良く壊すウィッチがいて

今じゃ『ブレイク・ウィッチーズ』なんて呼ばれている。

・・・ああ、そうそう。お姉ちゃんなんだがな、

惚れた男ができた。・・・いや、正確に言うなら

思い出した、といったところか。まあ、こんなこと

言つてもわからないよな。そいつは面白い男だ。

私より強いかもしれないぞ。・・・引退したら

夜這いしにいくつもりだから、新しい義兄と会えるのを

楽しみに待つて居ろよ。P.S. 子供を産むなら酒は

やっぱり控えたほうがいいかな。』

エイラは信じられないものを見ていた。

501の部屋にてサーニヤが寝ている隣で

姉からの手紙を月明かりに照らして読んで

いたところに思わず叫びそうになる爆弾発言。

(・・・姉ちゃんが惚れた男つて、一体どんな

怪物なんダ・・・?)

義兄になる男がどうかモンスターじゃありませんように。

そう願う彼女の望みは叶うが、

ある意味それよりもタチの悪い

悪夢が待っていることをエイラが知るのは

もう少し先の事である。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ  
(火薬積みのメリークリスマス)

⑨

前日のけがをいやすために、

あてがわれた家のベッドで

寝ていると、通信機に

応答が入る。

枕もとに置いていたそれを

右手で取り、コードを確認すると

ニパからだった。

応答ボタンを押して、

声を掛ける。

もしもし。

『・・・あ、よかった!!つながった!!』

聴こえてくるのはニパの声。

だが、なぜか焦っているように感じる。

どうした？と尋ねると、

信じられないことを言い始める。

『・・・基地の皆が大変なんだっ!!

助けてくれよっ!!』

すぐにいく、と伝えて通信機のスイッチを切り、

装備を整えてドアを開ける。

ジェットパックを噴射して空を飛び、

502 統合戦闘航空団基地に向かう。



結論から言うと、彼女たちは

無事だった。

命に別状はなかったらしい。

ネウロイに撃墜されたのかと

思ったが、ほっと息をつく。

しかし、ニパに基地の外に出迎えられ、

歩きながら説明されたことはなかなか

厄介な出来事だった。

『・・・キノコに？』

『もう皆ずーっと笑いつばなしで・・・。

どうしたらいいのかわからなくて・・・。』

キノコに当たった。

俺ではなく、俺以外の全員が。

正確には、病気でダウンしていたひかりと

毒キノコであることを見抜いたニパは大丈夫だったが。

ニパと一緒に、部屋の外から皆の様子を見ると

そこにはカオスが広がっていた。

げひやひやひやひや、と女子からぬゲス笑いを

高らかにするヴァルト。

腹を抑えて調理室で笑い転げるロス、

定子、ジヨゼ。

あのラルでさえ、顔をゆがませて

爆笑しているところを見て、

思わずぶふつ、と変な声が漏れた。

隣にいたニパも少し笑っていた。

そう、全滅である。

そして、そんなときにネウロイ襲撃の警報が基地にけたたましく鳴り響く。

「・・・っ!!」

血相を変えて格納庫の方に

走り出すニパ。

ニパっ!! 待てっ!!

出撃しようとする彼女の

後を追う。

皆を守るためにニパが格納庫から

出撃する。

それに続こうと飛ばうとすると、

体が痛み、思わずうずくまる。

まずい。

ニパ一人だけで行かせるわけには……。

動かない足を右手で殴り、

無理やりたたき起こす。

足を引きずりながら、

背中のジェットパックを点火し

空に飛びあがる。

ふらふらと安定しない飛行だが、

それでも何とか飛んでいる。

ブラスターを震える手で構えると、

前の方でニパがネウロイ相手に

戦っているのが見える。

苦戦しているらしく、

シールドで攻撃をしのいでいる。

ブラスターの引き金を引き、

ネウロイに当てていくが、

微妙に照準がずれ、コアに当てることができない。

そして、俺の方にもレーザーが発射され、



左腕にまともに食らってしまおう。

ぐっ……。

体から力が抜け、

地面に向かって落下していく。

ここで……やられるわけ……には……。

落ちながらも、近くにいたネウロイにワイヤーを

射出し、ぶら下がることでなんとか墜落を回避する。

それを振り切らんと旋回をなんども取り、

激しく上下に動くネウロイ。

ワイヤーを手繰り寄せ、

至近距離で背中中のミサイルを叩き込んだ。

ドグオ、という爆音が響き、

耳鳴りがして何も聞こえない状況の

中、少し離れたニパの方を見ると、

懐かしい人物たちがいた。

エイラとサーニヤがニパを助けていた。

……よ……か……つ……た。

落ちていく中、こちらを驚愕の表情で見ているサーニヤと目があつた気がしたが、今となってはわからず、意識はそこで途切れた。



体の節々が痛く、動かすだけでうっ、とうめく。

何だか後頭部に

柔らかなものが当たっている気がする。

意識が覚め、目を開ける。

素顔の俺の顔を愛おしそうに

なでているサーニヤの姿見えた。

「…………おそよう。」

……ああ。

かつて、交わしたあいさつに対して

そっけなく返事をする。

そうか、俺は……。

「502まで補給物資を届けに来たの。

……パーティーが終わったから

抜け出して、ボバを探しに来たの。」

……俺はどのくらい寝ていたんだ？

「落ちたときから大体、丸一日くらい。」

思っていた以上に長く眠っていたことに

絶句する。

そういえば、502の皆はどうなったのだろうか。

そんな俺の心中を察した彼女が

優しげに言う。

「皆、無事だよ。……エイラも夜まで楽しんで

ぐっすり寝ていたし。」

その間、ずっと俺を介抱してくれていたのか？

だんだんと目がさえていき、

あたりを見回すとどこかの民家で

あることがわかつてきた。

近くには暖炉があり、

火がパチパチと燃えている。

「この街は誰もいなかったから……。

治療するためにちよつと借りたの。」

俺の体を支えてここまで飛んできてくれたのか。

途中で抜け出すと不自然だから、

パーティーが終わった後にわざわざ。

ぼた、ぼた、と何かが顔に垂れる。

彼女の顔を見ると、泣いていた。

「……死んじゃうかと、思ってた。」

ぐしゅ、と腕で顔をぬぐい、

涙をふくサーニヤ。

今回、彼女には命を助けられた。

病んだ目で追い回されるのはごめんだが、

さすがに礼は言わないと。

ありがとう。サーニャ。

「……ん。」

にこり、と微笑まれた。

「……とこころで。」

ん？

急に話題を変える彼女。

一体どうしたのだろうか。

「何でボバがここにいるの……？」

ハイライトが消えた瞳で、俺の顔を

右手でアイアンクローしてくる。

メキメキメキヨツと骨がきししみ、

思わず苦悶の声をもらす。

っ……いだあああっ!!

「ねえ。なんで？なんで？なんで？

どうして私の傍じゃなく、

502なの？なんで？なんで？」

壊れた機械のように何度も

同じ言葉を繰り返す彼女。

頭蓋骨が陥没しかけ、

意識が朦朧としながらも

彼女に向かって必死に叫ぶ。

・っ、ぐ、偶然っ・っだっ！！

やましいこととかはないっ！！

俺の言葉にすつと目を細め、

アイアンクローを辞める彼女。

助かった・・・？

ほつとしていると、

体の匂いをすんすん、と嗅がれ、

今度は爪で顔を引っ搔かれる。

・っ!?

「……他のメスの匂いがする……。」

がりがり、がりがり、と顔や

体中を爪で引つ掻きまわされ、

傷が増えていく。

一体何を言つて……。

その時、先日の一仕事を思い出す。

脳裏に浮かぶ、ヴァルトルート、直枝、

ロス、ラルとの情事。

……あ。

心当たりがありすぎるだけに、

体を震わせる。

「……ねえ。」

俺の目をじっと見つめながら

しゆるしゆる、と服を脱ぐサーニヤ。

「・・・私にも、同じか、

それ以上のこと、して・・・。」

お願いではなく、命令。

弱った体では抵抗さえできず、

彼女に押し掛かれ、首元にキスされる。

「・・・ん・・・♡」

頬を舐められ、体をすりすりところすり付けられる。

彼女の匂いで体が満たされていき、

頭がぼうつとしてきた。

「・・・全部、全部わたしのもの・・・♡」

わたしのものなの・・・♡」

顔ががちりと抑えられ、

口の中をペロペロと舌でなめられていく。

行き場を失った両手を彼女の

背中でわななわと動かしていると、

彼女にじっと見つめられる。



抱きしめろと言っているようだった。

脳裏に浮かぶのは、あの4人の姿。

以前おこなった情事を思い出し、  
手が止まる。

ここで手を出せば俺は——つ。

そして、理性を溶かす

悪魔のささやきが耳元で告げられる。

「・・・本番以外なら、

何してもいいよ・・・?♡」

・・・っ!

その言葉に耐え切れず、最後の

一戦を自ら超える。

がばり、と彼女に覆いかぶさり、

抱きしめる。

「あっ・・・♡」と嬉しそうな声で

俺の背中に両手をまわすサーニヤ。

「もつとぎゅつとして・・・♡♡♡

離さないでっ・・・♡♡♡」

暖炉の火がぱち、ぱちと燃える中、

俺と彼女は長い時間を共に過ごした。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑩

“(またな)”

「……ぎゅつとしてっ？」

俺があぐらをかいているなかにすっぽりと  
収まる彼女。

とろけ切った笑みを浮かべる  
彼女を背中からそっと抱きしめる。

一瞬、直枝の顔が浮かんだが  
すぐに振り払い、今は彼女のことだけを考えることにした。

体をすりすりと背中からすりつけてきて、  
首元にキスされる。

彼女はよくこうしてくる。

まるで猫のマーキングみたいである。

腰に回している両手を掴まれ、

そのまま胸に持つていかれそうになるのを  
押しとめると、不服そうな表情で見つめてくる。

「……遠慮しなくていいのに……。」

いや、それはまずい。

俺がそういうとハイライトが消えた  
瞳でぼそり、とつぶやく。

「……あんなことしておいて？」

う……。

ほんの先ほどまでのことを

思い出し、顔が熱くなる。

それは俺だけではなく、

彼女も嬉しそうに顔を

赤らめている。

「……私とのかつことを想像して、

恥ずかしくがつてくれた……。うれしい……。♡」

また、すりすりと頭を胸元にこすりつけられ

甘えられる。

ここまでストレートに愛情を注がれると

気恥ずかしく、彼女を引きはがしたい

気持ち湧いてくる。

彼女の両脇に両手を滑り込ませ

抱っこし、そのまま反対方向に向きを変える。

お互いの顔が見えるようになり、

彼女が甘えるような声を出しながら

首元に抱き着いてきた。

「……んー……」

……。

一体、いつまで続くのだろうか。

いい加減ラルにあてがわれた家に戻らないと

不味い気がする。

それに、サーニヤもそろそろ帰らないと

エイラが心配するはずだ。

・ ・ ・ サーニヤ。エイラが心配するだろうから  
そろそろ帰ったほうがいい。

「 ・ ・ ・ もうちよつと ・ ・ ・ 夫婦の時間 ・ ・ ・ 。」

完全に出来上がっている。

伯爵や芳佳でさえここまで甘えてくることは  
なかった。

しかたがないので、自分の首につけているペンダントを  
外して、彼女の首につける。

それをやるから今日は帰れ。 ・ ・ ・ いいな？

「 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 。」

俺からもらったペンダントを右手に掲げて

むふー、と息を吐く彼女。

どうやら気をそらせたようだ。

そのまま彼女の背中を押して、部屋の

外まで送る。

・ ・ ・ そういえば、ストライカーは？

彼女にそう聞くとこの上なくいい笑顔で

言われる。

「・・・そりで来た。」

サンタコスが似合っているだけに、想像して思わず笑ったのだった。



ここまでで、大丈夫か？

「・・・一緒に来てほしいな。」

それは駄目だ。・・・いや、まてまてまて！

サーニャが嫌いというわけじゃない。

どこに持っていたのか俺の首に

軽機関銃を突き付けてくる彼女に

あわてて弁明する。

ここの戦線が落ち着くまで、

離れる気はない。・・・例え、

お前の頼みでも。

「・・・。。。」

じーっと俺の目を見つめてくるサーニャ。

今回の人生で再会した時と同じ、  
深淵を思わせる暗い瞳だった。

「……さすがに無理か？」

かくなる上は……、とジェットパックで  
逃げようと体重を後ろにかけていると、  
彼女の目にハイライトが戻る。

「……わかった。でもね……」  
うおっ。

正面から飛び掛かれ、口元に  
キスされる。

唇がすぐに離れる。

「……私、本気だから……」

あなたがいれればいいから……」  
そのまま基地の方まで走り去っていく。

完全にしてやられた。

まさかこんな……」

さきほどまでつながっていた



唇に右手で触る。

心臓の鼓動が速まっていき、

ぐらりと視界が揺れる。

・ ・ ・ 危うく惚れそうだった ・ ・ ・

というか、ほとんどのウィッチに

惚れて居そうな ・ ・ ・

自身の気の多さに戸惑いながらも、

鬱屈とした気持ちを抱えたまま

家に戻るために足を動かす。

そして、3歩歩いて気が付いた。

自身の体から放たれる

サーニヤの匂いに。

どう考えても男ではなく

女の香りだった。

・  
・  
・

全速力で走って家に帰り、  
シャワーを浴びた。



「サーニャ、忘れ物はないか？」

自身の大切な親友にそう声を掛ける  
エイラ。

補給物資を502に届けて、

自分たちの基地に帰る準備をしていた。

「……ひとつだけあるけど、

今はまだ大丈夫。」

「?まあ、サーニャがそういうなら  
いいけど。」

怪訝な顔をしながらも、

放っておいていいと判断したエイラは  
輸送ソリのエンジンを点火する。

「それにしても楽しかったナー。」

ニパにも会えたし。」

「うん……。」

エイラはクリスマス・パーティーのことを、

サーニャはとある男との情事を思い出し

微笑む。

旧友に会えて喜ぶもの。

夫(サーニャ視点)との再会に

喜ぶもの。

さまざまだったが実り多き

日であったのは間違いなかった。

「ありがとうございました!!」

「おかげで助かったぞ。必ず

ネウロイの巣を破壊して見せる。」

元氣いっぱいにお礼を言うひかりと

不敵に笑みを浮かべるラル。

他のウィッチたちも皆、二人を

見送るために並んで立っていた。

「じゃあナー!!元気でナー!!」

「・・・ばいばい。」

『またねー!!』

『ありがとうねー!!』

『また一緒に酒飲もうぜー!!』

飛び立つ二人の姿が見えなくなるまで

見送る502の面々。

そして、その姿が本当に

消えてしまうまで、彼女たちは

立っていた。

「・・・あれが、ガリアを解放したウィッチ。」

「・・・できるかな、私たちにも。」

「ふん。できるできないじゃない。・・・やるだけさ。」

そういつて一足先に基地の中に戻っていくラル。

その後が続いていくウィッチたち。

かくして、501と502の最初にの顔合わせは

穩便に終わった。

——この後、再び彼女たちは

とある大戦において何度も邂逅

し、キャットファイトすることになるのだが、

それはまた、別のお話。



サーニャは凍った湖の上を

ストライカーユニットで

飛び続けていた。

思い出すのは昨夜の事。

エイラでさえ知らない

二人だけの秘密。

二人だけ。

そう考えるだけで

彼女は上機嫌に鼻歌を歌う。

そして、彼女の視界にとあるものが写った。

この寒空の下、白い息を吐きながら、少し離れた場所から両手を振って何かを叫んでいる男の姿であった。

その叫び声は奇跡的に

サーニャにだけは聞こえた。

・またなー!!

包帯で全身をミイラ男のように

巻いて、ボロボロの姿で見送っている

彼の姿を見て、思わずサーニャはくすりと笑った。

と笑った。

「・・・ばか。」

「?何か言ったか?」

「ううん。・・・なんでもないよ。」

そうして、彼女たちは再び

彼と別れる。



いくらなんでもバカ過ぎた。

毛布にくるまりながらベッドの上で震える。

時折、ぶえくしゅ、とくしやみが

出では悪寒がして気持ち悪い。

今日、俺と二人つきりで会う予定の

ロスマンに最初にかけてられた第一声は、

「だ、大丈夫!?!」という彼女らしからぬ

焦った声であった。

完全に風邪を引いた。

そりゃ、重症なのに寒空で

両手を振ってぴよんぴよん跳ねて

大声を出してあげればこうなるか。

自業自得であったがサーニヤが

笑ってくれたならまあいいか、と

寝っ転がる。

「できたわよ。．．．はい、あーん。」

いや、自分で．．。

「……。」

食べさせてくれ（早口）

断ろうとすると、スツとどこからか

首輪と教鞭を手に持つロス。

首輪を見ているだけで寒気がしたので

快諾した。

口を開けると、彼女がスプーンで

スープを掬って俺の口に入れてくる。

「あ、あの……。おいしい……。かしら？」

ああ。

「~~~~♡♡そ、そう……。♡♡」

冷静にふるまおうと表情を取り繕っても、

耳と尻尾がものすごい勢いで動いている彼女。

一通り食べさせてもらい、眠くなってきたの

横に寝っ転がる。

すると、なぜか彼女が毛布の中にもぞもぞと

入り込んでくる。



・・・ロス？

「・・・うれしい。」

彼女の顔を見ると目から涙を流していた。

「もう会えないと、思っていたの。」

・・・でも、こうして、また会えて・・・

私・・・私・・・。」

胸元に顔をうずめてぐずぐず、と泣いている。

そうか、そんなに彼女は・・・。

ぎゅつと彼女を両手で抱きしめる。

「・・・。。。」

ん？と声が漏れる。

急に泣き止んだ。

どうしたのか尋ねようとすると

彼女が胸元から顔をあげて

俺と目を合わせてくる。

ハイライトが消えた瞳で。

「・・・どうして、あなたから

女の匂いがするのかしら……。」  
あつ、と声漏れる。

……匂い落ちなかつたかあ、と。

こ、香水だ。

震える声でさういう。

幸い、サーニヤからもらつた

香水が本当にあるので、それを

取り出して彼女に見せる。

「……本当に？」

本当に。

嘘は言っていない。

俺はただ、この香水の匂いだ、と

言つただけである。

一瞬にも、永遠にも思える沈黙が

俺と彼女の間に流れる。

「……いいでしょう。信じます。」  
許された。

心の中で両手をあげて万歳していると  
続けて言われる。

「……でも、その匂い。私、

好きじゃないわ。私と同じ

おそろいのをつけましょう。」

そういつて香水を

差し出してくるロス。

えっ。

これを変えるとサーニヤに怒られる。

しかし、今変えると言わないと

ロスに刺される。

胃が痛くなりながらも、しぶしぶ

持っていた香水をしまう。

そして、彼女が持っている香水を

胸元に軽くかける。

彼女が再び俺の胸元に顔をうずめ、

すんすん、と匂いをかぎ、

顔をはがすと恍惚とした表情になっていた。

「……おそろい。カップル。……夫婦？」

……夫婦……♡」

えへへ、と笑いながら

抱きしめられる。

……サーニヤに会ったら死ぬかもしれない。

結局、サーニヤの香水を捨てることもできずに、

ロスマンの香水も受け取るのだった。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ ⑪  
“いつから?”

502 統合戦闘航空団基地に呼ばれた。

いや、呼ばれた、というよりは

司令室の隣で聞き耳を立てていてほしい

といった変なお願いだっただが。

まあ、他のウィッチたちにばれないだろうから

安心だが。

最近、街を歩いているだけでジョゼ、サーシャあたりと

出会いそうでおちおちゆっくり散歩もできない。

傷をいやして、暇と言えば暇だったので

渡りに船だった。

なぜか中身がないマカロンを食べながら

隣でラル、サーシャ、ロス、ヴァルトルートが

話してる内容に耳を立てる。

そして、その中のあるワードに思わず  
持っていたお菓子を落とす。

『・・・ウォーロックか。このような計画があつたとはな。』  
ぶふう、と食べていたお菓子を吹き出す。

『?何か音がしなかつたかしら?』

『い、いや?なにもー?』

いぶかしむサーシャに対してフォローしてくれる  
ヴァルトルト。

・・・彼女には後でお礼を言っておこう。

『しかし、結局は暴走。そのつけを501が  
払うこととなつたか。』

あれは未完成の兵器だった。

それでも、戦局を変えるのに  
十分な力を持つていた。

もし、量産されていたら

ウイツチは完全にお払い箱に  
なっていたかもしれぬ。

かつての激戦の記憶が

脳裏によみがえり、胸の古傷を

思わず抑える。

『・・・今回の民間船護衛に積んであるもの。

これで何かが大体わかったな。』

民間船の護衛。

安全な航路なのになぜ、護衛を彼女たちに

依頼していたのがようやくわかった。

『・・・サーシャ。今のうちに

ストライカーの整備を手配してくれ。

激戦が予想される。』

『了解。』

そういつて部屋から出て行くサーシャ。

きわめて自然な形で人払いしてくれた。

彼女がいなくなったのか確認するため、

ドアをそつとあけて顔だけ覗かせる。

どうやら本当にいなくなったらしい。

司令室の中に入ると、

ロスマンが入り口のカギを

かけているのが見える。

「・・・さて。これが今回の

我々の作戦内容だ。ヴァルトルートが

他の3人を選出し、お前にはその

サポートに陰から徹してもらいたい。」

真剣な表情でそういわれる。

ああ。

何の条件も聴かずに二つ返事で了承した。

どうでもいい相手ならともかく、

501や502の皆のためなら、ついお願いを

聴いてしまうのだった。

「ねえねえ。さっきの僕のフォロー、よかった？

・・・ほめて？」



・・・ヴァルトルトかわいい。

「わーい♡」

ぎゅーつと正面から抱き着いてくる。

彼女の方が背が高く、男のプライドが

ずたずたにされながらも、抱擁し返す。

真剣な空気をぶち壊すヴァルトルト。

青筋を若干浮かべて静かに怒っているラル。

「・・・さっさと離れろ。」

あ、ああ。

「・・・っち。」

舌打ちしながら離れるヴァルトと、

すぐに離れる俺。

ロスもちよつとざまあみろ、といった

感情が顔に出ている。

・・・女って怖い。

牽制しあう三人に挟まれながら、

作戦の内容を詰めていくのだった。



司令室で遅くまで3人と話し込み、眠くなつたので基地の屋根で寝ていると、発砲音で目を覚ます。

何だ、と思ひ下を見ると

ヴァルトが真剣な表情で

銃を両手で持ち、的を狙っていた。

正確な射撃で人型の的に

銃弾を当てていく。

『……こつそり皆に隠れて練習するなんて、

見栄っ張りね。』

『……先生。』

ヴァルトとロスが何やら話し込んでいた。

彼女たちにばれないように

こつそりと話を盗み聞きする。

『……私たちはもう、長い間空を飛んで

戦っているわね。』

『ヒスパニア怪異からだから、そうだねえ。』

話しながら器用に的を撃ち抜くヴァルト。

いい腕をしている。さすがである。

『・・・あの3人にもつと経験を積ませたいわね。』

『僕たちが飛べるうちにねえ。・・・とはいっても。』

急にヴァルトが銃を降ろし、

そして俺の方に向けてきた。

ちよ。

『・・・降りてこないと撃つよ?』

『盗み聞きはよくないです。』

観念して二人の前に姿を出す。

彼女たちにはばれずに盗み聞きしようなんて

無謀すぎたらしい。

屋根から降りて、地面に降り立った。

・・・悪かった。

「明日、一緒に寝てくれたら許すよ。」

「・・・明後日は、私ですから。」

そういえば、明日はヴァルトで明後日はロスだった。ばれないように脱出の準備は進めているが、直枝やラルもよく来るので少しずつしかできていない。

グリゴリー作戦はそろそろ終わりを迎える。それまでに抜け出せなければ・・・。

『引退したぞ。よし、籍を入れる。』

『僕、良妻になれると思うよ・・・？』

『子供の世話は任せてください。・・・』

あなたの子供なら、きつとかわいいです。』

『・・・大切にしないと、ぶっ飛ばす・・・。』

脳裏に浮かぶ、ウエディング・ドレスを来て満面の笑みを浮かべる彼女たち。

ラル達4人だけでなく、ニパ達にも

一生いるように迫られるかもしれない。

手の震えを隠しながら話を

続ける。

二人とも、ヒスパニア怪異から飛び続けていたのか。

「うん。1936年からだからもう8年以上経つんだねー。」

「時がたつのは早いわね。」

そうか、俺がガランドと出会ったあの出来事に

二人もかかわっていたのか。

さすがにそれは知らなかったの

思わずへえ、と声が漏れる。

「………とところで、君はいつから

飛び続けているんだい？」

え？

まさか、自分のことを聴かれるとは

思っていなかっただけに間抜けな声が出る。

「私も知りたいわ。………少なくとも

私たち以上でしょうし。」

ロスも興味深そうに聴いてくる。

ああ、実は……。

そこまで言つて考える。

もし、素直に「1914年の第一次ネウロイ大戦から飛んでいる」と言つたらどうなるのか。

『今すぐ引退しよう。僕が一生養つてあげるから。』

ああ、二度と戦わなくても大丈夫だよ。僕が

ずっとずっとずっと守つてあげる。』

『へえ……。私たちのことを心配するのに、』

自分はそんな昔からボロボロになつていたんですか……？

……やはり首輪をつけて、二度と私の

傍から離れないようにしたほうがいいですね……。』

ハイライトが消えた瞳でそういう二人の

姿がありありと浮かんだ。

・・・ちよ、ちよつと昔から。

「……………」

「……………」

じいいつ、と二人に見つめられる。

本当のことを言え、とプレッシャーを

かけられているようだ。

だが、見えている地雷を踏む必要はない。

誤魔化すために、練習場においてある

射撃銃を手取る。

なあ、二人とも賭けをしないか？

俺がそういうとハイライトが戻る二人。

「賭け？」

ああ。・・・もし、2人のうちどちらかが

俺より正確に的に当てられたら。

射撃銃を的に向かって構え、引き金を引く。

パン、という発砲音が響き、

的の真ん中に穴が開いた。

——何でもいうことを聴く。

眼が据わって、耳と尻尾が出るロスとヴァルト。

「……本気で言っているの？」

「……いくらあなたでも。」

勝てる気がしないか？

「まさか。」

挑発に成功し、話題をそらせた。

ぐつと右手で小さくガッツポーズする。

「どうやら、今日が僕と君の結婚記念日に

なりそうだ……♡……あ、指輪はあとで

おそろいのを買いに行こうね……♡」

「ふふふ……♡金属製の首輪を

買って賤けてあげますからね……♡」

自信満々にそういう二人。

手をグーパーで開いたり閉じたりして

傷の癒え具合を確かめる。



・ ・ ・ 二人とも、悪いな。

「？」  
「？」

そういう俺の言葉に首を傾げる彼女たち。

◆  
—— 銃で俺に勝てる奴はいないんだ。

民間船の護送任務のことを考えながら  
ラルは基地の中を散歩していた。

彼がいる。

それだけで不思議と彼女は安心していた。

誰も死ぬことはないだろうと。

そして、射撃場から発砲音が聴こえて、

そちらに向かって歩を進める彼女。

彼女が見た先には、腰を抜かして

幸せそうな表情で何かを見ているヴァルトと、

心ここにあらずと言つた顔つきで立ち尽くすロスマンの姿があつた。

そして、その先には近くに置いてあつた練習用の銃で撃ち抜かれ、穴が開いていた人型の的があつた。ただし、転がつている薬莖が10個以上に対して、その穴はど真ん中に一つだけ開いていた。

「……は、はは……。ますます、惚れちゃつた……。♡」

「……こんなことが、ありえるの……?」

10発撃つて、1発だけ当てたわけではないことをラルは即座に見抜いた。

それはすなわち——。

「……腕は落ちていないようだな。」

すでにここにはいない彼のことを

思い浮かべながら、ぶるりと体を震わせ

彼女は笑つた。

——1発目で開けた穴に向かって残りの弾を

全て通したということであつた。

「……ちゅー、しろ……♡」↑今日、自分の番だったのでウキウキでやってきた直枝。

(忘れていた……。) ↑勝負が終わって、後は寝るだけだと思っていた。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑫

「嘘だろ?」

民間船の護衛に任務に陰ながら同行することになり、

家にて空を飛ぶ準備をしていたところ、

ドアノックされる。

はい?と声を掛けながら

ドアを開けると、そこには

ラルが立っていた。

「……………」

しかし、何かの余韻に浸っており、

黙っている。

ラル?

俺の呼び声に反応した彼女が

ハッと気が付き、思わず咳払いする。

「……ん。なんでもない。……あがるぞ。」

ああ。

彼女と自分の分のコーヒーを淹れ、  
テーブルの上に置く。

暖炉の火がパチパチと音を立てて  
燃える中、彼女と俺は

椅子に座る。

「……ふふふ。」

突然笑い出すラル。

一体どうしたのだろうか。

「いや、なに。……まるで通い妻だと

思ってたな……。」

思わず飲んでいたコーヒーを

嘔き出しそうになる。

不意打にもほどがある。

だが、思っていた以上に恥ずかしかったのか  
自分で自分の言葉に身を悶えるラル。

「……い、今のは忘れる。……おほん。」

普段は真面目なのに、俺といると  
なぜかこんな状態になる彼女に若干  
ドキドキしながら話を聴く。

「先日、命令があつた民間船の護衛だが。」  
ああ。

やはりその件で来たのか  
と納得がいった。

やはり、俺も彼女たちの  
後についていくのだろうか。

「・・・お前だけ、別ルートで  
現地合流してもらいたい。」  
え。

持っていたカップをテーブルの  
上に置き、先ほどの言葉を  
反芻する。

予想していた計画と早速  
食い違つてきた。

「今回のメンバーはヴァルトルート、

菅野直枝。ニパ。．．．そして雁淵ひかりだ。」

．．．ああ。

思わず手をぼん、と叩く。

ヴァルトルートと直枝は俺のことを

思い出しているからいい。

だけど、ひかりは俺のことを知らない。

記憶が戻っていないのに俺との接触は

しないほうがいいと伝えてくれたのか。

今、思ったことを彼女に伝えてみると

うむ、と頷かれる。

．．．本当はニパも俺のことを

思い出しているが。

「その通りだ。．．．私は、ニパか先生を

連れて行けば一緒に行けるといつたんだが、

ヴァルトルートは雁淵に経験を積ませたいと

言つてな。」

そういえば昨夜、そんなことをぼやいていた  
気もする。

彼女はだらけていて、仕事はちゃんとする  
人物だ。

・・・その真面目さをもうちよつとくらい

俺との付き合いいで発揮してくれてもいいんだが。

おおむねのことは分かったので、

了承の意を伝える。

「うむ。仕事の話は以上だ。・・・ところで。」

コーヒーをせず、と飲んでいると

話を切り替えられる。

ん？と上目遣いで彼女を見ると、

あつけらかんと言われた。

「いつ、私と一緒に寝るんだ？」

今度こそ盛大にコーヒーを噴いた。





ラルの爆弾発言を頭の中で

思い出しつつ、どぎまぎしていると、

通信機に連絡が入る。

『……こちら、ラル。……そちらは順調か?』

ああ。今のところは。

あたりを見回してそう彼女に伝える。

一人用のボートをワイヤーで引っ張りながら、で約1000キロの

道を進むことにした。

飛び疲れたらボートの中で休み、

回復したらワイヤーでボートを吊るし、

また飛ぶ。

簡単な作戦で、費用もかからない。

上手くいけば今日の夜には現地につく。

『うむ。ならいい。何かあったら言ってくれ。』

ああ。．．．ん？

少し遠くの雲が怪しい。

何というか、まっすぐにこちらに

向かってきて．．．。

おおおおおおっ?!

先ほどまで快晴だった空が暗雲に包まれ、

嵐になった。

ちよつと待て。

これはいくら何でも．．。

『．．っしたっ?!．．．とうしろっ!!』

雨音で彼女の声が聴こえない。

何か言っているラルに返事を返そうとすると、

ピカッ、と雲が光る。

へ、と間抜けが声が漏れ、次の

瞬間に意識が消える。



「あーっ」

506 統合戦闘航空団基地にて。

ロザリー・ド・エムリコート・ド・グリユンネは  
自分のカツプがわれたことに気が付いた。

「お?」

31 戦闘飛行隊基地にて。

ハンナ・ユステイナ・マルセイユは  
自信がつけていたゴーグルにひびが入っている  
ことに驚いた。

「・・・む。」

カールスラント前線基地にて。

ハンナ・ウルリーケ・ルーデルは  
とある男からもらった手首につけている  
青いリボンがぶち、と切れてしまったことに  
苛立った。

「ん?」

佐世保航空予備学校にて。

北郷文香はとある男から

送られた本のページが  
抜け落ちてしまったのを

訝しむ。

まさか、ここにいる誰も、

その男が今雷に打たれているとは

思いもしないであろう。



「……遅いなー。」

そういつて、港にある基地の

一室にてとある人物を待つヴァルトルト。

心配そうに窓の外をちらり、と

眺める。

「……あいつに何かあるわけないだろ。」

そう虚勢を張りつつもそわそわする菅野。

視線もどこかせわしない。

2人とも、合流地点に先につき、

打ち合わせ通り雁淵ひかりにばれないよう

こっそりと合流するつもりだった。

だが、予定の時間になっても

現れないのでおかしいと二人は感じた。

そんな二人がいる部屋がノックされる。

彼か？

そう思つてヴァルトルトが上機嫌で

ドアを開ける。

「失礼いたします。」

しかし、件の人物ではなく、

単なる一兵卒の軍人だった。

小さくため息を吐くヴァルトルト。

「502のグンドユラ・ラル少佐殿から

入電が……。」

へ？と二人は顔を見合わせた。

◆

あ、やばいやばいやばいやばい。

嵐の中、転覆したボートにしがみつき、



それでもようやく目的地に着いた。

そう思つて周りを見渡すと、

やけに閑散としていることに気が付く。

・・・あれ？

そして、嵐が収まり、

上を向くとそこには真ん丸の

太陽が俺をあざ笑うかのように

照り付けているのが見える。

ダラダラ、と冷や汗が体中に流れ、

唇が渴く。

船もない。

誰もいない。

つまり・・・。

・・・ぬおおおおつ!!

彼女たちが向かったであろう

先にジェットパックで飛び、  
全速力で推進する。



「……………」

ぶすー、とした顔で飛び続ける菅野。

「……………ふんだ。」

怒っています、と言わんばかりに

頬を膨らませるニパ。

「……………どこ行つたのさあ……………」

若干涙声でよろよろと飛ぶヴァルトルト。

「……………ええ……………」

朝からおかしい3人の様子に一人

困惑するひかり。

現地にて合流するはずだった彼が

行方不明になった。

昨日ラルから聴かされた情報は

彼女たちのモチベーションを



大きく下げた。

・・・それを伝えたラル本人も

大分焦っていたが、ひかりは知らない。

「(・・・うう、私が頑張らなくっちゃ・・・!!)」

元気がない3人の代わりに自分が・・・。

そう気負うひかりだった。

あああああ!!全然追いつけん!!

3人に殺されるううううっ!!

大声で空を一心不乱に飛ぶ

不審者の姿があつたとか。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑬

”渡さない”

(ちよつとまずつたかなあ・・・。)

ネウロイの攻撃を避けながら、

銃を撃ち続けるヴァルトルト。

辛うじて致命傷は負っていないものの、

被弾していき、だんだんと体が

ボロボロになっていく。

(・・・あーあ。まだ、キスもすませて

いないのになあ・・・。)

他の3人を守るため、一人でネウロイの相手を

し、奮闘し続けていた。

最後の一体にとどめを刺そうとしたとき、

反撃を喰らい、吹き飛ばされる。

(あ、これ、まず――)

ネウロイを倒し、そして

その反撃にやられて海に

落ちていくヴァルトルト。

(・・・ボバ。愛してたよ・・・)

彼女が目をつむり、衝撃に耐えようと

身構えると突然、体が浮き上がり、

誰かに抱えられる。

「・・・セーフ、か・・・?」

はあつ、はあつ、と息を切らしながら

ヴァルトルトを抱える男の姿があつた。

「・・・ねえ。」

「ん?どうした。怪我でも・・・。」

続きの言葉を言おうとする彼のマスクを両手でとり、

ちゅつと唇と唇が触れ合う。

「・・・!?!?!!?」

「んー♡・・・もうちよつとお・・・♡」

「お、おいつ!？」

「あいつら、殺そう。」

「……うん。」

「(あ、あの時の人だ……)」

ニパと菅野の二人に追いかけてまわされ、  
傷が開いた彼がヴァルトを抱えたまま  
海に落ちるといふ些細なことが  
あつたが、護衛は無事終わった。



仲良く入院となったボバとヴァルトルト。  
しかし、二人の病室はラルの計らいで  
別にされ、ヴァルトルトは

ちよつと拗ねた。

雷に打たれて出来た火傷後を

彼が見ていると部屋のドアがノックされる。

「はい？」

「あ、あの……。雁淵ひかりです。」

そういつて病室入ってきたのは

ひかりだった。

ボバが寝ているベッドに近くの椅子に座り、

ぺこり、と頭を下げる。

「……あの。クルピンスキーさんと、……お姉ちゃんを

助けてくださってありがとうございます。」

「……ああ。」

内心、冷静そうに振る舞っていたが

彼は混乱状態に陥っていて、

せわしなく布団の中の脚を

動かしていた。

(・・・記憶、戻らないようにしよう・・・)

「い、いや。たまたま近くにいただけだ。」

「……………」

そういうボバの顔をじーつと見つめるひかり。

「……………あのー。こ、これ……………」

「え?」

そういいながらひかりが両手で彼に

差し出したのはピンク色の便箋。

「……………え?」

「そ、それじゃつ!!」

ぱたぱた、と部屋から出て行く彼女の

姿を呆然と見つめる彼。

数分後、再起動した彼は

便箋の中身を取り出して、

読むとめまいがしそうになった。

「……………結局、こうなるのか……………」

『あの、私の名前は雁淵ひかりって言います。

．．．これ、私の基地の所在地です．．．

もしよろしければ、文通できると嬉しいです。』

ポケットにしまいながら、

直枝にばれたら殴られるところじゃすまないだろうな、とため息を吐きつつベッドで横になるのだった。



前の世界で502にいたときの事。

俺は、彼女に出会った。

魔力は少ないが、精一杯訓練し、

元氣一杯に頑張る女の子、

雁淵ひかりに。

入ったばかりの俺は、他のウィッチたちと

上手くいっていなかったが、彼女は

そんな俺に対しても接してきた。

『ボバさん!!扶桑皇国に行ったことが

あるんですか?』

『ああ。』

『私、扶桑の出身なんです!!九州のほうから来たんです!』

扶桑皇国に行ったことのある俺と、

彼女は共通の話題があったからか

だんだんと仲良くなっていた。

『ボバさんって、なんでこの502に

入ったんですか?』

『.....』

そんな問いに、マスクのてっぺんを

右手で搔く。

脳裏に浮かぶのは、501の彼女。

ひかりにどこか似ている

あの子の笑顔を想像するだけで、



俺は自然とネウロイとの戦いに身を投じていた。

だが、言うのが恥ずかしいので誤魔化すことにした。

それも、思いつきりタチの悪い方向で。

『……君のためだ。』

『えっ?』

俺の冗談に顔をだんだんと赤らめるひかり。

……そろそろ撤回するか。

そう口を開こうとした俺の後ろから

誰かが背中に乗ってきた。

『おい!! ひかりに変なことするなよな!!』

……大丈夫か!?! ひかり!!』

『え、う、うん……。』

『……降りてくれないか?』

『うるせー!!俺ともう一度戦え!!』

結局、模擬戦をねだつてくる直枝に

連れられ、ひかりに冗談だと言えなかった。

それからだ。

彼女の目が、どこか熱っぽくなり始めたのは――。

『あ、ボバさん!!洗濯しておきました!!』

『ボバさん!!一緒に走りに行きましょう!!』

『ボバさん!!と、年下の女子ってどう思いますか・・・?』

そして、グリゴリー作戦が終わり、

俺は基地を去った。

彼女たちにろくな別れも言わずに。



「……夢か。」

思わずつぶやいた。

窓の外を見れば、既に陽が落ちており、夕焼け色に染まっていた。

ベッドから体を起こし、

手を横につくと、むにゅん、と

何かに当たる。

「……ん。」

ゆっくりと声のする方を見ると、

ニパが寝ていた。

彼女の頭をなでると、

幸せそうな寝息になる。

そつとニパの体を仰向けにし、

俺が寝ていたベッドに寝かせ、

シーツをかけてやる。

近くにあつた自分の服を手に取り、  
着替えて、外に出る。

傷は癒えた。

帰るか。

そう思いながら廊下を歩いていると

通信機に連絡が入る。

応答ボタンを押して、出る。

「……もしもし。」

『あの……。わたし、ライーサです。』

思わず電源ボタンをオフにしようとする

右手を左手で抑えながら通話を続ける。

とりあえずとぼける。

「……えーと、どちらさまですか？」

『……前の人生の事。』

ぼそり、と彼女がつぶやく。

『転生。スター・ウォーズ。．．．全部、他のウィッチたちにばらしますよ?』

「まて。まてまてまて。」

暴挙に至ろうとする彼女を必死に止める。

それだけはまずい。

ハンナと圭子にばれた時のことを

想像する。

『——ほう。貴様、ライーサと話して、

私は無視か。．．．そうかそうか。

．．．何発鉛弾がほしい?』

『に．い．さ．ん?』

観念して、ライーサに返答する。

「．．．久しぶりだな、ライーサ。」

『~~~~~♡』

声にならない叫びが聴こえてくる。

何をしてしまったのかはわからないが、  
何かまずいことをしてしまったのはわかった。

「じゃ、じゃあまたな。」

『~~~~~はいつ♡あなた♡』

そういいながらぷつり、と切れる。

はあ、とまたため息をついた。



今日は最高の日だ。

彼が、彼と話せた。

ベッドの枕に顔をうずめながらばたばたと

両足を動かす。

「~~~~~♡♡」

顔が緩み切って、思わず

尻尾と耳が出て動いてしまう。

ああ、だめだ。

今すぐにも彼の元に

行ってしまいたい。

会って、抱きしめたい。

キスしたい。

手をつなぎたい。

ハグしたい。

×××や×××や××××××××××したい。

彼とそうしている場面を想像するだけで

軽く達してしまう。

「・・・う・・・う・・・う・・・♡」

幸せの余韻に浸っていると、

こんにちは、とドアがノックされる。

「ひゃっ!?!」

「ライーサ。私だ。」

そういつて声を掛けてきたのはハンナだった。  
がちやり、とドアを開けて入ってくる。

私の顔を見て、質問してきた。

「・・・どうした？」

「な、なんでもないよ。」

声が若干上ずりながらもどうにか誤魔化す。

自分で自分を慰めていた場面を

見られはしなかったが、それでも

恥ずかしい。

「ああ。そうそう。飯ができたから

そろそろ来た方がいいぞ。」

「あ、そうなの。・・・ハンナ。」

「ん？」

部屋から出ようとする彼女の背中に声を掛ける。

「実は——。」

そこまで言って、止まる。

・・・頭の中でこんな声がささやいてくる。

彼のことを言わなければ、独り占めできるぞ、と。



興奮のあまり尻尾と耳が出て、

取り乱しそうになったが、

のどまで出かかった声を飲み込み、

にっこりと彼女に笑いかける。

「——明日、おいしい牛乳が入ってくるって。」

「おお。そうか。そいつは嬉しい限りだ。」

今度こそ、鼻歌を歌いながら彼女は出て行った。

近くにあった枕をぎゅっと抱きしめながらつぶやく。

「——渡さない。．．．誰にも」

その日から、彼との秘密の通信が私の日課に加わった。

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑭

「ばか」

サーシャが菅野をかばってやられた。

最初に聴いたときは思わず

倒れそうになった。

司令室でラルに詰め寄る。

「……彼女は無事なのか?」

「……落ち着け。」

焦る俺を淡々と諭すラル。

だが、俺はすぐに背中を向け、

出口の方に行こうと歩く。

「……どうするつもりだ?」

「……ヴァルトルートに続いて、

サーシャまで、とは……。」

ぎりぎり、と歯ぎしりした。

ふう、と彼女がため息をつく。

「・・・全く。妬けるな。・・・私との

情事でもそれくらい熱くなってくれると

嬉しいんだが。」

ジト目で見つめてくる彼女に

思わず声を詰まらせる。

そして、そんな俺の顔を見て

彼女がふふっ、と笑う。

「・・・少しは、頭も冷えたか？」

言われて自分が落ち着いてきていることに

気が付き、頬をポリポリと搔く。

まさか、自分がたしなめられる方になるとは。

「・・・ありがとう。」

「ん。」

俺がそうお礼を言おうと、にっこりと笑う彼女。

最近は笑顔が増えてきたような気もする。

いつもの装備に変えると、

彼女が言う。

「・・・なあ。お前は死なないよな？」

珍しく、ほんの少し不安そうな

声で聴いてくるラル。

「・・・ああ。」

それだけ言っつて、部屋を出た。



502の補給路上に存在するネウロイは

きわめて厄介な存在であった。

あのヴァルトルートを撃墜に追い込んだのも

同じタイプのネウロイである。

サーシャたちがこのネウロイを倒そうと

したときは、結局勝てず、撤退することに。

そのリベンジとして、ロスマン率いる

ジョゼ、定子の3人と、菅野率いる

ニパ、ひかりの3人が二手に分かれて

挟み撃ちをしかける。

「……よし!!サーシャの敵だつ!!」

ぜってーに落とすつ!!」

右手の銃を構えながらネウロイに突っこんでいく

菅野。

後からついて行くニパとひかり。

「コアだつ!!コアをぶっ壊せばっ……!?!」

ロスマンの見立てでは、後ろ側にあるはずだった。

前方でネウロイの攻撃をしのぎ、

陽動をしていたロスマンたちは信じられない

物を見る。

「……分離したつ!?!」

「こ、これじゃあコアの位置がっ．．。」

バラバラに別れたネウロイがロスマンたちの方に  
向かって襲い掛かる。

「くっそー!!」

銃を手当たり次第に放つ菅野、ニパ、ひかり。

しかし、壊れても壊れてもネウロイは再生していく。

「コアはどこだっ!？」

「．．．．。」

何かを決意したような顔になるひかり。

「．．．．ひかり?」

ニパがそんな彼女に声を掛ける。



思い出した。

大切な人を。

きつと、この記憶は私のものじゃいかもしれない。

でも．．。

——『……君のためさ。』

私のために空を飛び、守っていてくれていた人。

お姉ちゃんの命を助けてくれたあの人。

(私も……!!)

ネウロイの近くに肉薄し、その装甲に触れる。

コアの位置がはつきりと見えた。

「——菅野さんっ!!そこですっ!!」

「……らあああああつ!!」

ずばああん、と魔力を込めた右手で

彼女がコアを打ち砕くとバラバラに消えていくネウロイ。

(……やった。やったんだ……私……)

お姉ちゃん、あの人の顔が浮かんできた。

「やったやった——!!」

「……へっ。」

喜ぶ菅野さんとニパさん。

私も、一緒になつてはしゃぐ。

すると、ぼぼん、と私たちの

ストライカーから黒い煙が出る。

「え．．．？」

「あ．．．。」

「あ．．．。」

真つ逆さまになつて落ちていく。

「「ああああああつ!!」」

すると、どこからか私たちの体にワイヤーが

巻き付かれ、地面に激突する寸前で空中に止まる。

．．．．．。

「あ．．．。」

上を見上げると、あの人

私たち三人をワイヤーで持ち上げ、

そつと地面におろすところが見えた。

「ためーっ!!来てたら手伝えよなっ!!

．．．．．たく!!」



「え!? いたのっ!」

・・・え?

2人の様子がおかしい。

・・・まるで、既に会っていたかのような・・・。

「・・・先に帰っているぞ。」

やることがある。

そういつて飛び去っていく彼。

「あ。おいこらっ!! 今日俺の番だからなっ!!」

「・・・今日は私の番だよ?」

彼の背中に向かって叫ぶ菅野さんと、

目を細めてそんな彼女につぶやく二バさん。

・・・へえ・・・。

そうなんですかあ・・・。

思わず、右拳を握り締める。

(・・・ふふふふふふふふ)

私のために空を飛んでいる、とか言っていたのに。

あ、そうだ。

彼に直接聴けばいいんだ。

きつとまた、会えるだろうから。

・・・502に戻ったら、準備しなきや。



502のみんなが切り開いた補給路に

他のネウロイたちが迫っていた。

小型が10匹。

中型が2機。

そして、あのサーシャを落としたタイプが1機。

「・・・どけ。」

右手に持っているダーク・ライトセイバーを

すれ違い様に叩きこみ、小型を2機落とす。

散開する残りをブラスターとミサイルで一機ずつ

狙い撃ちしながら敵の弾幕を避け続ける。

体をレーザーがかすめる。

だが、なんてことはない。

ヴァルトは一体、どれほど痛かっただろうか。あつげらんかんとしていたが、顔には

悔しそうな感情が浮かんでいた。

そのことを思い出し、ブラスターの引き金を何度も指で引き、容赦なく小型を殲滅する。

大型が後ろに下がりながら俺に向かつて

弾幕を張り続ける。

かぼうように前に出て、突っ込んでくる

2匹の中型。

1体が仕掛けてきた体当たりにつつかり、思わず血を吐く。

「・・・捕まえた。」

背中のミサイルを叩き込み、

1機仕留める。

爆風を利用して加速し、

もう1機に近づき、

コアにセイバーを突き立てると  
ばきいん、と音を立てて消えていく。

大型は俺から距離を取ろうと

逃げ続ける。

まともにレーザーを喰らって、

頭に傷を負ったサーシャは

どんな気持ちだったのだろうか。

そのことを考えるだけで、

ネウロイに近づいて、

バラバラにしてやりたくなった。

シールドがない俺の体に

大型のビームがかすっていく。

ルーデルと一緒にネウロイの大群に

突っこんだ時と比べればこんなもの、

どうってこともない。

何よりも・・・。

「……よくも彼女たちを傷つけたなっ!!!」

ビームが左腕に軽く当たると、

持っていたブラスターを落とすが

気にせずに突っ込み続ける。

「許さねえっ!!!」

肩の装甲に被弾し、マントが焼け落ちる。

だが、止まる気はない。

逃げ続けるネウロイ。

既に射程内だ。

左腕からワイヤーを射出して

大型の一部分に絡ませて、

ワイヤーが戻る力を利用して

正面から突っ込む。

「あああああっ!!!」

背中にあつたコアに剣を突き立てた。



「お前はバカか？」

「.....」

ぐうの音も出ない正論だった。

青筋を浮かべたラルに

怒られながらベッドで横になる。

自分は死なない、なんて言っておきながらの

まさかの墜落。

息も絶え絶えの状態でラルに

通信で助けを求め、ロスマンと直枝に

回収された。

そして、今は基地からちよつと

離れた例の家でラルの看護を受けている。

「ヴァルトルートンを落とすほどのネウロイを含む

13機をまとめて相手しただと？自殺志願者か？」

久しぶりにこんな怒っている彼女の

顔を見て、委縮する。

・・・頭に血がのぼったでは済まされない。

だが、ヴァルトルートがけがをしたときに

我慢をしていた分、サーシャがやられたと聞いて

ついに堪忍袋のおが切れたのだ。

「・・・まあ、結果としては、当然

補給路は安泰だがな。」

まったく、とこぼしながらも

するする、とうまいナイフ捌きで

リングを向く。

ウサギの形になったそれをフォークで刺し、

俺に向かって差し出してくる。

「・・・ほら。」

「あーん。」

・・・ラルって家庭的だったんだなあ。

知らなかった彼女の一面に萌えながら  
リングを食べていると、彼女に  
頬を両手で掴まれる。

「……ラル？」

「……死に急ぐな。」

目を合わせると、うつすらと

彼女の眼尻に涙が貯まっているのが見えた。

「……すまん。」

きっと、ヴァルトルートとサーシャがやられたときも

心配していて、俺までやられて限界を

迎えたのだろう。

司令官としていつも冷静さを求められ、  
重圧に耐えてきた彼女の苦勞を思うと、  
謝らずにはいられなかった。

「……ん。」

「……。」



目をつむりながらこちらに顔を近づけてくるラル。

彼女の気持ちに応えるために、俺も目をつむる。

「……………」

視線を感じたので、目を開けて入口の方を振り向くと、直枝、ニパ、ロスマン、ヴァルトルトの4人が立っていた。

さすがにこの雰囲気では口づけはできない。

「……………」

「っち、と軽く舌打ちした彼女が

何か小瓶のようなものをポケットに

しまい、俺のベッドの上から立ち上がる。

「目薬とは、隊長も役者だなあ。．．．

俺のに手を出すなよ。」

「．．．．．僕のだけどね？」

「．．．．．私のだよ？」

「ふふふ。3人ともまだ寝ぼけているのかしら？」

「．．．．．ね？あなた♡」

「．．．．．最後には、寝技がものを言う。」

「．．．．．私を選ぶよな？」

ハイライトが消えた瞳で

にらみ合う5人。

「．．．．．俺は、

なんで自分から修羅場を

作っているんだ．．．．．。

さつき食べたリングを吐きそうになりながら、

彼女たちの手厚い看護を受けた。

502統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ  
(そして、彼はその手を振り払えない)

⑮

彼女が帰ってきた。

あの、雁淵孝美が。

その一報は502統合戦闘航空団の士気をあげ、

新たな作戦、『フレイヤ作戦』の発動を

意味していた。

基地の屋根からこっそりと双眼鏡で

ヴァルトルートと孝美が模擬戦を

おこなっているのをこっそりと覗く人物。

「.....」

マスク越しのその表情は、複雑そうな

ものであった。

若干、眉間にしわが寄っている。

彼はかつて、彼女を助けるために

戦った。

助かったものの、3か月間も戦闘離脱した  
彼女がちゃんと戦えるかを危惧していた。

だが、次の瞬間にはほっとした表情になり、  
ため息をつく。

「……よかった。」

ごろり、と寝転がり男は考えた。

前回の人生で”取引”を持ち掛けた

1人である、マンシユタイン元帥が

502にやってきている。

……おそらく、孝美の着任と

502へグリゴリー攻略作戦の参加要請を

しに来たところか。

マロニーやガリア上層部とは違い

本物の軍人ではあるが、食えない相手である。

……彼女たちの模擬戦を見ているだけで

あそこにかつていたときのことを思い出した。

—— 『これでまた俺の勝ちだ。』

—— 『だっ—ー!!なんで俺の攻撃が

当たらねえんだよ!!』

—— 『これでも僕、自信があつたんだけどなあ……。』

—— 『いや、弱くないぞ。ただ……。』

その時、彼女たちと模擬戦をしていた俺は、

1000体以上ものネウロイを爆殺した彼女や、

軍神と崇められていたウィッチのことを

思い出していた。

—— 『世の中にはな。理不尽な存在がいるんだ。』

—— 『お、おう……。なんでお前そんな遠い目をしているんだ?』

—— 『(ものすごい疲れた顔をしているなあ……。)』

さて、孝美が502に戻ってきたとなると

当然問題が発生する。

ストライカーの数は確か、

今いるウィッチの分しかないはずだ。

ヴァルトルートや直枝、ニパも良く壊すので  
数に余裕がない。

と、すればより強い存在を求める  
ラルがすることは1つ。



「——と、いうことで、孝美の方が正式に  
502へ戻ることとなった。」

「……なるほど。」

ベッドでラルに腕枕をしながら  
話を聴く。

スオムスとカールスラントの共同作戦。

グリゴリー攻略が発動したと。

ひかりは、孝美とどちらが502に残るのかを  
かけて、……負けた。

その時の彼女の背中あまりにも小さく、

年相応の少女の者にしか見えず

後から思わず抱きしめたくなったほどである。

孝美のブランクと傷は問題ないだろう。

ヴァルトルートと模擬戦で互角に渡り合っていたところを見れば心配ない。

「……ラルも出るのか？」

「当然だ。……心配してくれているのか？」

彼女の言葉に目をそらす。

そつと頬に右手を添えられる。

「……ふふふ。この作戦が終わったら、

私たちの元に来るのだろうか？」

「……あー。」

マンシユタインに接触して、“取引”を

持ち掛けているわけでもない俺が、

502の基地にいることはできない。

だが、それと同じくらい強力なツテはある。

首からスコープをぶらさげ、いつも



余裕を崩さない彼女の姿を思い浮かべる。

階級が少佐であるラルよりもずっと上の

中将のウィッチ。

ロスマン、ニパ、直枝、ヴァルトルトの4人は

完全に俺が基地に残るものだと思っている。

この家に彼女たちの私物が増えているのも

気のせいではなかった。

頭の中でぐるぐるとそんなことを考えていると、

下着姿の彼女がハイライトが消えた目で

俺の両目のくぼみを指でぐつと押してくる。

「……つつ、ラ、ラル……？」

「……目が見えなくなれば、さすがに

誰かの世話になるしかないだろう？」

「……知っているか？ウィッチの退職金は

一生遊んでもおつりが出るのだぞ。」

いつもは鉄面皮で感情が表に出ない

彼女が嗤う。

そして、その右手が俺のあそこを

掴み、布団越しにこすり上げてくる。

「……！ラ……ル……！」

「出せ。他の女に出すくらいなら、

私の手の中にすべて放ってしまえ。

……体の相性が最高なのは

前世で実証済だろう？」

まただ。

ニパや他のウィッチ達も言っていた

俺の知らない記憶。

確認した限りでは、

サーニヤもシャーリーも

俺と結婚して、家庭を

設けたと言っていた。

だが、どの人生においても

そんな記憶は俺の中がない。

だったら、ラルは・・・。

伸ばされた手を振りほどいて

ここから逃げ出せば、二度と

彼女たちと会うこともなく、

自由に生きることが出来る。

ウィッチを助けたという気持ちだが、

502のために陰ながら支えたいという

思いが、俺を戸惑らせる。

体をびくつ、と時折跳ねさせる

俺の姿を見て、ラルは恍惚とした

笑みを浮かべる。

「・・・私たちから離れられると

思うなよ?・・・擦り込まれた

ものは易々と取れはしない。」

そういいながらも手の動きを

止めない彼女。

一昨日、昨日はヴァルトルト、ニパに絞られたというのに、ラルにもてあそばれて愚息はますます硬くなつていく。

「・・・ラ、ラル!! 離せつ!!  
出、出ちまう・・・っ!!」

しかし、必死に懇願する俺と目を合わせた彼女はにっこりと笑うと

——更に手を激しく動かしてくる。

「ほら。イけっ。イけっ。」

私の手を妊娠させろっ。」

「・・・!! あああああっ!!」

体の奥から精子が出て行き、

彼女の手の中にぶちまけられる。

しゅっ、しゅっ、と最後の一滴まで

搾り取られていき、陰茎が萎えるまで

ぐちゅぐちゅとこすられる。

ひとしきり出した後、

彼女は溜まった右手の精子を

一気に口の中に入れて飲み込む。

じゅる、じゅる、と喉に絡みそうになるのも

お構いなしに一心不乱に飲み続けるその姿に

目を奪われる。

「……やはり、いいものだな……♡」

ぶるり、と体を震わせた彼女が顔をあげると、

眼が獣のように据わっており、息がはあ、はあと

荒くなっているのがわかる。

「……明日までまだ長い……この体、

好きにしているのどうぞ？」

「……っ!!」

彼女がその左手で俺の右手を掴み、

胸を掴ませて来る。

ヴァルトルートやシャーリー以上かもしれない

そのグラマラスな爆乳の指に伝わってくる

感触に我を忘れる。

手を彼女の胸から離せずに固まる。

頭の中に浮かぶのは、

他のウィッチの事。

乱れていたヴァルトルート、

うれし泣きをしながらよがっていたニパ、

顔を枕に伏せながら恥ずかしさをこらえていたロス、

そして、顔を真赤にしながら震えるからだで

口づけを交わしてきた直枝。

サーニヤにも結果的に手を出していることが

俺の尾を引いていた。

「……まさか、他の女のことを

考えていたわけではないな？」

俺の右手首を掴む彼女の手に

ぎりぎりど力がこもっていく。

憤怒の表情で、感情を必死に

抑えているラル。

震える喉と、乾いた唇で

答える。

「……あ、ああ……。

ラルの綺麗な体に声を失っていただけ……だ。」

「……ふ、ふふ……。」

ふふふ、とおかしそうに笑う彼女。

消えていたハイライトが目に戻り、

艶めかしく唇を舐める。

「……愛しているぞ♡」

「……ああ。」

俺もだ、と言えなかったのは罪悪感からか。

前の人生でやらかしたことを今回は自重している。

だから、こうなるはずもなかった。

「ん・・・♡・・・はあっ♡はあっ♡指で・・・

いじって・・・くれ・・・♡」

「・・・ああ。」

必死に俺の体に寄り添う彼女の顔を見て、この基地を去ることを想像しただけで胃が痛くなる。

・・・逃げようとしたのがばれたら、今度こそ殺されるかもしれない。

やるなら、失敗は許されない。

彼女と口づけを交わしながら、

グリゴリー攻略作戦後のことを考え身を震わせるのだった。

・・・あと、孝美とひかりの問題を再度思い出し、前の人生で彼女たちにめった刺しにされた腹を思わず手で



撫  
で  
た。

# 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

⑩

(逃げなかった男)

グリゴリー攻略作戦当日。

切り札である列車砲をネウロイの巣である

グリゴリーに放ち、消滅させる作戦。

基地に集められた戦力を民家の屋根の

上から双眼鏡を使って覗き見る。

思わず舌を巻いてうへえ、とつぶやく。

ここまでの戦力が結集した例は

珍しい。

扶桑海事変の時と同じレベルだ。

502のウィッチ達は今頃、作戦のために

基地内部にて待機している。

さすがに俺のところまで来る時間は今はないのだろう。

だからこそ、千載一遇のチャンスだった。

戦力は十分であり、俺1人いようといなからうともはや関係はない。

スレーヴIがない今、単独で巣をつぶせるわけでもない。せいぜいが、大型と中型を数体を相手に

相打ちが精いっぱいだ。

もう、彼女たちを支えなくても大丈夫のはずだ。

ここを去っても、502の皆は恨みもしないだろう。ジエツトパツクから火を噴射し、基地から離れる。

(……じゃあな。)

◆ 俺はこの場所に心の中で別れを告げた。

「……なあ。隊長。あいつは？」

「……。」

菅野の言葉にラルは押し黙る。

ヴァルトルートはいつも通り……とは

いかずにちよつと緊張した顔つきで銃を整備していた。

「……これほどの大規模作戦、

バレずに共に戦うことは不可能だ。

なら……。」

「……!!つち……!」

ひかりが離脱し、そして今また一人が

消えたことを確信し、右手で

格納庫の壁を蹴る菅野。

だが、次の瞬間にはいつも通りの

獰猛な笑みを浮かべていた。

「……へ。もともとは俺たちの戦いだ。

……そもそも、ウィッチで無い奴が

ネウロイと戦うつてのはおかしいからな。」

そうは言うものの、やはり寂しいのか

表情に若干を暗い影を落とす。

彼のことを思い出していない面々には

何のことかわからなかったが、

それでもこれから行われる作戦のことで

頭がいつぱいで、考える余裕もない。

「・・・時間だ。いくぞ。」

『『『『『了解っ!!』』』』』』

かくして、グリゴリー攻略作戦は始まった。



「・・・。。。」

雁淵ひかりは走っていた。

グリゴリー攻略作戦に苦戦しているという

情報を、一緒にスオムスに向かう途中、

エイラが持っていた通信機で知ったからである。

電車を降りて、ひたすらグリゴリーに向けて彼女は走る。

「はっ！はっ！はっ！」

足が痛くなろうと、体が重かろうと、どれだけ寒かろうと上空で戦っている仲間のことを考えると自然とその足運びは速まる。

「・・・はっ！はっ！はっ！」

ひかりは思い出していた。

大好きな502の皆との思い出を。

憧れの姉の姿を。

そして、シールドを貼ることも出来ないのにネウロイと戦い続けた一人の男のことを。

「・・・あああああっ!!」

——かくして、502はそろった。



502の面々は、絶望しかけていた。

撃ち抜いたと思ったコアがダメーであり、その中に本物のコアが隠されていたのだ。

孝美はネウロイの攻撃で重傷を負い、

ジョゼに手当てされる。

一命をとりとめた物の、戦える状態ではないのは明らかであった。

頼みの綱の列車方も、魔力徹甲弾も防がれ、

コアも破壊できなかった。

そんなところに、ひかりがやってきた。

彼女をもとに組み立てられた作戦に対して各々のウィッチ達は

『へっ。やるぜっ!!』

菅野は笑った。

ひかりの愚直さに。

『……やってみるとしようか。』

ヴァルトルートは楽しそうな表情を浮かべる。

刺激的な戦いを想像して。

『やってみる価値はあるわね。』

ロスマンは喜んだ。

かつて、ひよっこだったひかりの成長ぶりに。

『最近の私、ついているから大丈夫だよ!!』

ニパは八重歯をのぞかせ笑みを浮かべる。

その先にあるハッピーエンドを想像して。

『大切な人たちを、守るっ……!』

ジョゼは奮起した。

その小さな体に勇気を漲らせ。

『まだまだ、皆に食べてもらいたい料理がありますからっ!』

定子は顔をあげた。

平和を勝ち取るために。



「……絶対に生きて帰りましょう！」

孝美は確信した。

きつと、大丈夫だと。

「……これが最後のチャンスだ!!行くぞっ!!」

ラルは天に向かって叫んだ。

己を鼓舞するかのよう。

ウィッチ達はあるものを思い出していた。

とある時の、幸せなひと時と、

——戦場で、どれだけ傷ついても

ウィッチを守り続けた男の姿を。

戦いは、まだ終わらない。



「……」

作戦本部にて、マンシユタイン元帥は

唇をかみしめていた。

少し離れた空では少女たちが戦っているというのに  
今は見守ることしかできない自分のありさまを。

彼の隣にいた、カールスラントの将校も

同じように悔しさをにじませている。

だが、決して戦場から逃げることはせず、

彼女たちから目を離さず見守り続けていた。

「……もし。」

マンシユタインがぼそり、とつぶやく。

「もし、私が空を飛べて、戦えていたら

絶対にウィツチを戦場に送りはしなかった。」

「……同意です。」

2人は笑う。

作戦が失敗すれば2人ともネウロイにやられて死ぬ。

彼女たちが死ねば、今度は自分の番だと

分かり切っていた。

諦念にも似た思いを抱いていた2人が双眼鏡で戦況を伺っていたその時、何かが空を飛んで彼女たちに近づくのを見た。

「……あれは？」



戦況は五分五分だった。

いや、孝美がやられて、ひかりが合流し

盛り返したことを加味すると奇跡に

近い状況であった。

そして、鞭のようにしなる攻撃を

彼女たちはよけつつ、ひかりと

直枝が進む道を切り開いていく。

鞭がひかりと直杖に当たりそうになったその時、爆発音がして、ネウロイの攻撃がわずかに緩む。そのすきを逃さずに菅野とひかりはコアがある本体まで突っこんでいく。

他の全員がフォローし、菅野とひかりが突っこみ、あと一撃と行ったところで

菅野が魔力を使い果たし、倒れそうになる。

「……………」

「……………菅野さんっ!!」

菅野を左手で支えるひかりの胸元から

おまじないとして持っていたルーン銃が

落ちる。

「……………っ!!」

それを右手で掴み、魔力を込めて、

◆ ———— その引き金を絞った。

げほ、と血を吐いて地面に倒れる。

彼女たちが突入する隙を作るために、ミサイルを後ろから叩き込んだのはいいモノの、手痛い反撃を喰らった。鞭のようにしなる攻撃を放つネウロイなど、何年ぶりだろうか。

通信機に通信を入れると、

ざざ、とノイズが走る。

『……やあ。』

「……ガ……ランド……か？」

こひゅー、こひゅーと弱弱しい

息が漏れる。

そして、ガランドがそれに気が付いた。

『……今すぐ場所を言うんだ。』

『すぐに向かうから。』

「ああ、．．場所．．は．．。」

「その必要はないぞ。」

すつと横から誰かの手が伸び、

ぴつと通信機の電源ボタンが押される。

「．．．あ。」

その声を聴いただけで体が震える。

寒さのせいではなく、

あの記憶を思い出して。

「——ストライカーを拾って待機していたら、

とんでもないお宝を見つけたなあ．．．。」

「．．．アウ．．．ロラ．．．。」

「しゃべるな．．．内臓がつぶれてる。」

俺をそりに置かれている箱の中に

入れる彼女。

「……なあ、アウロラ。」

口から血を垂れ流しながら  
彼女に言う。

「……なんだ。」

「実は、逃げようと思ってた。」

震える右手を抑えながら  
笑う。

「……知っているよ。」

「だが、気が付いたらここに來てた。」

「……それも知っている。」

「……今は、休め。」

優しい気な笑みを俺に浮かべた

アウロラの表情を見て、ほっと

落ち着いた俺はそのまま意識を失う。

かくして、グリゴリー攻略作戦は  
終わりを迎えた。

——そして、それはとある  
修羅場の始まりも意味していた。



502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ ⑰  
(皆が待っていた修羅場へ)

「……………」

窓の外を眺める。

そこでは、様々な人々が

基地でせわしく働いているのが見える。

手を動かして、近くにあった

コップを手に取りとうるとずきり、と

手が痛みうずくまる。

「……………」

すると、横から手が伸び、コップを取ると

俺に向かって渡してくる。

「……………はい、どうぞ。」

「……………ああ。」

ひかりが、顔を赤らめて俺に  
差し出している。

ずず、とコーヒーを飲みながら  
事の顛末を思い出した。



「……うあ……」

痛みにうめいて目を覚ますと、

そこはどこかの病室だった。

体を起こそうとすると

全身が痛み、思わず顔がゆがむ。

「……起きたのか。」

声のした方に顔を向けると、

そこには、ぼろぼろ、と

涙を流している彼女たちがいた。

.....。

シーツの中にもぐりこむ。

しかし、すぐにはがされ、

直枝に胸倉をつかまれる。

「てめえっ!!なんで死にかけてんだっ!!」

彼女の剣幕に押されて横に体を動かすと、

誰かの手に触れる。

そこには、泣きはらして、

疲れたような表情で寝ているジヨゼがいた。

「.....ジヨゼも、私たちもずっと

お前が起きるのを待っていた。」

いつの間に涙をぬぐったのかラルが

無表情ながらも完全にキレている

眼で俺を見ている。

「.....来てくれると、信じていました。」

定子に両手をぎゅっと握り締められる。

「……他の子たちとは話していたなんて、  
ずるい……です……。」

サーシャがなく。

呆然とする中、思い出した。

ガランドに回収を頼み、撤収しようとしたところ  
アウロラに見つかり、持ち帰られた事を。

彼女の姿が見えないので近くにいた  
ラルに尋ねる。

「……アウロラは？」

「……二日酔いで寝ている。……お前が

基地に戻って、目が覚めるまでずっとそんな  
感じだったぞ。」

あの酒に強いアウロラが？

一体どれだけ飲んだというのか。

そして、ひかりと孝美がそろって

俺の前に出てきた。

「……………」

「……………あ。」

前に会った時とは違う感じのひかりと、

目が合つて、気恥ずかしそうに背ける孝美。

……………あれ。

もしかすると、もしかするとだが……………。

「……………ひかり?」

「はいっ!!何でしょう!?!」

名前呼びにしたというのにニコニコと笑顔で

俺の顔をじつと見つめる彼女。

最初に会った時と違い、

何だか熱っぽい視線を感じる。

今度は孝美の方を振り返る。

「……………た、孝美?」

「……………はい♡」

若干声が震えるて呼んだが、  
全く気にせずがいい笑顔で  
爛々と目を輝かせる孝美。

・・・あれ・・・？

認めたくない嫌な予感。

目を背ける俺にサーシヤと  
ラルがとどめを刺す。

「・・・あなたのこと、全部思い出しました。」

「502にいる全員・・・な。・・・おかえり、  
ボバ・フェット。」

・・・。

さーつと顔から血の気が引いていく。

「ところで・・・。」

先ほどまで黙っていたロスマンが

口を開き、すつとその眼から

ハイライトが消えていく。

「・・・まさか、ここから

立ち去ろうなんて、考えていないわよね？」

その言葉に、他のウィッチ達からも

ハイライトが消えていく。

「……へえ。僕にあんなことしておいて？」

ヴァルトルートが近くにあつた

モツプを両手で持ち、

膝で真ん中の部分を折り、

右手で折れたモツプを持つ。

「……まさか。まさか俺が見込んだ

男がそんなことするわけないよな？」

ぶううん、と直枝の右手に魔力がこもる。

「……私、私、まだ、全然

あなたとお話できていないのに……。」

先ほどまでリングゴでも剥いていたのか、

包丁を両手で持ち、暗い笑みを浮かべる定子。

「……扶桑には、腹切りという文化もありますね。」

すちや、と携帯ナイフを持ち出し、俺の方に

取っ手を向けて差し出し出してくるサーシャ。

「．．．もう、離さない．．．だめ。」

他のところに行つたら．．．。

傷ついちゃう．．．。」

いつの間にか起きたのか、ぎゅうううつと

信じられないほど強い握力で俺の左手を

逃がさないとばかりに握るジヨゼ。

「．．．ねえ。知ってる?．．．死体は、

氷漬けにすると、ずっと綺麗なまんまなんだつてさ．．．。」

窓の外にある雪景色を眺めて

せせら笑うニパ。

「．．．また、私を助けてくれたんですね．．．。

恩返し、受け取ってくれますよね?」

すちや、とどこから取り出したのか

拳銃を俺に突き付ける孝美。

「えへへへ．．．ボバさん!!大好きですつ!!」



セリフは顔が思わず熱くなるような告白なのに、  
ハイライトがなく、ホラーみたいな壊れた笑みを  
浮かべるひかり。

「……ここが、お前の居場所だ。……だろう？」

手錠を右手に掲げてとろけた表情で  
俺を見つめるラル。

それに対して、俺は渴いた笑みを  
浮かべ、もう一度倒れた。

こうして俺は、502でこっそりと  
看護されることとなった。

——だけれども、俺は甘く見ていた。  
いや、忘れていた。

501で難なく見つからずにすんだから、  
今回もいざれ抜け出せると思っていた。

——彼女たちの愛が、とつくに

収まりの付かないところまで

煮詰まっていたことなど、俺は知る由もなかった。



194x年

く佐世保航空予備学校にてく

「……そうか。」

ちん、と電話を切る女性。

髪をポニーテールに結っており、

その顔は坂本美緒に似ている人物。

——北郷章香。

竹井醇子、ならびに坂本美緒、若本徹子の師匠である。

先ほどまでの会話を彼女は

思い出し、ため息を吐く。

脳裏に浮かぶのは、

まだ、空を飛ぶことさえ

億劫だった頃の弟子たちの姿。

——そして。

こん、こん、とドアがノックされ、  
とある人物が入ってくる。

「——章香。」

「．．敏子。」

彼女と交友がある

江藤敏子が校長室に入ってきた。

「．．．ふふふ。なんだかうれしそうだな？章香。」

「．．．．わかるのか。」

ぽりぽり、と指で自分の頬をかく章香。

自分の気持ちを看破されてどこか照れくさそうに

窓の外を見る。

「501の坂本美緒。504の竹井醇子。扶桑皇国『最強』の若本徹子。

・・・そして、502の雁淵ひかり、雁淵孝美。」

敏子の言葉に目を見開いて驚く章香。

「・・・さすがに、早いな。」

「頼りになる情報源がいくつかあるからな。」

はは、と敏子は旧友の驚き顔に対して

満足そうに笑った。

「章香が育てたウィッチ達は誰もが大成しているじゃないか。

・・・しかも、そのうち3人はネウロイの巣を破壊している。」

「・・・私としては、教え子が無事であればそれでいいよ。」

「・・・章香らしいな。」

謙遜もせず、淡々とつぶやく。

「でも。」

敏子は続ける。

「それと同時に、何だか悲しそうだな。」

「……………」

敏子の言葉に閉口する彼女。

それが事実であることを示していた。

そして、すつと章香は目をつむりながら告げる。

「・・・扶桑海軍変からの、とあるカールスラントの人物から、

ある情報が入った。」

「・・・彼の事か？」

「ああ。」

ふーつと何かをこらえるように息を吐いて、

そして告げた。

「刺された、そうだ。」

かくして、物語は続く。

——彼女たち二人が再び

空を飛ぶことになるのは、  
もう少し先の話である。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ  
(～蜜月編その1～) ⑱

グリゴリー攻略に伴い、502の戦線は一気に回復した。

それが原因なのか、最近では彼女たちの

出撃回数を減って、穏やかな時間が基地内には

流れていた。

・・・だが、何かが違う、と基地にいる者たちは感じる。

基地内を巡回している警備兵が2人、

夜の廊下を歩く。

「・・・なあ、お前。知っているか？」

「・・・何がだ？」

片方の男が、もう片方の明かりを持っている

男にそう切り出す。

「最近、ここウィッチ様たちがやけに

機嫌がいい理由。」

「・・・ああ。確かになんかな。」

彼らが浮かべたのは、502のウィッチ達の顔。その誰もが美女、美少女であり、こんな時代に生まれていなければ間違いなくアイドルして活躍していたであろう美貌の持ち主たちである。

「それは、グリゴリーを攻略して

「この戦線が落ち着いてきたからだろ？」

「・・・いや、それだけじゃないらしい。」

震える唇が、男の心情を物語る。

「ストライカー回収部隊のアウロラ殿は知っているか？」

「ああ。・・・前につかまって妹さんの自慢話を

延々と聞かされたよ・・・。」

その時のことを思い出したのか

うへえ、と舌を出して辟易する。

「・・・俺、グリゴリー攻略に参加しているとき、

見ちまったんだよ。」

ごくろり、と生唾を飲み込んで男は続ける。



「——ハイライトがない瞳で、血まみれの人間を箱に入れていたあの人の姿を——」。

2人とも立ち止まり、沈黙する。

そして、男はさらに語りだす。

「……それからだ。基地内で、毎日男と女の嬌声が聴こえるようになったのは……」。

その時、ガタガタ、と

彼らの正面から何か音がする。

びくつ、と体を強張らせ

2人は拳銃を抜き構える。

そして、正面からとある生き物が

彼らの方に走ってきた。

「……なんだ。ネズミか。」

「びっくりさせやがって……」。

ほっと息をつき、胸を

なでおろす2人。

そして、何も異常はなかったの  
帰ろうとすると、どこからか

かすかにうめき声のようなものが聴こえてきた。

『……あつ……ああ……。』

顔を見合わせる男たち。

「……オイ。今の……。」

「……ああ。」

2人して頷き、そつと音が

聴こえる方に歩みを続ける。

それは、近くにあつた

今は使われていない倉庫から

聴こえてきていた。

しかし、そこには誰もおらず、

もぬけの空である。

「……誰もいない?」

「・・・いや。これ、見てみろよ。」

男が明かりで地面を照らすと、そこには埃が溜まっていない

部分が存在していた。

ふつと息を吹きかけると、

はつきりとそれは姿を現す。

「地下への扉!?!最近

使われているのか!」

「・・・行くぞ。」

ぎぎぎ、と二人で地面にある扉を開けると

階段が見えた。

慎重にその中へと進んでいく2人。

もちろん、拳銃を片手に構えながら。

『・・・あつ・・・おお・・・』

『あつ♡・・・ああつ・・・♡』

『んんー♡・・・』

声がだんだんと大きくなるのを

2人は感じた。

そして、とある扉の前までやってきた。

「……。」

「……。」

片方がこくり、と頷くと

もう片方が扉を開ける方を

カバーするためその少し離れた

ところで銃を構える。

心臓の鼓動が速まり、

焦る気持ちを抑えつつ、

右手でドアの取っ手を

回し、ほんの少しだけ開けた。

「見たな。」

扉を少しだけ開けた男が

声のした方を見ると、がっ、という

うめき声を漏らしてもう一人が

倒れているのが見えた。

そして、その背後には、

白いフードで身を隠している

3人の人物が立っている。

右手には、何か鈍器のような

物を握っているのが見える。

銃を構える。

しかし、それでも気にせず

近寄ってくる3人に男は警告する。

「……とまれっ!!撃つぞっ!!」

「……ああ。そうそう。」

どこかで聞いたことのある声に

首を傾げていると、フードを

かぶった人物が愉快そうに言う。

「——後方注意、だ。」

はっと男が何かに気が付くも既に遅く、

がつん、と頭を何かで殴られる。

そのまま前のめりで倒れ、

意識を失った。



「——と、いうことで。あなたの存在が

上層部に知られないようにしつつ、

治療を行うために場所を移します。」

「・・・だろうな。」

ラルとロスマンのセリフを聴きつつ、  
思わずそんなセリフをつぶやく。

今回の人生で、俺はマンシユタイン元帥と  
取引していない。

ガランド以外の軍将校の協力と

理解を得ることは事実上

不可能に等しかった。

「あなたとしても、今回の人生では

なるべく世間やほかのウィッチ達に

気が付かれずに戦いたいのでしょう？」

孝美が俺の考えを代弁する。

それがあっているからか

思わず後頭部をぼり、ぼりと搔いて

そつぽを向いた。

「・・・私としては。世間に認知させて

お前をカールスラントの将校にするのも

1つの手だと思っただが……。」

「いや。さすがにそれは……。」

無理、とは言えなかった。

ラルだけではともかくガランドは嬉々として

俺を取り込もうとカールスラント内部で

政争をおっぱじめるだろう。

ネウロイとの戦いがあるのにそんなことを

していたらカールスラントにとっては

致命的な隙となる。

「……ふむ。だが、他のウィッチ達に

知られない、ということは……。」

その言葉に、部屋に集まっていた

他のウィッチ達が全員俺の方に

視線を向けてくる。

……ちやつかりと、アウロラもいた。

「……なんにせよ、今はあなたの治療が



最優先です。」

サーシャがそんな彼女たちを戒めるかのように  
言い放つ。

サーシャ……。

俺のことを気遣ってくれる彼女に

少し泣きそうになると、続けて

彼女は言った。

「私たち全員が引退する7年後まで、

他のウィッチ達からガードしなくてはなりません。」

「え。」

え？

それはつまり……。

不安げな表情が顔に出ていたのか、

ジヨゼと定子が俺の両脇に

腰掛けてきて、ハイライトのない目で

手をぎゅつと握ってくる。

「……大丈夫です。皆でお金を出し合えば、

一人くらい養うくらい簡単です。．．．あなた♡」  
「．．．私がずっとそばにいるから．．．。」

どんな怪我でも治すから．．．。」  
不穏なことを言う彼女たち。

．．．あれ？

あれれ？と何かが急速に決まっていくなかに  
違和感を感じつつも、彼女たちはどんどんと  
話を進めていってしまう。

「ヴァルトルート。501のエーリカ・ハルトマンや

そのほかのウィッチ達の気をそらして、  
なるべくボバの情報を遮断しろ。」

「了解。．．．ああ。やつと、なんだね．．．♡」  
「基地内部の情報統制も必要ね。」

万が一のことも考えて、彼の偽の

戸籍と所属情報も作っておきましょうか。

．．．あ、名前を同じロスマンにするというのも．．．。  
い、いえ。それはさすがに．．．。」

何かを指示するラルと恍惚とした

笑みを浮かべてえへへ、とはにかむヴァルトルート。  
顔を赤くしながら何かをぶつぶつとつぶやくロス。

体が震えてきた。

「ひかり!!お前の体じゃ満足させられねーよ!!」

「こ、こは俺がだな・・・!!」

「菅野さんだつて私とそうそう変わらないじゃないですか!!  
体力ならあるから何回でもできますよ!!」

「あら。2人とも。ある程度の大きさがあつたほうが

彼も喜ぶわよ?」

何かを言い争う直枝とひかり。

それを笑顔で嬉しそうにたしなめる孝美。

「隊長!最近ストライカーユニットが壊れなくなつて

きたんだ!・・・彼ともつと愛し合えばもつといいこと

起きるかな?」

「それはすごいわね……。念のため、私も検証しましょう。」

えへへ、と笑みをこぼすニパ。

それに驚いた表情を返すサーシャ。

それぞれが好き勝手に話し込んでいる

今のうちにベッドから降りて外に出ようと

すると、いつの間にか近くにいた

アウロラに詰め寄られる。

「……………どこに行く気だ？」

「……………外に。」

そういつた瞬間、首を右手で掴まれ

締められる。

がつ、ぐ・・・といううめき声を

もらしてもがくと他のウィッチ達が

何事かと彼女を糾弾する。

「ね、姉ちゃん?!何やって——」。

「——こいつ、今、逃げようとしていたぞ。」

その一言でしん、と部屋が静まり返る。

全員の顔から感情が抜け落ち、

無表情となる。

そして、そんな彼女たちに取り囲まれる。

「……ねえ。僕の初めて

あげたんだよ……？」

「……お前、まだ躰が

足りなかったみたいだな？」

「……あの、抱きしめても

いいですか？……あ。この

包丁は気にしないでください。」

「……たくさん食べるとね、

エッチな気持ちもわいてくるの。」

「……ふ。ふはははははは。

そうか。……そ、う、か……。」

「……あなた？ 早速浮気ですか？」

「……また。また私を3度も

おいていつてしまうのですか？」

「……だめ。だめだめだめだめだめつ。」

「……お前がいないと、酔えないんだ。

……酔えないんだよ。」

「……うあ……あ……。」

想像以上の狂気に圧倒され、変な声を思わず漏らす。

体がすくんで動けない俺。

そして、逃げる気がなくなつたと考えたのか

スツと彼女たちの目にハイライトが戻る。

「……………それでは、私たちの”家”に行くのでしょうか。」

……………この日から、俺は本番以外のありとあらゆる

行為を彼女たちとすることになったのだった。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ  
(〜蜜月編その2〜)

⑬

それからというものの、

502での日常を俺は過ごすことになった。

重すぎる愛を一心に受けながらも

脱出を伺う日々。

必ず、誰か一人が傍にいることになり、

毎日監視と看護をされる。

例えば、夜中にトイレに行こうと

した時の事。

『おい、どこに行くんだ?』

『……トイレだけど。』

『……だったら俺も行く。』

『え。』

有無を言わずに、魔力を込めた



拳を俺の腹に突き付けてきた直枝に

たいして断れるはずもなく、

OKを出してしまう。

そして、部屋で食事を

しようとしていた時の事。

『……あの。』

『だめです。まだ、傷が完全に治っていないです。』

『……全部全部全部、私に任せてください。』

料理を食べようとしたとき、定子に

全部世話をされた。

外に出て、走り込みをしようとするれば

ひかりに止められる。

『ダメです!!そんな激しい運動をしちゃ!!』

『……部屋でもできる運動を、一緒に

すればいいですから……。ね?』

ネウロイ掃討の作戦を組み立てるために、

知見を貸してほしいとラルとロスマンに頼まれ、

一緒に戦略を練っていた時の事。

『……ふむ。さすがだな。……さて。

仕事も終わったことだ。……こい。

抱擁してやろう……。』

『……首輪、似合うのを作ったんです……。

きつと、あなたの首にぴったりだと思えますよ……。』

他の面々も同じような感じである。

そして、そのすべてに共通していることがある。

……俺は、彼女たちと関係を持ち始めていた。

体がまともに動かせないというものもあるが、

彼女たちにはいいようにPETTINGされていた。

顔を、耳を、眼球を、指を、体のすべてを

貪られる。

本番以外のすべての行為を行う日々。

そして、ついに歩けるようになったその日、

俺は彼女たちの監視付きで外に出ることを

許された。



ひかり、直枝、定子の扶桑組に連れられ  
数日ぶりに外に出る。

「ボバさん!! 久しぶりの外は

どうですか?!

「・・・陽がまぶしいな。」

元気そうに笑って、嬉しそうな

表情を浮かべるひかりにそうこぼす。

「たによ・・・。ずっとずっと俺が

地下で世話してやるっていつてんのによ・・・。」

「まあまあ。・・・これがあるから

大丈夫ですよ。」

愚痴をこぼす直枝に対して定子がぐいっと

それを引っ張る。

うぐつ、と首を絞めつけられ、

息が苦しくなる。

「あつ、ぐ、ぐごめんさいっ!! 痛かったですか!?

「い、いや．．．」

彼女の手に持っているリードが

俺の首まで伸びてつながっていることを

改めて認識させられる。

この首輪がある限り、俺は逃げられない。

装備を出そうにもエネルギーがまだ

回復していないからか武装して

リードを引きちぎることも出来ない。

もし、サーニヤに首輪をつけられていたら

毎日こんな感じで飼われていたのだろうか。

街が無人であることが救いであった。

「．．．えへへへ」

背中に乗っかってくるひかり。

すりすりとの後ろにほおずりしている。

「．．．はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡」

そして、発情したのか

息を荒くし、くちゆくちゆという  
音を立て始める。

後を見れば、ひかりが自分の指で

秘部をいじり始めているのが見える。

「・・・指で・・・いじれ・・・よ・・・」

「・・・私もお・・・あなたのぉ・・・」

いじつてあげますからぁ・・・」

両隣で俺の指を掴んで自分の

あそこをいじらせようとしてくる定子と直枝。

ムラムラと抑えがたい気持ち湧いてきて、

その誘惑に屈していく。

首輪で体の自由を奪われている俺に、

拒否する意思はなかった。

「あつ♡そこっ♡・・・さきつぽお・・・いじつちやあ・・・」

いつもの言葉遣いが崩れ、

眼が虚ろになっていく直枝。

そして、自分のモノがズボン越しに

定子に掴まれ、上下に擦られる。

「・・・出してえ・・・♡いっぱい、びゅーって・・・♡」

手慣れた手つきで俺のモノを

苛め抜いていく彼女。

2人に迫られ体を震わせていると、

後からひかりが俺のズボンの

中に手を入れて、直接モノを掴んでくる。

「っ・・・ひかりっ・・・！」

「ほらほらっ♡戦場での、あの頼れる姿は

どうしたんですかぁ・・・♡」

「・・・うぐあぁ・・・。」

悪女の素質があつたのか、

責め抜いてくる。

直枝の嬌声を聴きつつ、

ズボンの外からは定子に、

中はひかりに責められ続け、

とうとう限界を迎える。

「・・・づあああつ!!」

絶叫すると、ひかりの手の中に  
大量の精子を吐き出す。

「ああ♡熱いのが・・・♡」

嬉しそうな顔つきで

俺のズボンから手を引き抜き、  
精子を舐めていくひかり。

「・・・んん・・・♡」

「ず、ずりいぞつ♡俺にもっ♡」

俺にもよこせっ♡」

「私もお・・・♡」

定子と直枝が俺のはいている

ズボンをズリ降ろし、直接

ペニスに残った精子を舐めていく。

その間も、自分の指で自分を

慰め続ける2人。

つたない舌遣いがかえって気持ちよく、

ぞくぞくとした快感が体を突き抜けていく。  
ひとしきりすべて舐め終わったひかりが  
耳元でささやく。

「……まだまだ、できますよね……?」  
「……っ。……」

彼女の問いに、俺は静かに頷く。

夕飯の時間まで、寒さを忘れるくらい  
熱く交わり続けた。



地下に移動させられ、  
養生し始める最初の日、  
ラルがウィッチ達全員と  
引き連れ、俺に向かって  
言ってきた。

「……そういえば、貴様の性欲についてだが。」  
思わずむせた。



いきなり何をいつているのか、という意味を込めた視線を向けると、ハイライトの消えた笑みですつとあそこをぎゅつと手で掴まれる。

『・・・この節操なしめ。・・・本来なら、

ここでバラバラに引き裂いて、全員で

肉片を共有してもよかったのだが。』

ぞつとした。

ウィッチ達全員がその言葉に異議を誰一人となえず、それが事実であることを示していることに。

『・・・だが。体を重ねた、たった一人の相手だ・・・。

・・・選べ。』

ラルに首元にナイフを突きつけられ、他のウィッチ達に銃を構えられながら選択を迫られる。

『ここで、私たちと愛を育むか・・・。

・・・【別の形】で共にあり続けるのか。』

その、【別の形】というのが何を示しているのか

彼女たちのハイライトのない瞳を見て一瞬で分かった。

叫びそうになる口を手で抑えながら

こくり、と一度だけ頷く。

その返答に満足したのか、

武器を降ろしていつもの

かわいらしい顔つきに戻る彼女たち。

ホツとしていると、がちやり、と首に

何かを嵌められた。

『……ずっとずっと、考えていた。』

ラルが語る。

『……君がどこにもいかないようにするには、

どうしたらいいかって。』

ヴァルトルトが紡ぐ。

『目を離せば、あなたはまた別のウィッチ達のところに行

行ってしまふ。』

ロスマンは唇を抑えて言う。

『・・・そんなのはだめ、です。』

ぼつり、とサーシャが漏らす。

『ここにいる全員で考えたんだ。』

直枝がぎゅつと拳を握り締める。

『靱帯を切っておくとか、四肢を切断して

達磨として傍に置くとかいろいろ案が

ありましたけど。』

定子がふふ、と笑う。

『だから、ね。』

ジョゼが潤目で見つめてくる。

『私たちが相手をします。・・・どんなことだって。』

顔をほんのりと赤らめた孝美が頬を抑える。

『ボバさんっ!!これで、ハッピーエンドですっ!!』

えへへ、とハイライトのない笑みを浮かべながら

ひかりが嬉しそうに叫ぶ。

かくして、この日から俺の彼女たちとの『蜜月』が

始まった。

——これがきつかけで、後の統合戦闘航空団同士の【話し合い】が起き、最大級の修羅場を迎えることになるとは一体だれが想像できただろうか。

502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ  
(～蜜月編その3～)

⑳

「ううあ……。」

「あんっ♡あんっ♡」

ギツ、ギツと俺の顔の上に

乗っかってあそこを擦りつけてくる

ジヨゼ。

秘部は既にヌルヌルになっており、

中に舌を入れると彼女の喘ぎ声が

更に大きくなる。

「……ん……ちゅ……。」

ずりゆ、ずりゆ、とその大きな胸で

俺のモノを挟み、啜え込むニパ。

ベッドに四肢をつながれ、

身動きが全く取れない状況で

2人に嬲られていく。

じゅじゅじゅじゅ、と音を立ててジョゼの  
愛液を吸うと、恥ずかしそうな  
声をあげる。

「いやあっ♡音っ♡たてないでえっ♡

恥ずかしいよおっ♡」

「・・・むー。・・・んんん・・・♡」

うなるような声を挙げながら

嫉妬したのかニパが俺のモノを

口をすぼめて早く精液を出せ、

と言わんばかりに締め上げてくる。

2人に挟まれ、とうとう限界を迎える。

「!!むうううううっ!!」

「ああああっ♡♡だめっ♡♡だめえええっ♡♡

「・・・んぶう♡♡」

ジョゼが大声をあげて果て、

ニパの口の中に大量の精子を出す。

じゅず、ずずず、とこぼさないようにそれを吸い、飲み込んでいく。

しばらく、ぴくん、ぴくん、と

体を痙攣させていたジョゼだが、

誰かによつてその体がどかさされる。

「はいはい。次は僕と先生の

番だからねー♡」

「・・・ニパさん。あなたも

いつているでしょう？交代しなさい。」

「・・・はい。」

ロスマンの言葉にちゅぽん、と

俺のペニスから口を離し、

不服そうな声を出すニパ。

そして、今までベッドにつながれていた

腕を足が解放され、今度は縄で

後ろ手に縛られる。

「……ふふふ♡今日は思いつきり  
恥ずかしいことするからねー♡」

「……。」

ヴァルトルートはブラのホックを外し、  
その爆乳を露にしながらせせら笑う。

ロスマンは無言で俺のペニスに

目を奪われ、放心している。

何をされるのかドキドキしながら

待っていると、ヴァルトルートの膝に

後頭部を乗っつけられ、口に胸を押し付けられる。

「んぶう……。」

「はあ♡はあ♡……授乳手コキつていうんだよ♡

ちよつと違う形だけ♡いやー♡

まさか僕がこんなことをするとはねー♡」

「……んっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

目をつむりながら母性に満ちた笑みで

俺に胸をむにゆうううつと押し付けてくる



ヴァルトルト。

ロスマンは俺のペニスに

自分のあそこを擦りつけ、

スマタをし始める。

ぐちゅっ、ぐちゅっ、という

粘液と愛液が絡み合った卑猥な音が

ひびき、亀頭が彼女の豆にあたるたびに

軽くイキそうになる。

ヴァルトが手で自分のモノをいじり、

自慰をし始める。

「・・・あうっっ♡う・・・うあ・・・♡すっっ♡」

はあっ♡はあっ♡いけないことしちやってるう・・・♡」

「ああっ♡ああああっ♡♡」

だんだんと声が大きくなり、

体の揺れが大きくなっていくロス。

絶頂に耐えるかのように、

2人はその身をかすかに震わせている。

かくいう、俺も二人に責められ  
限界を迎えつつあった。

「・・・つぐ！むううううっ!!」

「あああっ♡そんな強く吸っちゃだめええっ♡」

「イクっ♡イクっ♡イクうううっ♡」

ぷしやあああ、とあそこから潮を吹くロスマンと  
ぶるぶる、と震えて達するヴァルトルト。

そして、俺はロスマンの体に  
精子をぶちまける。

どろりとした汚らわしい液体が

白く、美しい彼女の肌を犯しているかと思うと、

更にムラムラとし、また、少しずつ

愚息が元気を取り戻していく。

「・・・ねえ♡まだまだここ、元気みたいだね?♡」

「お・・・おおっ。」

「・・・ふふふ♡まだ、まだ・・・でき、そう・・・ね・・・♡」

精液でぬるぬるになった亀頭をヴァルトルートに

右手でくちゆくちゆ、と擦られ

情けない声をあげる。

はあつ、はあつ、と息を荒く乱し、

髪が艶つぽく乱れたロスマンに

キスされる。

「ずるいずるいずるい!!私の番だつてば!!」

「・・・はあつ♡はあつ♡」

「あつ♡またガチガチになったあ♡」

「こらー!!伯爵も先生もルールを破るなー!!」

こうして、朝の情事は終わりを迎えた。



とある基地の一室にて、

彼女はベッドに寝転がりながら

それをじつと見ていた。

カールスラント【4強】の1人にして、

【世界最強のナイト・ウィッチ】である



薄い彼女は、久しぶりに  
少し涙ぐんだ。

生来、気弱で優しい彼女は

何か自分がまずいことを

してしまったのかと考え、

不安で胸を抑える。

そして、そんな彼女に

通信がかかってくる。

泣き止んだ彼女は慌てて

通信機のスイッチを入れ、

返事をする。

「あ、も、もしもしっ。」

『……久しぶり……』

彼女はその声の主を知っていた。

——『……ちよつと話したい事が……ある……の。』

サーニャ・V・リトヴァク。

ボバの正妻（自称）である。



「……。」

504 統合戦闘航空団基地にて。

とある2人の人物が司令室で

資料を見ながら真剣な顔つきで

対峙する。

「……だからね。」

司令官である、フェデリカ・N・ドツリオは

キリツとした顔つきで正面の竹井醇子に

告げる。

「——やっぱり、皆でメイド服を着るのはどうかしら?」  
「……。」

竹井醇子は可愛そうなものを

見る目でフェデリカを見つめる。

また、いつものおかしな発作が

始まったか。

そう思ったが、彼女は言わないことにした。

「・・・さすがに、それは許容できません。」

「あー!!ちよつと!!それ必死に考えたのに!!」

そういつて、フエデリカが企画した

案が書かれている資料を没収する。

504のメンバー全員でメイド服を着て、

カレンダーを作つて売ろう、という

アイディアである。

金策としてはいいかもしれないが、

ここまで風紀を乱すものは

醇子にしてみれば却下するのが

当然であつた。

「・・・全く。トラヤヌスの作戦も

近いのですから、しっかりしてください。」

「……。」

そういふとぷいっとちよつと拗ねた顔をしてそつぽを向くフェデリカ。

(……よし。特に異常はなし。)

竹井醇子は静かに歓喜していた。

彼を思い出している人間は504では一握り。

しかも中途半端にしか覚えていないので

その想いが復活することもない。

——だから、自分が初めて

彼の一番で、特別になれるかもしれない、と思うだけで顔が緩む。

そつぽを向いているフェデリカは窓の外を眺めながらぼそつとつぶやく。

「——あーあ。彼がいればなー。」



その小さな声に目を見開いて、

驚いた顔つきで彼女を見る醇子。

「……ん？あれ？私何か言ったかしら……？」

「……いいえ。」

「あら。そうよね。」

はははは、とフェデリカと醇子は笑いあい、

——醇子は歯ぎしりした。

フェデリカは、醇子に背中を向け、

窓の外をぼーっと見つめている。

（……また、なの？）

いつもいつも、邪魔が入ることに

苛立ち、背中を向けているフェデリカに

向けて持っている刀を振り下ろそうと

する醇子。

しかし、ここで切ったら

彼に再会して、結ばれることは

永遠に叶わぬ夢となってしまう。

結局、自制心が勝ち、

刀を降ろして、とんとんと

足で地面を叩く。

(・・・先生。私、あなたが絶対に

来てくれるって信じてます・・・。

・・・もし、来てくれないのなら、)

神速の居合を放ち、

持っていた資料を一刀する。

(・・・あなたのこと、こうしても

いいですよね・・・。)

見たも者の目を奪うような笑みを浮かべ、  
彼女は待ちきれない様子で静かに震える。

幕間く再び、世界最強の賞金稼ぎになるまで その1く

ちりん、と指でグラスを軽くはじく。

中に入っていた氷が

反響して、きれいな音色を奏でる。

——ここは、とある国の秘密のバー。

他の誰も知らない、俺の唯一

隠れ場でもある。

バーカウンターの頬をつきながら

今までとこれからのことを考える。

”あいつ”との決着はついた。

だが、まだ大きな問題が残っているのに  
気がめいり、思わずため息をつく。

はあ、と憂鬱気にグラスを傾けていると

スツとマスターが俺の前に新しい

グラスを置いた。

中には、高そうなカクテルが入っている。

「……頼んだ覚えはないぞ。」

「……。」

俺がそういうと、くいつとあごで

俺の真横を指し示す彼。

「……。」

そこには、俺の大事な【妹】がいた。

数秒の間見つめ続け、

動けないでいると、彼女が

俺の横に座ってくる。

「……マスター。私にも

彼と同じものを。」

「……。」

圭子がそういうと、

カクテルを作り始める彼。

しやかしやか、という音が

静かなバーに響く。

「……兄さん。」

「……。」

熱っばいで俺を呼び、赤い頬を

俺に近づけて指を絡めてくる。

俺たち以外に客がいないのが幸いだったが、

圭子にバレているということは他の

ウィッチ達にもばれているかもしれないと

ハラハラする。

そんな俺の心情を読み取ったのか

彼女がくすり、と笑う。

「大丈夫よ。……それにしても。」

「……なんだ？」

バーの中を見回して言う。

若干ジト目で俺の頬を引っ張ってくる。

「……いつもこういう場所です。」

他の女と会っているの?」

「・・・それは、1回目の人生の時だけだ。」

「そうかしら。」

カクテルが入ったグラスが圭子の前に置かれる。ありがとう、と彼女がマスターにお礼を言うと、マスターがわずかに微笑んだ気がした。

「・・・ねえ。兄さん。」

「・・・なんだ?」

「・・・兄さんの事、聴かせてよ。」

突然そんなことを言ってくる彼女に思わず笑った。

「・・・何がおかしいのかしら。」

若干、むーと頬を膨らませて拗ねる。

その姿が子供のころの彼女の姿と

重なって見えますますおかしく感じた。

「いや。なんでも。・・・ライーサとハンナへの嫉妬か?」

「……違うもんっ。」

っん、とそっぽを向きながらも絡めた指を離そうとしない。

マルセイユやライーサとはちよつと違い、

大人の女ぶりたいからなかなか

ストレートに愛情を表現してはこない。

しかし、2人つきりになると

こうして体を摺り寄せてくる。

初めて扶桑で会ったときと

何ら変わらない。

「……俺の過去を知っている奴は、少ない。」

「だからよ……特別だって思えるじゃない。」

ふふ、と短く笑う。

薄い化粧が彼女の魅力を引き立て、

俺の中にまだ残っていた彼女の子供のころの

印象を完全に消し去った。

「……さすが記者。そういえばこの場所はどっやって？」

「秘密。」

えへへ、といたずらが成功した悪童のように  
茶目つ気を含めて嬉しそうにさういう。

「……なんで、裏の世界にいたの？」

真面目な表情になった彼女に聴かれる。

「……ウィッチは知らないんだ。」

ネウロイよりも厄介な敵がいることを。」

「それって……。」

搾りだすような声をあげて

そういう俺の姿に気圧されたのか

声を詰まらせる彼女。

酔いが回ったのか、相手が他の誰でもない

圭子だからか、ぼろぼろとこぼしてく。

「……あれは、俺がこの世界に

来た1910年ごろの事だった——。」





痛い。

体がとにかく痛い。

俺の周りには何かの壊れた装置があり、  
タイムカプセルのようなものが二つ  
置かれていた。

二つともふたが空いて、中には

誰も入っていないかった。

ふらつく足でゆっくりと歩く。

——ここは。

そして、かすかに見覚えのある土地だった。

(・・・ブリタニア、か?)

一体何度目の転生だろうか。

こうしてまた、刺されて終わりを迎えた俺は、

生まれ変わりを果たした。

終わりの見えない転生に嫌気が若干刺しながらも

すぐに自分の状態を確かめる。

見たところ15歳くらいだろうか。

近くに落ちていたガラス片を右手で取り、

自分の顔を映すと、そこには何とも

微妙な顔つきの男が映っていた。

(・・・一回くらい、イケメンで生まれたりはしないんだろうか。)

前世どころか日本にいたときと変わらない顔面偏差値に

泣きそうになりながらも、首から下を見下ろす。

患者服のようなものを着ており、

頭の中にはそれまでの人生のことが

記憶に残っていた。

しかし、それは部分的なものであり、

わからない記憶も多々ある。

右手で頭を抑えながら考える。

(・・・俺の知り合いだったウイツチ達は

まだ皆生まれていないはず。・・・)

その時、頭の中にある考えがよぎる。

今回くらいはウィッチに関わらなくても

いいんじゃないだろうか。

そうすれば少なくとも修羅場に

巻き込まれる可能性はゼロであると。

幸い、能力は失っていないので

戦うことも出来る。

自衛どころか、そこらへんにいるごろつきを

暴力で屈服させ、金を巻き上げることも出来る。

だが、その選択をもしすれば、

彼女たちはどうなるのだろうか。

頭の中を、かつて見た、引退後のウィッチ達が行方不明になったり、

誘拐されたという新聞の記事を思い出す。

ぎり、と歯を噛み締める。

(・・・それは、だめだ。)

もし、その中に俺の知り合いのウィッチ達が

1人でもいたら――。

いつの間にか背中にしよつていたジェットパックがぼつ、ぼつ、と短く火を噴く。

頭がフルマスクで覆われ、体を

装甲が包み込む。

さて、相棒に乗つてまずは扶桑にでも行くか。

ネウロイを倒し、戦果をあげて

軍部の上層部と取引をする。

そのためにもまずは、身を隠しながら

情報を集めよう。

そう思つてあたりを見回すと

それが無いことに気が付く。

(・・・スレーヴーがないっ!?)

ただだつ、と地面を足でけり、

あちらこちらを走り回つて探す。

しかし、何も見つからない。

さーつと血の気が顔から

引いていくのを感じる。

スレーヴーがないということは  
自由に国から国を飛び回れない。  
つまり、ウィッチに出会ったら  
逃げ切れないことを意味していた。

その事実は俺の胃を締め上げ、  
胃液を逆流させようとしてくる。  
ふーつ、と深呼吸をすることで  
落ち着き、そして決意した。

(・・・ウィッチ達にバレないように、  
陰から守ろう。)

それなら、俺にも実害はでないし、  
安全だ。

うん、きつと。  
完全な策だ。

(よし、まずは近くに町がないか探して、  
善良なごろつきを締め上げて金を得ると

するか。  
すたすた、と道を歩く。

——これから歩く道のりが、  
こんなもんじゃない厳しいものであると  
一体誰が予想できただろうか。

◆  
「・・・それから、俺はとある街についた。  
そこでな・・・。」

圭子に話の続きを言おうとしたとき、  
誰かが店の中に入って来た。

「・・・あ。」

首からカメラをぶら下げた、  
とある記者。

エルネスタ・ニールマンが

驚いた顔で俺と圭子を見ていた。

「あ。あなたはっ・・・!!」

「・・・しー。」

思わず叫ぶ彼女に静かにするよう、

唇に指を当てて諭す。

マスターがぎろり、と彼女を睨むと

委縮したニールマンが圭子が座っている

反対の、俺の隣に座ってくる。

「ご、ごめんなさい・・・。びっくりしたもので・・・。」

「・・・あら。あなたもカメラを持っているわね。もしかして、記者?」

興味津々といった感じでニールマンが首からぶら下げている

カメラに見いやる。

そういうえば圭子も写真を撮るのが好きだった。

「は、はい!!・・・あれ?もしかしてあなたはっ!?!」

「しー!」

圭子の正体に気が付き、また騒ぎそうになる

彼女が今度は圭子に静かにするよう注意される。

またか、といった顔でマスターが

俺たちを見てきた。

すつかり縮まったニールマンが

しよぼん、と頭を伏せてつぶやく。

「……ごめんなさい。」

「気を付けてね。……あなたも兄さんの知り合いかしら？」

「はい。……あなたは、加東圭子さんですよ？ 記者の

中では知らない人はいないです。」

「ふふふ。嬉しいことを言ってくれるわね。」

和気あいあいと話す2人。

このままいけば、俺の恥ずかしい過去を

話さずに済むか。

「……でね。隣にいるこの人の過去について

ちよつと記事を書いてくれないかしら。」

ぶぼつ、と口に含んでいたカクテルを



吐き出す。

高濃度のアルコールが鼻に入り、喉が痛くなる。

「だ、大丈夫ですか？」

「・・・兄さん？逃げられると思わないでね？」

どうやら、話の続きを言うしかないようだった。

つづく？

## 502 統合戦闘航空団『ブレイブ・ウィッチーズ』へ

## 1 (蜜月編その4)

朝、昼、晩と俺は彼女たちと体を重ね続けていた。

本番行為さえしていないものの、

毎日襲われては、交わることを

強制され、精を絞りつくされていく。

大きなベッドで、幸せそうな笑みを

浮かべて寝ている彼女たちに囲まれ、

考える。

だんだんと、思考が鈍っていつていと。

毎朝の情事にはもはや体が反応して

自然とあそこを膨らませてしまうし、

口移しで食べ物を餌付けされたり、

体を洗われたりしても嫌な気もちが

全くわいてこなかった。

それどころか、今では

彼女たちが傍にいないと

違和感を覚える始末である。

ラルは言った。

擦り込んだものが易々と

取り払えると思うなよ、と。

最初に会ったときから

やけに積極的だと思っていたが

このためだったのか。

彼女たちにバレないように、

近くになぜか置いてあつた

通信機を手に取り、

手元に引き寄せる。

体を丸めて声が寝ている

彼女たちに聞こえないよう

小声で話す。

暗くてどのコード宛てかは

決められなかったが、この際誰でもいい。

そうしているうちに

連絡がつながる。

「……………もしもし。」

『……………はい。あなた♡』

ほっと息を吐く。

ルーデルでないのが幸いだった。

ライーサならまだ安心である。

が、ここで気が付く。

——アフリカにいる彼女に連絡を取って、

どうするとか。

ガラランドにつながれば数日で助けに来てくれるかも

しれないが、アフリカからここまで最短でも

20日はかかるだろう。

いや、手続等を踏む必要があるかもしれない。

そうであればもつと時間がかかる。

自分がとつた選択が何のプラスにもなっていない

ことに気が付いたが、今更電源を切るのも

不自然である。

額に脂汗をかきながら

通話を続け、会話を打ち切る

タイミングを探る。

「ライーサ．．．あー、その．．．。」

『ふふふ♡どうしたのですか?』

幸せそうな声でそう問いかけ来る彼女。

隣で寝ていた直枝が「浮気か．．．?」と

寝言を漏らしたのを聴いたとき、

通信機をベッドから落としそうになる。

「い、いや．．．。．．．そっちはどうだ?」

『．．．戦線のことですか? すっかり落ち着いているので

近いうちに会える思います♡」  
「ああ。」

ガリアはとつくに解放されて、グリゴーリも攻略されたのは  
周知の事実だが、まさかアフリカまでとは。

『そうそう。最近、502がネウロイの巣を攻略したという  
噂で持ちきりですよ。．．．一体誰のおかげなんでしょうね。』

「．．．．．」  
まずい。

ライーサは気が付き始めている。

俺が502にいるのではないかと。  
心臓を右手でぎゅつと抑えながら  
必死に嘘をつく。

「．．．．．知らないな。ところで、  
アフリカにいる他のウィッチ達は  
俺のこと、覚えているのか．．？」

『．．．．．』

俺の問いに彼女が初めて黙る。

不機嫌そうであることは  
なんとなく感じられたが

なぜそうなのかはわからなかった。

『……知らないです。ハンナ達には  
話していませんし。』

てつきりラルみたいにバリバリ俺の  
ことを教えているのかと思つたが  
そうでもないことに胸をなでおろす。

「そうか。」

『……なんだか嬉しそうですね？』

「……そんなことはない……ぞ。」

通信機から目をそらしつつ、  
そういう。

電源ボタンを押してそろそろ

会話を打ち切ろうとしたとき、

横から手が伸びてきて

通信機を奪う。

「……ほう。これが、そうなのか。」

横を見れば、ラルと孝美が

興味深そうに機械を見ている。

『……? 誰ですか?』

「あ、いや。」

突然の見知らぬ声に戸惑ったのか

ライーサが疑問の声をあげる。

「なに。貴様は知らなくてもいいぞ。

……ライーサ・ベットゲン。」

『……その声、どこかで聞いたことがあります。

……! そうか、あなたは……。』

ぎりぎり、と通信機から歯ぎしりするような

音が聞こえてくる。

「あいにく、新婚生活を夫婦で満喫中なのでな。



そろそろ、切らせてもらおうとするぞ。」

『……は？』

聞いたことがない彼女の本気の怒りの声。

そのたつた一言にどれだけの感情が

こもっているのか。

「……じゃあな。負け犬。」

『……』

殺す。』

それだけ言うと、ぶつり、と電源が切れる。

そして、ライーサはキレていた。

震える俺を後ろからそつと抱きしめてくる孝美。

白い下着を着ており、彼女の魅力を

引き立てている。

「そんなことより……♡」

「あつ。」

右手をパンツの中に突っこまれ、

ペニスを掴まれる。

「ううぐ．．．。」

「あはあ♡こんなに大きくしちやつてえ♡

一体だれのことを思い浮かべていたのですか？♡」

「そ．．れ．．は．．。」

朝、昼に出したというのに

すぐに元気を取り戻している愚息。

そして、前からはラルが

ピンクの下着姿で抱き着いてきて、

左手を孝美と同じように俺が

履いているパンツの中に突っこんでくる。

「あ．．ああ．．。」

「ふふふ．．．♡そう、それだ．．．♡

もつと見せろ．．♡その情けない姿を．．．♡」

完璧にスイッチが入ったラルと孝美。

顔は責められていないので、

大丈夫だと思っていると、

今度は横から誰かの手が伸びてきて、

キスされる。

「んん．．．♡」

くちゅ、くちゅ、と舌と舌が絡み合い、

とろお、とよだれが垂れていく。

サーシャが獣のように俺の唇を奪っては

夢中でついばむ。

「はあっ♡はあっ♡足りないですっ♡」

こんななんじゃあっ♡もっとお♡」

普段は絶対に見せないような

ト口顔で俺とキスし続ける彼女の

姿を見ているだけで、自然と

あそこが更に大きくなっていく。

「はあっ♡はあっ♡．．．ううー♡」

「むうっ♡むううううっ♡」

「あっ♡あっ♡あっ♡」

ぐちゅ、ぐちゅ、という音が  
闇の中で響き渡る。

朦朧とする意識の中、

気絶することさえ許されずに、  
彼女たちに体を掴まれ  
弄ばれていく。

そうした状況でいつまでも  
耐え切れるわけもなく、  
絶頂はやってきた。

「・・・!!うぐあああっ!!・・・」

「きゃっ!」

「・・・おお。」

「・・・あううう・・・♡」

ラルと孝美の手に精を放つ。

2人の手にドロドロの精子が

かかり、パンツの中がぐちゅぐちゅになる。

ぐつたりと孝美にもたれると、

ゆつくりと態勢を変えられ、

彼女に膝枕される。

「……ふふふ♡いっぱい出ましたね……♡」

「……あ……あ……。」

びくん、びくん、と体がけいれんし、

息が苦しい。

射精後の余韻に浸っていると

上からラルが乗っかってきて、

その有り余るグラマラスボディを

押し付けてくる。

「……逃がさん♡……次は直接飲む♡」

そういうやいなや、俺の下着を剥ぎ取り、

フェラしてくる。

出したばかりで萎えているそれは、

彼女の舌づかいで刺激されていき、  
また、大きくなつていく。

「はあっ♡はあっ♡~~~~~♡」  
隣を見ると、そこには

先ほど俺が脱がされたパンツを

顔に当て、右手で自分のあそこを

いじつてオナニーしているサーシャの

姿が見えた。

「だ、だめっ♡こんなことっ♡・・・ああ、

でもだめっ♡とまらないっ♡・・・うううう♡」

俺に見られている羞恥心と気持ちよさで

狂ってしまったのか軽く泣きながら

嬌声をあげる。

「こっちも触つていいんですよ♡」

右手を孝美に掴まれると、彼女の

胸を触らせられる。

むにゆり、と確かな弾力が手に伝わり、

大きな胸であることを伝えてくる。

俺が手を動かして揉み始めると

あつ、あつ、とよがり始める。

「・・・んん・・・んっんっんっんっ。」

「あっ!!ラルっ!!」

顔を激しく上下に振り、

髪が乱れるのも構わず、

俺のモノをほおぼり続けるラル。

そして、とうとう2度目の限界を迎える。

「あああっ!!」

叫んだ瞬間、ラルの口の中に

精子を出した。

きゅうううっつと口をすぼめられ、

搾り取られていく。

「・・・ひいっ♡」

孝美が気持ちよさそうな声をあげて、

眼の焦点があつていない顔になる。





「・・・さあ♡まだまだ終わらせんぞ・・・♡」  
火がついて収まらない彼女たちに  
一晩中犯された。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その1】（抜け出したその先には）

トラヤヌス作戦。

それは、504が実行したネウロイとの  
コミュニケーション実験。

上手く行っていれば、ネウロイとの  
共存も夢ではない。

しかし、人型のネウロイに504が接触した瞬間、  
更に大きなネウロイの巣が上空に出現し、  
人型のネウロイは他のネウロイによって消滅。  
そして、504は――。



「ぐっ！」

竹井醇子率いる504の面々は

ネウロイの軍勢を食い止めていた。

ヴィネツィアにいる人々が

非難を終えるまでの間、

死守する必要があつたからである。

巧みな連携と、個々の奮迅によつて

持っていた戦線はそれでも

圧倒的な数の利に押されて、

不利になつていく。

傷ついた仲間を背負い、

道を阻むネウロイに向かつて

醇子は吐き捨てた。

「……邪魔よ。」

持っている銃をネウロイに向かつて発射すると

そのまま離脱する。

かくして、504は半壊した。

撤退はうまく行き、死者が出なかったことは奇跡に等しかったであろう。

そして、運良くというか、悪くというかとあるニアミスが発生した。

もし、醇子があと一分だけ長くこの場に留まっていたら、彼女の望みは叶っただろう。

——それは、空の彼方からやってきた。

気が付いたネウロイがビームを発射する。

しかし、まるでどこに撃たれるかがわかっているかの如く、その飛行物体は最小の動きで躲す。

その人物は背中から火を噴く機械を背負い、フルマスク、金属製のアーマーを着こみ、

右手には奇妙な銃を。

そして、左手には黒く刀身が光る

剣を持ち、ネウロイに突っこんでいく。

「……ああああああっ!!!」

その男は、なぜか体のいたるところに刺し傷があり、血を流している。

それでもお構いなしに、片っ端から

ネウロイに襲い掛かり、コアを撃ち抜き、

ライト・セイバーでたたっ切っけていく。

「しやぎやああああああっ!!!」

獣のごとき方向を発するその生物に

ネウロイの身がわずかに遅くなる。

人間が出すものではないその声が

空に響き渡る。

——502を脱出した男は、久しぶりの空と

戦いに興奮し、すっかり我を忘れていた。

「……死ねええええええええっ!!!」

ストレス発散とばかりにミサイルを放って



——他の人間に見つかり、追いかけてまわされ、正気を取り戻すまでの間、やりたい放題していた。



とあるカールストラント基地にて。

司令室の一角。

首からスコープをぶら下げた

若き将校は机の上に置いた

通信機をじつと見る。

アドルフイーネ・ガランドは

ずつともやもやしていた。

(.....)

あの男が死ぬわけではない。

何かあったとしても、

それが、実力に裏打ちされた

ものであり、彼女と彼の付き合いの  
長さを証明する感情でもある。

だが、最後に男が女によこした無線の  
内容を何度も彼女は反芻する。

(・・・知らない、女の、声・・・。  
またか。

それが最初に出た感想であるとの同時に、  
机の上で組んでいた手をぎゅうううつと  
力を込める。

「・・・ふ。ふふふ・・・。」

そして、彼女の口から笑いが漏れる。

ああ、そうか。

そうなのかと。

自分への宣戦布告であることを

即座に見抜いた彼女は彼を探すために  
四方八方に自身の手を伸ばした。



しかし、すべて空振り。

徒勞に終わり、今にも

キてしまいそうな彼女の元に

朗報が入る。

電話が鳴った。

すぐさまそれを手に取り、

応答する彼女。

「……もしもし。」

『……久しぶり。』

探していた男からの電話であった。

◆ 「ああ。そうそう。俺だ。．．．なに？」

『私にはそんな俺とかいう名前の知り合いはいないね。』だと？

．．．．．もしかして、拗ねているのか？．．．あつ、いや、なんでもないぞ。うん。」

「．．．．．。」

「え？今どこにいるかって？．．．あ。ああー。

ちよつとな．．．．．行き倒れていたところを親切な人たちに介抱してもらった。」

「．．．．．。」

「．．．．．。」

電話で誰かと話す男の姿を見つめる22の眼。

皆、それぞれがむーと頬を膨らませたり、ジト目でその姿を見守っている。

坂本美緒は、先日完成させた自身の愛刀をさやから抜いてはばちん、とまた戻すのを繰り返し、そのイライラを抑える。

・・・目の前にいる男を切ったら、  
さぞかし刀に脂がのって、切れ味も  
増すことだろう。

「・・・ん? ああ、大丈夫だ。

大丈夫。・・・おお。」

「・・・ばか。」

「・・・ふんだ。浮気者。」

サーニャとシャーリーはつん、と

彼からそっぽを向く。

小声で罵倒しながらも

ベッドで横になりながら痛々しい姿で

電話している彼の傍にそっと寄り添っているのは

心配しているからだろうか。

「おおー。・・・いや、へいき、平気。

・・・そろそろ切るわ。・・・え?

場所をまだ教えてもらっていないって？」  
ちらり、と男が周りにいるウィッチ達に

目線を送る。

教えてもいい？と。

そして、彼女たちは皆、一様になつこりと笑うと

——それぞれの武器を取り出す。

ぶるりと震えた男は首をぶんぶんと横に振りながら  
電話相手に伝える。

「どこかの空だ。じゃあなっ！」

がちやん、と最後は半ばやけくそで

電話を切った男はふうーと息を吐く。

何日も閉塞空間に閉じ込められ、

外に出られたと思ったら、重症と負っていたので

またベッドの上にUターン。

神様。俺はそんなに悪いことはしていないはずだが。

悪びれずに男がうんうんうなっている、

隣で扶桑刀を構えていた坂本美緒が

ふつと笑顔を見せる。

「まずは、おかえり、と言っておこうか。」

「……この、大馬鹿がつ!!」

どごむ、と右ストレートを

男の顎に食らわせる。

うわぁ……とルツキーニとエイラが

声をあげてうめく。

「今の今までどこに居たんだ!？」

それになぜあんな重傷を負っていた?!」

「……………」

男は答えない。

こうなったこの男は意地でも話さないことを彼女たちは長年の付き合いから知っていた。

そんな変わらない男の姿を見て、

肩を下ろした坂本が続ける。

「．．．全く．．．きさ．．．ま．．．と

いう．．．奴は．．．。」

何かをこらえるような声を出す美緒。

その目尻には若干の涙が浮かんでおり、

どれだけ彼女、そして彼女たちが

男のことを気遣っていたのかが伺える。

「．．．．．ただいま．．．すまん。」

『!!』

男がそういうと、501の面々が一斉に飛びつく。

かくして、501は再結成されることとなる。

——世界中に散らばった爆弾を解除することなく。



言えるわけがない。

「大方。504を助けるために

ネウロイ相手に戦い続けていたのだから？」

「……………」

美緒の質問に閉口する。

言えるわけがない。

「全く。貴様はいつまでたっても変わらんな。」

ヴァルトルートにあきれ顔でそういわれる。

言えるわけがない。

「……………」

ミーナが俺の首元に手をやり、

スツと目を細める。

「この首を絞められたような跡……。どうしたのかしら？」

おう、速く話せよ。

そう彼女たちの目は物語っている。

言えるわけがない。

——媚薬を盛られたりしたとはいえ、

502の面々とにやんにやんからです、などと。

「・・・ボバ、さん・・・。」

きゆうつとベッドで横になる俺の

包帯でぐるぐる巻きにされている

手を両手で包み込んでくる芳佳。

「・・・会いたかったです・・・！」

「・・・っ！」

彼女の笑顔を見た瞬間、502のひかりの

顔が脳裏に浮かんできた。



——傷だらけの体で黙る男に対して乙女たちが  
持った想いは皆一つであった。

『ずっとずっと守ら(ねば)(りますわ)なくちゃ・・・!』

ネウロイドどころか、502から逃げるときに  
めった刺しにされたことを勘違いする  
乙女たちは、今度は私たちが彼を守る。

そう意気込み、決意を体にみなぎらせるのであった。

(・・・?この匂い・・・?)

一部のウィッチ達が男からわずかに香るその  
匂いに気が付いても、男のけがを心配して  
追及しなかったのは果たしていいことだったのか。

それは誰にも分らない。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へりとり！ 【その2】（久しぶりに）

いじめ、よくない。

それが501の模擬戦で

俺が最初に抱いた感想だった。

「……それでは。久しぶりに結成ということ、

それぞれチームを作り、模擬戦を行います。」

はーい、と返事をする芳佳やルツキー二達。

おう、といった感じでうなづく美緒やバルクホルン達。

彼女たちとの再会から少し経ち、

芳佳の魔法で傷もやつと癒えた頃、

ミーナと美緒が腹筋をしている

俺のところに来てきた。

『模擬戦?』

『そうよ。あなたも怪我をしてリハビリをする必要があるでしょう?それも兼ねてね。』

『……』

その時、隣で自分が作った刀を見せびらかすように掲げてきた美緒にばかり目が行って、ミーナの話があまり頭に入ってこなかった。

で、模擬戦当日。

こうして、チーム分けをすることになったのだが……  
組みにくい。

何というか、久しぶりに会ったので

何を話せばいいのやらわからない。

ウイツチ相手にどもることなど

本当に久しぶりであった。

どうしようか困っていると、

エーリカに手を引かれ、

端っここに連れていかれる。

「はいはい。じゃあこつちねー。」

「……ふん。」

エーリカに手をつながれながら  
バルクホルンがいる方に

連行される。

そして、反対側から

何者かが俺の体を掴んで

腕が伸びる。

「……だめ。」

「……サ、サーニヤのためだからナ!!……ちよつとだけ……。」

じつと俺の目を見てくるサーニヤと

エイラが反対側を掴んでいた。

あれ?これを502で見たような気が……。

そして想像通り、

思いつきり引つ張りあいが始まった。

「なんだヨ!!離せヨ!!」

「そつちこそ、いつつもサーニヤに近づくなとか

言っていたくせに、おかしいんじゃないのー?」

病み上がり、傷が治ったばかりの体には

死ぬほど痛い。

「.....」

「こつち来なよー!!」

そして、なんとルツキーニが肩に乗っかってきて、

無言、無表情のシャーリーが俺の首に抱き着いてきて

引つ張ってくる。

「あがががががつ!!があああつ!!」

痛い。死ぬほど痛い。

結局、ミーナの提案でくじ引きをすることに。

その結果……。

「……」  
「……」  
「……」

……俺と、最初に接触した  
シャーリー、サーニヤと組むこととなった。

俺はこの時感じた。

——絶対、ただで済みそうにもない、と。



「へっへーん!!私の勝ちー!!」

悔しいですわー!と叫びながら

エーリカを追い回すペリーヌ。

リーネはバルクホルンと相打ちになったが、

さすがにペリーヌでもエーリカには

叶わなかったらしい。

彼女はあれでもカールスラント【4強】の1人だ。

あのバルクホルン、ミーナ、ラル、ヴァルトルートでさえ

この中に入っていないのだから、カールスラントの

抱える戦力のすさまじさが伺える。

扶桑に比肩するほどである。

そして、ついにやってきた。

やってきてしまった。

「……………」。

「……………」。

「……………」。



「……なんだ?」

ずっと黙っている俺の耳もとで  
ぼそり、とささやいてくるシャーリー。  
そのささやきに対して返す。

「寂しかったんだからな……」

ちよつと甘えるような声で

鼓膜を犯される。

また、病むと思つていたところに  
こんなことをされてくらくつと来た。

「………ねえ。」

「………な、なんだ?」

今度は反対側からサーニヤが小声で  
耳打ちしてくる。

身構えていると、

頭を肩にこすりつけられる。

「……後でたつぷり、マーキングさせてね?」

その可憐な笑顔に胸元を抑えてうずくまる。近くにいた美緒とミーナが「どうした(の)?!」と言ってきたが手でそれを制して再び立ち上がる。

ようやく胸のドキドキが落ち着いてきた。

ふーと息を吐き、立ち上がると少し

離れた場所で俺のことを見守ってる

芳佳と目があい、

——最高の笑みで応援される。

「がんばってくださいーい!!」

「……しゃああおらああっ!!」

右手にダーク・ライト・セイバーを掲げ、

ぶんぶんと芳佳の方に手を振る。

それに応えて更にぶんぶんと

振り回してくる芳佳。

そして、それに対して

更に俺が——。

「・・・いい加減にせんかつ!」

鞘に入ったままの刀で

背中からぼくり、と美緒に殴られる。

「・・・これは、私が預かっておく。」

すつとダーク・ライト・セイバーを

回収され、フィールドから離れた

場所に移動する美緒やほかの面々。

そして、俺たちの相手は――。

「へっへー。・・・506みたいには

行かないからね?」

「・・・腕が落ちていないか、

確かめてやろう。・・・こい。」

スーパーエースタッグ。

エーリカとバルクホルンのペアだった。

ハンデなのか、こちらは3人。

向こうは2人。

サーニヤもシャーリーも彼女たちと  
まともに戦えるくらいには強い。  
戦力的に負けるわけがない。

そんなことはありえないはずだ。

「……………」

「……………」

「

沈黙。

もうすぐで戦いが始まるというのに  
目を合わせさえしない二人の姿に  
胃が痛くなる。

502にいたころとは違う意味で  
頭を抱えそうになったその時、

審判役のミーナが腕の上に

スツとあげる。

「・・・それでは、ボバ・シャリー・サーニヤチーム

対、バルクホルン、エーリカチーム。模擬戦・・・。はじめっ!!」

戦いの火ぶたが切って落とされた。



結論から言おう。

俺たちは勝った。

あのスーパーエース2人。

ハッキリ言って501の中でも

最強のコンビを打ち倒したのだ。

・・・だというのに、これは一体

どういうことだろうか。

事の経緯を思い出す。

『……………』

『む。ちよこまかとー!』

素早く飛び回り、テクニカルに動くことで速度が上のエーリカを翻弄するサーニヤ。

そして、じれったくなつたのか

固有魔法をエーリカが発動させる。

『えいつ!!』

暴風をサーニヤが襲う。

シャーリーはバルクホルンの

相手をしており、残つた俺は

どうするか？

——— 答えは簡単だ。

『あらよつと。』

『ちよ!?!』

いくら風を起こして

距離を広げようとして無駄だ。

ワイヤーで捕まえてしまえばこっちの

ものなのだから、関係がない。

片足に絡まったくらいであるが

それでも風で飛ばないように

出来る。

ペイント弾が入った銃を

エーリカに向けると、エーリカが

俺よりも早くペイント弾を撃って、

肩に当ててきた。

やられた。

『・・・へっへー。私の勝ちー!!』

『・・・ああ。そうだな。そして。』

ペしや、と彼女の後頭部めがけて

ペイント弾が当たる。

『……え？』

『……私たちの勝ち、です。』

『ちよ……！トウルーデ！！助けてー！！』

エーリカがそう叫ぶと、

ペイント弾で顔が汚れている

シャーリーとバルクホルンが

やってくる。

ぶほおつ、と息を吐くと

ぎろり、とバルクホルンが

睨んできたので目をそらす。

『……相打ちとは、腕をあげたな、

リベリアン。』

『……まだまださ。』

ふふん、と言葉とは裏腹に

胸を張るシャーリー。



あのバルクホルンと互角に

戦えてうれしいといったところか。

そして、ミーナが判定を下す。

『・・・そこまで!!ボバチームの勝ち!!』

いえーい、とシャーリーとサーニヤの

2人相手にハイタッチする。

勝った。

数の利が無ければ完全に負けていただろうが

それでも勝ちを勝ちだ。

フル装備でもないのに、まともにあの2人と

戦って勝てるわけもないのでこれがベストである。

そして、シャーリーとサーニヤが

じつと見つめあう。

ハイタッチしようと手を二人とも

空中に掲げ、そのまま静止している。

『……………』

『……………』

『』

固唾をのんで見守っていると、

2人がハイタツチする。

ほっと安心するため息をつくど

2人が抱き着いてくる。

『なあなあ。アタシの方が役に

たつたよな?』

『……………私だよね?』

『』

俺は思った。

あ、501にいる限り、悩まされ続ける、これ、と。

彼女たちが本当の意味で仲良くなるまで  
いましばらくの時間が必要だった。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！ 【その3】（かつての自分を）

「――」

「――」

少し離れた場所で何かを話している2人。

醇子と美緒が真剣な顔つきで

情報交換をしあっている。

トラックを運転して、美緒と芳佳を

連れてきたのはいい。

504の皆の容体が気にかかって

こうしてついてきたが、フードをかぶって

顔を隠して運転席に座って待っていた。

と、いうことは当然隣にはもう一人が

いるわけである。

「……………」

「……………」

目を合わせることも出来ずに、

俺たちは互いに正面を向いて黙る。

久しぶりの再会だというのに

何を言えばいいのかわからず、

かつて付き合っていた時のような

雰囲気にとぎまぎする。

このまま置物と化して

芳佳の方を見ないようにしよう。

そう思っって神妙な顔をしていた

俺の決意はあっさり打ち砕かれる。

「……………」

そつと俺の隣にいつの間にか近づいてきて、

肩に頭を乗せてくる彼女。

手と手が絡み合い下手をすれば

このままどうにかなつてしまひそんな空気である。

こらえきれず、観念するように

俺は彼女の名前を呼ぶ。

「……芳佳。」

「……はい。」

二つ返事で言葉を朗らかに

返してくれる彼女。

柔和な笑みがこぼれたその顔つきは

世の男を惚れさせること間違いなしだろう。

「……あえて……。う……。う……。」

「……。」

うれしい、好きだ、なんて言葉が出かかり

脳裏に彼女たと502の姿が不意に浮かび上がる。

『——愛しているって言つてえ♡』

『好きだぞ・・・♡』

もし、今までの人生のように好きだ、愛していると軽々しく言ったらまた、502みたいなことになるのではないだろうか。その想いが俺を踏みとどまらせる。

「・・・ボバさん？」

「・・・！」

何も言わない俺を不審に思ったのか様子を伺ってくる彼女。

いや、なんでもないとだけ言っ  
て彼女の頭を俺の肩から降ろす。

そうだ。

今回こそ俺は生き延びて——。

だから、致命的にやっつてはいけない  
一手を打ってしまったのだった。

「……宮藤。」



「……宮藤、リーネ、ペリーヌは  
訓練のため、とある魔女のところまで行って  
鍛錬を積ませることにした。」

「……なるほど。」

司令室でコーヒーを飲みながら  
もっさんと話す。

眉をひそめて彼女が問いかけてくる。

「……なぜ、頬が赤く腫れているんだ？」  
「……虫歯だ。」

俺がそういうと興味を失ったのか  
それ以上の追及はしてこない彼女。

……芳佳あ……



彼女のことを名字で呼んで  
他人行儀で接し、距離を取って  
修羅場を回避しようとしたら  
ご覧のありさまである。

当然、彼女は今でも怒って  
俺とまともに口もきいてくれない。

何かあったことを察した面々が  
声を掛けてきたりしたが、  
今はその気遣いを受け入れる  
余裕もないのであった。

「……ところでだ。」  
扶桑刀を右手に持っている美緒が  
俺の方を向いて言ってくる。

「・・・傷は大丈夫なのか？」

心配そうな表情で俺のことを

気遣ってくれている美緒の顔を見て、

醇子や圭子たちと同じで優しい

ままだな、と思わず笑ってしまう。

「・・・む。なんだその顔は？」

「・・・いや。」

ぷふふ、とこぼれた笑いを

隠すためにそっぽを向く。

文香の教えは彼女たちの

中にちゃんと生きているようであった。

この後、拗ねた美緒に

べしべしと頭をはたかれた。



「ていやー。」

「おおっ!？」

模擬専用の銃を手に、  
空を飛び回って戦う2人。

エーリカ・ハルトマンは

坂本美緒相手に互角の戦いを  
繰り広げていた。

互いの戦闘スタイルはうまく  
噛みあっていた。

直感で身をひねり、

固有魔法の『疾風』で変則的な  
動きを取って変幻自在に動き回るエーリカ。

たいして、一撃離脱の戦法を取り、

肉薄したと同時に攻撃を加え、

距離を取る。

ウイツチの中でも最強クラスの二人は  
これまででないほど調子がよかった。

そして、試合終了の合図が出る。

「——そこまでっ！時間内に両者に撃墜判定が

出なかったので引き分けです！」

「えー。．．．彼が見ている前で負けちゃったかあー。」

「．．．ふ。」

空から地面に降りてきてストライカー・ユニットを

外すエーリカ。

その様子はだるそうでありながらも、

悔しさをにじませている。

ストライカーを外そうとしない美緒に

ミーナが声を掛ける。

「・・・美緒?」

美緒が見ている先をミーナが追う。

「ねえねえ!!肩車やって肩車ー!!」

「・・・ふん。」

「・・・にゃー。」

「おいおいアタシにも構えよー。」

「・・・サ、サーニヤから離れろ!!」

「」

ベンチに座っていたはずの男は、

他のウィッチ達に伸し掛かられたり、

背中に乗っかられたりして

押しつぶされていた。

総重量、200kgもの重圧が

彼の体を襲い、圧迫死しかけていた。

「……貴様らあつ!!」

美緒が大声をあげて

追いかけまわす。

わー、とクモの子を散らすように

皆がさつと離れる。

ベンチで死にかけている男の

元に美緒は近づき、その手を掴んで立たせる。

「ほら。起きろ。……全く。次は私との勝負だろう?」

「……芳佳あ……」

男のつぶやきを聞いた美緒はぴきい、と

額に青筋を浮かべながら男に背中から

ヘッドロックをかける。

「……あいつのことを考えているとは

「余裕だなあ!?!」

「.....!?!いだだだだだ!?!え?」

「なんだこの状況!?!」

正気に戻った男が目を覚ますと

なぜか自分の教え子に首を

絞められているという意味の

分からない場面。

当然困惑である。

それから数十分後、

装備を整えた2人は互いに見合う。

「.....」

「.....」

先ほどまでのふざけた空気はどこにもなく、  
あるのは肌がひりつくような圧迫感である。

近くで見守っているウィッチ達は

その様子を固唾を飲んで見守っている。

「……どつちが勝つかな？」

「……身体能力なら坂本少佐。経験値なら

あいつだ。」

「シャーリー。私、ボバにもつと肩車

してほしいよ。」

「あとでもしてもらえ。……いくらでも

してくれるだろ。」

「……うーン……。見えないぞ。」

「……始まる。」

サーニヤがそういうと皆は

一斉に二人の方に注目する。

美緒とボバの間にミーナが立つ。

「……ふふ。」



「……?」

おかしい、とばかりに笑う

ミーナに首を傾げる美緒。

「……いえ。あなたたちが

初めて戦ったことを思い出してね。」

「……ああ。」

その言葉に二人は記憶を掘り起こされる。

女にとっては、どこかで見たことがある動きだが、

軽薄で、女つたらしな男でしかなかった。

男にとっては、初めて彼女が『ウィッチ』として

自分の前に姿を現した時であった。

二人の間に沈黙が流れる。

「……フル装備の貴様と戦うなど、いつぶりだ?」

「……さあな。……章香と本当に似ているな。」

「……そうか。……少しは先生に追いつけたのかな。」

嬉しそうに笑う彼女に向かって銃を

構えながら試合開始のカウントダウンを待つ。

「……彼女は、『自慢の教え子』だと。……俺にとつてもだ。」

「……」

あの扶桑海事変から一体何年がたったのだろうか。

ボバは圭子と徹子たちにはあつたものの

美緒には会っていなかった。

だからこそ、こうしてあえて

嬉しくないはずがない。

彼の銃を持つ手に力がこもる。

「……ジョドーさん!! 徹子ちゃんばかりずるいです!!」

私にも稽古をつけてください!!」

「……こら!! 美緒!! 俺の先生だぞ!!」

最初の人生での経緯が頭の中に不意に浮かんだ。

竹井醇子はリバウの貴婦人と呼ばれるほど

魅力的で、強く、タフな女性になった

若本徹子は扶桑皇国最強のウィッチとして

その名を馳せるようになった。

そして坂本美緒は、今では多くの仲間

に囲まれ、共に戦えるほどの器を持つ、

——ボバにとっても傲慢の子に成長した。

目からこぼれそうになるものを

右手でぬぐう。

今日くらい、顔を突き合わせて

彼女と向き合いたい。

だからこそ、ボバは何も今日だけは

何もかぶらずに彼女と

ぶつかってみることにしたのであった。

「……美緒。」

「……行くぞっ!!」

かつての教え子と、師匠の対話が始まる。

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい! 【その4】(“軍人”、坂本美緒は諦めない)

「はああああっ!!」

左手に銃を持ちながら、

眼前の敵に牙を向ける美緒。

右手に持った木剣でボバの

背中に向けて切り込む。

瞬間的にジェットパックの噴射を弱め、

位置をずらしてそれを躲すボバ。

反撃とばかりに剣の代わりに持っている

鉄の棒で美緒に斬りかかると、2人の

剣戟が交差した。

「・・・っ!!」

「・・・はあっ!!」

ジェットストライカーの推進力を

乗せた一撃を食らわせんと再び

強襲する美緒に後ろ向きで飛びながら

模擬銃を撃ち放つボバ

「・・・やるな。ここまで食らいつかれたのは

久しぶりだ。」

「・・・それは、どのウイッチにだっ!!」

「・・・ノーコメントだ!!」

美緒の叫びに呼応するかのように、

自分の身を守るために弁解がてら

大声をあげ、逃げ続ける彼。

しかし、ジェットストライカーの方が速いのか、

徐々にその距離は詰まっていく。

「どうしたっ!!逃げるばかりか!？」

男の態度にイラついた声をあげながら

追い続ける。

背後の美緒に向かって銃を放ち続けるが  
態勢の悪い状態で放った銃撃など  
あたるはずもなく、美緒は易々と  
避けていく。

「・・・とつた!!」

ゴバが持つ銃を木剣で斬り、  
はじく。

地面へと向かって模擬銃が落下し、  
美緒がそれを拾おうとする彼を  
追わせないように続けて二撃目を放ち、  
足止めする。

「・・・ぬううううつ!!」

「・・・っ!」

2人の激戦は続く。



「……ねえ。」

「……なんだ？」

「なんかさー、坂本少佐の動きは良いけど、  
彼の方は……。」

「……。」

空中で行われているドッグファイトを  
見守る501の面々。

しかし、エーリカは真っ先に気づく。

美緒のコンディションは抜群と言える  
動きを見せているのに対し、

もう一人は明らかに動きがおかしい。

バルクホルンもそれに感じているのか、

口を真一文字に結び、拳を握り締めて  
見守り続けていた。

「……あの、馬鹿。」

「……ほんと。」

ウィッチのわがままに



「甘いんだから。」

心配そうな声をあげながらも、

表情は嬉しそうな2人。

彼が全く変わっていないことに安堵し、

・・・2人は、自身の気持ちも

同じく、全く変わっていないことを自覚した。

「シャーリー。彼って年下好きだと思っただよねー。

・・・私の下半身をなめまわすように見てたし。」

「・・・ルツキーニ。あいつはおっぱい星人だから。」

「エイラ。彼と無理して話さなくてもいいよ。」

「サ、サーニヤ!?わ、私はサーニヤのことヲ・・・。」

「あ、そういう振りはいいから。」

「」

「・・・ますます許せんな。一体何人に

粉をかけているのだ?」

他の501のウィッチたちの会話を聴いて、

眉を顰めるバルクホルン。

「・・・トウルデー。ボバって

お淑やかで華奢な子が好きみたいだよ？」

「・・・なぜ、私の腕を見てそういう？」

「・・・私って、実は料理できるし

小柄だし、トウルデーの代わりに

彼のモノになるよ。・・・生贄は

1人でいいでしょ？」

「・・・。。。」

「・・・。。。」

彼にとつてここは502よりは

安心して腰を落ち着けられる

場所には違いない。

・・・ただし、

それがいつまで続くかは

別の話だが。

◆ 「はああつ!!」

「……!」

銃を落とし、遠距離攻撃の手段を失ったボバは美緒に銃を撃たれながら追われ続けていた。

近距離武器で遠距離武器を持った相手に戦うことは難しい。

ナイフで銃に勝てる道理がないのと同じである。

(……つよく、なつたなあ。)

その時、彼の頭の中に、扶桑皇国で徹子、醇子、そして幼いころの美緒が、竹刀で

打ち合っている情景が浮かんだ。

彼が頬を緩ませると、

それにむつとした美緒が

目を細めて更に攻撃を  
激しくしていく。

「……あああつ!!」

彼女にとって、彼に勝つことは

北郷章香を超えることに等しかった。

北郷章香は既にウィッチを引退し、

坂本美緒は彼女と共に空を飛んで

戦う機会を永久に失った。

——だが、目の前のもう一人の

男はいまだに空を飛び続けている。

一体、どれほどの傷を負っているのか、

美緒の中に思わず彼を殴ってやりたいほどの

激情がわき、

——次いで、彼に守ってほしいという

感情が生まれる。

(……のっ!!)

自身の気持ちをつづけるかのよう  
に、彼女は肉薄したところを斬りか  
かる。

それを迎撃するために

今度は美緒の方に自ら

飛んでき、自分から斬りかかっ  
ていくボバ。

2人は何度も切り結びながら

降下していく。

地面の近くまで降り立ち、

つばぜり合いをしながら止まる。

「……!!ようやく!!私と……。」

「……。」

逃げることを辞めた彼の姿を見た

美緒は嬉しそうな顔つきで再び  
斬りかかる。

カウンターで今度は美緒が持  
っている

銃を遠くにはじくボバ。

腕を痛めたのか右手だけで

剣を持ち、ボバも同じく

右手だけで彼女の剣を受け止める。

「はあああつ!!」

「……チエック。」

「!?」

ぼそり、と何かをつぶやいた彼女にたいして、嫌な予感があった彼女は彼が自分に向かって左手を

向けていることに気が付いた。

彼の装備を把握している彼女は

とっさにその腕から射出された

ワイヤーを身をひねって避ける。

「……おわりだつ!!」

「……ああ。お前がな。」

その瞬間、美緒の後頭部に何かがぶつかり、鈍い音が響いた。

痛みで思わずその場にうずくまる。

(・・・な、にが・・・。)

朦朧とする意識の中、美緒が最後に見た景色は、弾き飛ばしたはずの銃を左手に持ち、自分に向かって突き付けている彼の姿であった。

(・・・また、勝てなかった・・・。)



「・・・。。。」

「・・・。。。」

模擬戦が終わり、美緒の部屋の

ベッドに腰掛け、並んで座る2人。

ボバそつと距離を取ろうとすると、

彼女がその肩にもたれかかる。

だからと冷や汗をかいている彼は、

彼女に悟られないよう涼しい顔を浮かべる。

「・・・なあ。」

美緒が彼にそつとささやく。

「……私は、お前に、近づけたのか？」

その言葉に彼はふーつと息を吐く。

大切な【妹】が小さいころ、

よくそうして悩んでいるのを思い出し、

思わず彼女の手を握った。

——いつもいつも、見捨てることさえ

出来れば、のちに來る修羅場を回避できるというのに。

ウィツチには甘い彼は、

結局のところ美緒を見話すことはできなかつた。

「……最初に会ったときのこと、覚えているか？」

「……なにか、ジョドー・カストだ。」

全然違う名前だったじゃないか……。」

むーつとその時のことを思い出して

彼の頬をつねる美緒。

そのつねってきた手をそつと握り締め、



彼は目を合わせる。

そして、美緒がいつもつけている  
眼帯をそつと外し目を合わせると、

美緒はあつ．．．と声を漏らした。

「変わらないな．．．この目の美しさも。」

「．．．!!」

ぼふうつ、という音ともに

美緒が顔を真赤に染める。

そして、彼女は男の胸に

顔をうずめながらぼそぼそとしゃべりだす。

「．．．今度は、いなくならないよな？」

彼女が言っているその言葉を、

彼は一瞬で理解した。

前の人生のことを。

「．．．美緒。大丈夫だ．．．なんたつて俺は．．．。」

『ボバ・フェットだから』、か？」

「．．．。」

セリフを奪われ、恨めし気に彼女を

無言で見つめるボバの姿に吹き出す美緒。

「……く。ははははははっ。」

「……ようやく、一本取ってやったぞ。」

目じりに溜まった涙を

手で拭い、彼に笑顔を向ける。

「……あ、あー。そのだな。」

「……ボバ。」

「……ん?」

「……えいつ。」

彼女にベッドに押し倒されるボバ。

顔が赤らめながら服を脱ぎ始めた

彼女の姿に目を奪われ動けない。

「……。そ、そのだな……。」

軍人としては、規律を乱すような、

……そう!! 商売女を買うようなことは

許しがたい!! ……だからな。」

「……美緒?」

「……性欲処理を、私でしろ……」

「……部下の代わりに責任を負うのが上司の務めだ……」

女の手が彼の股間に伸び、大きくなっているそれをぎゅっと掴む。

「……う。」

「……わ、私で興奮しているのか?」

「……こ、この変態めっ……♡」

女として見られているかどうか

不安だった美緒は、とても嬉しそうにつぶやく。

「……!」

502で盛られた媚薬が体に残っており、

一日中体が熱く、燃えるようにたぎっている

彼は彼女の体に手を伸ばすのを止められない。

それまでは、502の面々が性欲処理をしていたが、それがなくなったことで性欲が有り余るばかりであった。頼みの綱の宮藤は離れた場所で修業を行っており、彼の相手をできるサーニャは夜の哨戒任務に出ている。

「……せんせい。」

昔の呼び名で、7年前と同じ

花の咲くような笑みで顔を赤らめながら

もじもじと恥ずかしそうに彼に彼女は言った。

「……私の初めて、もらって……？」

「はっ!!」

「……………どうしたの、芳佳ちゃん？」

「……………あの人、苦しんでるっ……………」

「……………そうなの？」

「……………(あ、そういえば喧嘩してるんだった……………」

……………うう……………!!なんで私と距離を置こうと

するのかな、もー!!)」

ウィッチは鋭い。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その5】（少女は”女”になる）

「はい。」

「・・・ああ。」

一夜が明けて、食堂に来たら

天使のような笑みを浮かべた

エーリカに料理が載ったプレートを手渡される。

手渡される。

周りを見ると、皆揃っているようだった。

・・・美緒以外は。

髪がほどけ、眼帯を外し、

幸せそうな笑みを浮かべて

俺の部屋で乱れていた美緒の姿。  
思い出すのは昨夜の事。

余りにも幸せそうに寝ていたので

思考に没頭している俺は、

ぐい、ぐい、と隣から

誰かに袖を引っ張られる。

「一緒に食べようよー。」

「・・・なあ?」

ルッキーニが俺の腕を

引っ張り、既に座っている

シャリーが俺に向かって

手招きする。

そつちに行こうと足を進めると

今度は背中から視線を感じたので

振り返る。

「・・・。」

「・・・。」

エーリカが潤目で見つめてきており、バルクホルンも若干眉をひそめて俺に視線を送ってきているのが見えた。八方ふさがり。

どうすりゃいい、と立ち往生していると、誰かに腕を取られ引つ張られる。

「みんな。おはようっ!!」

はっはっは!!と笑いながら

俺の腕を引つ張ってミーナの隣に座らせる美緒だった。

滅茶苦茶機嫌が良さそうである。

そうして、皆が席に着いたのでいただきます、と言って食事が始まる。

始まるのだが……。



「……ほら。口を開けろ。」

「……ん、ん……。」

左隣にいる美緒が、俺に向かって

おかずに差し出し出てきていた。

視線を向けると、頬が若干赤くなっており、

慈愛に満ちた表情を浮かべている。

「……。」

右隣を見ると、ミーナが指をくわえて

羨ましそうに見えていた。

後でフオローしないと刺されそうである。

「……あーん。」

観念して、ぱくり、と食べる。

他の皆は談笑しているように見えるが、

何人からかは視線を感じる気がする。

ぶるり、と体が震えると

美緒がそつと皆に見えないように

テーブルの下から俺の

あそこをぎゅむつ、とズボンの  
上からつかんでくる。

「……っ。美緒……?」

彼女の顔を見ると、下で唇とちろりとなめ、  
俺の耳もとに顔を近づけてそつとささやく。

「……我慢、しなくてもいいのだぞ?」

これからは、毎日私が面倒を見てやろう……♡」

昨夜の顔を真赤にして恥ずかしがっていた彼女はどこに行つて  
しまったのか、完全に獣と化している。

芳佳が、俺のことをチラチラみていた気もするが、  
彼女の方に顔を向けるとそらされる。

右手で額を抑えながら、ウィツチに嫌われるのつて  
思っていた以上にきついな、と誰に言うでもなくこぼした。



「——ロマーニヤ上空に現れたネウロイの、巢、か——」。

アドルフイーネ・ガランドは思わずつぶやいた。

先日の504壊滅の報と、501再結成の経緯に関して彼女は資料を見ながら思案する。

(・・・ネウロイの巣がまた出たのか。)

1941年にガリアにネウロイの巣が出てきたときにも同じような状況だった。

しかし、今の彼女の中には余裕がある。

501が既にネウロイの巣を破壊して見せたし、

それに続いて502もやってみせた。

506や505も奮闘しており、世界からネウロイの数は以前に比べれば明らかに減っていた。

司令室の椅子に座りながら、

机に頬杖をつき彼女は考える。

——501に戻ってきた彼の事を。

経験値はあのルーデル以上。

落とした数はハルトマン超え。

しかし、彼女は男がけがを負いすぎているのでは

ないかと危惧もしていた。

シールドもない。

魔力もない。

そんな存在が何十年もネウロイ相手に戦えつているなど、  
奇跡に等しいことをガランドははつきりと認識していた。

彼女は自身の権力を使って、彼を501にねじ込むことはできた。

あとは、彼やその部下たちが無事であることを祈るばかりであった。

(・・・そろそろ式の準備もしようかな。)

内心、彼が自分の手元に戻ってきて

ウキウキの彼女は、『幸せな未来図』を想像し、一人頬を緩めた。



「——ということ、あなたの処遇に関しては大丈夫よ。基地内を歩いていても兵士に

尋問されることはないわ。」

「一体何があつたんだ?」

「——あなたが良く知る人が根回しを——。」

「わかった。もういい。」

うふふ、と悪女のように笑うミーナの

顔つきを見て話を切る。

俺が501に居て、ウィッチ達と接触していても

周りからとやかく言われないのはそれが

原因だったか。

だからといっても、前までの人生と違い、  
正式な協力者というわけでもない。  
だからこそ、司令室の椅子に座って  
楽しそうに笑っているミーナに尋ねた。

「この501での俺の立ち位置は？」

「私の夫。」

「」

思わず絶句した。

続いて、抗議の声をあげる。

「いやいやいやいや。．．．いやいやいやいや!!」

手を横にぶんぶん、と振り否定のポーズをとると、

ミーナが悲しそうな顔になる。

「．．．あんなこと言つて、傷心中だった私の事、

慰めたくせに．．．。」

「むぐ。」

思わず言葉に詰まる。

だが、それは今回の人生の話ではない。

「……前までの人生のことだろ？」

「……今回の人生は、自重している。」

そんな俺の言葉にふう、と手のかかる子供を見るような目でミーナが論してくる。

「……一つ、忠告しておくわ。」

「……なんだ。」

神妙な顔つきでそういつてくる彼女の

剣幕に押され、小さな声で返事をする。

「女はね、何があっても『女』なの。」

「『4強』だろうと、『英雄』だろうと、

「『司令官』だろうと、ね。」

「……。」

「……逃げられると思わないほうがいいわよ?」

そういつてウインクしてくる。

502を脱出し、504の手助けをして、501に合流した。

万事、上手くいつているはずなのに

寒気が止まらない。

通信機は502に置きっぱなしだから

そういえば最近、ルーデル……た……ち……と……。

さーっと自分の顔から血の気が引いていくのを感じる。

それと同時に502の面目の顔が頭の中に浮かび、

吐き気がしてくる。

「……何か心当たりがあるようね?」

いつの間にか俺の目の前に立っていた

ミーナがじーっと上目遣いで見つめてくる。



「・・・いや、俺は。」

「話さない。」

「いや・・・。」

「話さない。」

「・・・。」

結局、これまでにあったウィッチたちのことを話した。

502とのくんずつほぐれつや、シャーリー、

サーニヤ、美緒との情事は隠したまま。

その結果、彼女まで部屋に忍び込んでくるように

なるとは誰が想像できただろうか。

美緒とミーナ。

シャーリーとサーニヤ。

そして、いまだに仲直りできてない芳佳に

囲まれている現状に、頭を抱えるのだった。

# 501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へりとらい!【その6】(モメにモメた日)

ジェットストライカーとかいう新しい

ユニットが開発され、501に配備されたという情報が  
入った。

どれどれ、と思つて格納庫の中に入ると、  
むわあつ、と熱気が体に掛かり、思わず膝をつく。

フルマスクにアーマー装備で入るには

熱すぎだ。

かといつて、男であることをばれないようにするためにも、

このマスクは基地内では易々と外せない。

ゾンビみたいにフラフラと歩くと、

美緒やミナ達がバルクホルンと

シャーリたちを相手に話しているのが見えた。

右手をあげて声を掛ける。

「よう。何しているんだ？」

「ん？な．．．に．．．。」

そして、エーリカとシャーリーが凍り付く。

2人とも、ブラジャーとパンツしか着ていない状況であり、俺も思わず、右手をあげたままの状態で固まる。

みるみるうちに顔を赤くしていく2人。

そして、

「．．．いやあああつ!!」

「．．．うわあああつ!!」

ドタドタ、と二人が格納庫から

叫び声をあげながら出て行く。

近くにいたバルクホルンが、

「．．．だから、もつとまともな格好を．．．。」と

右手で顔を抑えてため息をつく。

しかし、502ですべてのウィッチ達の中でも特にスタイルがいい、ラルやヴァルトルトの裸を目にしているので、ルツキーニとかが痴女丸出しの格好をしているても全く気にならなかった。

「・・・さっきのは、見なかったことにしなさい。」

ちよつとすぐんだ声のミーナの剣幕に押され、思わずあ、ああ。と答える。

「・・・これが、例の?」

隣にいたバルクホルンに聴くと、こくりと頷く。

「ふん!最新式の次世代型ストライカー・ユニット、ジェット・ストライカーだ!!」

「おお。これがか。」

「さつき履こうとして足を突っ込んだら

びりびりーってきたんだよ!!よしよしってしてー!!」

いつの間にか俺の頭の上に肩車で乗っかってきた

ルツキーニにそれは災難だったな、といいつつ、正面に抱きかかえながらよしよし、とあやしてやると「わーい♡」と表情をほころばせて喜ぶ彼女。・・・というか、ルツキーニもとんでもない

格好をしているよな。

子供相手だからか全くドキドキしないが、

周りのウイツチたちからの厳しい視線が飛んできたので、目をそらしつつ、話を続ける。

「ところで、これは誰が履くんのだ？」

「それは・・・。」

「私だ!!」

セリフをさえぎられて体育座りでいじける

ミーナの頭をよしよし、と撫でる美緒。

バルクホルンは胸を張ってどやあ、とした

顔をしながら俺に言い放つ

「これがあれば貴様にも負けんぞ!!」

「じゃあ、今のうちに破壊しておくか。」

「俺の言葉に絶句する彼女。」

「みなさーん!!朝ご飯ができましたよー!!．．．あつ．．．」

ご飯ができたので呼びに来た芳佳とリーネ。

俺の姿を見た芳佳が声をあげる。

ほりほりとマスクを手でかいていると、

そのまま彼女は先に行ってしまった。

「．．．ほう?」

誰かの興味深そうな声が聴こえたような気がした。

◆ 食事の時間。

部屋の中と、食堂では唯一このマスクを外しても大丈夫なので、素顔をさらしてご飯を食べていく。

芳佳がいると扶桑の食事が食べられるので助かる。

502の定子にだって負けていない料理の腕に

舌鼓を打っていると、隣に座っていた  
エーリカが突然核爆弾を投下する。

「——とどころでさ。ボバは誰の部屋で寝るの？」

その言葉に、何人かのウイツチたちはぶうう、と  
飲んでいた水を吹き出し、何人かは顔を

真つ赤にして彼女に詰め寄る。

「な、何を言っておりますの?!」

「そ、そうだゾ!!こいつは・・・!!」

「ウイツチだつて周りに言つてあるなら、

他のウイツチと一緒にの部屋じゃないのは

おかしいよね？」

エーリカの正論に黙る皆。

確かに、以前の人生で明確に男の協力者として

いた頃ならともかく、今はガランドのファインプレーで

何とかここに在ることができている状況だ。



であるならば、他のウィッチと同じ待遇にせず、一人だけ違う場所というのも周りには不自然に見えるだろう。

「今はまだ部屋が決まっていけないから、で押し通せるけど、

それもあと何日かだけじゃないの？」

しん、と食堂が鎮まる。

・・・そして、わつとみんなが一斉に

俺に話しかけてきた。

「ああああ、あのっ!!・・・わ、私の

ところは・・・だめ・・・ですか？」

「・・・と、特別に許して差し上げますわっ!・・・うう・・・。」

「・・・ふん。・・・し、仕方なくだな・・・。その・・・。」

なんだ・・・。ええい、同衾などできるかあっ!!」

「・・・じゃあ、トゥルーデは放つといて私の

ベッドで一緒に寝ようねー♡」

「ハ、ハルトマンっ!?!」

「ルツキーニ。3人で寝たらもつと楽しいと思うぞ。」

「だよねだよねー。」

「……エイラ。わかっている……よね？」

「……わ、私は……。」

「……すなおにならないと、傍から一生

いなくなっちゃうかもよ？それでもいいの？」

「……。」

口々に俺に向かつて勧誘してくる彼女たち。

何人かは独り言のようなことを言っているような

気もしたが、喧騒にかき消され聞こえない。

皆が自分の部屋に来るよう主張し、おさまりが

つかなくなってきたころ、ミーナと美緒が立ち上がり、

パンパンツ、と手を叩いて場を仕切りだす。

「收拾がつかないのでくじにします。」

えー、とエーリカやルツキー二達から挙がる

不満の声。

それに対して美緒がぎろり、と鋭い視線を

向けるとその声はたちまち収まる。

「……と、いうわけで彼にくじを引いてもらいます。」

いつの間に作っていたのか、スツ、とくじを俺に差し出してくるミーナ。

「さ。一枚引いてちょうだい。」

「ああ。」

彼女の声に従い、一枚引つ張った瞬間、

——ミーナの口がにやり、と歪んだ気がした。

そこには、ミーナ、美緒と書かれていた。

「……えっ。」

「はい。それじゃ私たちと一緒にね。」

「……う、うむ。……くじなら仕方ないなー(棒)」

『えー!!』

ぶーぶー、という声をあげる他の子たち。

美緒はくじで負けた方がわるい、と言り返す。

んー。何か作為的なものを感じる気が……？  
先ほどのミーナの悪そうな笑みを思い出す。

そうして考えていると、エーリカが

俺の傍まで歩いてきて、俺が持つていた  
くじをひったくる。

「ちよつとごめんね。」

そうして、ミーナがテーブルの上に置いていた

他のくじをミーナ達が他のウイツチと

話しているうちに手に取る。

「……………」

そして、みるみるうちにエーリカの顔つきが

険しくなる。

笑顔が絶えない彼女がこんな顔を

するのを見るのは初めてだったので

思わず困惑の声をあげる。

「……………エーリカ？」

そして、何を思ったのか上に向かってくじをばつと放り投げる。

それに気が付いたミーナと美緒が慌ててエーリカを止めようとする。

「な、何をしているの!?!」

「(っ)らっ!」

そして、近くに落ちた一枚を拾うと

それには『ミーナ・美緒』と

書かれていた。

・・・ん?

隣に落ちていたもう一枚を拾う。

同じく『ミーナ・美緒』と書かれている。

他のウィッチ達もそれに気が付いたのか、みるみるうちに目から光がなくなっていく。

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・美緒。」

「・・・・・・・・うむ。」

「撤退（よ）っ！」

『まてーっ!!』

ドドドド、と逃げ出す2人を追いかける  
他のウィッチ達。

ぼつんと食堂においてかれる俺。

・・・・・・・・と、なぜかいつの間にか俺の

隣に座って箸でおかずを取り、

俺に差し出してくるエーリカ。

「・・・・・・・・あーん♡」

そして、それを食べようと口を開こうとすると、  
どんつ、とコップをテーブルにたたきつけるような  
音が響く。

「・・・お先に、失礼します。」

芳佳が食堂から出て行く。

また仲直りできなかつた・・・。

そんな俺を慰めるように、

エーリカに料理を食べさせられ続けるのだった。

後日、俺は毎日別のウィッチ達と寝ることに  
なるのだった。

・・・502での情事を思い出し、性欲が  
収まらずきつい日々が続くことを考えると  
思わずため息をついた。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その7】（不穏さと、愛しさと）

シャーリーとバルクホルンが

スピード対決をすることに。

積載量対決とかも何度もしていて、

新型のユニットをつけている

バルクホルンがすべて勝っている。

ぐぬぬ、と連日悔しそうな表情を

浮かべるシャーリー。

だからといって俺に背中から

抱き着くのはやめてほしい。

他のウィッチたちにジト目で

見られるのだから。

以前の人生でのアフリカや、今の502での



境遇に比べれば天国に違いはないが。

そして、その日はやってきた。

港から皆と一緒にシャーリーとバルクホルンが  
速さ対決をするのを見る。

皆に気づかれぬように、少しずつすり足で  
近すぎる距離を取ろうとすると、すすす、と  
寄ってくるエーリカ。

ちやつかりと俺の右隣をキープしながらも  
しつかりと二人の勝負を見ている美緒。  
逃げられない。

(・・・ん?)

「あれ・・・?」

エーリカも異変に気付く。

バルクホルンの挙動がおかしい。

まるでこれは……。

「!!トウルーデ!!!」

頭の中に、507にいたときの

情景が浮かんだ次の瞬間、

俺は彼女のところまで飛んでいた。



あぶないところではあったが、

何とかバルクホルンは一命をとりとめた。

気絶して、海水をあまり飲んでいなかったことも

幸いであつた。

「……あなたは、魔力を使い果たして  
堕ちたのよ。」

ミーナが告げると狼狽して

叫ぶバルクホルン。

「・・・バカなっ!!そんな初歩的なミスをするなどっ!!」

「あなたのせいではなく、ストライカーが

原因でしょうね。」

ミーナいわく、性能が高い分、大量の魔力が必要であるらしい。

そして、俺は裸姿の彼女を見ないように、

1人背を向けながら話を聴いていた。

・・・外に居たら、基地の兵士たちに

不審がられるからな。

男じゃないかって。

「・・・ストライカーのせいではない!!

わたし・・・の・・・せ・・・い。」

バルクホルンの声がしぼんでいったので

ん?と首だけ後ろに向けてちらりと

覗くと、

——白いシートだけ身にまとっている  
彼女と目があつた。

「あつ。」

「．．．．．キ」

キヤアアアアアアツ!!という叫び声が  
病室に響いた。



結局のところ、新型は

使用中止となった。

穏当だとは思うが、

思いつめているバルクホルンを見ると

あぶないように思える。

こんこん、とドアをノックすると

返事がなかったのでそつと開ける。

『．．．．．このつ!!わからずやつ!!』

ばたばたつ、とドアから出て行くシャーリー。

その顔には怒りが浮かんでおり、何かあったことを伺わせる。

中に入ると、芳佳とリーネがなぜか

懸垂しているバルクホルンを心配そうな

目で見ている。

芳佳とはまだ気まずいので近くにいた

リーネに聴く。

「・・・何やってるんだ?あれ?」

「・・・なんでも、ストライカーを扱えない、

弱い自分が悪いから特訓って・・・。」

「・・・。」

芳佳はぶくーつと頬を膨らませている。

・・・まだ怒っているのか。

それはそれとして、頭の中が

急激に冷えていき、近くにあった

モップを手取る。

「……バルクホルン。」

「……ん？」

俺の声に後ろを向いた彼女の

顔にモツプをべしやり、と

当てる。

「

」

「……。」

絶句するリーネと芳佳。

ふるぶると震えて顔を

真赤に染めて懸垂を辞めて

降りて詰め寄ってくる彼女。

「なんのつもりだ貴様は!! ああつ!!」

「……ちよつと頭を冷やせ。」

ぐいつと肩を押すと痛そうな声をあげてうめく

彼女。

「……あの高さから落ちて無事なわけないだろう。」

「・・・芳佳。念のためもう一度回復魔法を。」

「!!は、はいっ!!」

あ、何気に芳佳と話せた。

そのことは後にするにして、

回復魔法を芳佳から受けている

彼女の目をじっと見つめて言う。

「・・・『悪いが生き残るが意思のないものに背中

預けられん。』」

「!!」

俺の言葉に目を見開いて驚く彼女。

「・・・あいつが言ったこと、忘れたのか?」

「・・・。」

目を伏せる彼女。

その頭にぼん、と手を置く。

「な、なにをつ・・・!!」

「で。俺の背中は誰が守ってくれるんだ?」

「・・・っ!!」

顎でドアの方を指し示す。

「・・・さてと。ネウロイ襲撃の警報も出たし

俺も行くか。リーネ、芳佳。ミーナのところに

いつて待機しておけ。」

「ま、まてっ!!私も・・・っ!!

「邪魔だ。」

「・・・っ。」

「・・・エーリカ。行くぞ。」

「・・・はいはい。・・・これってデートのお誘い?」

そんな彼女にんなわけあるか、と返す。

せつかく助けたのに、死なれたら、な。



結果的に、苦戦していたネウロイを

ジェットストライカーをつけて応援にきた

バルクホルンが倒した。



その代償なのか、ジェットストライカーはボロボロとなり、壊れてしまう。

「・・・すまん。」

「いいのよ。・・・あなたの方が大事なんだから。」

落ち込むバルクホルンに笑顔を向けるミーナ。

基地の司令官ともなると、さすがに人間ができています。

そして、シャーリーとバルクホルンがまた

喧嘩をしだすと、眼鏡をかけたエーリカそっくりの

人物が格納庫に現れる。

・・・あ。

逃げようとする俺の首を掴むエーリカに

引っ張られ、連れていかれる。

そのウィッチは他の501の面々と談話しており、

とても楽しそうである。

「・・・あ。」

「・・・ん。」

目があったので会釈すると、

俺の元にはたばたと駆け寄ってくる。

「あ、あの!!お久しぶりですっ!!」

「・・・ああ。」

嬉しそうに大声をあげて

あいさつしてくる彼女。

—— エーリカ・ハルトマンの

双子の妹であり、ストライカーの開発者である

ウルスラ・ハルトマンであった。



「・・・ねえねえ。あの2人って

顔見知りなのかな？」

「・・・さあね。」

シャーリーにそう尋ねるルツキーニと、

また別のウィッチが・・・と機嫌を悪くしながら

フライドポテトを手でつまんで口にほうるシャーリー。

「・・・ハルトマン。あの2人、やけに仲が良さそうだが?・・・。」

「昔からの知り合いなんですよ?・・・それに、

かわいい妹がずっと会いたがってた相手だし。」

危機感のないエーリカの言葉に

はあ、とため息をつくバルクホルン。

501の面々からちよつと離れた場所に

座ってボバとウルスラは話していた。

「———そうか。じゃあ、あのジェットストライカーを

作ったのは・・・。」

「はい。私です!」

誇らしげにそういう彼女。

昔はもつと引つ込み思案だった気もするが、

ずいぶん明るくなった気もする。

きつと507の面々以外にも

色んなウィッチたと出会ってきたのだろう。楽しそうにストライカーの設計について語る彼女に視線を向けていると、彼女が俺の背中をじつと見つめてくる。

「・・・ジェットパックが気になるのか？」

「あ、いえ、その・・・。」

「いいえ。・・・ほら。」

そういつてジェットパックを外し、彼女に手渡すと、目をキラキラと輝かせて分析し始める。

「す、すごい！何この形状・・・?!」

ストライカーと全然違うのにこれで

空が飛べるなんて・・・！」

どうやらお気に召したらしい。

フライドポテトを右手で取って

口に入れて食べていると、ジェットパックを

抱きかかえた彼女が突然叫びだす。

「・・・あ、あのっ!」

びくつ、と体を強張らせていると

ついで彼女が言った。

「・・・よかつたら、今日だけこれを

私に預けていただけませんか? きつと

性能をアップさせてみせます!」

願ってもいない申し出。

もちろん、断るという選択肢はなかった。

「じゃあ、頼む。」

「・・・はいっ!・・・あ、今のやりとり、

まるで・・・ふうふ・・・。」

自分で言つて恥ずかしくなったのか、

顔を真赤にしてぼふん、と音を立てて

爆発する。

相も変わらず、彼女は魅力的だった。

「ところで、507の方々とは・・・。」

「俺がここにいることは絶対に言わないでくれ。」  
ぼそりとつぶやく彼女に思わず念押しした。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へりとり！【その8】（外出。爆走。柄の間の平穩。）

ウルスラ・ハルトマンが501を来訪してから

幾日経った後。

朝食の準備をしようとしていた

芳佳が叫ぶ。

「あ、あれっ!?!お米がないっ!」

予定では501の面々はもう少し遅れて

集まるはずだったのが予想以上の

スピードで集まったので食糧が

なくなってしまった。

芳佳が美緒にそのことを告げると、

顎に手を当てて美緒が考える。

そして、そんな横を通り過ぎる、

フルマスクにアーマー姿の

怪しい人物。

美緒はがっちりとその人間の肩を

掴むと引き寄せる。

「よし。ボバ、芳佳たちと一緒に買いだしに行け。」

「……え。」

彼はこれから訓練に行こうと思っていた矢先だったので  
氣勢をそがれたような声を出す。

「……行くよな？」

「……わかった。」

芳佳たちの見えないところで指をそつと

絡められ、甘えるような声を出された彼は

観念して買い出しに加わることに。

「……あ、ちよつと待っていてくれ。」

そういつてどこかに走っていく彼。

しばらくすると、何かが入った袋を

肩に担いで戻ってくる。

「……なんだ、それは？」



「秘密だ。」

さて、出発、となったところで  
問題が起きる。

本来なら基地に残る気だったウィッチ達  
彼がついて行くと知って態度を変えたのである。  
ベッドでぐーすか寝ていたエーリカも  
そのことを耳にした瞬間、飛び起きて、  
彼の隣に立ってちゃっかりとすり寄る。

トラックの前で集まって誰が行くか  
決めることになる。

「私たちが行きます。」

「そうだぞ!!・・・だ、だけど、

サーニャに重いモノを持たせるわけにも  
いかないし、男では必要だから・・・。」

「運転できないだろ？二人とも。」

アタシとルツキーニがいれば大丈夫だつての。」

「そうそう!!ボバー!!肩車してー!!」

「いやー。私がついていくよ。これでも

土地勘はあるしね。」

「・・・わ、私の魔法があれば荷物は大丈夫だぞ。」

ぎゃあぎゃあ、と主張しだすウィッチ達。

詰め寄られたボバは冷静に告げる。

「・・・芳佳、バルクホルン、シャーリー、ルツキーニで。」



「・・・うええ。」

「大丈夫か?」

シャーリーの荒い運転で気分が悪くなったのか  
顔を青くする芳佳。

ルツキーニとバルクホルンは大丈夫なのか  
ケロツとした顔をしている。

俺も、旅で乗り物慣れしていなかったら  
あぶなかった。

芳佳にさつと手を差し出す。

「……ほら。」

「……え。……あ。うん……。」

あ、そういえば俺、芳佳と仲直りしていなかった。

そう思つて手を引つ込めようとしたが、

既に芳佳にがちりと握られており、

今更撤回することも出来ない。

顔を赤らめながら俯く芳佳と、

気恥ずかしさで後頭部をぽりぽりと

搔く俺。

何とも言えない空気が俺と彼女の間に  
流れ出すと、バルクホルンがもう片方の  
手を握ってくる。

「.....」

何かに対抗するかのように、  
そっぽを向きながらも、しっかりと  
その手をしっかりと掴んでいる。

そつと握り返すと、彼女も  
にぎにぎ、と指を絡めてくる。

「~~~~~♪」

「.....」

殺気と呑気の二人にサンドイツチされ  
胃が痛くなつてくると、前の席に座っていた  
ルツキーニが大声をあげる。

「わー!! ついたついたらー!!」

その言葉に惹かれて前の方を見てみると、そこには、ローマの街並みが広がっていた。

「わあ・・・!」

「ほう・・・。」

驚きの声をあげる芳佳と、

感嘆の声を漏らすバルクホルン。

2人とも目を輝かせてそわそわしている。

そして、トラックが止まり、

全員で降りる。

「それじゃあ、色々買う必要があるし、

さっさと買い物に行こうか。」

シャーリーに手を取られ、

ぐいっと引つ張られる。

その後ろをついてくる3人。

耳元でシャーリーにささやかれる。

「・・・なあ。二人つきりになれる場所に

来てくれたら、いいことしてやるぞ……♡?」

その甘いささやきにごくり、と喉を鳴らして

彼女が押し付けてきている胸を見る。

やはり、顔立ち、スタイル、性格のどれを

とつても一流の女であるシャーリーにそういわれて

悶々とする。

しかし、2人つきりならともかく、他に

3人いる中でそうしたことはできない。

何より、美緒やサーニヤたちのこともある。

「……シャーリー。やはりこういうことは……。」

「……。」

あつ、と自身のミスに気が付くも遅い。

彼女はみるみるうちに目から光を失くしていき、

病み始めた。

「なんでだ? アタシ、そんなに不細工か?」

スタイル悪いか?・・・性格、好みじゃないか?」

「・・・いや、シャーリー・・・。」

「なあ。お前のためなら何でもするって言ったよな?」

アタシは。・・・嘘じゃないからな?子供だつて作りたいし、

結婚だつてしたいと思つているんだ。・・・前世の

記憶だろうと何だろうと・・・。」

そういつて腕を組んでくる。

肩に顔を乗せてしなだれかかってくる

彼女のことを振りほどくことも出来ずに、

そつとささやく。

「・・・シャル。」

「!!」

前世で二人つきりの時に読んでいた愛称で

呼ぶと、耳と尻尾をぴよこんと出して

嬉しそうな顔つきになる彼女。

「・・・いろいろとまだ、問題を抱えている。

・・・だけれども、その気持ちは、本当に、

嬉しい・・・。」

思い出すのは現代でのトラウマ。

『さいつてー!!早く謝んなさいよ!!』

『生理的に無理っ!!』

『あたし、あいつ嫌いなんだよねー。』

女子に関する思い出でよかったものなど

何一つなかった。

この世界に来て、ウィッチと関わるようになってからは

別の意味で頭を悩ませているが、それでも

あの地獄に比べれば100倍マシだ。

・・・結局のところ、

俺はウィッチに弱いらしい。

シャーリーを押し返すこともせず、

自身の気持ちを伝える。

「・・・ありがとう。・・・刺されてもいい。

俺も、シャーリーのこと、好きだ。」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」





伸し掛かられ、顔のいたるところにキスされるのを止められない。

呆然と立ち尽くしていたバルクホルンが再起動し、魔法を展開して、シャーリーを引きはがしにかかる。

「コリアアっ!!何をしているかっ!!・・・私の

腕力に耐えるだっ!!」

「んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡♡♡」

「・・・い、息がっ・・・。」

ねちっこく舌を入れられたりもして、

顔はべたべたのドロドロになっっていく。

そして、今まで黙っていた芳佳がトラックに

戻り、何かを右手に持ってシャーリーの

後頭部を思いつき叩く。

「・・・ぎゃうんっ!!」

悲鳴をあげて倒れるシャーリー。

芳佳の行為に目を見開いて驚く

俺とバルクホルン。

・・・・トラックに入っていた、  
箒でたたいた?

彼女の顔を見ると、にっこりと

目が笑っていない笑顔を俺に

向けてきている。

「・・・お楽しみでしたねー。

止めないほうがよかったんでしようねー。」

「よ・・・よし・・・。」

「ばかっ!!」

べしん、と箒を顔に投げつけられ、怒った

彼女はスタスタと歩いて行ってしまふ。

膝立ちでうなだれる俺の肩を

バルクホルンが顔を赤くしながらそつと手をおいてつぶやく。

「・・・泣きたいなら、胸を貸すが・・・?」

「……………」

彼女の精一杯のジョークに返す余裕もないほど俺は打ちひしがれていた。

「そういえばフランチエスカ少尉は？」

「あ。」

立ち止まった芳佳と、俺の声が街に響く。

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へりとりらい!【その9】(目指すは成層圏 前編。)

ルツキーニがなぜかマリア公女と友達である  
という件が発覚し、買い物から帰ってきたら  
数日後。

俺たちは新たなネウロイを相手に空を飛んで  
戦っていた。

「ほいっと。」

全員が危なげなく戦う中、余裕綽々で

ネウロイの攻撃を全弾回避して空を飛び回る

1人のウィッチ。

エイラ。

アウロラの妹にして、スオムス最強のウィッチである。

「うわー。すごいですねー。」

隣で一緒に空を飛んでいた芳佳が  
思わず声を漏らす。

被弾しても生き残って帰ってくるルーデルとは  
別ベクトルの天才である。

全く、これだから天才というやつは・・・。

凡人代表としてはあの光景を見ているだけで

自分の経験を否定されるくらいの衝撃がある。

あらかた駆逐し終わり、帰投かと思っていたところ、  
サーニャと美緒が突然後ろを振り返る。

「・・・あれはっ!?!」

双眼鏡を取り出して美緒とサーニャが見つめている  
方向を覗きみる。

どこまでも空高くそびえたつ、黒い塔が

山の間立っているのが見えた。

いや、あの外殻の感じ・・・。

「・・・まさか、ネウロイ?」

「・・・。」

近くにいたサーニャに向かってそういうと  
頷く彼女。

超大型陸戦ネウロイ、戦車型ネウロイと様々なのを  
相手にしてきたが、あんなのは初めてだ。

「……少し、様子を見てくる。」

「あ、坂本少佐っ!」

そういつて、ペリーヌの引き止める声も  
気にせず、塔に向かう彼女。

一応護衛のために彼女から少し離れた  
後方を一緒に飛ぶ。

ぐんぐんと塔の上の方に飛んでいく美緒。  
それを追っていく俺。

ある程度上がったところで美緒が止まる。

「どうした?」

「……ストライカーではここが限界だ。」

そういう彼女のストライカーを見ると、

プロペラの挙動がおかしいことに気が付く。

「コアはあの上だ。．．．全く厄介な．．．」



「．．．．以上が、ネウロイの全容だ。」

そういつてスクリーンに映し出された

塔型のネウロイの説明をした美緒。

コアは高度30000メートルにあり、ストライカーでは  
せいぜい10000メートルまで。

そこで、とる手段は新たなストライカーである

ロケット・ストライカーを使うというものである。

「これならさらに上に上がることができるわ。」

．．．．でも、通常のユニットより魔法の消費量が  
激しいから．．．。」

「．．．．それをつけた誰かがコアまで行けるように

俺たちが守ると?」

俺の言葉ににこり、と微笑むミーナ。



作戦室内の皆から少し離れたソファーに座り、

ぼつんと距離を置きながら話に加わる俺。

自分の隣に来てほしいのか、じつと俺の

方に熱い視線を向けてくる501の面々。

シャーリーに襲われてからは、

基本、警戒を解かずにこんな感じで

彼女たちと微妙に距離を置いているのであった。

「・・・ふわーあ。・・・あー、

さいこー。」

「・・・高いねー。」

眠そうに俺の肩に頭を置いてあくびをするエーリカと

俺の膝に乗っかりながらネウロイの姿に驚きの声を

漏らすルツキーニ。

この二人は安全牌なので体が拒否反応を起こすこともない。

「そこで、今回の作戦ではサーニャ。お前が肝心要だ。」

「・・・え。」

まさか自分が指名されるとは思っていなかったのか  
驚きの声をあげる彼女。

・・・だというのに、俺がルツキーニとエーリカの

2人とまつたりしている姿を見て驚いたようにも見える。

サーニヤ好きのエイラが声をあげて抗議する。

「ちよ、ちよつと待ってくれヨ!!アタシも・・・!」

「・・・・・・・・。」

俺のほうをじつと病んだ目で見てるサーニヤ。

背筋に寒いモノを感じたので、ルツキーニとエーリカを

自分の体から離し、皆から均等に離れた出口の近くで

壁にもたれながら話を聴く。

ぶー、ぶーとぶーたれる二人を無視しながら

ミーナに質問する。

「質問がある。・・・魔力消費量が激しいユニットを付けた後、

2人が落下してくる思うんだが、誰が受け止めるんだ?」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

じつと俺の顔から眼を離さず見つめているサーニヤと、

先日の発情事件で首から『わたしはこうじよりようぞくに

反するふるまいをしたはずかしいうちです。』という看板を

首かがぶら下げつつ、頬を赤らめながら期待するような

視線を浴びせてくるシャーリー。

「……そういえば、魔力をお前は使わないんだったよな？」

「ああ。」

俺はウィッチではないので魔力は使わない。

せいぜいがジェットパックの燃料とエネルギー程度である。

……ということは。

自分の顔を指さすと、美緒とミーナがコクコクと頷く。

ちらり、とサーニヤの方を見るとにこりと微笑まれ

その隣に座っているエイラからはうー、という声で

威嚇される。

「……わかった。」

他の誰でもない彼女たちの頼みを断るといふ選択はありえず、

即答で了承する。

成層圏に行くということは相当寒いはずだ。今からいろいろと準備をしておかないと。

「これで作戦の立案は以上だ。．．．ところで。スクリーンの写真を消して、美緒が言う。」

「．．．シャーリー大尉が観衆の面前で

ボバを押ししたとした件に関してだが。」

みしい、という音が部屋に響く。

音のした方を見ると、そこには自分が

持っていたコップを強く握りすぎたのか

ひび割れたコップを無表情で持っている

バルクホルンがいた。

そのほかのウィッチ達も雰囲気は何とというかとげとげしい。

注がれる批難の目。

「罰として、イエーガー大尉は一週間

こいつとの接触を禁ずる。」

「そんなああああっ!!!」

シャルの悲鳴が部屋にこだました。

「・・・あと、ボバは罰として、

イエーガーにされたことを私たちに全員に  
すること。」

「!？」

この後、色々と大変だったのは言うまでもなかった。



人間としての尊厳を失いかけたその日。

俺はいつもの装備に着替えて外に出ようとしていた。

いざというときは、俺がてっぺんまで行って

コアを破壊するためにどこまで上に行けるか

確かめるためである。

ジェットパックを点火して空を飛ばうとすると  
背中から声を掛けられる。

「……………どこに行くの？」

「……………」

心配そうな目で俺のことをじつと見てくるサーニヤと  
むー、と嫉妬しているのか剣呑な目つきで見えてくるエイラが  
立っていた。

「ただの散歩だ。」

「……………散歩なのに武装するの？」

「……………む。」

誤魔化そうとするも、一瞬で論破される。

エイラががーつと怒る。

「コラツ!! またお前はそうやって……………!!」

「このかつこつけっ!!」

脛とがんと彼女に蹴られる。

だが、逆にエイラが痛そうに足を抑える。

「……………!!」

「大丈夫か?」

手を差し伸べると、「……ふ、ふんっ!」ふんっ!と  
そっぽを向きながらもその手を取る。

「……」

横で立っているサーニャの目がどんどんと  
黒ずんでいくがそれに気が付かないエイラが  
言ってくる。

「……よシ! 私たちも一緒に行くゾ!」

「……うん。」

「え。」

いや、ただ下調べに行くんだが……。

かと言っても、2人とも散歩しに行く気満々である。

よく見たら、足にストライカーをつけている。

……久しぶりに彼女たち二人と

散歩しに行くか。

「ああ。．．．行こうか。」

「よし!!．．．こ、これはサーニヤに手を出させない  
ためなだからナ!!勘違いするなヨ!!」

「．．．．んー。」

俺の右隣をエイラが、左隣をサーニヤが腕を  
組んでくる。

恥ずかしいのか顔を真赤にして

ふるふる震えながら小声でつぶやくエイラ。

たいして、目を閉じて、気持ちよさそうな声を

あげて体をこすりつけてくるサーニヤ。

「．．．い、行くゾ．．．。」

「．．．あつ。．．．んんつ。」

サーニヤ。ステイ。ステイ。

心の中で思わず彼女につぶやく。

久しぶりの散歩は、胸躍るひと時であった。



501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へりとらい!【その9】(目指すは成層圏 後編。)

成層圏まで行く2人。

エイラとサーニヤが皆の協力を経て、高く、高く空へと舞いあがっていく。

「いっけええええっ!!」

501の皆が足場となり、エイラとサーニヤは上昇し、ついに成層圏まで到達する。

コアを破壊したのか、彼女たち二人が地上に落ちてくる。

しかし、2人とも顔をほころばせており嬉しそうな顔つきである。

他の皆は魔力を使ってへとへとなので

俺が落ちてきた二人を受け止めながら、

ジェットパックの噴射で降下スピードを

緩めながら地面に落ちていく。

ぎゅつと寒さで震える二人の体を抱き留める。

「……よくやった二人とも。……無事でよかった……。」

2人に聞こえないように言つたはずの言葉は

しつかりと聴かれていたようで、エイラにニヤつかれながら、

サーニヤには微笑まれながら脇腹を突つつかれる。

「んん？なんダ？もつとはつきり言わないと

わからないゾー？」

「……ん。」

からかうようにそういつてくるエイラ。

便乗して頷くサーニヤ。

少しイラツと来たのでエイラの耳元で

囁く。

「……エイラ。大好きだぞ。」

「……なっ！」

「……。。。」

俺がそういうと慌てだす彼女。

これだからからかうのを辞められない。

「な、何言ってるんだ!!降ろせ!!変態っ!!」

「エイラ。俺は自分の気持ちと言ったぞ。・・・後は

お前次第だ。」

「・・・。」

やきもちを妬くサーニャに脇腹をつねられながら

ぎやーぎやーと暴れだすエイラを抱えて降りる。

下では、501のみんなが俺たち3人を待っていた。

「・・・親友か。」

「え?」

俺のつぶやきに反応したエイラに向かって

顔をそむけながら、なんでもないと返した。



ロマーニヤの軍は壊滅したが、結果的には大型のネウロイを撃破することに成功した。作戦の成功を喜ぶ彼女たち。

基地内では、皆が騒ぎながら楽しそうに話している。

そんな中、ボバは基地の一番高いところの屋根の上に胡坐をかいて座っていた。

隣には食糧庫から彼が盗み出した酒とチーズが置かれている。

「.....」

上空に照らしつける月を

見ながら、静かに考えている。

ふと、彼の脳裏にこの世界に来る前の、

転生を繰り返す前の最後の情景が

浮かんだ。

「……お前のようなクズは死ね!!」

「労働力にもならないゴミがっ!!」

「……ばっかじゃないの? アタシが

本気であんたと付き合うとでも?」

結局、タコ部屋から逃げようとして彼は

ヤクザに背中から銃撃され、死んだ。

そして、今ではこの世界でネウロイと戦いながら

生きている。

自身の胸に手を当て、目を閉じながら

思案するその形相は、ひどく歪んでいた。

「何しているんだ?」

声に驚き、左の腰に付けている

ダーク・ライト・セイバーを抜いて

左腕でリストミサイルを構えると

すぐに警戒を解く。

「……お前か。」

「おっ、脅かすなっ!!」

突然、武器を向けられたエイラは叫んだ。

立ち上がった彼がまた座ると、

その隣にエイラがちよこんと座る。

「・・・なんだ?」

「・・・ちえつ。・・・私が

ヘタレならお前は鈍感だな。」

そう吐き捨てながら、チーズを右手で

掴み、口の中に入れる。

「・・・なんか、変な味だな。」

「ナチュラルのチーズはそんなもんだ。」

眉間にしわを寄せながら苦い顔をする

彼女にそういう。

「・・・あのサ。」

「・・・ん?」

沈黙を破ったのはエイラだった。

「昼間、親友がどうか言っていなかったか？」

「……。」

彼女の言葉に押し黙る。

ボバはごろり、と彼女とは反対の

向きに寝転がり、フルマスクをつけなおす。

「おいっ！無視するなよナー！」

「……俺が。」

抗議の声をあげていたエイラは

彼の言葉に押し黙る。

「俺が、まだボバ・フェットで無かったころの

話した。……俺には2人の親友がいた。」

きわめて平坦な声でそういう。

そのマスクに隠れ、表情はエイラに

全く見えなかったが、なぜか彼が嬉しそうであることを

彼女は悟った。

「……その二人はな、俺の、唯一の家族だった。」

「・・・血のつながった家族ハ・・・？」

恐る恐る尋ねるエイラに

吐き捨てるように言うボバ。

「俺には、そんなもはない。血のつながりなんて、

何の意味もない。・・・身をもってそれを知った。」

ぎゆううつ、その時のことを思い出して

怒りをこらえるように右手を握り締める。

「・・・嫌われ者だった俺に、なぜか

優しくしてくれてな。・・・共通の

趣味もあつたんだ。」

酔っているのか、親友の話をしていて

感情が昂っているのか、ぼろぼろと

話し始める彼の姿に目を奪われるエイラ。

彼から、過去のことについて

教えてもらったのは今回が初めてであつた。



「その趣味って?」

「……スター・ウォーズ。……ま、

何のことかわからないだろうが、な。」

そういつて酒が入った瓶を右の指ではじく。

きいん、という甲高い音が鳴った。

「……まあ、よくある創作物だよ。

……2人は、ダース・モールと

グリーヴァス將軍というそれに出てくる

キャラに憧れていた。……そして、

俺も。」

「……それが。」

「ああ。……この姿だよ。」

自分の姿を指さしてそういう。

「……好きなキャラが違っていても、

俺をかばって、味方してくれたのは

あの2人だけだった。……今は

もう会えないだろうが、な。」

そういつて、黙る。

彼の名前がそこから来ていることを知って、エイラには一つの疑問が生まれた。

「……本当の名前は？」

「……。捨てた。」

女つたらしで、ウィツチを助ける癖に責任を取らない男だと思っていたエイラは想像以上の重さに思わず小さな声でつぶやく。

「……その、ごめん……。」

「……謝るな。……謝られると  
みじめに感じる。」

ふと、エイラの脳裏に記憶が蘇る。

それは、2人つきりで幸せな家庭を築いたときの前世の記憶であった。

一戸建てのごくごく普通の民家。

だが、子供と夫がいる帰る場所。

『・・・エイラ。』

『・・・おかしーん!!』

そして、エイラの胸が熱くなり、

思わず彼女は自分の胸を手で抑える。

サーニャが好きだという気持ちには

変わりはなかった。

・・・そこに、それと同じくらい

大切なものが加わろうとしていた。

『・・・エイラ。——愛して』

そして、また別のビジョンが浮かぶ。

ネウロイのレーザーを浴びて

彼が消し炭になる光景が。

(・・・ん。・・・そっか・・・。)

彼女は、サーニヤや一部の仲間さえ  
無事ならそれでいいと思っていた。

アウロラやニパ、そしてサーニヤたちさえ  
大丈夫なら。

元来、彼女は優しい性格であつた。  
仲間を見捨てはしない

エイラが立ち上がり、彼の近くに  
近寄る。

「・・・エイラ？」

何も言わず傍に立つ彼女を  
訝しんだ彼が振り向く。

マスクを手で外されると、

—— エイラにキスをされた。

すぐに離れてにしし、と笑う。

「・・・大丈夫だ!!サーニヤとは  
ちゃんと話をつけるからナ!!」

「・・・。」  
呆然とする彼。

エイラはサーニヤを守るためだけに  
自分と接していたと思っていたところに  
キスをされ、硬直する。

「ああ。そうだな。」

「!!よ、よし!!決まりだナ!!」

(意味わからん。・・・とりあえず

領いておこう。ここはそうした方が

いい気がする。）

そう思つて適当に相槌を打とうとするのは日本人ゆえの優柔不断さからであつた。

その結果として、502の姉と再会するとき

一波乱あるのだが、それはもう少し

先で語られることになる。

「……子供は何人ほしイ？」

「？俺は、家族が多い方がいいと思うぞ。」

「……そうか。……わ、私は

こう見えても体力はあるから大丈夫だからナ!!

寂しくないように、たくさん産むからナ!!」

「ああ（……何を？）」

酒でじつは酔っぱらっていて  
思考力が退化している彼は  
深く考えずに、隣に寄り添う  
彼女の膝枕で寝るのだった。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！ 【その10】（風呂ができてしまった（震え  
声））

「・・・というわけで、風呂ができた。」

作戦室で集まってそのことを聴かされる

501のウィッチ達。

美緒は耳と尻尾を出して、

嬉しそうな顔でそう告げた。

「今日の正午からは入れるぞ。」

「本当ですか!?!楽しみー!!」

きやつきやと姦しく騒ぐウィッチ達。

そんな彼女たちをしり目に、一人の

男は内心冷や汗ダラダラで部屋の隅っこで

縮こまりながら座っていた。



「……ところで、どうしてそんな場所に  
いるんだ?」

「いや、なんでも……。」

美緒に聴かれてじり、じりと出口の方に  
体を寄せるボバ。

502での経験が、彼に告げる。

今のうちに彼女たちから距離と取って  
おけと。

しかし、そんな彼の両脇にいつの間にか  
移動して、その腕をがっちりと

掴むエイラとサーニャ。

「まずは何人かが

風呂に入る形をとる。」

「あの一……彼はどうするんですか?」

リーネの言葉に一齐にボバの

方を向くウィッチ達。

顔を赤くし、何かを期待するような

まなざしを向けられた彼は、その  
目線から顔をそらす。

「……ボバ。長湯は好きか？」

両脇にいたエーリカとエイラを  
振り払うと、近くにあったドアの  
ノブに手をかけようとする彼。

しかし、バルクホルンとシャーリーの  
2人に背中から引つ張られ、部屋の  
中に引きずり込まれる。

「なんで逃げるんだ？あ？私と

一緒に入るのがそんなに嫌なのか？」

「……アタシの胸、触っても

いいんだぞ？」

「無理だろっ!!枯れるっ!!」1人

相手はさすがに……。」

ルツキーニが彼の背中に乗つかると

ぐえっという声をボバが出す。

うつぶせで取り押さえられている。

彼に視線を合わせて美緒が言う。

「……こないいいモノがあつてな。」

スツと取り出したのはピンク色の

液体が入った小瓶。

その瓶を見た瞬間、502で軟禁されていた時

ラルが良く飲ませてきていた薬のことを

思い出した彼は、他のウィッチ達に乗つかられながらも

ナメクジのように地面を這つて出口へと向かう。

「……逃げちゃだめです。」

「よいしょつと。」

リーネとミーナにも乗つかられ

今度こそ完全に身動きが取れなくなる。

「待てっ!俺はドラム缶の風呂でいいっ!!

死ぬっ!!」

近くにあつたソファアにしがみつくと彼の両足をミーナと美緒が持つ。

バルクホルンとシャーリーがその

しがみついている指を一本一本

優しく外していく。

「……あなただって、本当に

悪い人ね。」

「観念しろ。……退役後の

事も話そうじゃないか。」

「ぐるぐる巻きにして縛っちゃえばー?」

「そうだな、ルツキーニ。」

「エーリカも起こしてくる。……」

「このこと知ったら飛び起きるだろうからな。」

「ボバさん……。あの……。す、

擦り付けたら、触るくらいなら……。」

「あああつ……!」

作戦室の近くを通りがかった哨戒兵は

◆ びくつと体を強張らせた。

結局のところ、彼は風呂場に連行される  
こととなり、現在、無理やり体を  
洗わされていた。

「・・・んっ・・・ああっ・・・。」

艶っぽい声を出すエーリカの姿を  
なるべく見ないようにしながら

無視で彼女の体を手に持ったタオルで  
優しく洗っていくボバ。

「・・・おおっ・・・。な、懐かしいな・・・。」

ごくろり、と生唾を飲みながらも  
顔を赤らめつつも彼の体を

洗っていくバルクホルン。

いつもの生真面目な空気はなく、

発情した獣のように目の前の

オスに目を奪われていた。

そして、そんな彼女の右手が

ぎゅつと彼のペニスを掴む。

「うぐっ。。。」

「あ、す、すまんっ。痛かったか？」

「。。。大丈夫だ。」

502で散々セックスを強要されたことに

比べれば、501と一緒に体を洗いあうくらいは

マシであった。

そう思っていたが、バルクホルンが

俺のモノをしごくスピードを徐々に

あげていく。

「。。。バルクっ。。。ホルンっ。。。！」

「。。。ふふふ。どうした？ただ体を

洗いあっているだけじゃないか。」

「。。。むー。」

自分の想い人が親友に骨抜きにされている

ところを見て、ぷくーっと頬を膨らませる

エーリカは、彼の正面に抱き着いて

その股をボバの脚にこすりつける。

「えいつ。えいつ。．．．なんか変な

きもちになつてきたあ．．♡」

にちゅ、くちゅつ、という音どが響き

彼女の股から愛液が出始める。

それは、彼の体に擦り付けられ

念入りに擦り込まれていく。

「ねえっ♡私の胸、吸って．．．?♡」

「．．．う。」

普段だらしなない彼女のかわいい姿に

思わず手を伸ばす彼。

胸の直前で手を止めると、じれったくなったのか

エーリカが彼の顔に自分の小さな胸を押し当てる。

おずおずと舌でその乳房をなめ始めた。

「・・・んっ♡・・・くすぐっ・・・たい・・・よお・・・♡」  
「・・・むう。」

今度はバルクホルンがうーっ、とうなるような  
声をあげてエーリカに嫉妬し始める。

自分の自慢の胸を背中から押し当てつつ、  
手で彼のモノをしごき続ける。

にちゅっ、くちゅっ、という音がペニスから  
出始め粘液でぐちよぐちよに濡れていく。

「っーんんっ!」

「・・・あうっ♡吸われてるうううっ♡」

「・・・ほらっ♡出せっ♡他の女に  
うつつを抜かすなど、許さんぞっ♡」

エーリカは両手で口を抑えながら  
体を震わせる。



たいして、バルクホルンは湯気で

体が火照っているのか背中に

自分の胸を擦り付けながら、

両手で彼のペニスを責め続ける。

ヴァルトルートとロスマンに

やられたようなことを、再びされて

限界を向かえつつあった彼は、

今度こそとどめを刺される。

エーリカも彼のモノにそつと

手を触れ、優しくしごとく

ボバが限界を迎えた。

「・・・っ!!」

「うわっ♡」

「ひゃんっ♡」

どびゅっ、どびゅっ、とエーリカの

白い肌に向けて放たれる精子。

自分の体が汚されているというのに

嬉しそうな顔でそのドロドロの液体を  
手で掬うと、嬉しそうに口に含んだ。

「……にがい……。……これが、

私の中に出されたらなあ……。」

「ハルトマンばかりずるいぞっ！

……ほら、私にもたくさん出せっ！」

どいたエーリカに代わって彼の

正面に回ったバルクホルンが彼に

しがみついて甘え始める。

右手はずつと彼のモノを握り続けており、

他の誰にも渡さんとばかりに独占欲を

発揮している。

「……出したばかりだ。そんな

すぐには復活しない。」

そんな彼の言葉に聞き耳持たない彼女は  
がっちりと彼の両頬に手を添えて

口づけをする。

ちゆるるるる、と男を振り向かせ、  
自分だけしか見えないようにするために  
バルクホルンは必死に舌を入れて  
絡める。

「んっ♡んーっ♡♡…んんんっ♡」

彼のモノが徐々にその硬さを大きさを

取り戻してきたことに気を良くした彼女は

左手で彼の手を掴み、自分の胸を

掴ませる。

彼が指をくにと動かして彼女の

豊乳をもむとびくんっ、とバルクホルンが

体を小さく跳ねさせる。

「んぶうううっ♡♡んんんんっ♡♡」

「…う。…」

快楽と酸素不足で意識が朦朧としてきた

彼は、とうとう射精をする。

先ほどよりも多くの量をバルクホルンの胸やへそにだし、彼女の体を汚す。

まだおさまらず、少し出ている彼の

モノを握りながら彼女がうっとりとした顔つきでささやく。

「・・・ハルトマンのときより、たくさん

体に出してくれたな♡・・・つまり、私のほうが愛されているということだよな？」

「・・・は？」

今まで恍惚とした表情で横になっていた

エーリカがむくり、と起きだし

今までに見たこともない表情で

バルクホルンを睨む。

「体つきも私のほうがいいいな。

・・・ああ、気にするな。胸で

挟めなくつても。」

「・・・。」

ふふん、と鼻で嗤うバルクホルンと

そんな彼女をじつと無表情で見つめるエーリカ。

「・・・きしゃーっ!」

「やるのか!」

エーリカがバルクホルンに飛び掛かって

ごろごろともつれあいながら転がる2人。

自分の精液を体中につけながら

じゃれあう二人の姿を見たボバは

今が好機とばかりに風呂場の出口に向かう。

すると、出口が開けられ、

次に入る予定である他の皆

が入ってきて目があう。

「あ。」と声を漏らすと

美緒が目をつと細めて

にじりよってくる。

「……どこに行くつもりだ？」

「……ちよつと、喉が渴いたから。」

「……全員と一緒に風呂に入る

予定だったはずだが？」

「……すぐに帰ってくるから。」

「目を合わせて言え。」

「……うおおおっ!!」

アイシールド21なりに上手く彼女たちを避けて

風呂場を抜け出そうとした彼は顔を赤くしたペリーヌと

リーネに上から抑えつけられ、そのまま風呂場に引きずり込まれていく。

「2回出したんだっ!!これ以上は無理だっ!!」

「媚薬を飲んだからもつとできるだろう？」

「……少なくとも、私たち全員のために

1回ずつは出せよ。」

これじゃ、502と何も変わらない。

さすがにルツキーニとは何も

しなかつたが、他の皆が見ている前で

1人ずつ本番以外のことをさせられた

彼は、その夜、ベッドでうんうん

うなされたという。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！【その1】（ミーナのお尻できゅつと・・・  
あ、なんでもないです。）

お風呂でしごかれ続けて一日後。

エーリカとバルクホルンの部屋で寝ていたら

2人に抱き枕にされて、息苦しさで目が覚める。

2人からの拘束を解こうと体を動かすと

バルクホルンが魔法を展開して、俺の

腕をぎゅううつと握り締める。

あまりの痛さに思わず悶絶した。

隣のエーリカはずつと俺の

胸に顔をうずめながらすりすり

マーキングするように体を

こすり付けてきている。



するする、と服を脱いで

2人の拘束を抜け出し、廊下に

出ると、まだ夜の様だった。

マスクをつけたまま下はパジャマ姿で

歩いていると、司令室で

誰かがいる気配を感じ、右手にブラスターを

構える。

ドアをそっと開けてブラスターを

構えると、ソファアームでミーナが

寝息を立てて寝ていた。

近くには、頑張つて終わらせたのか

書類が山積みがにされていた。

ふう、と息を吐き、近くにあった

シーツを彼女の体にかけておく。

さきほどよりも寝心地が良くなったのか

彼女の顔色が少し良くなった気がする。

その隣に座り、頭をなでると

「．．．んえへへ．．．♡」と

嬉しそうな寝言を漏らした。

最初の人生で会った時にはこんな彼女の表情を見ることがになるとは思わなかった。

脳裏に、過去の情景が浮かんできた。



最初の人生において、美緒と

模擬戦を行い、501の一部のウィッチから信用を、

一部からは疑心を持たれるように

なったところ、一番彼女と多く話していた。

「・・・次のターゲットは？」

「・・・このネウロイよ。」

司令室に座る彼女から手渡された

標的が映る写真。

びゅう、と口笛を吹いてその写真を

眺めながらどれだけの金になるか考えていると

近くにいたミーナがじつと俺のこを見つめて

いるのに気が付く。

「・・・なんだい？」

「・・・あなたは、何者なのかしら？」

敵意を隠そうともせずそう質問してくる

彼女に思わず笑う。

そういう時は、腹芸の一つでも

するものである。

「・・・まだまだ若いな。お嬢さん。」

「・・・ふざけないでもらえるかしら？」

さきほどよりも語気を強めてそういう彼女。

「・・・確か、501のミーナ、だったか。」

「何者ねえ・・・。少なくともウィッチではない

ことだけは確かだが。」

俺がそういうと疑いのまなざしを

向けてくる彼女。

事実を言ったところで信じてもらえないのは

明白だった。

いつもの装備を引っさげて司令室の

ドアから出ようとするのと背中から声をかけられる。

「・・・あなたが、501のウィッチ達に

何かをするようだったら、私はあなたを・・・。」

「許さないってか?」

彼女に向けてブラスターを向けると、

彼女も俺に向かって拳銃を突き付けている

のが見える。

だが、アーマーで全身を防護している俺と、  
シールドが貼れるとは言え、単なる軍服姿の  
彼女ではどちらが有利であるかは明白だった。

しばらくの間にらみあっていたが、  
思わず笑みをこぼし、先にブラスターを  
降ろす。

「・・・俺の敵はネウロイであって、  
あんたらじゃない。・・・金さえもらえりや  
どうでもいい。世界だろうと、何だろうと  
興味がない。勝手にやってる。」  
それだけ言って、今度こそ司令室の  
ドアから出る。



(・・・今考えても、彼女が俺に

惚れる理由はなかったと思うんだけどな。  
マスクを外して、ソファで横になって  
寝ている彼女の手をそつと握り締める。  
ん・・、という落ち着くような声が  
聞えたかと思うと、彼女がゆっくりと  
目を覚ます。

意識がまだはつきりしていないのか  
ぼーっとした顔をしている。

「……こんばんは。」

「……。」

そういう俺の方に顔を向け、  
じーつと見つめてくるミーナ。

どうしたのかと思い、声を掛けようとすると  
彼女にシートの中に引きずり込まれる。

「……あ。夢なのね……。」

「・・・んー♡」

寝ぼけている彼女にいろいろと体を  
まさぐられる。

このままではいろいろと不味いことになりそうだったので  
脱出を試みるも、彼女にがちりと抱きしめられ、  
エーリカ、バルクホルンの二人から逃げたときの様には  
いかなかった。

ほっぺをむぎゅーっつつまんで引つ張ると  
目を覚ましたのか彼女がはっとした顔つきになる。

「・・・。」

「・・・。」

ミーナのほっぺをつまんでぷにぷにと  
動かしている俺と、目を見開いて驚きの  
表情を浮かべる彼女。

「……………」

そのまま俺から離れて、シートの中にももる。

「ミーナ? ……おい。」

「……………見ないでえ……………」

いつも大人びている彼女の弱弱しい声を聴いて思わずぶふつ、と笑った。

その後、いい笑顔のミーナに脇腹をぐりぐりとなねられたのはご愛敬。



「まだ怒っているのか?」

「……………そう言う風に聴いてくるのはいや。」

むすーつと拗ねるミーナ。



その頭を撫でようと手を伸ばすと、  
ぱしん、と手を払われる。

「・・・前の一件だつて恥ずかしかったのに・・・」

「・・・ああ。・・・あれは・・・な・・・」

まさか、お尻でネウロイを倒すとは  
誰も思うまい。

501の他のウィッチ達ならともかく、

男である俺に見られたことが相当

恥ずかしかったらしい。

今の彼女に慰めの言葉は逆効果であるので、

ソファーに座りながら彼女の手をそつと握り締める。

握った手に力を入れてきて、嬉しそうにぎにぎと

してくるミーナ。

「・・・♪」

どうやら機嫌を直してくれたようである。

しんとした静かな部屋で、

沈黙を楽しんでいると

彼女がぼそつとつぶやく。

「……あなたはいつたいどこから来たの？」

不思議そうな声でそう尋ねてくる彼女。

まさか、全く別世界から来ているとは思えない。

それを知るウィッチもほとんどいないが、

彼女になら少しくらい話してもいいかと思ひ、

窓の外に映る月を眺めながら答える。

「……遠い、遠い、場所から。」

そう答えると、寂しそうな声で

彼女が俺の手をぎゅうつと力強く

握り締めて言ってくる。

「・・・だめ。・・・帰っちゃ・・・いや・・・。」

少し病んだ目でそういつてくる彼女を  
安心させるようにそつと語り掛ける。

「・・・安心しろ。俺に帰る場所はない。」

現代に戻るくらいなら死んだ方がマシだ。

人間として、いや、『ボバ・フェット』ととして  
生きて死ぬこと。

それが俺の望むこと。

傍に置いたマスクをぎゅっと手で掴む。

ミーナが安心したような表情に変わり、  
うとうととし始める。

「・・・ねえ。愛しているわ・・・。」

それだけ言つて彼女は今度こそ目を閉じる。

「・・・ありがとう。・・・俺も・・・だ。」

目を閉じて眠る彼女を司令室に残し、俺は部屋に戻ることにした。

「ねえ、どこに行ってたの？」

「……私の傍からはなれるな。」

「……いや、その……。」

「……あれ？なんでミーナの匂いがするの？」

「ねえ、なんで？なんで？」

「・・・ほう。・・・ほう。」

「(・・・そのうち、ここでも刺されそうだな・・・。)」

バルクホルンとエーリカの部屋に戻った俺は、

彼女たちに一晩中、責められ続けた。

途中、色々と凄いことをしていた気もするが、

翌朝、エーリカ、バルクホルン、そしてミーナの

機嫌が治っていたのでよしとした。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その12】（不調の原因）

「・・・俺への贈り物？」

『うん、そうだよ。』

ガランドの言葉に思わず返す。

ちらりと横にいる彼女たちを見ると、

芳佳とリーネが仲良く談笑しており、

美緒とミーナはこれからどこに行こうか

楽しそうに予定決めをしている。

司令室の電話で受けた

ガランドからの情報。

ミーナはこのことを既に知っているのだろうか。

しかし、見た感じそうした雰囲気はなく、

本当に俺くらいしか知らないようである。

美緒たちに背を向け、小声でガランドに

話しかける。

「……それは一体何なんだ？」

『……ふふふ。着いてからのお楽しみさ♡』

ぞくり、と背筋に冷たいモノが這い寄る。

ちん、と思わず電話を切る。

彼女の過去の言動を思い返す。

—— 『ねえねえ。一緒に私の部屋で極上の

ワインを一緒に飲まないかい？』

—— 『子供、ほしいんだよね。』

—— 『少しくらい、年がいつていても、

気にしないでいてくれるかな？』

(……いやいやいや。……いやいやいやいやいや。)

ぶんぶん、と頭を振ってそれはない、それはないはずと

自分の考えを追い払うように必死に否定する。

彼女はカールスラントの上級将校であり、

501の実質的な最高司令官でもある。だから、その権力を使えば

今は彼女の下についている扱いの

俺にも多少の無茶な要求は通せるはずだ。

「あら？ 話は終わったの？」

後からにゅつと顔を出して覗き込んでいる

ミーナ。

気取られないよう、真顔で返す。

「・・・ああ。ところで、今日のお昼は？」

「私が作ったぞ！」

美緒が胸を張ってそういう。

・・・美緒が、料理を？

「・・・なんだ、その眼は。・・・おい、

宮藤、リーネ、なぜおまえたちも目を・・・

ミーナまで!？」

◆ 司令室に彼女の叫び声が響いた。



食堂で、美緒のデスクツッキングを堪能し、死者が続出するという事件から数時間後。

色んな意味でタフな芳佳、ミーナ、美緒の

3人で模擬戦をすることに。

他のウィッチ達は美緒の料理を食べるなり

ベッドの上で物言わぬ軀と化し、

ペリーヌは完食してしまつて特に重症であつた。

「……やはり、醤油を入れた方がよかつたか？」

「……美緒。次からは一緒に作ろうな……。」

「?!ほ、ほんとか?!……き、貴様がそういうのなら

仕方ないな!!……ふふ。」

ミーナと芳佳にジト目で見られていることに気が付いた

美緒がおほん、と咳ばらいをし、木剣を地面に刺して言う。

「ミーナ。たまにはお前も戦つた方がいいだろう。」

「……そうね。デスクワークが続いているし……。」

「え。」

意気揚々と自分の愛銃を掲げて魔力を展開し始めるミーナ。耳と尻尾がせわしなく動いており、飼い主に構ってもらえて喜ぶ犬のように見える。

「宮藤。お前はボバとだ。」

「・・・え。えー！？」

驚いた声をあげ、手をぶんぶんと振って

悲壮な表情を浮かべる芳佳。

「む、無理ですよお！まだ、ブランクが

抜け切ってもいませんし！」

そんな彼女の耳元で美緒が何かをぼそつと

ささやく。

あわてていた芳佳が突然、無表情で

美緒を睨み始める。

体の震えが収まらない。

最近寒いからだな、と結論づけて

ミーナの方を見ると指でばってんを作って

止めるのは無理、とジェスチャーしてくる。

「……さっきの約束、本当ですね？」

「……ああ。いいぞ。私はこいつが

勝つ方に賭けるからな。」

そういつて、背中から美緒が抱き着いてくる。

豊満な胸が背中に当たって変形しているのがわかる。

甘い香りが鼻に届き、ぐらつと来ると

正面にいた芳佳が今まで見たこともない

険しい形相でこちらを見ているのに気が付く。

ひゅん、と玉ヒュンしていると

おほん、と美緒みたいに咳払いをした

ミーナが仕切りなおす。

「……双方準備はいいかしら。」

「いつでも。」

「……。」

何も言わずに俺をじつと見つめてくる彼女。

怖いとかいうレベルではない。

不意に、彼女との思い出が部分的によみがえってきた。

——ガリア解放時に別れックスして、絞り殺されたときのこと。

——501の再結成時に、彼女に薬を盛られて絞り殺されたときのこと。

——501が再び解散するときに『赤ちゃん、ほしいです……。』と迫られて延々とセックスし、絞り殺されたときのこと。

あれ？絞り殺されたときの場面しか思い浮かんでこないぞ？

負けたら一体どうなるのか。

震える手でペイント弾が入った銃を握り締め、  
構える。

「……はじめっ!!」

ミーナの号令がかかった。

「・・・で、どうだった?」

「・・・明らかに不調だな。」

そう聴いてくる美緒に応える。

・・・俺の膝枕でだらしない表情を浮かべて

寝ている彼女の顔を見ていると、何だかどきりと

してくるので目をそらしつつ話す。

「芳佳は、不調だ。・・・あれじゃ、誰が相手でも勝てない。」

「・・・そうか。」

ふう、と美緒が息を漏らす。

司令室のソファアの柔らかさが心地いい。

「・・・。。。」

ミーナがものほしそうな顔つきで指を

咥えてこちらを見ているのを無視しつつ、

彼女に聴く。

「近々、ネウロイ掃討作戦のために扶桑皇国から

大艦隊の援軍が来るんだろう？」

「ああ。・・・我が扶桑皇国が誇る、戦艦大和も来るぞ！」

嬉しそうな声ではしゃぐ美緒。

扶桑軍人として、同じ扶桑の軍隊と共にネウロイと

戦えるのが嬉しいのか。

そういえば作戦を聴いた芳佳も嬉しそうな声を

あげていた気がする。

かつて日本人だった軍事知識に詳しくない俺でさえ

知っている有名な戦艦である。

だが、どうも扶桑皇国の軍部にはいい感じを持ってない。

—— 扶桑海事変で圭子、章香、敏子たちを結果的に

危機にさらしたあいつらは。

「・・・おい、どうした? 凄い顔をしているぞ・・・?」

美緒の声ではっと我に返る。

・・・やめだ。あの一件は当の昔に

終わったことである。

それよりも、今は来たるべき

作戦に向けて準備をしておく方が先だ。

すつと立ち上がると、美緒が名残惜しそうに

あつ・・・、という声を出す。

そのことに彼女自身が気が付いたのか、

はたまた、俺と他のウィッチであるミーナに

そんな姿を見られて恥ずかしかったのか

顔を赤く染めている。

「・・・。」

「・・・あー。・・・ああ。そういう

ところが魅力的なんだよなあ。」

思わずつぶやいた声に彼女はますます顔を赤く  
火照らせた。

「……ところで、他のウィッチ達は大丈夫なのか？」

「……だ、大丈夫だと……思うぞ。」

自身の料理が原因であることを自覚しているからか  
先ほどとは違う意味で羞恥に悶える美緒。

そういえば美緒は勉強、武道ばかりで

料理とかは経験がなかったなあ、と遠い目で

女子力が高い我が妹を思い出した。

「兄さん！ありがとうございます！」



「どうした、ケイ?」

「なんか兄さんが思わず

キスしたくなるようなことを言ってくれた

気がして。」

「……ほう。」

(えーと。……ハンナとケイのプロマイドと……)

……わ、私のを渡しても喜んでもらえると

いいなあ……)。

どこかで出立の準備をしている魔女たちが

電波を受信したのは特に意味はない。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！【その13】（大和を守れ（誰か俺を守ってく  
れ））

ペリーヌが大和を逃がすために

独りでネウロイを引き付けていた。

街のはずれの港にて呑気に

釣りをしていた俺は基地に帰って

すぐにそのことを知らされる。

ネウロイがでるはずもない地域に突如出現し、

扶桑皇国の艦隊が戦線を離脱するまで時間を

稼ぐというのだ。

すぐにジェットパックを噴かして

通信室の窓から外に出ようとすると

肩を美緒に掴まれた。

「……ここからじゃ間に合わない。」

「……俺が、どうするのかわかっているだろ。」

その手を振り払っていこうとすると美緒はふっと

嬉しそうに息を吐き、……そして近くにいた

エーリカとミーナに目線を合わせると2人が頷く。

「……ミーナ。」

「……はいはい。アレを使うのね。」

……本当は、絶対に使わせたくないけども、

……リーネさんがあぶないし……。」

「じゃあ、私が片道だけ飛ばして、あとは

彼にお姫様だっこしてもらおうよ。」

にしし、役得役得、と笑うエーリカを

じとつとにらむ2人。

そんな3人に問いかける。

「……あれって?」

そういつた俺に苦い顔でとある

資料を見せてくるミーナ。

◆  
リーネ・ビショップは一人、  
ネウロイ相手に孤軍奮闘していた。

さすが501に所属しているだけの實力を持つてはいたが  
たった一人で超大型ネウロイの相手をするのは無謀であった。  
シールドを展開し続け、致命傷こそ免れていたが  
その体に徐々に傷跡ができていく。

一瞬、恐怖が彼女の体を硬直させ、

—— ついで、扶桑皇国の艦隊と  
それに乗っている自身の親友のことを  
思い浮かべるとすぐに銃を構え直し  
掃射していく。

正確無比な射撃でネウロイにダメージを  
与えていく。

しかし、コアまで届かないのですぐに  
ダメージを回復するネウロイ。

反撃とばかりに巨大な赤いレーザーを  
放つとリーネのシールドを砕く。

ふらふら、と魔力不足気味で拳動が  
おかしくなっていく。

(・・・だめ。これ以上は・・・!)

だが、そうであっても彼女は退かなかった。

501の面々と、——とある男から教わった  
勇気が彼女の体を突き動かす。

シールドを貼る魔力が尽き始め、  
再度レーザーを放とうとする

彼女の前に、割り込んでくる影。

正確には、空の彼方から音速を超える

速度で割り込んできた

「……おとおつ!!」

……両足に見たことのある赤いユニットを

身に着けたエーリカと、その背中から抱き着いている  
ボバであった。



ミーナとの会話を思い出す。

—— 『これは、ウルスラの?』

—— 『そうよ。……試作品を修理、回収した

ジェットストライカーの改良型、

ストーム・ストライカー。』

バルクホルンを傷つけた忌まわしい赤のストライカーに  
一瞬眉をひそめたが、息を深くすすって落ち着き

話の続きを聴く。

—— 『彼女は、バルクホルン大尉が使っていた

ジェット・ストライカーを回収し、短期間で

改良することに成功したの。・・・どつかの

誰かさんの装備が役に立った、って嬉しそうに

こぼしていたわよ?』

ジト目で見てくる彼女たち。

エーリカは、それは知らなかったといわんばかりに

俺の腕をつねってくる。

じやれついでくるエーリカを引きはがし、

聴く。

『・・・まさか、それを?』

『・・・運用をテストしていないものを

実戦で初めて使わせるなんて本当はありえないん

だけども。』

だが、こうしているいまもリーネは一人で戦っている。

迷っている暇がないのは明白であった。

『・・・じゃあ私がそれをつけていくよ。

・・・迷っているひま、ないよね?』

『・・・エーリカ?』

即決で決めた彼女に想い留まらせるよう

何かを言おうとすると人差し指をマスクの  
前に当てられ、にしし、と笑われる。

—— 『行きは私が運ぶから、魔力切れの私を

ちゃんと守ってね？』

ストーム・ストライカーを使えばリーネのもとまですぐにも  
行くことはできるだろう。

だが、魔力切れを起こす可能性があるかもしれないし、  
何よりも暴走するかもしれない。

だというのに、彼女はこういつているのだ。

—— 命を預ける、と。

その意味を理解できないほど女心に疎くない俺は  
彼女の右手を両手でがっちり握りしめる。

—— 『ああ、任せろ。……絶対に俺は俺が守る。

……何があっても。』

—— 『……』



「……? エーリカ。」

ぼーっと蒸気した顔でエーリカはつぶやいた。

「……録音したいからもう一度言ってくれない?」

なんとも、マイペースな彼女らしかった。



リーネのところまで来るのに成功し、

間一髪でエーリカがシールドを貼って

割り込むことに成功する。

このままリーネが逃げ切るまでエーリカと

俺で持ちこたえれば。

しかし、そう考えていた俺に

エーリカが力の抜けたような

声で言ってくる。

「……あ、ごめん。魔力切れた。」

「早いなっ!!」

あてにしていたエーリカのシールドがもう使えなくなつたことをしり、

背中から抱き着いてた俺は態勢を変える。

魔力切れで空を飛べなくなつた彼女を

正面から抱えてお姫様だっこし、

左腕のワイヤーでお互いの体を

離れないようにしっかりと結ぶ。

俺の左腕と彼女の胴体が

ワイヤーでつながれると彼女が

ぶるりと身を震わせる。

「・・・なんか、これ、イイ・・・」

1つになつているみたいで・・・」

恍惚とした表情で怪しい笑みを浮かべ、

そうささやく彼女を無視し、持っていた

ブラスターを渡す。

「俺が飛び回る! だからエーリカが」

「・・・ネウロイを狙えってことだね? りよーかい。」

すぐに俺の意図を汲み取った彼女が

両手でブラスターを構えて掃射していく。

三点バーストの武器に慣れていないように見えたが

すぐにコツをつかんだのか、的確にネウロイに当てていく。

「やっぱりこの銃、面白いや。・・・私に出来ない?」

「馬鹿言うな。・・・来るぞ!!」

大きな攻撃から、拡散式のレーザーに攻撃を切り替えてきた

ネウロイ。

それをあぶなげなく身をひねってかわしていく。

しかし。

「・・・エーリカ!! ストライカーを脱げ!!」

ちよつとでも軽くする!!」

「えー。・・・あとで一緒にミーナに怒られてくれるなら。」

「なんでもしてやるっ!!」

そういうった俺の言葉にスツと目を細めながら

「よいしょ。」と言ってストライカーをほい、ほいっと

捨てる彼女。

大分重量が減ったからか、先ほどよりも動きが

軽くなる。

が、攻撃を当てられるとは言え

決め手に欠けていた。

たいして、相手は一発でも

当てられれば勝ち。

リーネも援護射撃をしてくれているが

このせめてあと一人いれば……。

次の瞬間、三時の方向から

ネウロイに向かって射撃が放たれる。

「……リーネちゃん、エーリカさん、ボバさんっ!!」

そこには、空を飛べなくなっていたはずの

芳佳が、見たことのないユニットをつけて

大空を飛び回っていた。

かくして、俺たちはネウロイの撃破に成功する。



帰投した俺たちを出迎えてくれる皆。

ペリーヌは涙目でリーネに抱き着き、

美緒は芳佳の頭を撫でて「よくやった」と

嬉しそうに褒めている。

——そして俺たちはどうなのかというと。

「ハルトマン!!なんでお前がああストライカーを……。

いや、とうかななぜワイヤーで二人ともつながりあつて

いるのだ!?!」

「いやー。彼が私から離れたくないっていうから

もうずっとこのままでもいいかなーって。」

「「「「「は?」「」」」」」

キレ気味のミーナやシャーリーたち。

そして、俺は後ろから「あたしも一緒に

遊ぶー!!」って言いながら無邪気にじやれついてくる

ルツキーニに癒されながら、皆と目を合わせないように

下を向いて考えていた。

(・・・どうやってこのワイヤーをほどけば

いいんだったかな。)

夕食の時もエーリカとくつつきあい、

いつの間にか隣に座って顔を赤らめながら

食事を食べさせてきたリーネ。

それらをとがめてくる他の面々と言う

カオスに気疲れしながら死んだ目つきで

うなだれた。

「……………待っているよ。」

アフリカからの使者が来て  
それどころではなくなるのは  
いいことだったのか、運が  
悪いのか。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その14】（命を賭けた鬼ごっこ）

——なぜこうなったのだろうか。

手傷を負い、痛む腹を抑えながらくらい道を歩く。

獲物と狩人。

今、俺は間違いなく狩られる獲物であった。

（……はっ。はっ。はっ。）

近くの部屋に入り込み、中で膝をつく。

——なぜ、俺は追われているのだろうか。

いや、それだけならいつものことだ。

501や502の面々に追われるなど

日常茶飯事である。



だが、今回ばかりは本当にまずい。

(・・・厄介なっ・・・!)

ぎり、と歯ぎしりしながら右手で腹を  
抑えているとぱきり、と音になる。  
思わず構えて警戒する。

——次の瞬間

大量の虫ががさがさと、入ってきたところとは  
反対の出口から湧いた。

ほっと溜息をつき

——そして気づく。

(!?なんで、虫がっ……。)

くらくら、と意識が朦朧となり  
仰向けに倒れ込む。

見上げるとそこには、顔を赤くし  
めをとろんとさせつつ俺の体を  
恍惚とした表情でまさぐる彼女たちの  
姿があつた。

「さいしよは、私だからねっ！」

「ちよーだい♡体熱いのお……♡」

「子供、子供子供……♡」

——すべては、海に行こうと美緒とミーナが  
言い出したことから始まった。

◆ 501統合戦闘航空団基地の司令室にて。

「・・・慰安？」

「その通りだ！」

はっはっは、といつも通りに豪快に笑う美緒。  
少し違っていたのは、ソファアームに座っている  
俺を取り囲むようにくっついてる面々を  
冷たいまなざしで見つめていることか。

女同士の戦いに身を震わせていると

リーネがおずおずと手をあげて聴く。

「・・・あ、あの・・・彼はどうなるんですか？」

その言葉に一齐に彼女たちがミーナの  
方を向く。

この中で一番の長である彼女の命令を

待っているかのごとく、視線が集中した。

「・・・そうね。少なくとも、水着姿では

まずいわね。」

ウィッチとして通している以上、外でこの装備を脱げばいくらなんでも体つきで男だとばれるだろう。

かといつて、あの装甲姿でビーチに俺だけいるのも同じく不自然だ。

他のウィッチ達みたいに一緒に

ビーチに居なければ不自然すぎて

周りに異常に思われる。

「……あ、そうだわ。」

「ぼん、と彼女が手の平を叩いてにこりと微笑む。」

その笑顔は天使のようにも見えたが

——悪魔のそれであったことを知るのは

それからすぐのことであった。

◆ 『あはははっ!!ペリーヌったらおもしろーい!!』

『ほらほら!眼鏡を返してほしければおいついてごらん!』

『こ、こらーっ!!それはしやれになって・・・きやん!』

『ペ、ペリーヌさん?!い、今なおします!!』

『・・・砂浜に顔面ダイブかあ・・・。・・・自分の想い人が

いる前で絶対にそんな真似はしたくないよね、トゥルーデ。』

『同感だ。』

姦しく楽しそうに遊び、はしやぐ彼女たち。

そんな中、俺はというと。。。

「・・・・・・・・。」

包帯でぐるぐる巻きにされて、

車いすで押されていた。

なぜ、こんな格好をしているのか。

それはミーナの提案によるものであった。

——『・・・重症者のふりをして、包帯ぐるぐる巻きで  
車いすに乗る?』

——『そう♡』

につこりと微笑むミーナ。

しかし、それがとんでもない策であることに  
すぐに俺は気が付き、あ、と声を漏らす。

『体を覆い隠すために包帯をするのはそれでオツケー。。。そして、

それによって、海で泳がない理由ができつつ。』

『俺は誰にも怪しまれることなく皆と一緒に海に行けるのか。』

ばああつ、と表情を明るくする彼女たち。

生真面目なバルクホルンと美緒さえそわそわと

嬉しそうに体を小刻みに動かしている。

『普通なら、そんな傷を負った相手を連れまわすなんて・・・』

と言われることでしょうけど、もう一つ傷があることに  
すればいい。』

『・・・PTSD?』

ルツキーニがそういう。

『そう！トラウマを持つている、だから、仕方なく……』

・・・・そしてほかの兵士たちはこうも考える。』

——上官の過去に詮索するのは、まずいのではないかってね。

『あー。そつかー。・・・ということ、これで横やりを

入れられる可能性は完全に消えるわけだー。だよな？

シャーリー？』

『ははは。いいね。アタシ、他の男が訝しむの。・・・』

いい加減うっとおしくて仕方なかったんだよな……』

『ウィッチなら少なくとも軍曹以上の階級を持つている。』

『この基地にいる他の整備兵たちの中にそれ以上の階級を

もったものなどいない。』

『あ、じゃあこれからずつとそれを大義名分にして

色々なことができるわけですね!! やったね芳佳ちゃんつ!!』

『うん。』

ぞつとした。

例え見た目は押さなくて、愛らしい少女たちもその中身は狡猾なのであることを実感し、思わず握っていた右手に汗が浮かぶ。

(・・・ウィッチって。・・・いや、女って。)

ちよーこわい。

現代から俺の女に対する価値観はあまり変わっていないようであった。



で、今の俺は足が動かさなくらい重症を負いつつも、心にある傷をいやすため車いすで皆と海に来たという設定である。

が、当然そんな状態では泳ぐこともできないし、



・・・・かぶっている身にまどっている黒の  
ローブも脱ぐことはできなかった。

(・・・退屈だ。)

彼女たちが楽しそうに遊んでいるのを見るのは  
かなり嬉しいが、それもずっと見ているとなると  
さすがに飽きる。

ふああ、とあくびをもらしながら寝ようか  
迷っていると後ろから誰かに車いすを引かれる。  
振り返るとそこにはエイラとサーニヤがいた。

2人はどうやら皆と一緒に  
遊んでいなかったようだ。

美緒とミーナはあたりを注意しつつ  
皆の安全を見守っている。

「・・・2人は泳がなくなっているのか？」

俺がそういうとサーニヤがにこりと笑い、顔を赤らめ、なぜか慈愛に満ちた表情を浮かべるエイラの二人が車いすの取っ手をぎゅつと掴み。

——前に思いつきり押す。

バランスを崩して倒れる俺。

しばらくの間呆然としながらも

立ち上がるために上半身を起こすと

サーニヤが俺の耳もとでささやく。

『……だめ。下半身を動かしたらばれちゃう。』

その言葉に思い出す。

自分が今置かれている状況を。

（——嵌められた。）

今の俺はジェットパックで空を飛ぶこともできない。

全ての装備はあらかじめ回収されている。

足を動かすことも出来ない。

——港から俺たちを見守っている

警備兵の存在がある限り。

ついでエイラがへへへ、と笑う。

2人で組んでいるのか。

そう思っていた俺はさらなる衝撃を受ける。

「……なあ。サーニヤ。私が

そいつの面倒を見るから、サーニヤは

遊んでも大丈夫だぞ。」

あのサーニヤ好きのエイラが

サーニヤに向かって言った。

それは、つまり。

「・・・エイラ。大丈夫。

私一人いれば。・・・だからエイラこそ

皆のところに行つてもいいよ？」

こてん、と首をかわいらしく傾げ

微笑むサーニヤ。

エイラの顔が無表情となる。

火花を散らしている間に

俺は這いずつて、2人から気づかれないうちに

少しずつ、少しずつ離れる。

2人がにらみ合っている今がチャンス。

ここから帰るまであの岩場にでも・・・。

その目論見もあつさりつぶされる。

「・・・あらあら。大丈夫？」

「ほら、手をかしてやるぞ。」

ぐいっとミーナと美緒に肩を貸されて

シートがしかれている場所まで連れていかれる。

一件、俺を案じて寝かせているようにも  
見えるだろう。

しかし、俺にはわかる。

—— 2人の目が捕食者のものであると。

ごく自然にミーナが膝枕をして俺の頭を乗せ、  
美緒が頭を撫でてくる。

「だめよー? 気を付けなくっちゃ。」

「頭はいたくないか? 大丈夫か?」

俺を案じる二人の声。

だが、わかる。

この二人は、俺の動きを拘束するために  
車いすから投げ出された俺をごく自然な形で  
シートに座らせ、……捕縛した。

だが、俺も自分が車いすでなければ歩けないという  
設定を活かして二人に言う。

「……いやいや。車いすに乗るよ。……2人に  
迷惑をかけられない。」

そういつて車いすがある方を向くと。

いまだににらみ合いを続けているエイラと  
サーニヤと。

——真ん丸に丸められた  
車いすがあつた。

(……あ、あれ?)

目をこしこしと手で拭く。

もう一度見るも、そこには  
同じく鉄くずしか見えない。

そして、後ろからさらに

声が聴こえてくる。

「……ああ、すまんすまん。

力加減を間違えてお前の車いすを

壊してしまった。……本当にすまん(棒)」

「まったく、トウルーデったらさー(棒)」

怪力を展開して車いすのパーツを

引きちぎっているバルクホルンと、

熱っぽい視線を俺に向けているエーリカと

目線が会う。

そして、海辺で遊びながらも

俺を逃がさないとばかりに

ずっと注意を向けている他の

面々。

その眼には怪しい光が皆、  
灯っている。

(・・・食われる。)

転生を繰り返して機器察知能力が  
発達した俺の勘がそう告げていた。



501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい! 【その15】(かけつこと戦いと)

「・・・宮藤たちがいない?」

「ああ。岩場に行つたきり・・・。」

そう話すのはシャーリー。

芳佳、リーネ、ペリーヌ、ルツキーニの

4人がいないのだという。

あたりと見回すと、中が開けられた

宝箱が散乱している。

ミーナに話しかける。

「・・・大方、何か探しに行つたんだろう。」

遅くならないうちに見つけ出した方良いだろうな。」

「・・・そうね。」

俺の進言を聞き入れたミーナがバルクホルンや

エーリカ達を集めて四人を搜索する旨を

伝える。

俺も、と思つて車いすを転がそうとすると  
バルクホルンに止められる。

「・・・それでは動きづらいだろう。

4人は私たちに任せてゆつくりしている。」

「そうそう。・・・帰つてきたら

膝枕してあげるからさー。」

「エイラさん、サーニヤさん、お願いね？」

そういつて、皆岩場の方に進んでいく。

残されたのはエイラとサーニヤと俺。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「」

重々しい空気の中、

2人に挟まれながら俺は

下を向いて委縮するのであつた。



「……こっちか?……にしても暗いな。」

扶桑刀を背負いながら美緒が歩く。

その顔はあたりを警戒しつつ、

不満がにじみ出ている表情であった。

彼女に取っては、ビーチで彼と

密着し、周りに見せつけられる

チャンスであった。

それは他の面々にとっても同じであるので

皆、同じような顔つきになる。

「……それにしたって、4人はどこにいるのかな?」

「足跡があるところをたどっていけば見つけられるだろう。」

エーリカの問いにバルクホルンが答えると、突如

上から何かが降ってくる。

咄嗟のことで反応が遅れる美緒。

ぶつかりかけたその時、  
黒く光る剣がツボを破砕し、  
壁に突き刺さり、ずり落ちる。  
それと同時にツボの中身が  
飛び散り、あたりに赤い液体が  
散乱彼女たちに降りかかる。

「——大丈夫か？」

彼女たちの後ろからやってきたのは  
包帯でぐるぐる巻きになっていたはずの  
男であった。

◆ 「・・・おい？」

エイラとサーニヤが争っている  
内にこつそりと皆についできた俺は、  
四人に向かって振ってきたものをセイバー・スローで  
破壊した。



「なぜだ!?なぜおまえは私のことを

トウルーデと呼んでくれない!?嫁の

ことを他人行儀で呼ぶなんておかしいだろ!?

・妹のクリスにも紹介するんだから

さつさと私と籍を入れろよお!!」

ミーナは体育ずわりしながら

顔を俯かせてぶつぶつとつぶやき始める。

「ふふふふふふふふふふ。他のところには

渡さないわ。そう、絶対に。

あなたを失いたくないですもの。ふふふふふふふふふふ。」

地面に垂れている赤い液体を指で触れ、

口でなめてみるとアルコールの味がした。

(ふふふふ酒?)

だから皆、こんなにラリっているのか。

よほど度数が強いのか完全に酔っぱらっている

彼女たちを、とりあえず正気に戻そうとすると

後から誰かに押しなおされる。

「うえへへへ・・・♡いいからだしてるなー♡やっぱりー♡

・・・ほらほらアタシのグラマラスボディに子種を

仕込めよー♡」

振り返ると、そこには俺の背中に胸を押し付けてくる

シャーリーの姿が。

目はとろんと虚ろになっており、

どこか怪しい雰囲気醸し出している。

振り払って、立ち上がるとじつと

他のウィッチ達に見つめられる。

——その目はアフリカや502の

彼女たちのそれと酷似していた。

『なあ、ブラのホック、つけてくれないか?』

『兄さん。一緒に寝てほしいな・・・。』

『あなた・・・は、恥ずかしいですねっ♡』

じりじりと後退する俺。

にじりよつてくる彼女たち。

さいなら、と言つて振り返つて全力疾走すると後からどどど、という音が迫ってくるのが聴こえる。

「「「までええええっ!!」」」



ペリーヌ・クロステルマンは洞窟の奥深くにある石像と対峙していた。

ガリアの子供たちが学校に通えるよう、橋を直すには資金がいる。

そのためには石像を倒して財宝を手に入れる必要がある。

レイピアを構える彼女。

石像がその拳を振り下ろそうとしたその時



闖入者が現れる。

「・・・どけええっ!!」

全身を黒いローブで身を包んだ

包帯男が両手で黒く光る剣を抜刀し

石像の拳をたたつきる。

一瞬、呆気にとられたペリーヌだったが

チャンスであることにはつと気が付き、

手首から先がなくなった石像の右腕に乗りかかり、

ジャンプしてレイピアを石像の胸に突き刺す。

「・・・はあああっ!!」

雷鳴がとどろき、石像は粉々になる。

「やったやったー!」

後で見守っていた芳佳たちが喜ぶ。

「でも、今のつて・・・?」

次いで、後ろの穴からミーナ、エーリカ、

バルクホルン、シャーリーが飛び出してきて  
彼を追って走り去っていく。

「……なにが起こっているの？」

「……さあ？」

そうリーネに聴いた芳佳であった。



でろんでろんに酔っぱらい、醜態をさらした

4人と、野生児になった美緒を引き連れて

501に戻った俺たち。

芳佳の魔法で傷が治せたことになった俺は

包帯と車いすから解放された。

……美緒は酔っていた時の記憶がなかったが、

ミーナたちはしつかりとその記憶が

残っていたらしく、今は自室で死んだ目を

しながらシートにくるまっているらしい。

……あんなでろんでろんなどころを

見せればそうもなるか。

基地をぶらついていると、書庫室の明かりがついていることに気が付き、そつとドアを開ける。

そこには、机に突つ伏しているペリーヌがペンを握り締めて寝ているのが見えた。

近寄つて見ると、何かの書類を

書いているみたいであつた。

「……なるほど。」

その紙切れに目を通した俺は思わずつぶやいた。



「……ふあああ。」

あくびをしながら食堂に向かうペリーヌ。

が、すぐさま淑女らしからぬ行動をとってしまったと自分を戒め、つぎのあくびをかみ殺す。

(……はやく橋を直さなくては……)

彼女は一時休暇中にガリアの橋が壊れ、

子供たちが学校に通えないとしり  
何とか直せないか奮闘していた。

昨夜も、書物を読み漁り、打開策を練っていた。  
他のウィッチ達の協力もあり、

以前よりもなんとかかなりそうな雰囲気  
を彼女は感じ取っていたが、それでもまだ頭を  
悩ませていた。

(・・・いけませんわ。貴族たるもの、

焦らず、余裕をもって手本足らねば。)

自己を律し、いつもの毅然とした態度を取りつつ  
食堂に入る彼女。

「おはようございます。」

彼女がそう言うと、美緒たちが

あいさつを返す。

「おお、おはよう。」

「……おはよう。やっぱり

他の方々は？」

「……シャーリーは今も

しくしく泣きながらベッドにくるまっているよ。  
放つといた方がいいんじゃないかな。」

芳佳がルツキーニ聴くと、彼女は  
そう返した。

「あ、そうだ。ペリーヌ。」

「?は、はい。」

急に美緒に呼ばれてびしつと改まるペリーヌ。  
そんな彼女に笑いながら伝える美緒。

「なんかな、お前がいま悩んでいたガリアの村の  
橋を直す件。建材費を出してくれる人物がいて、  
なんとかなりそうだという連絡があつたぞ。」

目を見開いて驚く彼女。

(……一体、だれが?)

ガリアの貴族たちは皆、統治や復興に時間、

資金を費やしているのでそういった援助をおこなうとは考えにくい。

そう思っていると、彼女たちが知っている人物が食堂に同じく入ってくる。

「……おはよう。」

食堂に入るなり、マスクを外し、

ふう、と息を吐いて男は椅子に座る。

……その眼には隈ができており、寝不足であること伺えた。

リーネが彼の身を案じて声を掛ける。

「あの、大丈夫ですか？」

「ああ。……昨日の夜、ちよつとな。」

その言葉に耳を立てていたペリーヌはぴくり、と尻尾を動かす、

——ふっ、と思わず笑った。

「……ペリーヌ？どうした？」

「……その眼の腫れ、どうにかした方が

いいと思いますわ。」

「ひどいな。」

それだけ言つて食堂の机に突つ伏し、

朝食を待つ彼。

隣では誰が座るかもめているのを

しり目にペリーヌは柔らかな笑みを

浮かべて彼を見つめる。

(・・・本当に、馬鹿な人。)

後日、ガランドから彼宛に

「これで貸し、1だからね♡」という

連絡があつたが、特に関係はないのだろう。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！ 【その16】（アフリカ組 しゅーらい！  
その1！）

なんだか最近、みんなの様子がおかしいような気がする。

食堂で皆と一緒に食事をする。

周りをちらりと横目で見ると

そこには、いつも通り皆が

談笑している景色があつた。

が、それぞれして落ち着き

無いように感じる。

気のせいかな、はたまたま……

隊長格である美緒とミーナに視線を



そつと向けると、2人が目をそらした。

(・・・何か隠しているな?)

調べるか。

そう思った俺は、とりあえず目の前の食事をまず  
食べきることにした。



「・・・と、いうわけで今回の作戦に

参加することになった・・・。」

「ハンナ・ユステイーナ・マルセイユだ。

よろしくな。」

ゴートルをつけたブロンドヘアーの

女性が作戦室の椅子に座っている501の

面々にそう挨拶する。

芳佳がマルセイユの写真が載っている

雑誌をめくっていき、すごい、

とその撃墜数や経歴に目を見張る。

「撃墜数、200!?!スーパーエースじゃないですか!」

「すごいねー。」

そう感嘆の声を漏らす芳佳とリーネに

気分をよくしたマルセイユはふふん、と胸を張る。

たいして、バルクホルンは腕を組んで目をつむり、

エーリカは「うわ……。本当に昔から

変わってないなあ……。」とだるそうに

机に突っ伏す。

周りの面々もそれぞれが彼女に畏敬の

視線を注ぐ中、ミーナが作戦の内容に

関して話していく。

「今回、501側から一人、彼女と二人で組んで

ネウロイのコアを破壊しに行ってもらいます。

……。ハルトマン中尉。」

「……。え?」

他のことをぼーっと考えていた

エーリカがミーナの声に反応して振り返る。

周りの面々からも視線が集まっている

ことに気が付いた彼女は、自分を指さす。

ミーナがこくり、と頷くと再びうなだれる。

「…………えー…………。」

「…………。」

いつもなら注意するバルクホルンは

沈黙を保っていた。

そんな彼女をあざ笑うかのように

マルセイユが挑発する。

「…………どうした? 自分が

立候補もしないのか?」

「……ふ。」

勝ち誇った笑みを浮かべる彼女に

マルセイユはスツと目を細める。

「……撃墜数200?ハッ。そんな小さな

事にこだわっているから本当に大切な

獲物を逃がすんだよ。」

「……。」

瞳孔が開くマルセイユ。

つかつかとバルクホルンの近くまで

歩み寄る。

待っていたとばかりに

牙をむき出しにしてにいと笑いつつ

バルクホルンが立ち上がり魔法を展開する。

取っ組み合い、押しあう二人。

作戦室に暴風が吹き荒れる。

「ちよちよちよちよっ!!」

「外でやれーっ!!」

慌てる声や、止めようとする声。

しかし、それでも止まらない二人を

より大きな声が静止する。

「……っ!!」

その声を聞いたマルセイユはバルクホルンから  
手を離し、声のした方を向く。

「……ケイ。」

「だめでしょ? 喧嘩しちゃ。」

扶桑の服を来て、赤いマフラーを

身につけたショーカットのウィッチが

そこに立っていた。

「……うふふふ。」

その後ろには、金髪の肩まで伸ばした髪を持つ  
ウィッチ、ライーサ・ベットゲンが

極上の笑みを浮かべながら立っていた。

「だせっ!!おいしいっ!!」

地下で収容される男の声が牢屋に響き渡る。

◆ 時は少し前にさかのぼる。

「え? ついてきてほしいところがある?」  
「ええ。」

書庫室で本を読んでいると

ミーナからそう話しかけられる。

後にはミーナとバルクホルンが立っており、同じくどこか怪しい笑みを浮かべていた。

まさか、また酔っぱらったんじゃないだろうな、と3人を警戒しつつも、膝の上に乗っかって

一緒に本を読んでいるルツキーニの頭を

撫でると、彼女が幸せそうな声をあげる。

「……ちよつと一緒に来てくれないかしら?」

「ええー?もつと一緒にいたいのにー。」

ぶーぶーと抗議するルツキーニの

頭をなでながら立ち上がる。

「……あとでもつと一緒にいてやるから。」

「ほんと?わーい♡」

手を振って、笑顔で俺を見送る彼女を背に、

部屋を出る。

「……ツチ。」

スタスタと歩く彼女の後ろについていく。

後には、バルクホルンと美緒がなぜか  
しつかりと俺をマークしていた。

「……なんだ？」

「いや、なんでもないぞ？」

「そうだ。」

俺の言葉にしたり顔でそういう2人。

どうも怪しい。

地下室に入っていく俺たち。

なんだか嫌な予感がしてくる。

だが、証拠も特にないので

気にせずに進むともものすごく嚴重そうな

扉があつた。

「ふんっ!!」



魔法を展開し、重い鉄のドアを開ける彼女。

ぎぎぎ、という重厚な音を立てながら

ドアが開かれる。

「さ、入って。」

先に入るミーナ。

それに続く俺と、その後ろに

ついてくる美緒とバルクホルン。

再び、バルクホルンが怪力を発動し、

ドアを閉める。

中は、10畳ぐらいの石造りの部屋であり、

他の部屋に通じているのかドアが更に

二つついていた。

ベッドと机が置かれている。

「あなたにお願いがあるの。」

ぼすんとベッドに腰掛け、  
足を組み替えてそういうミーナ。

「……なんだ？」

「ちよつと眠つてて。」

ぞくり、と本能が飛べ、  
と警告する。

その場を離れると  
魔力を発動したバルクホルンが  
俺の背中から飛び掛かってきたのを  
かろうじて避ける。

「……なんのつもりだ？」

俺がそういうと答える美緒とバルクホルン。

「……仕方がないことなんだ。」

「……ああ。」

「一体なんの……。」

後ろにいた2人ばかりに気を取られていた

俺は後ろにいたミーナに足を払われ、

ミーナに背中から組み付かれつつ

ベッドに押し倒される。

「今よっ!!」

「ふんっ!!」

「ぐがっ……。」

バルクホルンの拳がマスクに当たる。

ダメージはないもののマスクが揺れて

三半規管がぐわんぐわんと鳴らされ

意識が朦朧とする。

マスクを美緒に外されぶり、と注射器を  
首元に刺される。

「何を……。」

「ごめんね……。でも、本当にちよつとだけの  
辛抱だから……。」

502の時のように監禁されるのか。

朦朧とする中、舌をかんだ方がいいだろうか  
迷いつつ、意識を手放した。



地下室に閉じ込められた男がドアにタックル

していた時、食堂ではアフリカから来た

3人のウィッチを加えて軽い歓迎会を

おこなっていた。

「圭子さんって扶桑海事変を解決された方ですよねっ!!」

同じ扶桑のウィッチとして憧れです!!」

「私はそのころ、まだまだひよっこだったなあ。

加東殿は私の大先輩でもありますよ。」

「ふふふ。ありがとう。2人とも。」

和気あいあいとした雰囲気です。

芳佳と美緒、そして圭子。

同じ扶桑出身ということも相まって

話が弾むテーブルとは別に、

マルセイユ、ライーサが

いるほうのテーブルは沈黙していた。

「……………」

「……………」

真顔のマルセイユは黙々と芳佳たちが

作った料理を食べているのにたいして、

ライーサは何を考えているのかずっと

笑顔を浮かべている。

エーリカも同じく薄い笑顔を浮かべており、

バルクホルンも仏頂面でマルセイユの隣で

食事をしていた。

「・・・・・・・・面白い話でもふれよ、堅物。」

「・・・・・・・・なんか言ったか、尻軽。」

お互いに険悪な雰囲気を感じそうともせず  
に罵りあう2人。

「・・・・・・・・ふふふ。」

「・・・・・・・・なに？」

エーリカに笑顔を向けるライーサを

訝しんだ彼女に、なんでもないですよ、

と返すライーサ。

他の501の面々は好き勝手に話し合っていた。

「・・・・・・・・ところで、聴きたいことがあるの。」

今まで美緒、芳佳たちと話していた

圭子が写真を取り出してそれを

見せつける。

——隅っこに、501の彼女たちが

良く知る男が映る写真を。

「……この人を探しているんだけど、  
知らないかしら?」

女同士の戦いが始まった。

「あ、トイレと風呂もついでる。……お、

雑誌もあるじゃないか。」

ミーナ達がこしらえた部屋で娯楽にふけていた

男は脱出することも忘れてベッドで寝ながら

雑誌を読んでいた。

すぐ、真上で行われている女同士の

修羅場に気づくこともなく。

501 統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！ 【その17】（アフリカ組 しゅーらい！  
その2）

「なるほど。探し人を……ですか。」

食堂の空気が凍り、静寂が包まれる。

それを破ったのは圭子の隣にいた  
美緒だった。

「……あいにく、わかりませんな。」

首を傾げながら顎を指で擦る。

思案にくれているようにも、

何かを観察しようとしているようにも見える。

「……うふふ。もののついでよ。」

圭子もにこり、と笑いながら

美緒にそう返した。



対して、マルセイユは

「……………」

無表情。

どこまでも感情を感じさせない、  
能面のようなその顔つきは何を  
抑えようとしているのか。

ブロマイドや、雑誌の取材で表情  
豊かに顔つきを変えていた彼女は  
そこにはおらず、ただただ、一人の  
女がいた。

「…………それは残念です。 ……彼は、  
隊長の兄、なのですから。」

「…………!?!……………」

ライーサの言葉によって、一瞬動揺し、  
すぐにそれを抑える501の面々。

初めて知ったその事實は、彼女たちにとつてその態度を崩すには十分すぎる情報であつた。がたり、と3人が食堂の椅子から立ち上がる。

「……ごちそうさまでした。おいしかったですよ?」

圭子がそうミーナにお礼を述べる。

「それはよかったです。」

「……でも私は」

——もつとおいしいものを食べたいですね——。

薄く、ほんの少しだけ優越感が混じつた

その表情に501の彼女たちは気づき、

——そして、挑発されたことも察した。



「……暇だ。」

ベッドで寝転がりながら読んでいた

雑誌をぽいっと投げ捨て、

枕に頭をどかっと乗せて仰向けで横になる。

ここに幽閉されてから3日が経った。

食事もあるし、風呂とトイレも隣に

準備されているし、娯楽もある。

だからと言つても、ずっと部屋に

こもりっぱなしというのもさすがに

飽きてくる。

外に出て、新鮮な空気を吸いたい。

その時、頭の中に502でのひと時が

思い浮かぶ。

——口移し、ペッティング、首輪、薬、

ありとあらゆることをさせられ、身も心も

貪られたあの日々。

ムラムラとしてきたので近くにあったティッシュを手にとって

性処理をしようとする、ドアがどンドン、とノックされる。

びくつと跳ねて、降ろそうとしていたズボンをあげて  
そちらの方を見ると、ぎぎぎ、とドアが重々しい音を  
立てて開けられる。

バルクホルン、ミーナ、エーリカが入ってきた。

「……あ、ごめんなさい。」

俺がナニをしようとしていたのか察した

ミーナが顔を赤くして目をそらし、

エーリカは「はへー。やっぱりおつきーい。」と

声を漏らしながらにやにやと笑みを浮かべ、

バルクホルンは「……。」顔を真赤にして

体をもじもじとさせている。

気まずい空気を払しよくしよう何事も

なかったように、彼女たちに声を掛ける。

「……あー。どうした?」

「……いえ、ちよつと様子を見に來ただけよ。」

「?そっか。」

心配そうな声でそういうミーナに疑問が湧いたが、  
気にせずにもたまたまベッドで横になる。

その上にじやれて乗っかってくるエーリカ。

バルクホルンは腕を組みつつも、

俺の方をちらちらと見ては何度も目線を

送ってきている。

ミーナは俺が使っている枕に

同じく自分の頭を乗せて寝っ転がってきた。

「……大丈夫だからね。」

「……何がだ?」

「いえ、何も……。」

シーツを自分とミーナにかぶせると

エーリカがその中にもぐりこんでくる。

バルクホルンはチラチラとこつちを見つつも、

恥ずかしいのか入ってこない。

電気はつけっぱだが、もうこのまま寝てしまうか。

うつらうつら、と眠くなり、その意識を手放した。



「……ということでミーナ達はボバのところに行つて見張っている。」

使われていない密室にて、501の面々を前に

そういう美緒。

両手で地面に突き立てている愛刀を握る手には

力がこもっていた。

「……あの。」

スツと、サーニヤが手をあげる。

「なんだ？」

「……アフリカの人たちはもうしばらくいるんですよね？」

その間ずっとあの人を閉じ込めておくのって無理な気が……。」

探知能力の高さを自負しているサーニヤは自分でさえ

捕まえるのに骨が折れる彼が逃げ出すことを危惧していた。

——そして、自分とエイラの番になったら絞りとりつくすためにも、アフリカの面々を近づけないようにする必要があった。

「いい質問だ。．．．だからこそ、私たちが日替わりで

あいつのもとに行くのさ。」

にかつ、と笑う美緒に首を傾げる芳佳、リーネ、ペリーヌ。

たいして、ルツキーニヤ、シャーリー達は納得したのか

「あー、そういうことね。」とつぶやいた。

「．．．あいつは、ウィッチと一緒にいるときは逃げ出さない。

そうだろう?」

その言葉に501の面々は思い返す。

自分とベッドで寝たり、一緒にお出かけしているときは

なんだかんだ言つて最後まで付き合ってくれていた

時のことを。

逃げるとしたら、一人つきりでウィッチがいないとき

だけなのだ。

だからこそ、常に傍に誰かがいれば、その誰かを

ないがしろにすることはない、という見方が  
美緒とミーナの結論である。

「……それに関してはわかったけどさー。」

あの3人はどうするの？ エーリカはずっとマルセイユと  
一緒にいて、コンビを組めるよう共同生活をする

必要があるしさ。」

シャーリーが彼がいなくなつて拗ねているルツキーニの

頭を撫でながらソファで足を組み替えつつ

そう聴く。

「極力、接触は最低限にする……。と、言いたいところだが。」

とん、とん、と指で地面に突き立てた愛刀を

叩きながら目をつぶつて思案する。

すつと眼帯をつけていないほうの目を見開き

告げる。

「——虎穴に入らずんば虎子を得ず。……。情報を、抜き取るぞ。」

にいい、と、美緒は口角をつり上げて笑った。





「さてはて、どうしますかねー。」

501基地の港にて、話す3人。

ライーサはふふふ、と余裕を崩さない

笑みを浮かべてそうつぶやいた。

「・・・そうね。どうやら彼女たちは

私と兄さんの関係性は知らなかったみたいね。」

顎に手をあて、考える圭子。

自分の大切な相手の事を501は知っている。

その予想は確信へと代わり、彼女は

次の策を考える。

「・・・基地内をくまなく探してしまいたいが、

あまりうろうろしても奴らに警戒されるだろうな。」

基地の外観を眺め、マルセイユが言う。

いるとしたらどこに彼はいるのか？

先ほどからずっとそのことだけを考えていた。

「マイルズ少佐からも『絶対に彼のことについて

情報を得てきなさいっ!!』って念を押されてますからね。」

「・・・アフリカの戦線は押しあがっているはいえ、3人  
一氣に抜けるのもな。」

実はマイルズ少佐も此度、501に来ようとしていたが  
さすがに圭子、マイルズの二人が一度に離れることを  
上層部は容認しなかった。

結果的にマイルズはやけ酒で酔っぱらって

若干、愚痴っていたのだが、それは関係のない話である。

「・・・ライーサ。例の”協力者”からの情報は？」

「・・・最後に、502を出てからの足取りは

ここらへんであったと・・・504には見たところ  
いなかったから、いるとしたら・・・。」

「501よね？」

基地を見上げる3人。

ずっとずっと、思い焦がれていた相手との  
対面を期待してここまでやってきたのである。

ロマーニヤに關係のある統合戦闘航空団は

501、および504である。

504の内情も調べてある3人はここにしていると  
確信を持っていた。

「・・・アフリカも、そろそろ”巢”を壊せそうなんだ。

さつさとあいつを連れ帰ってじっくり”愉しむ”としよう・・・。」

「・・・あら。ハンナ、悪いかおしてるよ?」

「・・・そういうライーサもね。」

かくして、女同士の戦いは続く。

「・・・zzzzz」

「・・・クー」

「・・・スピー」

「・・・んんっ・・・。」

当人は、呑気にエーリカ、ミーナ、バルクホルンと  
昼寝をして、つかの間の幸せをかみしめていた。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい! 【その18】(アフリカ組 しゅーらい!  
その3)

作戦まであとわずかという日時まで

迫ったところ、アフリカ組と501で

模擬戦を行うことになった。

使用する者はペイント弾が入った

模擬専用の銃。

形式は3対3。

マルセイユ、圭子、ライーサに対して、

501からはバルクホルン、エーリカ、美緒が

出ることに。

本来ならば、作戦に参加するエーリカと

マルセイユだけで模擬戦をおこなえばいいはずだったが、

せつかく数があるとのことと3対3で行うことに。

審判を務めるミーナが6人の近くに立つて

ルールの確認を行う。

「ペイント弾が体に当たったら撃墜判定。同じく、

ストライカーに当たっても。いいですね？」

「ああ。問題ない。勝つのは私たちだからな。」

「……ふふふ。」

「さて……ガリア解放の英雄様たちの

お手並み拝見と行こうかしらね。」

ミーナの説明を受けて、やる気満々の

アフリカ組。

エーリカ、バルクホルン、美緒は

3人で作戦を小声で話し合う。

「……いいか。余計な情報は渡さんようにしろ。

あいつの動きとかは極力使わないようにな。」

「ああ。……あんな奴に負けてたまるかっ・！」

「……。」

美緒の言葉に闘志を燃やすバルクホルン。

対して、エーリカは沈黙している。

「ハルトマン中尉?」

「・・・ま、相手はそうでもないようだけどね。

んじゃあ、さくつと倒していちやつきますか。」

ふあーあ、と寝すぎであくびをするエーリカ。

しかし、次の瞬間にはすつと目を細めて

戦闘態勢に入る。

「・・・それでは、はじめっ!!」

501の面々が見守る中、模擬戦が始まった。



「ふんっ!!・・・ぬんっ!!」

「よいしょつと・・・。」

「お茶入れましたよ。一緒に飲みましょう。」

芳佳とリーネにそういわれて、持っていた

木刀を壁に立てかけてお茶が入ったカップを受け取る。

飲んでみると、懐かしい香りが鼻を突き抜ける。

「・・・緑茶か。」

「扶桑から入ったので。」

「おいしいですねー。」

ここに入られてから何日かが経った。

俺は、ここでの生活にすっかり順応していた。よくよく見れば、トレーニング器具もあるし、娯楽にチェスや雑誌、他にも色々なものが入っている。

飯は待つていれば出てくる生活。

現代で、自分が小学生だったころは

自分で食べ物を盗むなり、作るなりして

まかなっていたのが懐かしい。

502での監禁と違い、軟禁なので

多少の融通も効く。

墮落しきった俺はベッドで横になりながら



幸せを満喫する。

(・・・子供が、親に甘えるのって

こんな感覚なのだろうか。)

経験したことのない、愛情を向けられるという

感覚に戸惑いつつもごろごろだらける。

ふああ、とあくびをすると芳佳が

膝枕をしてくれる。

「もしかして、眠いんですか?」

「・・・ああ。」

こここのところ、彼女たちがいて、

又くことも出来ない。

ペッティングはなるべくしないよう

誤魔化して避けているだけに、性欲は

溜まっていく一方だった。

かといって、彼女たちを突き放しきれず  
結局のところこうして世話になってしまふのだった。

リーネが優しい声で俺の頭をなでながら  
言ってくる。

「……ゆつくり、休んでください。」

「……あ……あ……」

すう、と目を閉じるとすぐに意識が  
遠くなっていく。

心地いい後頭部の感触と共に

夢の世界に旅立った。



「はあああつ!!」

マルセイユがバルクホルンの背後を取り、  
後ろから追い続ける。

体をひねって危なげなく、皮一枚で

避けていくバルクホルンにマルセイユが  
声をあげる。

「ちよろちよろと・・・!!逃げるのは

上手いな!!堅物!!」

「お前にはわからんだろうな!!」

急停止して、身をひるがえし

今度はバルクホルンがマルセイユの

背後をとる。

「もらった!!」

「やあっ!!」

エーリカに追われていたライーサが

バルクホルンに向かってペイント弾を

掃射する。

突然の奇襲に対応するために

バランスを崩してがむしやらに

よけるバルクホルン。

銃身がぶれ、彼女が発射したペインド弾はマルセイユには当たらなかった。

少し離れたところでは、圭子と

美緒が熾烈なドッグファイトを繰り広げていた。

「さすがですなっ!!・・・しかし、

その動き・・・!!私を挑発しているのですか!？」

「そっちこそ!!その剣筋はあの人のじゃないっ!!」

感情をむき出しにして、撃つ、切る、追う、躲すといった

ギリギリの攻防を一進一退で繰り返す2人。

相手の動きが自分の想い人の物に似ていることもあつて

我慢の限界を迎えていた。

「・・・!!兄さんに守られていただけの小娘がつ!!」

「年増がつ!!いい加減、家庭にでも入って落ち着けっ!!」

ついうっかりと出る本音。

しかし、お互いにそれを気にした様子もなく

ただただ目の前の相手を倒し、彼にとつての一番を証明するためだけに痛む体を動かし続ける。

加東圭子はありとあらゆる戦い方を

ボバ・フェットから教わり、叩き込まれた。

本来ならば、かつて撃墜時に負った怪我によつて

激しい動きはできないはずだったが、彼から

学んだ技術によつて傷を最小限に抑えることができたのだつた。

かたや、坂本美緒は徹底して剣術を教わつた。

剣道ではなく、相手を殺し、自分が生き残るための

それは美緒の才能を限界まで引き出していた。

しかし、さすがは扶桑海事変、そしてアフリカでの

激戦区で生き残っているだけあつて経験値は

圭子のほうが上であつた。

それが拮抗しているのは、ゆえに、美緒の

肉体的なアドバンテージによるものであつた。

年齢差はほんの2，3才ほど。

それでも、その利点は大きなものであつた。

「兄さんは私のものなんだからっ!!」

「~~~~!!先生は渡さないっ!!」

ペイント弾がお互いに切れ、

今度は近距離で木剣を鏝迫り合う2人。

また、そこでの剣戟も似たような動きであつた。

——彼がもしここにいたら『2人とも強くなつたなあ……。』と

他人事のように言っていたに違いなかつた。



「……お二人とも。」

「あ、ペリーヌさん。」

地下室に入ってきたペリーヌに

芳佳が声をあげる。

「彼は・・・っと。」

ベッドで寝息を立てて寝ている

彼の姿を見つけると声を潜める

芳佳が小声でペリーヌに聴く。

『ペリーヌさん。模擬戦はどうなりましたか?』

『どっちの勝ち・・・?』

『・・・ドローですわ。』

首を横に振るペリーヌ。

そっかーと芳佳が息を漏らす。

『やっぱり、激戦区のウィッチさんは強いね。』

『そうだね。』

『・・・あなたたちもガリア解放の立役者でしょうに。・・・。』

呑気なことを言う二人にあきれた声を出すペリーヌ。

そして、愛らしさを含んだ目で彼をじっと見つめその頬をそつと撫でる。

ネウロイにたいして全く容赦をしない男が無防備にベッドで寝て、あどけない素顔をさらしている。

その事實は彼女の母性を刺激し、胸の奥を温かくさせた。

『……ガリアに帰化してもらいましょう。』

『……は？』

『……へえ。』

ペリーヌがぼそつと漏らしたその言葉にすつとハイライトが消えるリーネと

目を細める芳佳。

ペリーヌは何の気なしに言つてのける。

『あら？祖國復興のためにも優秀な人材は

確保するべきでしょう？』



『……ちよつと、そういうの、ずるいかなつて。』

『……あざとい。』

お前が言うな、と言われそうなりーネと芳佳だった。

(目を覚ましたら修羅場だった……。どうなっているんだ……。)

実はペリーヌが入ってきた時点で目を覚ましていた彼は

3人がけん制しあっているのに困惑していた。

これよりも激しい女同士の戦いが外で行われているのにも

気が付かず。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとらい！ 【その19】（アフリカ組 しゅーらい！  
その4）

作戦当日、潜水艦に搭乗した

エーリカとマルセイユがタッグを組み、

ネウロイのコアを撃破した。

それからすぐにアフリカに帰る予定の

彼女たちは明日、来た時に乗った

輸送機でトンボ帰る予定である。

貴重なウィッチを遊ばせておく余裕はどこもないのである。

が、今回はちよつとばかり事情が違っていた。

501とアフリカ組の交流という大義名分で

マイルズ少佐と圭子はあるべく滞在期間を伸ばしていた。

しかし、あと一日。

それがアフリカからきた3人を苛立たせる。

風呂に3人で入りながら彼女たちは

作戦を考える。

「・・・彼の痕跡は見当たりませんね。さすがに、

私たちが来る前にそれぐらいの手は打ってましたね。」

「ええ。・・・でも、兄さんがいるような気がするわ。」

「私もだ。・・・絶対に逃がさん。」

とはいうものの、その顔には若干焦りが浮かんでおり

今日、何も掴めなければ彼と当分会えなくなってしまう

予感がしていた。

ミーナ達の思惑道理に進んでいた。

が、一つだけ違うとすれば。

ぱしやり、とお風呂のお湯で顔を洗い、

圭子は言う。

「・・・仕方ないわ。最後の手段を取りましょう。」

「異議なし。」

「同じく。」

追い詰めすぎるとどんなことをしてくるのかわからない。

それを考えていなかったことである。



「やけにおとなしいな。」

「ええ。・・・不気味ね。」

ここにいられる最後の日だというのに

一向に動きを見せないアフリカのウィッチ達を警戒する美緒。

他の501の面々も、基地内を徘徊しており、

何かあつたらすぐに対処できるようにしていた。

ミーナは司令室の椅子にこしかけ、

テーブルに両腕を置きながら言う。

「……まさか。」

美緒も何かに気が付いたのか

すぐに立ち上がり、ドアを開けて

駆け出す。

「まずいつ!!あいつら……!!」



「よいしょっと。」

巡回していた兵士を気絶させ、ずるずると

両足をもって近くの部屋に隠したライーサは

ぱんぱん、手をはたく。

「ハンナ、そっちは?」

「全部片づけておいたぞ。」

「こつちもよ。」

ライーサの視線の先には、ロープでぐるぐる

巻きにされ、木箱に詰められている兵士たちの

姿があった。

「……やけにここだけ嚴重ですね。」

「……ああ。」

ライーサたちはこの基地を毎日、  
少しずつ調べていた。

しかし、ずっと警備が嚴重なところがあつた。

それが、今は使われていないはずの

地下室がある部屋であつた。

もともとが歴史ある城を改修し、

基地に改造した場所だけあつて、

そうしたところも残されていた。

目当ての場所までやってきた

3人が、その部屋の中に入ると

地下に続く階段を発見する。

「……行くぞ。」

マルセイユが先陣を切りながら、

2人がカバーしつつ、あたりを

クリアリングする。

こつ、こつ、と階段を降りていくと  
重々しい鉄の扉の前につく。  
しかし、その扉は開いていた。

「・・・。」

マルセイユが圭子とライーサに  
視線を向けると2人が頷く。  
中に入ると、そこにはベッドや  
テーブルなど生活感あふれる  
空間が広がっており、ベッドの  
シーツが膨らんでいた。  
ごくり、と3人が唾を飲み込む。

ようやく目当ての人物を前にして  
3人は違うことを考えていた。

(まずは○○○○して、○○○○して○○○○して○○○○  
しなきや・・・♡)

鼻から血が流れ出そうなほど妄想するライーサ。

(・・・兄さん。兄さん兄さん兄さん兄さん兄さん・・・)

久しぶりに、体と心を一つに重ねられる。

本当の意味で家族になれると想像し、圭子はぶるり、とその身を震わせる。

(・・・)

ハンナの頭の中は驚くほど明瞭であった。

ライーサと圭子の事さえ忘れて、

今はただ、目の前の男と愛し合うためだけに

そのシートに手をかける。

「・・・久しぶりだなっ!!」

ばさつとシートがめくられる。

そこには、「残念でしたー!!!」という

張り紙がされているピンクのクッションが置かれていた。

張り紙を手に取り、わなわなと手をわななかせ、



その紙を無表情で破るハンナ。

すると、がごん、と彼女たちの後ろから音がした。

見ると、先ほどまで開いていた鉄の扉が  
閉じていたことに気が付く。

ドアのガラスの部分からバルクホルンが  
顔を出す。

「……檻の中はどうだ?」

「……バルク、ホルン……。」

右手をぎゅっと握り締めて、

マルセイユはバルクホルンをにらみつける。

そして、その横からシャリー、ルツキーニなど

他の501の面々が顔をのぞかせる。

マルセイユはドアの前まで詰め寄り、

彼女たちに叫ぶ。

「……あいつはどっかだっ!?!どっかに

「やった!？」

「……なんのことかな?」

ふああ、とエーリカがあくびをしながら答えると、ライーサがふふふ、と笑う。

しかし、それはいつものような余裕がある笑みではなく、猛禽類が獲物をしとめるときにする表情であつた。

「……ハメて、くれましたね……。」

「手を先に出したのはそつちでしょ?」

「……渡すわけないじゃん。」

そこで初めてライーサが齒ぎしりする。

目の前にいるメスに対して、憎悪を込めた視線を送り、悔しがる。

「……やられたわね。……仕方ないから兄さん分を補給しようつと。」

ベッドに残る彼の匂いを堪能しようと

圭子がベッドにダイブする。

そして、ライーサがシーツをすぐに  
独占し、顔をうずめる。

「……………」

しばらくの間マルセイユは501の面々を睨んでいたが、  
今はどうしようもないと判断したのか、  
近くある501の面目の写真が載っている雑誌に  
落書きし始める。

——彼がどうなっているのか、  
時は少し遡る。



「え?外に出ていいのか?」

リーネに背中から抱き着かれながら、

芳佳にそう聞き返す。

「ええ。……これつきですけど。」

彼女が持っているのは首輪と、首輪の

リード。

思わず尋ねる。

「……芳佳。これは？」

「首輪です。……ああ、ちゃんと

あなたの首に合うようサイズを調整してあるので

大丈夫です。」

理由を聞いたのに、当然とばかりに

言われる。

そうこうしている間にがちやがちや、と

首に付けられ、芳佳が手をすつと差し出してくる。

「……お手。」

「……。」

右手で顔に手を当てて、呆然としている

首輪をぐいっと引っ張られる。

「……お手。」

彼女の気迫に押されて右手を

彼女の左手に乗せる。

「おおー。．．．なんか、いい．．．。」

新しい扉を開きかけている彼女を無視して  
その隣で立っているペリーヌに聴く。

「どれくらいならそとに出ていいんだ?」

「一時間。．．．まあ、基地内で巡回している

兵士以外は鉢合う可能性は低いでしょう。」

耳としつぽをびこびここと動かし、

なぜか熱っぽい視線を俺に向けてくる

ペリーヌ。

リーネはさつきからずつと俺の背中にしがみついて

甘えてきている。

どうやら、俺にぴったりくつつくのが

気に入ったらしく、放っておくことにした。

「．．．じゃ、久しぶりに外、行きましょう♡」

「．．．．．。」

一抹の不安を覚えつつも、外に出ることになった。

その不安とは裏腹に3人との夜の散歩は  
とても楽しいひと時となった。

「ああ……。あの人の匂い……。♡」

「……。兄さん、兄さん兄さん兄さん。」

「ははは。全員不細工にしてやったぞ!!」

「……。なんか、一発殴っておきたくなかった。」

「フラウ。落ち着け、負け犬の遠吠え」

「”バルクホルンは乳が垂れている”、と。」

「コロス」

「シャーリー。ボバは？一緒に寝たかったのにー。」

「今頃、外で芳佳たちと一緒に散歩してるだろうさ。」

「……。羨ましい。」

「(……。最近、一緒に夜の散歩していない……。)」

「・・・」恋人”か。いい感じだな・・・。ふふ・・・♡」

後日、輸送機が一台501基地から発進したと彼はミーナから聞かされた。  
それに誰が乗っていたかは彼は知る由もない。

501統合戦闘航空団『ストライク・ウィッチーズ』へ  
りとりらい！ 【その20】（最終けっせん！そして……。）

ロマーニヤからネウロイを完全殲滅するため  
巢の攻略作戦が発動した。

そうミーナから聴かされた501の面々は  
動揺を露にする。

さらに、今回の作戦では大和を主力とした  
艦隊がネウロイの巢攻略を主に担当する。

それが意味することはウィッチ以外で  
ネウロイと戦うということである。

ネウロイと戦う時の主力はウィッチ。

それは、1936年にストライカー・ユニットが



開発される前からの当たり前とされたことであつた。

失敗した場合、人類はロマーニヤから撤退し、501は解散である。

それぞれがミーナに対して意見を言うなか

俺は静かに彼女たち、いや、先ほどから元気が

なさそうな美緒に視線を向けていた。

悩んでいる。

曇り切つた表情はわかりやすかつた。



「美緒。」

港に呼び出した彼女がやってきたので

声を掛ける。

彼女の愛刀を持つてくるように言ったが、

律儀にも、ちゃんと持つてきてくれたようである。

いつもなら、2人つきりになると喜ぶ彼女も

落ちこんでままである。

最終作戦が近いというのにこの状態では戦いもままならない。

だからこそ、彼女に言う。

「……美緒。何があつた？」

俺の言葉に、びくん、と体を動かす彼女。

しかし、彼女は黙ったままである。

すつと海の方を指さし、言う。

「……海でよくやっているいつもの烈風斬。

最近はやらないのか？」

「!!……」

ほんのわずかだけ声が漏れるも

すぐに動揺を押し殺し、いつもと

変わらぬ毅然とした態度で言ってくる。

「……たまたまだ。作戦前に無駄な魔力を

使いたくないからな。」

「……………」

俺は確信した。

「……………ウィッチの”あがり”は、20歳ごろからだ。」

「……………」

そして、事実を突きつける。

「美緒、お前はそろそろ、”あがり”の年齢だよな?」

次の瞬間、ひゅぱつと空気を割く音が聞こえたかと思うと

彼女が俺の首元に扶桑刀を突き付けているに気が付く。

いつもの慈愛に満ちた目ではなく、突き刺すような

凍る目つき。

息を荒く吐きながら彼女が手を震わせて言う。

「……………私……………は……………」

「美緒。」

◆ そんな彼女をそつと抱きしめた。

「……最後かあ。」

自分が漏らしたつぶやき周りの  
ウィッチ達が反応して、少し

委縮する芳佳。

基地全体がいつもよりピリピリとしており、  
ウィッチ達も多少、気が立っているのは  
間違いなかった。

そんな中、食堂でテーブルに突っ伏している  
エーリカがつぶやく。

「……彼は、どうなるんだろう。」

501の全員が気になっていたこと。

それを改めて突き付けられ、各々は

彼の元まで飛んで行きたい衝動に駆られる。

バルクホルンは両腕を組みながら目をつむって

何かを考えている。

ペリーヌはガリアの恋愛小説を読みながら  
静かに時間を過ごしていた。

ルツキーニは彼からもらった髪飾りを  
手でいじりつつ、彼との未来を考える。

シャーリーは左指にあるべきものが  
ないことに苛立ちながらも、来る別れを  
惜しんでいた。

リーネは彼から教わったことを頭の中で  
反芻し、勇気を奮い立たせようとしていた。

エイラは、自分の姉に速く紹介したいと  
気が速まっていた。

サーニヤは、首元につけているプレゼントを  
見つめ、物思いにふけていた。

ミーナは作戦の資料を読み返し、  
皆が傷つかないよう全力を尽くそうとしていた。

そして、落ち込んでいた美緒は憑き物が

落ちたようなすつきりした表情で自分の  
眼帯を右手で触っていた。

そんな中、芳佳は彼がこの場にいないことに  
気が付く。

(・・・あなたは今、どんなことを考えているの?)

想い人が、願わくば私たちと同じ気持ちでありますように。

芳佳はここにいる皆と、彼が無事に生き残れるよう  
神様に祈った。

◆ 作戦当日。

大和率いる扶桑皇国の艦隊がロマーニヤの  
ネウロイの巢へと進行する。

それを護衛するのは501のウィツチ達。

ガリアの巢を破壊した実績を買われ、  
護衛を命ぜられ、ネウロイを相手にしてたが

いかんせん、その物量差に苦戦する。

「くっそー!!数がおおい・・・おい、ルツキーニ!!

あともう少しだ!!頑張れっ!!」

「ふへ・・・。しんどー。」

フラフラと空を蛇行するルツキーニを鼓舞する  
シャーリー。

危なげなくネウロイの攻撃を彼女たちは

躲し続けていた。

「ほらほらほらあっ!!」

「ハルトマン!!右だっ!!」

「あいよっ!!」

お互いに背中を守りながら

周りのネウロイを殲滅するバルクホルンと

エーリカ。

スーパーエース2人の活躍によって

戦線は徐々に切り開かれつつあった。

そして、そんな中、芳佳はリーネを

カバーしていた。

「12!!・・・13!!」

「やああつ!!」

得意の狙撃で次々にネウロイを落としてく  
リーネ。

彼女に近寄ってきたネウロイを掃射し、

殲滅していく芳佳。

各々がなんとか戦い続けている中、

ミーナは美緒と共に大和周辺に

集まってくるネウロイを相手にしていた。

「美緒!!3時の方向よ!!」

「はあつ!!」

ミーナが美緒の動きを支え、

彼女が扶桑刀でネウロイを一刀していく。

しかし・・・。

「・・・ぐ。」

「美緒!?!」



握力に限界が来たのか、

——魔力の減退のせいなのか

刀がネウロイの装甲にはじかれ

大和に落してしまう。

呆然と自分の手を見つめる美緒。

その彼女に近づくネウロイを

機銃で撃破しつつ、ミーナは

美緒に近づき、その両肩を

手で掴んで揺さぶる。

「どうしたの!?!」

「・・・もう、魔力が・・・。」

搾り切ったような彼女の声に

ミーナは右手で口を抑える。

——そして、大和がネウロイの巣に向かって

空に飛んでいく。

「おお!!サーニャ!!見ろヨアレ!!」

「もう見ているわ・・・。」

船の上に着艦し、その様子を眺める

501の面々。

巣へと大和が入ろうとしていたその時

異常事態が発生する。

「・・・あれ?」

「・・・大和が・・・。」

作戦の通りなら、巣のシールドに向けて

主砲を撃つはずであった。

しかし、明らかに大和は攻撃しようとしてない。

そうこうしているうちに、ネウロイが大和に

たいして爆撃していく。

彼女たちの隣に同じく着艦する一人の男。

「・・・なんだあれ。どうなっているんだ?」

懐に入れていた双眼鏡を取り出し、

大和が攻撃されているのを観察する。

そして、美緒とミーナの会話が

聴こえてくる。

『——美緒っ!?!』

『——私が大和に乗り込み、魔法力で魔導ダイナモを——!!』

「坂本さんっ!?!」

芳佳が叫ぶ。



「・・・そうか。作戦は・・・。」

アドルフイーネ・ガランドは

自分の部屋に入ってきた部下からの

報告にそう返す。

「・・・(ぐ)苦勞。下がっていいよ。」

「はっ！」

敬礼をし、部屋から出て行く部下から

目を離し、窓の外に目をやる。

その眼は、憂いを帯びていた。

「・・・あーあ。また、逃げられちゃったか。」

言葉とは裏腹にどこか嬉しそうなその声は、

彼女がまだあきらめていないことを意味していた。

考えごとをしていた矢先に、電話が突如なり始める。

その電話を右手で取り、耳に

受話器を押し当て応答する。

「——ああ、私だ。ガランドだ。」

——ロマーニヤにあるネウロイの巢は

破壊された。

ただし、2人の魔女の魔力喪失と、  
とある男の行方不明という結果を  
伴って。

「うん。私もそろそろ我慢の限界だ。  
・・・例え空が二度と飛べなくなってもいい。」

それは、「彼女たち」にとって本当の意味で  
腹をくくらせるには十分な理由となってしまうた。

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』【その1】（積みあがった火薬に関して「そろそろ」けじめ）の時間です）

とある場所にて、複数の人物が

一堂に会していた。

それぞれが、歴戦の勇士であり、

また共通点を持っている者同士でもある。

その中の一人、グンドユラ・ラルは

かねてからの知り合いであった、

ミーナに声を掛ける。

「……上層部は鉢をつついたような騒ぎだそうだな。」

「……ええ。」

にっこりとミーナはラルに笑顔でそう返す。

「たった二文字だけの返答に、ラルは若干いらだちを

感じ、組んでいた手に力を入れる。

そして、そんな中、ブロニスラヴァ・F・サフォーノフが

笑顔でラルを罵倒する

「あら？泥棒猫が何か言っていますね？」

「・・・未練がましい奴だ。」

かつて、ブロニスは503に引っこ抜く予定だった

サーシヤをラルにとられた経験があった。

そのことに対する意趣返しだと気が付いたラルは

はっ、と吐き捨てる。

「・・・貴様ら。そんな下らん話をするために

私をここに呼んだというのか？」

テールに足を乗せ、頬杖をついて

声をあげるウィッチ。

グレート・M・ゴロブは愛銃を片手に他の面々を見渡していた。

「まあまあ。あんまり怒ると眉間にしわが寄るわよ？」

そんな彼女に対して真つ向から啖呵を切る

フエデリカ・N・ドツリオ。

どこから持つてきたのか、ワイングラスを右手に持ち、酒を飲んでゐる。

自由過ぎるにもほどがある。

それが、他のウィッチがフエデリカに

抱いた感想である。

「全く。皆そろつて落ち着きがないわねー。」

やれやれ、といった風に肩をすくめる穴淵智子。お前が言うな、と周りの面々が一斉に心の中ですつ込む。

「……さて。そろそろ本題に入りませんか？」

ロザリーが紅茶のカップをテーブルの上に置き、



話を切りだす。

残りの司令官もはやる気持ちを抑えきれずに  
ミーナとラルの方を見やる。

つまり、すべての統合戦闘航空団の

関係者を集めた2人を。

「……最初に言っておきます。」

「あなたたちを呼んだのは私たちではない、とな。」

その言葉に他のウィッチの顔つきが変わる。

そして、頭のいい者はすぐに誰がこの場を

用意したのかに気が付く。

ゴロプが笑いながらミーナに言う。

「これはこれは……。敵に塩を送って

くださるのですか？ミーナ殿。」

一応、自分よりも階級が上であつた彼女に

たいして形式的に敬語をつけるゴロブ。だが、その眼には明らかに敵意がにじんでおり、下手をすれば持つている愛銃を向けかねない。雰囲気醸し出している。

「——やあ、よく集まってくれたね。」

コツ、コツ、と足音を刻みながら彼女たちに歩み寄る一人の人物。

「——私はアドルフイーネ・ガランド元帥。

・・・よろしくね？」

にこり、と彼女は笑った。

——その傍では、アウロラ、章香、ルーデルに取り押さえられ、ぐるぐる巻きにされている

1人の男がいた。

他にも、彼に関係するウィッチ達が

後からぞろぞろ部屋に入ってきた。

——時は遡る。



坂本美緒と、宮藤芳佳が魔法力を失い、

再び取り戻した後の事。

美緒は扶桑のウィッチ養成所に教官として、

芳佳は取り戻した魔法力をもとに、再び

空を飛ぶことにした。

それからいくばくかの時が経ち、

統合戦闘航空団および、戦闘飛行隊から

ウィッチが引退し始めてからのことだった。

——各地で、引退したウィッチが行方不明に

なるという事件が起こっていた。

そして、その数日後にはそのウィッチが発見され、

その首謀者らしき人物たちが警察署の

前に縄で縛られ置き去りにされるというのが現象がセットで起きていた。

——加東圭子はその見出しが書かれている新聞記事を呼んでため息をついた。

喫茶店のテーブルにて、ため息をふう、とつく彼女の姿に見とれて目を奪われる男たち。彼女と一緒に歩いていた男は脛を蹴られた。

「……ケイ。」

そんな彼女に近づく二つの影。

ハンナ・ユステイナー・マルセイユと

ライーサ・ベットゲンである。

「……この事件。このあたりでも起きているんですよね。」

ライーサが圭子が呼んでいた新聞に目を落として  
そういう。

それに対して、圭子はふう、と息を吐いた。

「……全く。どこにいるのかしら。」

「まあ、時間はまだあるんだ。ゆっくり探そうじゃないか。」

ふふふ、と笑うハンナ。

しかし、目は笑っていないかった。

あの野郎、どこいったといわんばかりの

肉食的な目つきである。

「……兄さんのせいで、この年まで未婚なんだから

責任とってらうもん……。」

ぷくーと頬を膨らませてそういう圭子に

たいして、ライーサが言う。

「……まあ、私はまだ20代ですし。

ケイさんは、他の人と付き合わないんですか？」

「兄さん以外の男？皆歩くジャガイモでしょ？」

幼少から一番多くの時間を共にすごし、

影響を受けた相手のことを忘れられない圭子は、

年を重ねるにつれていろいろな意味で重い女となっていた。

「さて、そろそろ行くか。」

ハンナがサングラスをかけ、2人にそういう。

美女3人がそろって道を歩くその姿を

男たちは鼻を伸ばして見つめていた。



「ルツキーニ。」

「んー?」

ルーム・シエアしているルツキーニに

たいしてシャーリーは新聞の記事を

見せる。

「いれ。」

「.....」

何を言いたいか分かったルツキーニは、

ソファーから降りて、彼からもらった

白のリボンでいつも通りの髪型に

まとめ、シャーリーに向かって言う。

「にひひ。．．．今日こそ見つかりそうだね。」

「ああ。．．．モデルの仕事をやるようになってから

他の男たちからの求婚がうっとおしいと思っていたんだ。

さっさと見つけるぞ。」

「アタシもだよ。」

アパートの外に出て、隣の部屋をノックする。

「．．．ふあーあ。なに?」

エーリカが眠そうな目つきでのそつと

ドアからその顔をのぞかせた。

シャーリーとルツキーニが

そんな彼女に向かって新聞の

記事を突きつける。

「．．．ふふふ。．．．トゥルーデ!!」

一瞬笑ったかと思うと、すぐに

料理を作っている同居相手の元まで走り出す。

かくして、501の面々は動き出す。



「さて、これまでの話を聴いて、出たいやつは出て行ってもいいぞ。」

502の関係者の前でそういうラル。

ご丁寧に指でドアを指し示して。

そんな彼女に最初にかみついたのは

直枝だった。

ざぐん、とフオークで自分が食べていた

ステーキを突き刺し、口の中に放る。

「・・・ざげんな。んな奴、いねーっつーの。」

かつて、502で味わった幸せなひと時を



思い返しなからそう言う。

「彼をあきらめる？他の男とねんごろになる？」

「・・・ふふふ。隊長もジョークが下手になったね。」

腰まで伸ばした髪を彼からもらったヘアゴムで

ポニーテールにくくっている伯爵が息を荒くしながら言った。

ラルが他の面々を見渡すと、

彼女たちはラルを黙って見つめ返した。

「・・・・・・・・ふっ。そろそろ年貢の納め時だ。」

「・・・・・・・・本当の意味でな。」

スツと彼女が立ち上がった。

「先生から連絡があった。・・・あいつが

いた痕跡を見つけたと。それは・・・・・・・・。」



「えいつさ。ほいつさ。」

鍬を右手で持ち、地面を耕していく。

隣では、農夫服を着たおつちゃんが鎌で

稲を刈っていた。

「おーい。そろそろ休憩にするべ。」

「おー。そうかそうか。．．．ほれ、ばあさんが

菓子をよういてくれたぞ。休憩にしようや。」

「あいよー。」

民家の縁側に腰を降ろし、ばあさんが

入れてくれたお茶を飲んでまったりする。

温かなお茶が、のどに染みる。

「いやー。それにしても、あんた、根性

あるなあ。」

「じいさんもな。」

実はムキムキなじっさんにそういう。

農家の男、女はタフだと聞いていたが

ホントらしい。

ずず、とお茶を吸っていると

じいさんが聴いてくる。

「そういえば、なんでこんな辺鄙なところに？」

「……………いろいろあるんだよ。」

ぶいっと顔を背けてそういう。

そんな俺にじいさんは小指を立てて

聴いてきた。

「これがらみか？ いやー。儂も昔は

火遊びしすぎてなあ……………」

「……………おじいさん？」

「な、なんでもないぞっ!!」

後ろにいたばあさんに冷たい声をかけられ、  
委縮するじいさん。

「・・・ああ、そういえば。」

じいさんと一緒に茶を飲んでいた俺に  
ばあさんが言ってきた。

「なんか、この島に偉いべっぴんさんたちが

あんたのことを探し回ってきている、って

隣の坂井さんが言っとったで。」

ぶふう、とお茶を吐き、懐から

お金を置く。

居間に上がって自分の荷物を右手に

持ち、じいさんとばあさんに言う。

「達者でな!!」

ダッシュで港まで走った。

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』【その2】(逃げ続けた結果の先〜ちよっと”話し合い”ましようか〜)

「はっ……。はっ……。」

ボロボロになった体を引きずり、

森の間を縫って走る。

途中、邪魔な枝をダーク・ライト・セイバーで

叩ッ斬り、処理しながら進むと前の方から

声が聴こえてきた。

『包囲しろ!! 四方を囲んで逃げ道を塞げ!!』

『このあたりにいるはずだっ!!』

「っ……!!」

すぐに身をかがめて、近くの木に

隠れる。

顔だけそつと覗かせると

前から504の面々が警戒しているのが

見えた。

すぐにまた木に姿を隠し、  
なくなった左腕を右腕で抑えてうなだれる。

(・・・まだまだ、自由でいたい・・・)

ぎゅつと右腕で左肩を掴み、

そして、意を決して前に向かって走る。

不意を突かれた504の面々が一瞬あつげに

取られるなか、2人だけすぐに反応して

おそいかかってきた。

「先生っ!!」

「にがさないわよ!!」

醇子の木刀による薙ぎ払いを左肩の

プロテクター部分で受け止め、

フェデリカの右ストレートを

右腕で払って、そのまま左に

横にいる醇子に向かって崩す。

「わわっ!?!」

「ちよっ・・・!」

もつれあう二人をしり目に、

一目散に前方に向かって進むと、

後から撃たれる。

足に激しい痛みが広がったかと思うと、

体が動かなくなる。

「っ・・・ぐ・・・。」

何とか這って、近くの草むらに身を

隠そうとすると、足を踏まれる。

上を見上げると、笑顔で彼女が

立っていた。

「やあ。久しぶり。」

「ガラン・・・ド・・・。」

四方から他のウィッチ達が近づいてくる気配を感じつつ、意識を失った。



「4年と3か月。．．．これ、何の数字かわかる？」

「．．．．．。」

椅子に座らせられている俺の背後に立ったガランドが、俺の耳元でささやく。

「．．．．最後に姿を消してから、逃げ続けた期間さ。」

肩をがっちりと掴まれ、



ぎゅうううつと力を入れてつねられる。

「……つつう……！」

「ああ。ああ。ああああ。本当にないんだ。」

悲しそうな声をあげて、ガランドが俺の

左肩を撫でる。

「でも、今はそれよりも、責任を取ってもらわないとね？」

くふふ、と熱っぽい息を吐きだし、

彼女が笑う。

そして、連れてこられた先にはさらなる地獄が待っていた。



どうしてこうなった。

首から『私は大変なものを盗んでいきました。』

「……ウィッチ達の心です。」と書かれた

プレートをぶら下げながら、椅子に座らせられる。

縛られた腕と胴体を何とか

ほどけないか試してみるも

ご丁寧に硬く結んであつてそれも

叶わない。

そして、その周りを取り囲む

見覚えのある面々。

いや、ありすぎて困るといったところである。

カツ、とライトが一際大きく照らし出されると

前方に、8人の人物が椅子に座っていた。

敵意、好意、憎しみ、愛情、様々な

感情が入り混じった視線が投げられる。

「……さて、それでは早速彼の

処遇に関して話し合おうでしょう。」

ガランドが右手をあげると、どこにいたのか

圭子がスツと書状を取り出して読み上げる。

「ボバ・フェット。年齢不詳。経歴不明。

1910年代からその存在を確認されています。

・・・そして、世界中を回っては

ウィッチ達に力を貸していたとも。」

周りのウィッチ達からの視線が一層

厳しいものになったのを感じる。

何人かはうー、とうなっており

今にも飛び掛かってきそうである。

そんな彼女たちを制すかのように

圭子が続ける。

「第一次ネウロイ大戦。ヒスパニア怪異。

扶桑海事変。・・・例をあげればきりがありません。」

スツと目を細めた圭子からも冷たい視線を投げられ

少し胸の奥が痛くなる。

「ふむ。さて、では君たちの意見を聴こうか。」

そういつて、統合戦闘航空団の司令官であった

彼女たちに問いかけるガランド。

スツとミーナが手を上げる。

「私たちは、彼の所有権が元、501の私たちにあると主張します。」

「……ほう。」

「は？」

「……ふーん？」

ミーナの言葉に司令官だったウィッチ達が眉間にしわを寄せたりして怒りを露にする。

それを手でガランドが手で制し、先を促す。

「続けて。……その理由は？」

「彼は唯一私たち、元501で”正式”にウィッチとして

所属しておりました。……それに対して他では

どうでしょうか？」

ふふん、とミーナが勝ちほこった笑みをうかべると  
ゴロプが天井に向かって銃を発砲する。

ばあん、という破裂音が聴こえたかと思うと  
ぱらぱら、という細かな木のクズがこぼれる。

「……それは、過去の話。今、すでに

ウィッチではない我々にはなんの関係もない  
話ですが？」

フエデリカもミーナに対して反論する。

それに対して、次にラルがその大きな

胸を揺らし、主張した。

彼女の胸を見た瞬間、俺の背後に立っている

ウィッチ達から銃を構える音がしたのは

気のせいだと思いたい。

「……一つ。言っておこう。」

椅子から立ち上がり、そして爆弾を

投下した。

「——我々は、今回の人生において彼と  
肉体関係を持っている。」

空気が死んだ。



「おじいさん。」

「ん？」

自分の伴侶の呼びかけでそちらの  
方を向く老人。

「あの子。大丈夫かいねえ？」

2人の脳裏に、左腕がない

隻腕の男の姿が浮かぶ。

やけに焦った顔で港まで

走っていったのは彼らにとつて印象的であつた。

「大丈夫じやろう。．．．たぶん。」

「おじいさんの勘はあたりますからねえ。」

はっはっは、とちやぶ台を囲んで

和気あいあいと話す2人であつた。



誰か俺を殺してくれ、と

身も悶えるような暴露話が

目の前で繰り広げられていく。

「わ、私はその．．．．．．．．．股で、

彼のを．．．。」

「．．．挟んで、こすつた？」

ガランドの問いにロスが真赤な顔を

両手で隠してこくり、と頷く。

「僕は502に彼がいたとき、毎日これで挟んであげてたよ。」

自慢の胸を手ブラして見せつける

伯爵。

胸が控えめなウイツチ達の

目からハイライトが消えたような気がした。

「待ていっ!!」

それまで静観に徹していたバルクホルンが

人込みを掻き分け、前に出てくる。

もしかして、俺を助けてくれるのか？

だが、差し伸べられた手は俺を救うためではなく、とどめをさすためであった。



「――501の全員も本番以外の行為をしているぞっ!!」

また、空気が再度死んだ。

501の皆もなぜかドヤ顔である。

ラルからキツとにらまれる。

そつと顔を横に背けると、

隣にいたルーデルに顔を掴まれ、

アイアンクロ―される。

「な・ぜ、私よりも先にひよっこどもに手を出したっ……!!」

「ぬぐあああつ!!」

みしみし、めきいつと骨がきしむ音を立てて

顔がゆがんでいく。

「ルーデル。」

そんな彼女の肩にポンと手を置く章香。

彼女ならこの魔王も止められるかもしれない。

そう思った俺は、まだ自分の認識が甘いことに気が付いた。

「あとで『話しあい』の時間を取るから、その時に気が済むまでやるといい。」

「.....」

言われるままに、俺の顔から手を放し、ふんつ、と拗ねるルーデル。

アーデルハイドが彼女に牛乳を差し出す。

——話しあいはつづく

最終章『ワールド・ウィッチーズ編』【その3】(逃げちやいかんのか?~逃げられるとでも?)

現状の洗い出しという名の地獄が終わり、

尋問も佳境に入らんという場面へと進んだ。

「——では、私たちが気にしていることに関して

そろそろ突っ込みましょうか。」

「……え?」

これ以上地獄が続くのか……?

そろそろゴールだと心の中ですっかり

思っていた俺は目をぎらりと光らせて

そういうミーナに対し、体を震え上がらせる。

部屋の気温が2、3度は低くなったような感じが

して、寒気が収まらない。

「一体、彼を今後どうするのかに関して、か?」

『……………』

それまであちらこちらで口々に言い争っていた  
ウィッチ達の視線が一点に集中する。

即ち、この騒動の元凶である俺自身へと。

改めて、自分がもう助かるビジョンというのが

全く思い浮かばず、頭の中が真っ白になってくる。

俺は誘惑されたとはいえウィッチ達と関係を持った。

純潔を奪ったことは無いが、それでもウィッチを重要な

戦力として認識している各国の軍部、政府からすれば

抹殺対象である。

さらに言えば、アイドルとしてウィッチを崇拜、畏怖している

各国の国民からすれば、そんな美女、美少女である

彼女たちに想いを寄せられている俺は嫉妬と憤怒の相手であろう。

俺の後ろ盾であるガランドが今更俺に味方するとは

想えず、冷や汗がつう、と頬を滴り落ちた。

「……何だったら、殺しあうか？」

ルーデルがそういうと、部屋の中が一気に

殺気で充満し、身を突き刺すような感覚に陥る。

獸耳と尻尾を生やした少女、美女たちが各々の獲物を構え、警戒しあう。

「待った。それじゃあ、漁夫の利狙いのあざとい

ウィッチ達に持つていかれるだろう。」

『(あなた)(貴様)が言うな(言わないでください)』

ガランドの発言に全員で一斉に突っ込む彼女達。

俺と一番付き合いが長い彼女に対して苛立っている

ようにも見える。

「けど、まあ、確かに殺し合いを始めると真っ先に

彼と心中しそうな面々が何人がいそうよね・・・」

「他の女に取られるくらいならっ・・・、って彼を殺して、

そのまま自分も一緒に死にそうな奴らとかな。」

『・・・・・・・・・・』

その言葉を受けて黙る、自覚がある何人かのウィッチ達。

ライーサ、サーニヤ、ロスあたりは予想していたが、

まさかエーリカまで目をそらすとは思わず、

唾をぐくり、と飲み込んだ。

「……さて、改めて状況を再確認しましょう。」

また話がそれそうになるのを引き戻す醇子。

かつての幼い面影はなく、大人の女としての

顔つきになっている彼女になんとも言えない胸の

つつかかりを感じながらも、首元や背中に

ウィッチ達に抱き着かれながら話を聴いていく。

「まず、彼がどこかの統合戦闘航空団、

いえ、元、といえばいいのかしら？」

・・・に所属しなおすという選択肢。」

「まあ、彼がどこかにとどまり続けたら、

他の奴らが一斉に襲いに行くだろうな。」

「……………」

頭の中で想像するとその絵が容易く

描けてしまった。

燃え盛る基地。

怒号をあげて互いに殺しあうウィッチ達。

そして、新聞やメディアに取り上げられ……。

「……じゃあさ、いつそ本当に

彼を”ばらばら”にして……。」

「エーリカ、ステイ。」

「……ちえ。」

バルクホルンにそう言われたエーリカは

懐に持っていた何かの液体が詰まった

袋を”ごそごそ”と取り出し、それを

テーブルの上に置いた。

……防腐剤と書かれたラベルが

貼られていたのは全力でスルーする。

リアルでエクゾディアみたいにパーツにされて

しまうのはさすがにごめんだった。

「じゃあ、彼に選んでもらうって言うのは?」

誰が言ったのか、その発言に対して

今までそわそわしていた娘や、つんとした

態度をとって、「私にはそんな気はないから  
アピール」をしていたウィッチ達の首もぐりん、  
と俺の方に向けられる。

頭の中で必死にこの状況をどうやったら潜り抜けられるのかを  
考える。

そして、次々に浮かび上がってくる案をもし、  
実行したらどうなるのかを予想していく。

案1

『実は、俺は誰も好きでは……。』

『そう。じゃあ、一緒に墓にはいる?』

『殺す。』

『ひどい……。』

『僕の身体じゃ満足できなかったの?』

髪も伸ばして女の子らしくして、君好みに

なったのに、どうして? ねえねえねえねえ……。』

『だったら私のことを好きになるまで』



ずっと体を重ね合わせます。』

『どけ、ライーサ。．．．．貴様の

眉間に弾丸をお見舞いしてやる。

その後、私も後を追って死ぬ。

なあに、大丈夫だ。またやり直そう。

何度でも、何度でもだ。』

(主に俺が) 阿鼻叫喚の地獄絵図となる

姿が浮かんできた。

マジで死体にされて、腐らないように

ミイラ状態で皆に愛でられそうである。

無論、却下である。

案2

『．．．．実は、余命いくばくかであつてな．．．．。』

『大丈夫です! どんな病気でも、怪我でも

私が治します!! 絶対に!!』

『これでも私は医者志望なんだよー?』

あの世に逃げようたつてそうはいかない  
からねー。』

『ふざけるな。私だけ置いて貴様が先に  
死ぬなど絶対に許さん。牛乳を飲んだら  
すぐに良くなる。そしてたら私が本気で  
相手をしてやろう。病気なんぞ

殲滅してくれる。』

『(アカン)』

火に油を注いで、俺を冥府から黄泉帰らせようと  
するだろう。絶対に。

特に芳佳あたりは自分の魔力を全て使つてでも  
俺を助けようとするだろうからこれも却下である。  
嘘がばればば、それこそ本当に余命数年どころか  
数日になりかねない。

案3

プランC?

ねえよ、んなもん。

現実逃避のために思考に没頭していたが、  
それも終わりを迎え、彼女たちの声で  
現実に引き戻される。

「……このままじゃ、一生決まらないね。」

「……ええ、そうね。」

「……遺憾なこと。」

「……ふん。」

ガランドの言葉に同意するそれぞれの  
グループのリーダーたち。

このまま何も決まらずにうやむやになれば、  
助かる可能性が実はまだある……?

そんな淡い希望は今度こそ完璧に打ち碎かれるのであった。

「……じゃあ、全員で共有(独占)しようか。」

——何の気なしに、ガランドはそう言い放つのだった。

つづけども地獄

本編後の修羅場く現代編く

現代生活編くくボバ君で遊んでみよう！（ワクワク○さん風）> く彼だけが記憶がない現代でその1く

ボバ君で、遊んでみよう！（天の声）

「おい、カメラ止めろ。」

ナレーションに突っこむ、六畳の

和室の部屋で腕を組みながら敷かれている

布団の上に座って天を見上げる男。

ボバ・フエット（偽）は気が付いたら

こんな場所に拉致されていた。

『今回はねー。ボバ君で遊んでみようという

企画なんだよー。（優しげな声）』

イラッとした彼は天井に向かって

ブラスターをぶっ放そうと腰に手を

やると、自分の装備がないことに気が付く。

それどころか、なぜか学生服を

着ており、10代の頃に若返っていた。

「・・・俺の装備はどこだ？」

『メルカ○に出したら、ウィッチ達が

高値で買ってくれたよ！』

「フアック!!」

ごん、と床を右手でたたき彼。

叫んで少し落ち着いたのか、

冷静になった頭で彼は

これからどうするのかを考えていた。

そんな彼に無情なアナウンスが告げられる。

『それじゃあ、ゲームを始めようか。』

・・・ “設定”!!”

天からの声に身構える彼。

来るなら来いと言わんばかりに戦闘態勢を取っていたが、次の言葉で態度を180度変えることになる。

『 全員顔見知りのウイツチ達がいる

高校に通う世界線!!でも、彼だけは

現代にいたときの性格と記憶のまま!!” 』

がしゃん、と窓を突き破って外に出る彼。

通行人がびくつ、と体を跳ねて、彼に

奇異の視線を向けるがそれも気にせず

いつの間にか着せられている学生服の

ままだどこかへ全力疾走する。

(なんだこれは!?!どうすればいいのだ!!)

とりあえず、学校に行かなければいい。

天から聴こえてきた声はゲームと言っていた。  
ならば、時間制限はあるはずと彼は考えていた。

肉体も若返っているからか、いくら走っても  
彼はあまり疲れを感じず、足を動かし続ける。

(くそっ……!!俺が一体何をしたというんだ!?!)

とりあえず、近くに公園があつたのでそのベンチに座って  
一旦休むことに彼はした。

そして、それが最悪の一手となる。

「……はあつ。はあつ。……あれ?

俺は一体何を……?」



『いい子の皆にだけ教えてあげるね！』

・・・彼から、ボバとして生きていた時の

記憶を消しました！・・・え？ウイツチ達の

ほうはどうかって？・・・あ、ちようど

いいところに彼女たちが来たよ！』

ベンチでぼーつと座る彼に近寄る人影。

「あー！こんなところにいたんですかー！」

ぱたぱた、と愛らしい顔をした中学生くらいの

少女が彼に駆け寄る。

髪の毛が少し跳ねており、

短めの髪型である。

後には、彼女の知り合いである

ペリーヌさんとリーネさんが立っていた。

「・・・宮藤、さん？」

「はい！今日から入学式なんですから

しっかりとしてくださいよ。・・・ほら、行きましよう！」

「おはようございますわ。」

「おはようございます。．．．あの、お弁当作って

来たんですけど、よかったら．．．。」

「．．．い、いや、大丈夫．．．です。」

彼は彼女たち3人に背中を押されて

連れていかれる。

『彼にとっては単なる顔見知り！』

．．．ウイツチ達はあの世界での

戦いの記憶があるんだよね！

いやあ、どうなるのか楽しみ楽しみ！』



「で、あるからして……。」

俺は今、退屈な授業を受けていた。

思わず、机に突っ伏して寝ようとしたが

隣の宮藤さんに耳もとで寝ちやだめ、ときさやかれ

仕方なく起きることに。

だが、暇である。

ケータイを取り出して大好きなスター・ウォーズの

映画を見ようとすると、今度は反対側にいた

宮藤さんが顔をにゅつと出して一緒に覗き込んでくる。

小声で注意する。

『……あ、あの、近いんですけど……。』

『えー。いいじゃないですかー。』

私も暇ですし、こっそり一緒に

見ましようよー。』

『……ばれないようにするなら……。』

『はーい。．．．やっぱりあなたは

変わりませんね．．．。』

『?な、何か?』

『なんでも．．．あ、イヤホン片方

もらいます。』

騒がれて教師にバレるのもいやだったので教科書で隠しつつ、スター・ウォーズを

一緒に見る。

しかし、周囲から微妙に視線を感じる。

周りの男子達、特にスクールカースト

で上位の奴らに目をつけられ、

身を縮こませ、宮藤さんからそつと

距離を取る。

すると、ずい、と体をこちらに寄せてきて

距離を近づけてくる彼女。

ますます周りの男子達からの嫉妬の

視線が強くなる。

（・・・ああ、神様。俺はただ、スター・ウォーズを

見ればそれでいいのに・・・。なんでこんな美少女が俺にぐいぐい来るんだ・・・。）

結局、上機嫌の宮藤さんと一緒に映画を見続ける羽目となった。

次の時間はペリーヌさんが、その次はいつの間席を変えたのかリーネさんが俺の隣に近寄って一緒に見ていた。



「・・・。」

「おい。」

机に突っ伏して死んでいる俺に

声を掛けてくる誰か。

顔をあげると、怒りに顔を歪めた  
クラスカースト上位の男子達が

俺を取り囲んでいた。

「あんまり彼女たちに近寄んなよな。

・・・その顔じゃ釣り合わねーよ。」

「そそ。・・・これ、お願いじゃなくって

命令だから。」

「・・・。」

その言葉に押し黙る。

内心ビビって声が出ないだけが

余裕をぶっこいていると勘違いした

1人が俺の机を軽く蹴る。

「黙ってんじゃねーよ。なんとかい」

その次の瞬間、男の近くを

椅子がかすめ、教室の外まで

出て行った。

校庭の真ん中にまで飛んでいった椅子。

飛んできた方向を見ると、そこには  
無表情で俺を、正確には俺の周りを見ていた  
バルクホルンさんが腕組みをして仁王立ちしていた。  
隣にはエーリカさんとミーナさんたちもいた。

「・・・っち。」

そそくさと散っていく男子達。

他の見て見ぬふりをしていた男子達も

瞳孔が開いているルツキーニさんや、

笑顔で怒っているミーナさんの姿を見て

あわてて目をそらしていく。

「・・・大丈夫？」

サーニャさんに手をそつと両手で包まれる。

間近にきれいな彼女の顔があつて、

心臓がばくばくなりながらも必死に

お礼を言おうと口を開く。

「・・・りがと。」

「・・・いいの。気にしないで・・・ね？」

にこり、と微笑む彼女に、俺に優しくしてくれるとはいい子だなあ、と感動していると腕をエイラさんに引きはがされる。

「コラ!! 駄目ダつ!! サーニヤに手を出すなよナ!!」

「・・・あ、いや、そんなつもりは・・・。」

彼女はどうも苦手だ。

俺からサーニヤさんに話しかけたことなどないのに  
いっつもこんな感じで怒られる。

両親に酒瓶でめった打ちにされたときのことを  
思い出しながら、席をすつと立ってドアの

方に歩いていく。

「・・・おい!! どこに行くんだ!？」

「・・・ト、トイレだけど・・・。」

それだけいってそそさくさと

廊下に出た。





「それにしても、彼ってあんな引つ込み事案  
だったんだねー。」

彼のおどおどとした顔を可愛いと思いつつ、  
顔を緩めたエーリカが愛おしそうにそういう。

たいして、バルクホルンは若干不機嫌そうだった。

「……ふん。いつものあいっならあんな

言われっぱなしでないだろう。」

組んでいる腕をぎゅううつつと握り締め、  
悔しそうな表情を浮かべている。

「……まあ、なんだかんだ言って女子に

優しい性格は変わっていないようだがな！」

はっはっはと豪快に笑う美緒。

彼女たちウィッチも彼同様に転生を繰り返していた。

そして、何の因果か戦争のない平和な現代に  
ウィッチ達は生まれ、彼もまた同じこの世界に  
やっつけてきた。

・・・違うとすれば、彼は何も覚えておらず、  
気弱で引つ込み事案のままであるが、  
ウィッチ達はすべて憶えていた。

そして、顔は変わっていないのですぐに  
彼に気が付き、取り囲むことにした。

「・・・ねえねえ。なんで坂本さんたちって

あいつのこと・・・。」

「しっ！・・・聞こえるよ。」

「同じクラスの斎藤くんとかのほうか

運動も勉強もできてかっこいいのにね。」

「まあ、ライバルが減るからいいけど。」

ひそひそと陰口を叩く女子達に  
ルツキーニがうーとうなる。

そんな彼女を落ち着かせるように

シャーリーが頭にぼん、と手を置く。

「・・・彼の事、何にも知らないくせに・・・。」

「逆に考えろ。・・・男を見る目がない

バカばかりでよかつたってな？」

「あ、そう考えるとそうだね。・・・くすくす。

これくらいのおこちゃまじゃ顔で男を選ぶのが

限界だもんね。」

転生を繰り返して人を見る目が各段に養われていた

ルツキーニはシャーリーの言葉に思わず笑った。

「・・・でも、意中の殿方が嗤われているというのは

いい気はしませんわね。」

「・・・私も、です。・・・彼、何だか

辛そう・・・。」

ペリーヌは自慢のブロンドを後ろにふわきあ、とかきあげ、リーネは胸に両手を当て、心配そうな表情を浮かべる。

「……自分に自信が持てないんですね。」

「……あの強い人にもあんな時代があったんですね……。」

「一番ある意味付き合いが濃い芳佳が顔に陰を落として思わず言う。」

「でも、これはチャンスよ。……他のウィッチ達に気づかれる前に一気に勝負をつけましょう。」

「ミーナが決意を込めた瞳を元501の面々に向ける。皆が皆、彼と戦場で共に戦ってきた戦友であり、良き伴侶として過ごした記憶を持つ者たちであった。」

「だが、それと同時に奴には自信を持ってもらおうと思う。」

「……どうやって?」

美緒の言葉にエーリカが質問を投げかける。

彼女はふふん、と胸を張って言った。

「女子に免疫がないのなら、私たち全員で

責めればいい!!……そして、女子慣れ

しでしたら……。……しでしたら……。」

「……他の女子達に好かれてしまうわね。」

ミーナの冷静な指摘に無表情になる美緒。

「……前言撤回。……あいつを守りつつ、

困り込むぞ。」

「「「「「了解」」」」」」」」

かくして、少し違った世界での生活が始まった。

「憶えていなんですか!?! 私ですよ!! ひかりです!!」

「いや・・・あの・・・。」

「ボバあ!!!・・・会いたかったよお・・・うええん・・・。」

「伯爵、道端で泣くな。・・・ふむ。やはりまた会えたな。・・・ふ、ふふふ・・・。  
先生。ボバの学校は？」

「割り出せたわ。・・・また、あえて嬉しいわ・・・。あなた・・・。  
(・・・なんだろう。この美人さんたち。)

その日、学校からの帰宅中、

502の面々と出くわした彼は困惑する。

ぐいぐい来られると思わず身を引いてしまうのは  
世界線が変わっても変わらなかったようであった。

現代生活編くくボバ君で遊んでみよう！（ワクワク〇さん風）> く彼だけが記憶がない現代でその2く

今日は変な人たちに会った。

『・・・ボバっ!!愛しているっ!!愛しているからねっ!!』

『落ち着きなさい。伯爵。・・・またね。』

『・・・ふふふ。次は、また別の形で、な?』

『・・・あ、あの・・・。・・・また会いましょうねっ!!』

長身の褐色肌の美人さんを抑えながら

去っていったどこかの女子生徒たち。

・・・最近、女子に絡まれることが多くて変だ。

1人暮らしのボロアパートに帰ってきて、鍵を開けて中に入る。

すると、汚れていたはずの部屋がなぜか綺麗にされており、部屋の真ん中にあるちやぶ台の上にはサラダとカレー。

そして、ガスコンロの上にはカレーが入っているであろう鍋が置かれていた。

(……ま、またか……。)

すぐに鍵を閉めて、中に入る。

体がぶるりと震えたが、

お腹が空いて、思わず

置かれている夕食に手を伸ばしそうになる。

しかし、どこの誰が作ったかもわからないものを食べるのは危険そうで少し戸惑った。



が、次の瞬間にはため息を漏らし、  
スプーンを右手で持つ。

（・・・死んだら死んだでいいや・・・。）

親に虐待されたときについた頭の傷を右手で  
そつと抑えながら自嘲気味に彼は笑う。

自分以外誰もいない部屋でぽつり、と  
つぶやいた。

「いただきます。」

<ドウゾ

カレーをスプーンですくって口に

入れ、もぐもぐと咀嚼する。

すると、次の瞬間彼の目から涙が  
ぽろぽろと落ちる。

「・・・っひっぐ・・・！」

懐かしいような、それでもって  
愛情がこもっている料理を食べて、  
彼はその身を感動で震わせる。



『・・・ひっぐ・・・』

「よかったあ♡喜んでくれたのね♡兄さん♡」

監視カメラに映る映像を見て、

うっとりとした顔つきになるとある女性。

加東圭子。

以前の世界線ではボバの妹であった  
女性である。

彼女は、彼と直接コンタクトをまだとらずに、  
まずは今の彼の状況を調べることにしていた。

独り暮らしでまともなものを食べていないことを  
して、毎日夕食を作り部屋に無断であがっているのだが、  
彼女はそれをさも当然のごとく毎日行っている。

「お。．．．ふふふ。いい顔だなあ。」

ビールを片手に圭子が見ている映像を  
覗くもう一人の女性。

ハンナが愛しの男の顔をじっと見つめる。

「．．．．」

ハイライトが消えた瞳で

泣いているボバをじっと見守る

3人目の女性。

ライーサは内心穏やかではなかった。

「……彼を傷つける人たちは皆、

消えてしまえばいいのに……！」

ボバの過去と現状を知っている彼女は

歯ぎしりしながら心底憎くてたまらない

声をあげる。

「……まだ、転校手続きはおわらないのですか？」

「来月には入れるそうよ。……それまでは、

じれつたいけどこうして見守りましょう。」

「万が一、あいつに手をあげるような輩がいたら

全員東京湾にコンクリ詰めにして沈めればいいしな。」

ライーサと同じくハイライトが消えた目で

ハンナは銃をいじり、圭子はナイフを静かに研ぐ。

「……私の王子様。……おとぎ話はいつだって

ハッピーエンドなんですから。……だから、

もう少しだけ、待っていてくださいいね？」

誰に言うでもなく、ライーサは静かにつぶやいた。

◆ 朝。

起床して電車に乗る。

今日は昨日カレーをたらふく食べて

寝坊してしまった。

あわてて電車に乗ると異様な雰囲気気が付く。

（・・・あ、あれ？）

周りにいるのは女子ばかり。

しかも色んな学校の制服を着た

女子生徒たちだ。

ドアの真上にある注意事項を読むと  
そこには『女性専用車両』と書かれているのが見える。

(ま、間違えたっ——!!)

あわてて他の車両に移ろうとするも、  
電車はかなり混んでおり、身動きが取れない。

そうしているうちにどんどんと他の  
女子達に乗ってくる。

しかし、何も言われず、

かえって不安になっていく。

しかも、近くにいる何人かは息が荒いし、  
顔が赤い。

女子特有の甘い香りがふわあ、と鼻を突き抜け  
くらりとする。

（やばいやばいやばい！．．．こ、こんなに女子が  
いるなんて．．．。）

ぶるぶると体を震わせていると、  
近くにいたミドルくらいの黒髪の  
女の子が話しかけてきた。

「．．．あのー。大丈夫ですか？」

「あ、い、いえ．．．。」

あまり女子に慣れていないからか  
話しかけられてどもってしまう。

気持ち悪がられてしまう．．．。

そう心配していたのだが、にこ、と  
微笑まれる。

「よかったー．．．その制服、

確かこの辺の高校の人ですよね？」

「え？え、ええ。まあ．．．。」

話をなぜか続けてくる彼女。

いや、今ので会話を切らないのかよ、  
と思っている与自己紹介される。

「私、黒田那佳つて言います！ノーブル女学院に  
通っているんです。」

「・・・え、ええ？」

ノーブル女学院と言えば、知る人ぞ知る、  
ガチのお嬢様学校である。

中には、大富豪の娘さんも通っているという  
噂もある。

「す、すごいですね・・・。」

はー、と関心の声を漏らすとなぜか  
目の前の黒田さんが恥ずかしそうに顔を  
赤くしている。

「・・・え、えへへ・・・。」



「・・・あ、あの。どうしたんですか？」

「な、なんでもないですっ！」

そして、かぶりを振るうと、

意を決した彼女が何かが書かれた紙を

渡してくる。

「・・・あのっ。」

耳元で囁かれ、びくつと

体が跳ねる。

「・・・これ、私のケータイ番号と

ライ○IDです。・・・それじゃ！」

ドアが開くと同時に彼女は降りていく。

他にも同じ制服を着た女子生徒たちが降りていく。

彼女の方を見ると、にこっ、と無邪気な笑みを

浮かべながらこつちに手を振ってきているのが見える。

その姿に見とれて、思わず俺も

手を振り返してしまう。

「……つち。」

「……処す? 処す?」

「……ジエーン、ここは私たちも逆ナンして……。」

「……た、大将! そんなの恥ずかしいですよ!」

なぜか周りが騒がしくなったが

今度こそ誰にも話しかけられないように

耳にイヤホンを突っ込み、スマホから

顔を背けないようにして縮こまりながら

電車でじつと立っていた。



「……。」

黒田那佳は呆然としていた。

自分が知っていた人物と、今の

そのひとがあまりにもかけ離れていたことに。

顔は変わらないし、服装もおしゃれとはいいがたい。  
女慣れしているようにも見えなかった。

「……ふふふ。」

しかし、彼女は笑う。

だからこそ、染めかいがあると。

お金くらいにしか興味がなかった邦佳は、彼を

自分の体とかで縛り付けるチャンスだと興奮する。

最初に会ったときには30代くらいだった。

それでも性欲が強かったのに、中学生ぐらいの

今となればどうなるか？

……自分と彼がベッドの上で

激しくまぐわっている姿を想像して

思わず両手で緩み切った頬を抑える邦佳。

「・・・・・・・・へへ♡・・・・・・・・えへへ・・・・・・・・♡」

駅の構内でそんな顔をしている

彼女の後頭部をぼしん、と誰かが叩く。

「・・・・・・・・朝っぱらから何をしておる?」

「・・・・・・・・あ、プリンツさん。」

「おはよう。機嫌が良さそうね。」

「やあ、おはよう。・・・・・・・・どうかしたのかい?」

「あ、ロザリーさんとジーナさんもおはようございます。」

えへへ、と頭を叩かれたというのに上機嫌な

那佳を訝しむ目で見る3人。

那佳に聞こえないくらいの声量で3人はひそひそと話す。

「・・・・・・・・どうしたんだろうね。」

「・・・・・・・・やけににやけているわね。」

『・・・あやつが、金以外で喜ぶことなど一つしかない。』

プリンツのその一言で、はっと目を見開くジーナとロザリー。

「・・・のう、黒田よ。」

「えへへ・・・♡あつ、なんですか？」

「ボバはどうだった？」

「いやー。あの人、可愛いんですよー♡・・・なんていうか、女慣れしていないから、ぐいぐい行けばすぐにでも墮とせそうで・・・。」

「・・・ほう。」

「あつ。」

プリンツの質問に馬鹿正直に答えてしまい

咄嗟に自分の口を両手で抑える那佳。

しかし、既に遅かった。

ジーナとロザリーの目が黒ずみ、

プリンツも怪しい笑みを浮かべながら

彼女ににじり寄る。

「詳しい話を聴かせてくれるよね？」

「……あの人が、いるの？」

「……無理やりしやべらされるか、自分から話すか選ばせてやろう。」

「……あつ。そういえば今日、お昼を買ってから

学校に行くんですけどっ！お先にっ！」

そういいながらだだっどと走って逃げ出す

彼女の3人が追う。

「逃がすかあああつ!!」

お嬢様学校のお転婆姫たちが、令嬢らしからぬ

ふるまいをしていたという噂が立ったが

彼には関係なかったという。

# ☆☆R18注意☆☆

現代生活編～彼だけが記憶がな

い現代でその3～

芳佳に搾り取られる。～

結局、黒田さんとはつながらなかったの

彼女のラインIDとメールアドレスを消してから後日。

授業がつまらず、眠りそうになっていると

先生に指される。

「……牡馬。ここはなんだ？」

「え、えーと……」

目をすぐさまし、迷っていると隣の

宮藤さんがくいくいつとそつと袖を

引っ張ってきた。

何事かと思い、彼女の方を見ると

口パクしているのが見えた。

『こたえ、3。3だよ。』と。

「3です。」

「・・・正解だ。・・・つち。」

舌打ちする彼を見て、思わず

顔をしかめる。

クソジジイめ・・・。

だが、宮藤さんのおかげで助かった。

彼女に向かって小声でありがとう、というど、

にこりと微笑まれる。

顔が熱くなるのを感じながら

思わず顔をそらした。

可愛すぎる・・・。

ドキドキしながら机の中に手を入れると、

何か硬い紙が入っていることに気が付く。

(・・・なんだ?)

気になったので取り出してみると



白い便箋だった。

中身を取り出し、机で隠しながら読んでいく。

(・・・えーと? 『・・・あなたのが好きでした。

放課後〇〇教室にて待っています。』・・・?!)

こ、これはもしや・・・!?

(ラブレター!?)

動悸が激しくなり、思わず周りを見渡す。

いや、何でこんな。

お、落ち着け、と自分に言い聞かせても

顔が緩むのを抑えられない。

今まで女子と付き合ったことのない俺が・・・と

便箋を思わず握り締めた。

その後、上の空だった俺は再び教師にさされて、

また宮藤さんに助けてもらった。

浮かれすぎた……。



「ねえねえ。罰ゲームの手紙、入れてきた？」

「うん。入れてきたよー。牡馬のところに。」

「マジで!? 受けるー!!」

「ま、待ち合わせ場所なんていくわけないけど。」

「あんなダサいのと付き合ってられないっつーの。」

牡馬と同じクラスメイトである、

カースト上位の女子達が屋上で

笑いながらそう話す。

ボバは手紙を受け取って律儀に

待ち合わせ場所に向かったことも知らずに。

「つーかさー。同じクラスのミーナとか、

坂本とかうざくない？」

「わかるー。斎藤君とか、千葉君とか、イケメンが皆ぞっこんだしー。」

「いつつもつるんでるあいつらでしょ？ほんと

美人って邪魔だよねー。」

彼女たちは同じクラスの斎藤や、千葉に

気が合った。

しかし、彼らは美少女である宮藤やリーネ達に

気があり、いつも声を掛けていた。

自分の見た目は悪くないのになびかないどころか

牡馬とかいうさえない男には優しくしている。

それはカースト上位の男子達から

牡馬が恨まれていた理由である。

「てゆーかさー。牡馬、今頃馬鹿みたいに

待っているのかなー？」

「バカみたいだからありえるっしょ（笑）」

「クラスのグループプラインでさらそうよーww」

しかし、彼女たちは気づいていなかった。  
その待ち合わせ場所に向かったのが  
彼だけでなかったことと。

「.....」

彼女たちの近くに、ぶちぎれた様子の  
美緒、ミーナ、バルクホルンがいたことに。



放課後。

はやる気持ちを抑え、  
指定された場所までやってきた。

ドアに手をかけ、引く。

ガラガラと音を立てて

開かれるドアを気にせず

中に入ると、窓の近くに  
立っている女子がいた。

「あ……。」

思わず声が出た。

イタズラじゃなかった。

本当だった。

嬉しさで泣きそうになる顔を  
ぼん、ぼん、と叩いて抑える。  
そして、その女子生徒に  
声を掛ける。

「……あ、あの……。」

くるり、と振り返ると

それは見知った人物だった。

「……こんにちは。」

宮藤さんがいつも見せてくれる  
笑顔でそういつてきた。



「全く、最低な奴らだったな。」

肩を怒らせ、逃げていく

女子達を睨む美緒。

隣ではミーナがニコニコと笑いながら

静かにキレていた。

「ふふふ．．．。あの人に手を出すとか．．．。

以前の世界だったら何のためらいもなく

引き金を引いていたのに．．．。」

「私に魔力があれば、体を真つ二つに

ちぎってやっていた。」

真顔で手をパキパキと鳴らしながら

バルクホルンが低い声でうなる。

「……そういえば、あいつは今でも

待っているのか？」

美緒の言葉にハツとなるミーナとバルクホルン。

屋上の出口に向かって走り出す。

たた、と制服のスカートが乱れるのも、

男子から不快な視線が向けられるのも

気にせずに、目的の場所まで走り続ける。

教室のドアを思いつき引き、

中にかげこむ彼女たち。

そこには、誰もいなかった。



「……ん……♡」

なぜか、体育館の倉庫でマットを敷いてその上に寝つ転がる俺たち。

服装は体育着であり、宮藤さんはブルマ姿である。

その上を脱ぎ、上半身が裸となった。

美脚、美形、白くてなめらかな肌。

じつと見ているだけでおかしくなりそうな

その姿にごくり、と唾を飲み込むと

彼女がのしかかってくる。

ズボンの上からあそこをぎゅつと掴まれ、

優しい手つきでしごかれていく。

自分が今、されていることが

信じられなかった。

(こ、こんなかわいい子と・・・)

同じクラスのイケメンなら釣り合うような

超が付く美少女と。

セックスしたいと言われたときは思わず呆けたが、



彼女に手を引かれ、ここにやってきてしまった。

誰もいな夕焼けが窓から差し込む部屋の中、

彼女が俺のズボンを降ろし、直接握ってくる。

「ううあ……。」

「ね♡私のも……♡」

そういつて、俺の右手を掴んで、

ブルマの中に入れてさせてくる彼女。

既にぐちゅぐちゅに濡れており、

クリを指で軽くつまむと彼女が

足をびん、と伸ばす。

「ああんっ♡あんっ♡」

「うぐ……あ……あ……。」

ぐちゅぐちゅと湿った音が部屋に響く。

興奮しっぱなしでいきり立ったそれが

宮藤さんの手淫に耐えられるわけもなく、

情けなく果てる。

「ああっ……ぐおおっ……！」

「きゃあっ♡」

びゅる、びゅると彼女の白い肌に  
精液をかける。

自分の体が汚されているというのに  
嬉しそうな顔つきでそれを  
受け入れる。

「ああん……♡もつと出してえっ……♡」  
「うあああっ……!」

いったばかりの亀頭をにちゅ、にちゅと  
指でいじめられ、思わず声が漏れる。

やばい……。

気持ちよすぎる。

びくびくと体を震わせていると、  
彼女が俺に口づけしてくる。

そつと触れるだけのものではなく、  
舌と舌が触れ合う濃厚なキス。

よだれて口元がべとべとになるのも

気にせず、俺たちは互いを貪っていた。

顔が離れると、俺のモノは興奮して

すっかりとその硬さを取り戻していた。

彼女がごそごそと何かをまさぐり、

銀色の包みにはいったものを取り出し

ビリビリと破る。

中には、コンドームが入っていた。

「これつけて、いっぱいびゅーびゅーしましょう？♡」

あつという間にコンドームを付けられ、

寝ている俺の上に彼女が乗っかってくる。

ペニスが割れ目に当たると、宮藤さんが

声を吐いた。

「うう・・・あ・・・♡入ってくる・・・よお・・・♡」

そして、一気に奥まで姦通すると、

腰を上下に振り始めた。

きゆうきゆうにあそこで締め付けられる。

「あんっ♡あんっ♡ああっ♡すっ♡いっ♡」

よだれと涙を垂らして、乱れる彼女の

尻に両手を置き、そのやわっこい感触を  
堪能する。

はっ、はっ、と乱れた息で呼吸する

俺たちの声だけが部屋に響く。

「いっばい♡いっばい突いてっ♡おちんちんで

犯してえっ♡」

「・・・っー」

こらえきれず、今度はこちらから腰を動かす

彼女を犯す。

「来たああっ♡子宮にいいいいっ♡」

「・・・っぐうっ!!」

ぶるぶると震えだす彼女。

そして、二回目の射精を迎える。

「♡♡♡はひっ♡♡はひっ♡♡ひいっ♡♡いんっ♡♡」

「あ……絞られ……る……。」

一しきり精子を出し、  
倒れ込む。

彼女も俺に向かつて

もたれかかってくる。

それを受け止めると、

彼女にキスされる。

「……あ、あの……。宮藤さん……。」

「……芳佳。」

「え？」

彼女が笑顔でそう言うってくる。

「……芳佳って、呼んでほしいな……。♡」

胸の奥がきゅんきゅんして、

痛くなる。

「……芳佳……。」

「はい♡良く呼べました♡……。つづき、する？♡」

新しいコンドームを咥えて、

そう誘ってくる彼女。

結局、なぜかいつもより性欲が

収まらず、5回以上してしまった。

責任を取って付き合おうと言ったら、

「気にしなくていいよ」と返されてしまい

困惑した。

・・・一体、何で俺なんだろうか。

(40年ぶりくらいに精子♡幸せえ・・・♡)

一体を考えているのかもわからずに、

芳佳と抱き合うのだった。

## 現代生活編～彼だけが記憶がない現代でその4～謎（笑）の美女と

芳佳と学校でシてからというもの、  
何だか今までと違った視点で周りを見れるようになった。

前よりは女子相手にきよどる事も  
少なくなつたし、あがることも  
減つてきた。

しかし何というか、周りから、  
ひいては一部の女子から  
視線を感じるようになった。  
特に、芳佳さんと仲がいい  
美少女グループの女子達からは。

彼女は付き合わなくてもいい、と言ったが、  
した以上は責任を取りたい。

その言葉を聴いた彼女はふつと笑って

「あなただって本当に変わらないんですね」と  
はにかまれた。

一体、何のことかわからなかったが

屋上からぼーつと空を見上げつつ、

今日のお昼を食べる。

菓子パンとお茶だけだったが

食費が浮くので便利である。

芳佳はクラスで浮いている俺を

気遣ってか、俺と一緒に

食べたいときにだけ食べる、と言って

他のところに行った。

女子が苦手な俺にとつて

本当に助かる。

しかし、なんで俺があんな可愛い子と……。



恋愛ゲームの主人公のように

イケメンでも、金持ちでもないのに。

（……美人局だったらどうしよう……。）

ぶるり、と背筋が凍った。



「一緒にご飯食べない？」

そういつて、誘ってくる同じ学年、

もしくは違う学年の男子達。

おしやれな学生服の着こなしに、

イケメンであることからクラスの

中心人物であることがわかる。

周りの女子達は何やら熱っぽい

視線を彼らに向けているが、

返す言葉は決まっている。

「いめんない。友達と……。」

私がそういうと引き下がる男子達。ようやく、食堂の椅子に座れる。

他の元501の人たちも声を掛けられているのが見えた。

あ、エイラさんとペリーヌさんが

追い払った。

坂本さんとミーナさんがにこりと

笑うと気圧された男子達が逃げ出す。

地獄絵図だ。

「全く。これくらいの威圧で逃げるとは

情けない。」

「本当にね。」

グラスに入った水を飲むミーナさんと美緒さん。

女傑ってこういう人のことを言うんだろ？うなあ、と

考えていると、リーネちゃんがそわそわしながら

あたりを見回している。

「どうしたの？」

「・・・あの人は、いないのかな・・・。」

ぼつり、とこぼす。

その声に反応する他の子たち。

「一緒にご飯食べたけれど、それをやっちゃやうと

あいつがいじめられちゃうからなー。．．．あー。

早く押し倒したいんだけど。」

「シャーリー。媚薬飲ませちゃえばいいんじゃないかな？」

「こら!!物騒なことを言うな!!」

「とか言つて、トウルーデが通販でそれ系の薬を

買おうとしていたの、覚えているからね？」

「ハ、ハルトマンツ!!」

．．．本当に抜け駆けしようとする人が

多いなあ．．．。

お箸を握る手に力がこもる。

「．．．芳佳ちゃん？」

「．．．なんでもないよ。」

それだけ言つて、またご飯を食べだす。

既に、彼と関係を持っているとは

まさか知らないだろう。

(・・・何も心配せずに、セックスだけ

してていいんですからね・・・♡)

最終的に、彼が自分と交わってくれるなら

何でもいい。

ドロドロに、グチュグチュに。

久しぶりの再会だ。

もう我慢の限界はとうに過ぎている。

邪魔がいくらいても関係ない。

お腹をさすり、彼のものがまだ入っている

ような感覚の下半身のうずきを抑える。

お金はある。

あとは人生設計だ。

彼が逃げ出さないように、慎重に

事を運ばないと。



「・・・うーむ。」

望遠鏡を公園に立て、

とある学校の屋上を見つめる少女。

いや、少女と言うにはあまりにも

体つきが豊満で、大人びていた。

ショートカットの髪が揺れ、

胸が弾むたびに通りすがりの男たちが

目を奪われる。

そんなことなど意に介さないとばかりに

一心不乱にとある人物を見つめる

彼女の頬は赤く染まっていた。

「・・・隊長。」

そういつて彼女に声をかける

強気そうな黒髪の少女。

手にはコンビニ袋を持っていた。

「そろそろ交代だろ？ 変われよ。」

「……もう少し。」

「とか言ってさ。ずーずーと

昨日変わらなかったのは誰だっけ？」

むすーと拗ねながら

隊長と呼ばれた少女の頬を引つ張る

長身、褐色の女性。

グラマラスな体つきが

制服で圧迫され、体の

ラインがくつきりと映っていた。

「さあさあ。交代交代。」

「あっちの方に入れてもらえよ。」

そういつて、黒髪の少女が

指さす方に身を寄せ合って

スマホを見る複数の少女たち。

「あー。いい。すっごい……。」

「後姿だけじゃなく、もっと近くの

映像はないんですか？」

「これ以上近づくとばれるわよ……。」

姦しく、とある人物が映っている

映像を嬉しそうに眺めている。

隊長と呼ばれた人物がコンビニ袋から

コーラのボトルを取り出し、ふたを開け

ごきゅごきゅと飲む。

「……ふむ。やはり、近くに越してきて

正解だったな。」

にやり、と笑う彼女。

同じく、長身の女性と強気そうな少女が

笑みを返す。

「学校の位置が分かれば、あとは張り込んで、

彼が出てくるのを待つだけだからね。」

「全く、この通信機器ってやつは本当に便利だよなあ。

……写真をいくらでも取れるしよ。」

スマホの待ち受けに、自分とある人物が手をつないでいるように合成した画像を設定している少女は病んだ目つきで呆ける。

隣の褐色の女性はうえへえ・♡、とにやけながら、とったプロマイドにほおずりする。

彼女たちが彼の近くに移ってきたことで、  
またもめるのだが、それはまた先の話である。



芳佳と目線で会話し、

家に帰る道すがら、スーパーによる。

いつも、気が付いたら夕飯がなぜか

用意されているが、冷蔵庫に

ジュースを入れておきたい。



それに、お気に入りのスナックも切らしていた。

今日は特売りの日なので

セール商品をかごに入れ、

レジに向かうと途中、

声を掛けられた。

「……すみません。」

後を振り返ると、そこには

黒髪長髪の毅然とした姿勢の

美人さんが立っていた。

「この商品を探しているんですが……。」

なぜ俺に聞いてきたのだろうか。

周りには店員さんがいるのに。

しかし、それは俺が良く買っている

スナックだったので置いてある場所まで

一緒に行くことに。

「こらっ!! 大将っ!! 一人一つまでだからねっ!!」

「えー。あいつが好きな菓子位いっぱい買ってあげば

いいじゃないか。」

「グリユンネ。ジーナ。本当にあやつはここに来ておるのか?」

「そのはずよ。」

「せつかくだから、彼が好きそうなものを買っておいて

あげようか。」

なぜか、混んでいた。

近くの高校の女子もいれば、遠くの高校の

女子もなぜかおり、わちゃわちゃとしている。

正直、あの中には入りたくない。

すると、隣で立っていた美人さんが

手をつないできた。

「えっ．．!?!」

思わず困惑の声をあげる。

いい匂いが鼻につき、くらりと

脳がしびれる。

「ちよつと混んでいるみたいだからね。

ああ、そうそう。これをかぶっておくといい。」

そういつて、俺に帽子をかぶせてきた。

高そうなキャップである。

「・・・じゃあ、行こうか。」

そういつて、ずんずんと進んでいく。

身を縮こませながら前に進む俺と

堂々と歩く女性。

目的の棚まで来ると、彼女がそれを

カゴいっぱいに入れる。

買すぎじゃないか・・・？と思っていると

また手をつながれ、レジの方に連れていかれる。

途中、美人さんが周りにいる女子達に

目配せした気がしたが、気のせいだと

考え、レジで会計を済ませる。

あつという間のことだったが、

なぜか心臓の鼓動が激しく鳴りっぱなしだった。

「ふふふ。ありがとう。」

そういつて、俺の右手を彼女の

両手で包んでくる。

「あ、いや……。」

ドキドキしながらうろたえていると

スツと紙を胸ポケットに入れられる。

そして、耳元でささやかれる。

「……楽しい思いをしたかったら

おねーさんに電話してね?♡」

「あつ……。」

そつとズボンの上からあそこを触られる。

なんで?

どうして?

逆痴漢されていると彼女がすつと  
離れる。

「またね♡ボバ♡」

投げキッスして歩き去っていく彼女。

その背中から目を離せず、

ぼーっと突っ立ったままだった。

・・・そういえば、なんで俺の名前を  
知っていたのだろうか。

（・・・早く家に帰ろう。）

お姉さんのことを思い出すと

ムラムラし、思わず家でシてしまった。

☆☆☆☆R18注意☆☆☆  
現代生活編く彼だけが記憶  
がない現代でその5く体育館でルツキーニに痴女られる

く

体育の時間。

バドミントンの授業で

ペアを作ることに。

しかし、クラスで孤独な俺には

そんな相手などいくわけもなく

ただただ体育館でうなだれる。

他の面々が楽しそうにバドミントンを

やっているさなか、こっそりと

体育館の二階に上がり、

ベンチに寝転がる。

昨日の美女のお姉さんの  
あの手つき。

香り。

温もり。

それが忘れられずに  
今も頭の中でぐるぐると  
駆け巡っていた。

いつも、ボロアパートと  
学校を往復するだけの  
生活だったというのに  
なぜ、最近変なことばかり  
起きるのだろうか。

(・・・転校しようかな。)

金はある。

両親は事故死して、保険金と遺産が残っている。

それを使えば一生、

働かなくても生きていけることは明白だった。

しかし、やはり高校くらいは

出ておいた方がいいと思ひ直し、

学校には行くことに。

それでも、その決意が

既に弱まっているが。

ふああ、とあくびをして、

目を閉じる。

意識が薄れていき、寝そうになると腹に衝撃が走る。

ぐふつ、と息を漏らして

目を開けると、その原因に気が付く。

「……ごー」



俺の眼前まで顔を近づけ、  
見つめてくる少女。

ツインテールがトレードマークの  
確か……。

「……ル、ルッキーニ……さん？」  
「……何してんの？」

俺のかけ声を気にすることなく  
にこにここと笑いながら訪ねてくる彼女。

しかし、今はそれどころじゃない。  
昨日のお姉さんのことを思い出して  
思わず勃ってしまっているあそこが  
彼女のあそこに触れそうである。  
足に力をこめて抑えようとした。  
しかし、彼女がゆっさゆっさと  
揺らしてきた。

「ねーねー。」

「ちよつ、ちよつ……。」

あわてて落ちそうになる彼女を

かばって地面に落ちる。

いてて、と打った頭を

抑えていると、彼女が放心した

ような顔つきで俺のことを

見つめていた。

「……あ、あの……？」

「……変わってない……。えへへ……。♡」

そして、顔に手を添えられ

——口づけをされた。

時間にして、ほんの一秒程度の

バードキッスだったが、それでも

俺の意識が飛びそうになるくらい  
やわっこい感触だった。

そんな俺の下半身を

体操着越しに手で触れて

擦ってくる。

「うっ……。な、何を……。？」

「——芳佳のこと、考えていたの？」

心臓が止まりそうになった。

（な、なんでそのことを——。）

いや、それよりも一体何のつもりで

それを言ったのか。

「視線。・・・今日、芳佳のほうばかり

向けていたよ。」

言われてハッと気が付く。

確かに、彼女とそういう関係になってから  
思わず芳佳のことをー。

もつと気をつければ。

そう思っても後の祭りだった。

耳元で囁かれながら

あそこをぎゆううつと布越しに

掴まれ、上下に動かされる。

「うつ・・・うつ・・・」

「ねえねえ？こんな風に芳佳に

シコシコされてたのー？♡」

クスクスと笑う彼女。

その幼い見た目からは想像も

できない行動。

ギャップにどぎまぎしていると

ぐいっと彼女が馬乗りになってきた。

「もし、芳佳と付き合っていることが

他の奴らにばれたら、お互いに

大変だよな？♡」

クラスカースト最底辺の俺と、

上位の彼女が付き合っていると知られれば――。

彼女は他の男子達からも

狙われている。

女子からは嫉妬されている。

そして、なによりいじめられている

俺と同じようにいじめられるかもしれない。

「……っ、それだけ……はっ……。」

搾りだすような声を出してそういうと、

にひっ、とルッキーニさんが笑う。

「……私とも、そういうことしてくれたら、

黙ってあげるんだけどな♡」

手を動かしながら

えへへと笑う。

体がびくつ、びくつと跳ね、

快楽に耐え切れずに、その精を吐き出した。

「・・・っ!!」

「おー♡いった？♡いつちやったの？♡」

いつても手を動かすのを

辞めてくれない彼女。

パンツの中が温かく、

変な感じがした。

射精後の倦怠感に身を任せ、

寝転がっているとズボンとパンツを

降ろされる。

彼女が体操着の上を脱ぐと、

ピンクのブラジャーに包まれた、

・・・その見た目からは想像できない

大きな胸が露となる。

見とれていると、それに気が付いた

彼女が胸を両手で挟む。

「すごいでしょー♡アタシ、こうみえて

ものすごく着やせするタイプなんだー♡」

ブラのホックを慣れた手つきで外すと、

ピンクの乳房が姿を表す。

白い肌に、抜群のプロポーション。

小学生くらいの見た目なのに、

スタイルは同じクラスのシャーリーさんや

バルクホルンさんと同じくらいいい。

アンバランスさが怪しい魅力を

生み出していた。

ぼーっと見とれていると

右手を取られ、胸を掴まされる。

「んっ♡・・・ふふ♡入れるよ?♡」

もにゆり、という柔らかで

いつまでも触れて居たくなるような

感覚が手に残る。

そうしていると、どこから取り出したのか  
コンドームを取り出し、手早く俺の  
モノに被せてきた。

下を脱ぎ、ショーツと下着も脱いで  
しましまのニーソだけの姿になった彼女が、俺のモノにあそこを  
押し付け始める。

「ふうっ……ふうっ……」  
息をゆっくり吸っては吐いてを  
繰り返し、その体を沈めていく。

一番奥まで届くと、彼女が自分の  
手で口を抑え、静かに絶叫する。

「~~~~~♡♡♡~~~~~♡♡♡」  
ぐっちゅ、ぐっちゅという

湿った音が鳴り始めた。



腰を深く、そして早く動かし、

感じ入る彼女。

感じているのに、それを

見られないように自分の

顔を両手で隠している。

その姿にムラムラとし、

手を無理やり掴んで

顔から外させる。

顔が真っ赤になっており、

目と口から液体が垂れていた。

「あつ♡恥ずかしいよおつ♡見ないでえっ♡」

『?今なんか上から聴こえなかった?』

『気のせいだろ。』

クラスメイトの声が聴こえてきたが、

バレていないようでホッとすする。

しかし、もしかしたらバレるかもしれない。

そう考えただけで心臓がわしづかみにされたような気分となる。

早く、早くオワラセナイト。

「うっ・・・ぐうううっ！」

「あんっ♡ああんっ♡赤ちやんできるうっ♡

ママになるうっ♡あんっ♡」

小さく器用に叫ぶ彼女。

ただ淫らに快楽を貪る

彼女の両手をそつと恋人つなぎする。

「♡あはあっ♡♡これすきいっ♡♡ふーふ♡

ふーふになろっ♡♡」

「ぐ・・・ううああっ♡」

腰をフルスピードでどんどん上下に動かす彼女。  
きゆうきゆうと小さなあそこに締め付けられ、  
とうとう限界を迎えてしまう。

「!!っ・・・ああっ・・・!!」

「♡♡~~~~♡♡」

体を前の方に倒し、俺の顔を両手で掴んで  
キスをしてくる彼女。

彼女の中に射精する。

自分一人でする時とは全く違う  
量が出ているのを感じる。

きゆうきゆうと子種を搾り取られ、  
体がびくびくと痙攣した。

気持ちよすぎる快樂に  
身も心もどろどろに溶けていく。

「……あぐ……」

「……っ♡♡」

くたあ、と倒れ掛かってきた

彼女を受け止め、両手で抱きしめる。

——や、やってしまった……。

脅されたとはいえ……。

「・・・あーあ♡シちゃったねー♡」

にたあ、と先ほどの笑みとは違う

ねちっこい笑顔を見せてくる彼女。

その右手にはスマホが握られている。

彼女が画面をタツチすると

動画の再生が始まった。

『あんっ♡ああんっ♡』

『うぐあぁ・・・』

つい、先ほどまでの情事が

写っていた。

「ね♡芳佳ともシていていいからさ♡

・・・私ともこれから先、してくれるよね?♡」

その問いに対して、俺が

抗えるすべはなかった。

## 現代生活編く彼だけが記憶がない現代でく波乱の文化祭（それを修羅場という） その1!く

「それでは、文化祭実行委員長を決めたいと思います。」

黒のスーツの上に、白衣を見にまとった

中年の七三わけのおっさんが眠そうにそういう。

やる気のなさが微塵も感じられないが、

それは周りのクラスメイト達も同様であった。

皆、立候補する者はおらず、

しん、と教室が静まり返る。

「・・・誰もいないのか。」

皆そわそわとあたりを見回すも

誰も手は上げない。

ふう、と息を吐いて担任が言い出す。

「・・・うし。女子と男子でじゃんけんしあつて、

それぞれ負けたやつが代表な。」

それだけ言って、椅子に座る担任。  
仕方ないのでじゃんけんすることに。

結果。

俺が負けて委員長になることに。

思わず手で顔を抑える。

横では、同じくじゃんけんにも負けた

エイラさんがニコニコとなぜか笑顔で

嬉しそうに立っている。

「んじゃ、ボバとエイラの二人なー。」

うし、今日は解散。」

文化祭実行委員が決まり、

皆それぞれ好き勝手に行動し始める。

他のクラスメイト達からはにやにやとした

笑みと、ご愁傷様、といった哀れみの  
目線が配られる。

やばい、どうしよう、と思っていると  
周りになぜかエイラさんとその仲良し組が  
集まってくる。

「エイラ・・・いいなあ。」

「んじゃあ、皆で手伝うか。」

ルツキーニ?」

「そうだね、シャーリー。」

「ミーナ。出し物の候補を今のうちに

あげておかないか?」

「そうね。そうしておきましょうか、美緒。」

わいわいと話し合っでとんどん

議論が進んでいく。

俺のことを卑下した顔つきで見えてきた

男子たちの顔が怒りに染まっているのが見える。

一体、どうなることやら。

震えながら、こつそりと自宅まで戻った。



『それは本当?』

「ああ。」

紺色のセーラー服に身をまとい、  
灰色のソフアーにもたれながら  
電話をするラル。

その相手は、ロスマンだった。

「あいつの学校で、文化祭とかいう

ものが行われるらしい。」

『文化祭・・・謝肉祭みたいなものかしら?』



現代に関して、細かな知識がない

ロスマンはうーんと声を出してうなる。

とある男を監視していたら、その人物が

通っている学校でイベントがおこなわれることを

掴んだ。

なので、こうして話し合っているのだった。

「まあ、そんなものだろう。．．．我々みたいに、

外部の人間も彼がいる学校に入れるみたいだぞ。」

『．．．．あら、それはステキね．．．。』

落ち着いた声が一転して、嬉しさを含んだ

声になるロスマン。

彼と会えること、そして、あわよくば

『イロイロ』なことができることを想像すると

誰にも止められなかった。

「ニパ、ゆつくり、ゆつくりだぞ．．．。」

「わ、わかつてるよ。．．．あつ。」

「あつ。」

『グオオオオオオっ  
!!!!』

「ぎゃああああああっ!!?」

「うわああああああっ!!?」

すぐ隣では、PS4でバイオ・ハザードを

ニパと菅野がやっていた。

画面いっぱいに映し出される、触手が生えた

人型の化け物を見て、悲鳴をあげる2人。

驚いているうちに、あつという間に攻撃され続け、

死んでしまう。

「くっそー!!全然進まねーよ、これ!!」

「・・・だったらかつこっけずにもっと

明るいゲームやろうよお。」

コントローラーを置いて怒る菅野と

体育座りで半泣きになるニパ。

すっかりと俗に染まっているようだった。

『・・・なんか、ものすごい悲鳴が聴こえたような気がしたんだけど。』

「・・・気にするな。」

それより、とラルが仕切りなおす。

「先ほどの話の続きだが、どうやら一週間後らしい。」

『へえ。速いわね。』

ラルがぴつとりモコンのボタンを右手で押し、テレビのチャンネルを変える。そこでは、芸能人の不倫騒動が報じられていた。

「既に入るための準備は終わっている。他の面々が帰ってきたらまた、詳しいことに関して話そう。」

『わかりました。・・・伯爵!!未成年なんだから

ワインは駄目よ。』

『えー。彼を酔わせて・・・。』

『それやったら、彼への接触を1年間禁止にするわ。』

『ごめんなさいごめんなさいすみませんすみません

それだけはどうかやめてください。』

伯爵とロスマンの漫才を聴いていたたまれない気持ちになったラルは電話の電源を切る。

唇にルージユを塗り、淡く微笑む。

「……ふふふ。」

その笑みに一体どんな意味が込められているのか。

それは彼女にしかわからないのだった。



「ふう、疲れたー。」

返ってきた我が家。

もといマイルーム。

といつても、ぼろっちいアパートの

5、6畳の部屋だが。

制服の上を脱ぎ、ベッドにダイブする。

何もする気力が出てこず、

うだー、とグータラしていると  
ケータイが鳴り始める。

ポケットに入っていたそれを右手で  
取りだして、通話ボタンを押す。

耳に押し当てて答える。

「はい、ボバです。」

『やあ、私だよ。』

「あ。．．．どうもです。」

思わずぺこりと通話越しに  
頭を下げる。

自分の面倒を見てくれている

恩人の声を忘れるわけもなかった。

「どうしたんですか?」

『なに、様子を知りたくってね。』

はっはっは、と陽気に笑う。

相変わらず、豪快な人だ。

『・・・そうそう、そういえば文化祭があるだろうか?』

「え?・・・え、ええ。」

あれ?なぜそのことを?

話した記憶がないのに

知っていることに疑問が湧くも

すぐにどうでもいいことだと考え

捨て置くことにする。

「あ、もしかして・・・。」

『うむ。・・・来週、私も

君の学校まで行くことになった。』

「・・・あー。」

ふふふ、と悪戯つぽく笑う恩人に

ぽりぽりと頬を搔く。

茶目つ気があるとは思ってはいたが

まさかわざわざ俺の通っている学校に

来るとは。

しかし、今のクラスに馴染めていない俺の姿をあまり見せたいとは思えなかった。

かといって、断るのも不義理である。

「……楽しみに、してます。」

『うむ、私もだ。……じゃあね?』

それだけいってピツと通話を切る彼女。

結局、俺はあの人を迎え入れるしかなかった。



「ねえ、他にはどれくらい多くの人が手を出している

かなあ?」

「……うーん。」

マッ○でフライドポテトをつまみながら

話す2人の女子高生。

片方は、白のリボンで髪をツインテールに

まとめている八重歯がチャームポイントの  
小さな女の子。

ルツキーニ。

もう一人はそれとは対照的にグラマラスな  
体型で背が高い長髪の女性。

シャーリー。

2人は神妙な顔をして話し合っていた。

「正直なところ、わかんないんだよなあ。」

ポテトをつまみながらシャーリーがそうこぼす。

「アタシも、とつくに一線は越えて、

動画と音声もとっているし、2日に1回は  
『濃い』のがもらえるからいいんだけど。」

スマホで、その時の情景を見るルツキーニ。

えへへー、と頬が緩み切っておおよそ、

美少女がしてよくない顔になっていた。



「結局のところ、前世で私らがあいつに

逃げられていたのって、逃げ道をつぶさなかったからだもんな。・・・まあ、私も

とつくにそうしているけどな。」

同じく、スマホを取り出してその時の

写メを見るシャーリー。

舌でちろり、と自身の唇を舐め、

ふう、と熱っぽい息を漏らす。

「あと、何人くらいと関係を持たせれば

逃げられなくなるかな？」

”鎖”は多ければ多いほどいい。・・・ま、

もつとも、あいつにとって私以外の女は

単なる性処理道具だと思っぞぞ？」

「…………ふふっ。」

「…………あ？」

「…………ん？」

自身の言葉を笑われて気に障った

シャーリーが凄み、ルツキーニがそれに応戦する。

そして、すぐにその矛を取める2人。

「……こんないがみあいばつかしていたから

あいつを取り逃すことになったんだ。……今回は

ちよつとはおとなしくしてろよ？ルツキーニ？」

「……誰彼構わず男を誘惑するような『ピッチ』、彼は

好きじゃないと思うよ？シャーリー？」

「……ふふふ。」

「……あはは。」

テーブルの上では和やかに笑いあい、

——テーブルの下ではお互いの脚を蹴りあうのだった。

# 現代生活編く彼だけが記憶がない現代でく波乱の文化祭（それを修羅場という） その2!く

「おい、そつちの材料。」

「ん、あ、ああ。」

「こつち手伝つてくれ。」

「お、おう。」

文化祭の出し物が決まってから

数日後。

なぜか俺は同じクラスの男子達から

ひっきりなしに頼られていた。

そして、そのたびに――。

「あ、じゃあここは私とルツキーニで

やっておくから。」

「シャーリー。予備のセロハン取ってくるよ。」

――俺について回っている女子達が加勢

してくれるという図式が出来上がっていた。

そんな彼女たちに近づけて嬉しいのか

鼻の下を伸ばしてデレツとする男子生徒たち。

・・・気持ちはわかるが、なぜか胸のあたりが  
むかむかする。

肉体関係を持っているからか、それとも。

いや、ルツキーニや芳佳達が

美少女であることは認めるし、知っている。

彼女たち目当てではあるとしても

クラスメイトからつまはじきにされていけない

現状はまだマシだった。

・・・これを出し物が『コスプレ喫茶』じゃなければ  
もつと良かったと思うんだが。

———事の経緯は少し遡る。

◆ 文化祭実行委員を決めた日から近く、

出し物を俺たちのクラスで決めることとなった。

「あー。意見をどんどん紙に書いてくれ。

・・・んが。」

それだけいって、机に突っ伏して眠る担任。

本当にこのおっさん、大丈夫なのか？

と思いつつも、実行委員である俺と

エイラさんで候補を黒板に書いていく。

「・・・それじゃあ、この中で多数決で。」

エイラさんがそういうと、議論が起こる。

「ここは”おばけ屋敷”がいいんじゃないか？」

「時間かかるだろー。普通にアイス売りとかどうよ？」

「喫茶店は？」

「クイズ!!」

そして、多数決が始まり、選ばれたのが、コスプレ喫茶だった。いやああああ、と悲鳴をあげる女子とおっしやああああ、とガッツポーズを組む男子。

なんだこれは——。

「……カオスだな。」

「……。」

隣でそうつぶやくエイラさんに俺も思わずうなずくのだった。



そして、肝心の衣装であるが演劇部から借りる、だけでは足りない

ことが発覚。

なぜかという、当日、演劇部は演劇部で出し物のために衣装を使うからである。

交渉の末、なんとか数着は貸してもらえることになったがそれだけでは当然足りない。

そして、女子、男子の総当たりでそれっぽい服を持つてくることに。

——机の上に置かれるメイド服、チャイナ、軍服、セーラー服とこれまたカオスの惨状。女子がコスプレをし、接客を担当。

男子連中が厨房にこもって調理をする。

当日は完全な分業体制に決まる。

そして、今は教室の整理を皆で

おこなっていた。

俺もいそいそとテーブルの飾りつけをしていく。

しかし、あまりこういった経験はないからなかなかうまく飾りをつけられない。

苦戦していると、横から誰かの手がスツと伸ばされる。

「……こうやってつけるんですよ？」

そういつて、持っていた飾りを

テーブルに美しくつけていくリーネさん。

せつけんの良い香りがふわりと漂ってきて、心臓がぼくぼくと鳴る。

顔が近かったのでそつと距離をとると、

その分、彼女が詰め寄ってくる。



「ふふふ。どうしたんですか?」

「……あ。その……。」

横目で芳佳やルツキー二達を見る。

飾りつけに夢中でこちらに

気が付いていないらしい。

ほつとしながらも、

目の前にいるリーネさんから

目線をそらしつつ、お礼を言つて

背中を向ける。

「ありがとう、リーネさん。ここは

俺の1人で大丈夫だから、

ほかの男子のところに……。」

「あ、リーネさん!!俺たちの

ところに来てくれ!!」

「カモーン!!」

俺の言葉に被せるようにそう言ってくる  
カースト上位の男子達。

見た目麗しく、また、スタイルが良い

彼女が思春期真つただ中の彼らに

見過ごされるわけもなく、獲物を

狙うような目つきでその肢体を

なめまわされる。

ある意味助かった。

これで……。

と思っているのも束の間。

彼女が口を開く。

「……………ごめんなさい。私、

こつちの手伝いをするよう頼まれてて……。」

「……あ、ああー。そっかー。」

「……そりゃしようがないなー……。」

目に見えて肩を落とす男子達。

が、それもすぐ様元気を取り戻し

ほかの女子達にちよっかいを出しに  
行く。

『ねえね!!ミーナさん!!坂本さん!!』

こつち手伝つてくれない? 大変でさー。』

『そうそう。』

『……ふふふ。』

『……。』

——男子生徒たちに誘われる二人が怖い表情をしていたので  
必死に見ないようにする。

「……ふふふ。2人つきりつてやつですか?」

「……おひよふはっ!」

隣にいたリーネさんのそんなささやきで  
恥ずかしい奇声をあげてしまうのだった。



「ふいー。」

文化祭の準備を一日中していただけたというのに  
どつと疲れを感じる。

家のドアを開け、靴を脱いで

部屋にあがるとすぐにベッドにダイブする。

「……?」

なぜかフローラルな香りがした。

(最近リセツシュとかしてたか?)

わからないので首をひねりながらも

当たり前のように置かれている

テーブルの上の夕食に目を通す。

——白の皿に盛り付けられたサラダと

ミート・ソース・パスタである。

まだ、湯気が立っていることから

作られたばかりであることが伺える。

「.....。」

ぐるるる、とお腹がなり、次いで  
ごくり、と唾を飲み込む。

フオークを手を取っていざ食べようと  
したその時、ドアがノックされる。

「.....はい?」

お腹が空いていて若干不機嫌になりながらも  
返事をしながら出る。

「.....こんばんわ。」

——そこには、満面の笑みを浮かべた

顔に横がけた傷がある金髪の美人さんが立っていた。



「.....。」

ハンナはその眼を見開いて二人のやりとりを見ていた。

彼女にとって、その相手は

エーリカ以外に認めた数少ない

相手であり、上官だった相手だからである。

「……ルーデル女史。」

「……これは厄介な相手が出てきたわね。」

カメラに映る二人の映像を見ながら

ハンナと圭子はつぶやく。

『隣に引越してきたハンナ・ルーデルという

者だ。よろしく頼む。』

『は、はあ。こちらこそ……。』

そういつて握手しあう二人。

男は軽く。

反対に女はどこまでも力強く。

——まるで彼を離さないと言わんばかりに。

『。』

『あ、あのー?』

『・・・ああ。すまない。ちよつと考え事をな。』

それだけ言って、手に持っていた

土産を彼に手渡すハンナ。

『祖国の食べ物と、つまらないもの、というやつだが

置物だ。』

『・・・。』

ナチュラル・チーズと、ジヨツキの形をした

置時計。

一体どんなチョイスからそれを選んだのかは

全く持って不明だった。

『それじゃ、今後ともよろしく。』

『あ、はい。』

スタスタ、と彼女は立ち去り、

隣の部屋に帰っていった。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

無言でハンナと圭子は見つめあうのだった。



## 現代生活編く彼だけが記憶がない現代でく波乱の文化祭（それを修羅場という） その3!く

ついにやってきた。

やってきたしまった。

学校の行事の一つにして、

俺にとって最も縁がない

恒例のお祭り。

即ち、学園祭。

俺が通っている学校では

毎年、生徒たちが力を入れ、

学校側もサポートを手厚くしているので

ものすごい規模かつ、質の祭典になっている。

もし、こんな学園祭で

女子と綿あめを一緒に

食べながら回れたら、

一体どんなに楽しいだろうか。

我がクラスにおける出し物、

コスプレ喫茶は盛況を極めていた。

ひっきりなしに入ってくる

お客。

飛び交うオーダー。

コスプレに身を包んだ

女子達はせつせとせわしく

走り回り、男たちは

厨房で料理を用意する。

俺ももちろん、その一人である。

「オーダー!! 4番テーブルに

チャーハン!!」

「オムライスおねがーい!!」

「食器下げとけよっ!! 後が

つつかえちまうだろうっ!!」

「材料足らねーぞ?!」

怒号が教室に響き渡る。

それにしても、今年は

やけに人が多い気がする。

厨房からそつと顔を

出してテーブルの方を

見ると、そこには色んな

学校の制服を着た、

美少女たちがいた。

「のう。あやつはどこじゃ?」

「クラスがわかればいいんだけど・・・。」

「すいませーん!!お酒・・・。」

「伯爵?」

「ごめんなさいごめんなさい

彼への接触禁止だけはやめて

ください」

「む。このチャーハンという米料理・・・上手いなっ!!」

「ハンナ、あんまり食べ過ぎないでね?」

何か、見覚えのある顔もいる気がするが。

「おいっ!!何やってんだ!!」

クラスメイトの一人に怒られ、

厨房に戻される。

「しっかし、なんかレベルの高い

女子がやけにいるよな。校内に。」

「ああ。ぶっちゃけうちの

女子よりかわいい子が多くね?」

「それな。」

客としてきた

女子達のことですり上がる

他の男子達。

その顔はだらしなく緩んで  
鼻の下が伸びきっている。

——彼らの後ろでこめかみに

青筋を浮かべてクラスの

女子達が立っているのに気が付いた

俺は、人知れず十字架を切った。

『アツーーーーー!!!』

野郎どもの野太い悲鳴が  
奏でられた。



いやらしい事件だったね・・・という

悲劇も終幕し、交代の時間がやってきた。周りがグループを組んで遊びに行く中、当然のことく俺は1人に。

いつものことだ、と溜めいきを吐き、教室の外にでる。

芳佳やルツキー二達と一緒に行くか最初は考えたが、

俺が彼女たちと行動していると怪しまれる。

クラスで立場が低い俺と

共にいる、付き合っているんじゃないかと

噂されては彼女たちに迷惑が

かかるであろうことは容易に

想像できた。

一緒にいるのがいやなわけじゃない。  
彼女たちが嫌いなわけでも。

しかし、元カノを寝取られて  
恋愛に対して根付いたトラウマと、  
両親から受けた虐待のせいなのか。  
自分から彼女たちにどうしても  
近づこうと動けない。

（・・・何やってんだ、俺。）

芳佳も、ルッキーニも、シャーリーも。  
ちゃんと好意を伝えてくれていていうのに。  
ふう、とまたため息をつきながら歩いていると、  
何だか周りから視線を感じることに気が付く。

それも、一つや二つではなく、  
大量の気配である。

その数の多さと向けられている  
ねっとりとしたなめまわすような  
感触にぞつと背中が冷える。

(———!!何だ、これは・・・?!)

この感覚になぜか既視感があった。

手で自分の頭を押さえ、廊下の  
壁にもたれる。

———そして、とある光景がフラッシュバックする。

『へえ……。3ケタですか……。』

『そうですかあ……。』

『大丈夫です!!私、体力には自信』

ありますから!!だ、だから子供も』

いっばい……。!!』

『養育費、考えないとですね?』



『これ以上、増えないよな?ん?』

『兄さん……。私……。私……。私……。』

体中から汗が滝のように吹き出し  
始める。

鬼気迫る様相で、とある珍妙な  
格好をした男を囲む、パンツ姿の  
痴女たち。

いや、そういえば彼女たちは――。

「あの……。」。

!?

突然声を掛けられ、  
体を跳ねさせながら  
後を向く。

そこには、見知らぬ  
女子生徒たちがいた。

制服を見る限り、  
他校の生徒だろうか。

「具合が悪そうですけど……」。

大丈夫ですか？」

あ……その……。

間近で顔を見られ、

心臓の鼓動が速くなる。

優しそうな顔つきの

長髪の美人だ。

若干、彼女から距離を

とるため後ずさりして

応える。

あ、だ、大丈夫……です。

「でも、体、ふらついてますよ？」

「保健室に連れて行って

あげるから、ね？」

・・・う。

確かに、足取りがおぼつかず、

ふらついた体でこのまま歩くのは

危険である。

だが、しかし。

なぜだろうか。

彼女たちは善意で俺のことを

心配してくれているはずなのに。

——なぜ、こども胸騒ぎが

するのだろうか。

いや、気のせいのはず。

そうだ、そうに決まっている。

そう心の中で結論を出し、

彼女たちに保健室に連れて

行ってもらおうようお願いする。

あ、あの、それじゃあお願いします……。

「任せて。……じゃあ、

手を私の肩に回すわね。」

「ゆっくり動かしますからね。」

「……ヤットミツケタ。センセイ……。」

俺はつくづく何かにとりつかれているらしい。

——保健室でそう思わざるをえない

経験をすることになるのだった。

～ 501+1 発進します編 ～ 正体ばれて、普通  
に501にいることになりました(震え声)

～ここは、本編のようであって、本編でない世界～(CV 若●)



色んな事があつて、俺こと、ボバ・フェットはウィッチと呼ばれる、  
空を飛んで戦う少女たちを陰から守ることになった。

ネウロイと呼ばれる怪物たちを倒すために、

命を賭けて戦う彼女たちを放っておくことができず、

各地を転々としながら戦うこと、20数年。

そして、死ぬたびにある程度前世の記憶を引き継いだ状態で、

またこの世界に戻ってくるというステキ仕様である。

対ネウロイ戦の経験値がどんどんたまっていき、

先日は1000体目のネウロイを撃破したばかりである。

(数年で300体倒しているエーリカとかに比べれば、

大したことのない数字だが)

で、一番ある意味なじみが深い面々、501の部隊。

ある時は一般兵として潜り込み、

ある時はコックとして潜り込み、

ある時は整備士として潜り込んだこともある。

転生するたびに、違う方法で潜入してきたので、

バレることもほとんどなく、こうして二桁目となる、

501との出会い

のはずだったのだが……。

はあ、とため息をつきながら、顔を覆っていた両手はずして、

ちらりと机の上に広げられた新聞を見る。

そこには、『ネウロイと戦い続けた民間人。それも、魔力を持たない男性』

『ついに世界初のウィザード誕生か!』『専門家に問う!!話題の人物の知られざるその素

性……』などなど、思いつきり書かれている。

そう、俺のことである(白目)

(……なんでこうなった?)

すでに冷めてしまったコーヒーカップを口元に運び、

胃の中に流し込むと口の中が苦いのでいっばいになる。

落ち着こうとあれこれしても、

漏れるため息は少なくならないし、

頭の痛みもとれはしない。

また、はあ、とため息を吐いていると、

こんこん、とドアがノックされる。

『ボバ?』

(.....逃げたい.....)

ドンドン、と叩かれるドアを見ながら、

ここに来るまでのことを思い浮かべるのだった。



く 1944年x月x日 く

「ガランド。ここでの戦いは終わった。次は手はず通り、

501への足を頼む。」

『おーけー。』

右腰につけてあつたトランシーバーを、  
右手で手に取つて口の近くまでもつていき、  
ガランドにつなげてそう告げる。

ここからなら、501の基地は近いし、  
时期的にもウオーロック事変が起こるころだ。  
そろそろ俺も向かわないと、と頭の中で、  
ネウロイとの闘いをイメトレしていたところ、  
トランシーバーが再度つながつた。

「?・・・おい、ガランド・・・?」

『ああ。なんでもないよ。ちよつと、ね?』

「?・・・まあ、いい。」

何やら首の後ろ辺りがそら寒く感じるが、  
気のせいだろう。

さつさと荷物を持つて、

集合地点まで行き、次の戦場に向かわなくては。

そう思つて向かつた港には、



黒のジャケットに、サングラス、下は青のジーンズパンツを着こなしている、  
ガランドが待つていた。

「やあ、来たね。」

「ああ。時間通りだな。」

「それじゃ、さっそく向かおうか。．．．入って。」

「ああ。」

彼女が右手で示したほうにある船に乗り込む。

軍船の一種だろうか。

鉄の甲板に覆われた、カールスラントの国章が記された旗が風で、

ばたばたとはためいており、見るだけで圧倒されそうなスケールである。

近くには、ガランドの部下なのか、カールスラントの軍服を着た、

若いウィッチらしき少女たちが、彼女に向かって敬礼をしながら、

迎えていた。

「(苦) 苦勞。．．．樂にしなさい。」

「はっ!!」

彼女がそういうと、それまで敬礼で並び立っていた彼女たちは、

一斉に休めの態勢を取り始める。

が、ガランドの隣にいる俺をじろじろと見てきている。何やら敵意や、悪意も感じる視線である。

「・・・・・・・・・・楽にしろ、といったはずなのだがね。」

「!?も、申し訳ありません・・・!!」

彼女がそういうと、俺に向けられていた視線は完全になくなり、

彼女たちは緊張した顔つきで、ぴしっ、と直立不動になる。

「ふふふ。おかしいと思わないかい?き、行こう。

相棒。」

「・・・・・・・・・・。」

お前、普段からそんなのか・・・・?と思ったが、

いつも世話になっていることもあり、聴かないでおくことにしたのだった。



く 1944年x月x日 く

北アフリカ戦線、” ストームウィッチーズ ”

ネウロイとの激戦やまぬ、アフリカの戦線。

それを支えるウィッチたちの飛行隊。

その中のエース、ハンナ・ユステイナー・マルセイユは、牛乳を飲みながら、ふう、と一息ついて休んでいた。

女子としてはテーブルに足をかけているのははしたない、と言わざるを得ないが、彼女にはやけに似合っていた。

近くにいた同僚のウィッチライーサは、そんな彼女をしようがないなあ、という、しかしどこか楽しそうな笑顔で見つめるのだった。

「ライーサ。今日はやけに静かだな?」

「うん。今日はネウロイの襲撃もないし……。」

ちらりと彼女が基地の外に目を向けると、ちようど、

朝を迎えつつあるところであつた。

窓からは日差しが入ってきており、

やや薄暗かつた部屋に光が満ちていく。

「に、してもハルトマンの奴め……。またスコアを伸ばし

……。

近くにあつた新聞を手に取り、中を広げて記事を読んだハンナがそうつぶやいたかと思つと、急にフリーズし、新聞を両手に持ったまま止まった。

? という疑問と共に、ライーサが首を傾げる。



～ 501+1 発進します編 ～ ハニートラップ祭  
り、開催 ( ) モテモテだよ!! やったねボバくん!! (震え  
声) ～

□

その新聞の見出しを見て、俺はまた頭を抱えることになった。

——カールスラントの誇る、スーパーエース、エーリカ・ハルトマン、  
ウィザードとの熱愛発覚か!!?

——ガリアの誇る、貴族、ペリーヌ・クロステルマン、  
件の人物との逢瀬を目撃!!?

どこもかしこも、真実と嘘が混じった情報が流布しており、  
こめかみに銃を押し当てたくなるほどだ。

ああ、どうしてこうなった？

各国の動きは、新聞、ラジオとガランドからの共有で、大体のことが分かった。

まず一つ。俺を擁護し、取り込もうとする動きがあること。

もちろん、各国の首脳陣たちが自国の利益を考えて動いているのであって、決して善意だけによるものではないということだ。

現に、ガランドが所属しているカールスラントのほうでも、

引退する間近のウィッチ、もしくは引退しているもの、

まだ誰とも婚約していないいいところのウィッチを俺にあてがおうという話も出てきているという。

——ちなみに、その時のガランドの声は完全な棒読みであり、その声を聴いているときには寒気が止まらないほどであった。

内心、マジ切れしていることだろう。

二つ。俺が本当にウィザードなのか疑う声が出てきていること。

これも当然と言えば当然である。

それまで、ネウロイとまともに戦っていたのは魔力を持つウィッチのみ。

しかも、魔力を持つウィッチは女性しかおらず、

男性はウィッチのようにネウロイと戦うことはまずできない。

既存の兵器では、太刀打ちできないのである。

ところが、である。

そこに突然現れた俺という存在。

世間から見ればありえない珍獣であり、疑うのも無理もない。

1920年、いや、詳しくはそれより少し前から戦い続けていた俺の撃墜スコアは、

1000を超えているが、それを証明する手立てもないし、

できるとしても、501のメンバーと組んで、ネウロイを倒しているところを記者に

撮らせて、証拠を作り、世界に示すくらいであろう。

ちなみに、この点については先日、501の基地に向けてやってきたネウロイを50

1のメンバーとともに撃破することで問題なく、クリアした。

——ただし、ミーナがにやりと笑っているところがどうも不気味であるが・・・。

何か、まずい選択をしてしまった気がしてならない。

最後に3つめ。

俺が前世、もしくはそれより前に出会ったウィッチたちの記憶が戻るかは、

ランダムであり、運が絡んでいた。

ゆえに、身を隠すことによつておつかまることもなく、安全を確保していたのだが……。

想像してみてほしい。

——それまで、逃亡生活をしてきた男が、突然新聞の見出しで突然取り上げられ、さぞや501のメンバーと婚約しているかのように記事が組まれているのを見たウイツチたちの状態を……。

「

「……今週も、たくさんね。」

501基地には物資補給のために定期的に輸送便と、輸送船が飛んでくる。戦い続けるために、物資の補給は当然必要であるからだ。

それ自体はおかしなことでもない。

毎週、新たな人員、物資が届けられるのは補給が上手く行っている証拠だからだ。

ところで、ウイツチたちは一般の人たちからするとまさしく「高嶺の花」なのである。

その証拠に、シャーリーやハルトマンはよく雑誌に取り上げられているし、



美緒は扶桑では一番有名なウイツチの一人である。

「処女であることがウイツチの条件だから、」絶対にほかの男と肉体関係を持ってない  
まさしく、世の男たちからしたら”最高のアイドル”だ。

で、そんなアイドル達は手紙や、プレゼントが送られることもしばしばある。

——だが、これはさすがに予想外であった。

「

「・・・ほう・・・。ほう・・・。」

自分が作った扶桑刀を右手に構えながら、

俺宛に持ってこられた縦、横が1mの木箱の中を見て、  
スツと眼帯を掛けていないほうの目を細める美緒。

「・・・」あの時、私を救ってくださったときから好きになりました・・・。

私の友達である、彼女も同じ気持ちです。・・・今でも、大好きな故郷を守るため、戦  
い続けています。いつか、また私たちのもとに戻ってきてくださいいね?」・・・。

ふううん。」

昔出会った、とある故郷を守っていた二人組の小さなウィッチからもらった手紙の中を読み、真顔で俺のほうに顔を向けるエーリカ。

顔も、目も笑っていない。俗にいう、無表情である。

「結婚してください」……こっちは「そろそろ引退するから、準備しておいてくださいいね?」……はよう、妾たちのもとに戻ってこぬか。……でなければ、どうしてくれようか……?」……ほう……ほう……」

思わず魔法を発動してしまったのか、近くにあつた壁をつかみ、

その一部を引きちぎるバルクホルン。やばい。

そーつとこの場から離れようとする、

首根つこをつかまれ、地面へと引きずり倒される。

俺を倒した人物は、最愛の相手、芳佳だった。

「……先生。今じゃ自分も扶桑最強のウィッチだなんていわれるようになったぞ

!!はははは!!すごいだろ!!……なあ。なんで、501にいるんだ?なあ?

ずーつと俺の面倒見てくれるんじゃないやなかつたのか?なあ?

……なあ!!!……へええ……ずいぶんと扶桑のウィッチさんたちの知り合いが多い

んですねー。」

「よ、芳……。」

「——それじゃあ、お風呂場に行きましようか」

——1週間に1回、彼女たちに俺宛の手紙をすべて見られるという修羅場が起  
ることになった。ちゃっかりと、ガランドからも手紙が届けられて、その内容を見た彼  
女たちがさらに嫉妬したのは別の話

く 番外編 もし、ネットがある時代で、ウイツチたちが  
 掲示板で会話していたら（震え声）く

スレ 589 く あいつを絶対に見つけ出す く

いんじゆうじゃないよ!!（B・Fの正妻）

いくら探してもみつからないんですけれども・・・

なおなお（B・Fと婚約済み）

くっそー!!!あいつどこいったー!!!

俺を口説いておいて放置しやがってええええええ!!!

ワイン好きの淑女（B・Fとは赤い糸で結ばれている）

まあまあ、なおちや・なおなお。

僕もそろそろ我慢の限界だけでも

ふ、ふふふ・・・。

ねこです (B・Fから結婚指輪をもらいました)

・ ・ ・ あの人がいそうな場所に、先回りすればいいと思う

プリン姫 (B・Fと入籍済み)

とはいえ、あやつが先に行きそうな場所など、予想がつくというのか？

貴族 Of 貴族 (B・Fと結納済み)

まあ、あの人が向かいそうな場所と言えば・ ・ ・。

体力に自信あり!! ひかりん (B・Fとは夜の運動済み)

ほかのウィッチたちのところ・ ・ ・ ですよね？ (ハイラトオフ)

不幸だけど、不幸じゃない (B・Fは私の夫です)

なんか・ ・ ・ 急に刺したくなってきた・ ・ ・。

誰をととは言わないけど

未来が見える!! (B・Fは私の嫁!!)

まあ、気持ちはわかるけども、あいつなら一回刺されたくらいじゃまた、起き上がってくるだろうナー

刺すときは、めった刺しにして、分割しておかないとナ?

三度の飯より出撃 (B・Fは比翼連理)

みんなのお姉ちゃん (B・Fは私の婿)

私なら素手で手足を引きちぎって、二度とそばから離れないようにする

ヤマトナデシコ (B・Fは私の先生)

む。それよりも、扶桑刀でちゃんと細かく切り刻んでだな……。

歌手希望 (B・Fは私の旦那)

ストップ。話が変な方向に行っているわ

ないとなウィッチ (B・Fさんは私の王子様)

あ、あの・・・。ナイトウィッチの能力を結集して、  
探知するのはどうでしょうか？

ねこです (B・Fから結婚指輪をもらいました)

・・・!!

プリン姫 (B・Fと入籍済み)

おぬし、天才か・・・?!よし!!準備ができ次第実行するぞ!!



「……………」

見ていたスレッドを閉じて、スマホをマナーモードにし、  
右ポケットにしまっておく。

ははは。変なスレもあったもんだなあ。

俺やん（

これは間違いなくあいつらであろう。

今まで気が付かなかつた、いや、気が付かれなかつたのは不幸中の幸いだったが、もうそうも言つてられない。

（……え？何？俺はそんなに恨まれていたのか……？）

少なくとも、ともに戦場を駆け抜けた戦友であるとは思つていたが、それでもなかつたらしい。

ナイフで刺すだの、見つけたら引きちぎるだの、分割するだの言っていることが物騒すぎる。

だんだんと思い出してくる、”前世”の記憶。

想像するだけでめまいがしてきて、倒れそうになるのをこらえ、ベッドに身を投げ出す。



(・・・何だ。俺が一体何をしたっていうんだ・・・?)

真面目な話、分からない。

時々、既視感を感じる相手を見かけることはあった。

大抵は、目も覚めるような美少女に美女ばかり。

しかし、そんな相手とつながりがあるような人生は送っていないだけに、

通りがかるたびに首をひねっていたものだ。

そして、その疑問は今日、完全に晴れてしまったというわけである。

「・・・ま、とはいっても」

自分一人しかない部屋で独り言をつぶやき、心を落ち着かせる。

あいつらは俺を見つけることはまずできない。

お互いにどこにいるかなどわかるわけもないし、

前みたいにも、メディアに取り上げられるようなこともない。

ネットがあったとしても、この広い世界でたった一人の人間を、

どうやって探せるというのか。

ナイト・ウィッチの能力が使えたとしても、人、一人だけを探せるものか。

(・・・まあ、平和な時代で、周りに目を配る余裕もある。)

ネウロイと戦い続け、男との出会いもほとんどない状態であれば、

そばにいた唯一とっていい男の俺に執着するのも当然。

——そして、平和な現代においては、もはや俺一人を狙う理由がなくなるもの必然。

俺よりも強いやつはいくらでもいる。

俺よりも金があるやつはいくらでもいる。

俺よりも顔がいいやつはいくらでもいる。

彼女たちがそうしたほかの男とくつついて、結婚するのも時間の問題だ。

(・・・幸せ、か・・・。)

—— 『すみません。でも、あなたがいつも無理をしていそうだったから——』

これで合っているはずだ。正しいはずだ。

俺は彼女たちに手を出していない。話しても、顔を合わせてもいない。

だというのに、なぜ、あの子の顔が浮かんでくるのだろう。

ぼすん、と隣にあったクツシオンを壁にぶつけ、八つ当たりをするも、この胸の痛みが治まることはなかった。



「——で。あやつがいる正確な国はわかったのか？」

「はい。前の世界でいう、扶桑にあたる国にいらっしやるそうです。」

とある国の、とあるカフェ。

見た目美しい、アイドル級の美女、美少女がやけに来店し、

男どもが鼻下を伸ばしながら件の人物について話し合う。

「ふむ。で、ほかの者どもには知らせたのか？」

「とりあえず、506のうち、何人かはすでに日本に向かっているそうです。」

・・・引越して、日本の国籍も取るそうです。」

「そうか。・・・む？そういえば、あやつだけ元々日本ず・・・み・・・。」

「・・・・・・・・・・抜け駆けされます？」

「・・・・・・・・あやつのことじゃ。間違いなくするじやろうな。」

反政府活動が続く、エジプトでは、

4人の美女が日本に向けて出立の準備を行っていた。

「ハンナ、それ、本当?!」

「ああ。ウィッチ・ネットワークで写真がアップロードされていた。

：日本住みのウィッチたちが執念で突き止めたらしい。」

「同じ日本ゆかりのウィッチとして、出遅れたわ・・・!!」

「今は体調でもなんでもないから、私も一緒に行けるわ!!」

準備をしたら、扶桑に行きましょう!!!・・・あ、日本だった。」

——そのほかにも、世界中の美女、美少女がとある市に集結し、ネット上で噂になったのは別の話。

「大丈夫だよな。・・・だよな?」

男は知らない。知りようもない。

1247 ～ 番外編 もし、ネットがある時代で、ウィッチたちが掲示板で会話していた  
え声) ～

——これから起きる、自分の運命について。